

鬼虎川遺跡第19次 発掘調査報告

1988

財団法人 東大阪市文化財協会
東 大 阪 市 教 育 委 員 会



櫛(右・18)、鋤(中・12)、梯子(左・54)



小型瓢形壺(上右・1、上左・2)、環濠出土弥生土器(下)

序

東大阪市は、古代より栄えた河内の一画を占めています。市内に存在する遺跡も現在約120ヶ所を数え、埋蔵文化財の宝庫といえます。かつては、大阪の近郊農村地帯でありましたが、現在大部分は、住宅・工場などが立ち並んでいます。比較的、開発の遅れていた市域の北部の開発を目的とし、また近畿日本鉄道奈良線の混雑を解消するため、新たに東大阪線が開設されることになりました。鉄道開設予定地及び国道308号線拡幅工事予定地は、鬼虎川遺跡をはじめ、水走・西ノ辻・神並遺跡が存在しているため工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

今回、報告する鬼虎川遺跡第19次調査もこれらの調査の一つであります。鬼虎川遺跡は、弥生時代の大集落跡として、銅鐸の鋳型や豊富な木製品などの出土とともに全国的に著名な遺跡であります。この度の調査では、集落の居住区を囲むと思われる弥生時代中期初頭の環濠や柵列が、多くの出土品と共に確認され多大な成果を挙げることができました。

本書が弥生時代の社会を解明する上で、お役に立てれば幸いであります。また、地域の文化財の学習資料となりますことを願っております。

最後になりましたが、調査及び整理を実施する上に、多大なご協力を頂きました近畿日本鉄道株式会社(調査当時、東大阪生駒電鉄株式会社)、阪神高速道路公団をはじめとする関係機関、方々に心より謝意を表します。

財団法人 東大阪市文化財協会

理事長 木寺 宏

本文目次

I.	はじめに	1
II.	位置と環境	3
1.	位置	3
2.	地理的環境	3
3.	歴史的環境	5
III.	調査概要	7
1.	調査方法と目的	7
2.	調査経過	7
IV.	遺跡	8
1.	層序	8
2.	遺構	17
	歴史時代の遺構	17
	弥生時代の遺構	24
V.	出土遺物	42
1.	古墳時代以降の遺物	42
2.	弥生時代の遺物	50
	弥生土器	50
	土製品	71
	木製品	73
	石器	88
	動植物遺存体他	91
VI.	附編	116
1.	鬼虎川遺跡第19次調査出土人骨について	116
2.	鬼虎川遺跡出土の弥生時代（畿内第II様式期）の異形土器ならびに 織具腰当と想定される木製品に塗布された赤色顔料の化学分析	117
3.	鬼虎川遺跡出土のサヌカイト遺物の石材産地分析	120
VII.	まとめ	122
1.	弥生時代の遺構について	122
2.	遺物について	124

挿 図 目 次

第1図 地区割図 (1/500)	2
第2図 周辺遺跡位置図	4
第3図 A地区南壁断面図	9
第4図 B～E地区北壁断面図、C地区環濠（溝16）南北断面図	(折込1) 12・13
第5図 E地区西壁断面図	14
第6図 F地区西壁断面図	16
第7図 A地区第3遺構面実測図	18
第8図 B～C地区第2遺構面平面図	19
第9図 B～D地区第3遺構面平面図	20
第10図 C地区第5遺構面（溝11・12）平面図	21
第11図 E地区第6遺構面（足跡）平面図	22
第12図 F地区第2遺構面（溝13・14）平面図	23
第13図 A地区第7・8号方形周溝墓平面図	25
第14図 第7号方形周溝墓木棺・土壤11実測図	27
第15図 第8号方形周溝墓木棺実測図	28
第16図 環濠・柵列遺物出土状況平面図	(折込2) 30～32
第17図 B地区環濠南北断面図	33
第18図 環濠断面図（C地区東西・南北断面）	34
第19図 B地区第7遺構面（溝17）実測図	35
第20図 B～E地区第7遺構面（ピット）断面図	37
第21図 B地区第7遺構面（土壤12）実測図	38
第22図 B地区第7遺構面（土壤13・14・18～22）実測図	39
第23図 落ち込み2出土土器	40
第24図 F地区第3遺構面（落ち込み2・ピット）平面図	41
第25図 須恵器・韓式系土器・ミニチュア土器・黒色土器・綠釉陶器・陶磁器等実測図	43
第26図 土師器実測図	44
第27図 泥面子・土錘・砥石・古銭・他実測図、拓影	45
第28図 壺B	48
第29図 細頸壺	49
第30図 無頸壺A	49
第31図 高杯A	50
第32図 環濠出土弥生土器（壺A）実測図	53

第33図	環濠出土弥生土器（壺B）実測図	55
第34図	環濠出土弥生土器（細頸壺・無頸壺・たこ壺・鉢）実測図	57
第35図	環濠出土弥生土器（高杯・壺蓋・甕蓋）実測図	58
第36図	環濠出土弥生土器（鉢A）実測図	59
第37図	環濠出土弥生土器（甕A）実測図	60
第38図	環濠出土弥生土器（甕B-3）実測図	61
第39図	環濠出土弥生土器（甕B-2）実測図	62
第40図	環濠出土弥生土器（甕B-1・B-3・C・山城系）実測図	63
第41図	環濠出土弥生土器（底部）実測図	64
第42図	土壤12出土弥生土器（壺・鉢・甕蓋）実測図	66
第43図	土壤12出土弥生土器（甕A・B-3）実測図	67
第44図	各遺構出土弥生土器（壺・甕・鉢）実測図	69
第45図	包含層出土弥生土器（細頸壺・鉢・高杯・壺蓋）実測図	70
第46図	弥生時代 土製品実測図	72
第47図	環濠出土木製品（鍤・鋤）実測図	74
第48図	環濠出土木製品（鋤・鍤・不明木製品）実測図	75
第49図	環濠・土垢12出土木製品（鍤・板状木製品）実測図	77
第50図	環濠出土木製品（鋤）実測図	78
第51図	環濠出土木製品（橇・高杯・梯子・板状木製品）実測図	80
第52図	環濠出土木製品（高杯・容器・臼）実測図	81
第53図	環濠・包含層出土木製品（刺突具・弭・鳥形木製品等）骨製品（刺突具）実測図	83
第54図	環濠出土木製品（カゴ状纖維製品）実測図	84
第55図	環濠出土木製品（杭・腰当具・石斧の柄・木錘・板状木製品等）実測図	85
第56図	環濠出土木製品（杭・弓・板状木製品・不明木製品）実測図	86
第57図	環濠・包含層出土木製品（柱材・板状木製品）実測図	87
第58図	石器（石鎌・石錐・楔形石器・叩き石・磨石）実測図	89
第59図	石器（削器・磨石）実測図	90
第60図	石器（削器）実測図	91
第61図	石器（扁平片刃石斧・大型蛤刃石斧）実測図	92
第62図	石器（石庖丁・石庖丁未製品・砥石・不明石製品）実測図	93

図 版 目 次

- 図版1 航空写真 調査地全景(上・東方向)
- 図版2 調査地・遺構 1. B地区より生駒山遠望(西より) 2. B～D地区第1遺構面全
景(東より)
- 図版3 遺構 1. C地区掘り上げ田溝の杭群(西より) 2. B・C地区第2遺構面全
景(西より)
- 図版4 遺構 1. C地区第3遺構面全景(南より) 2. C地区第4遺構面全景(南より)
- 図版5 遺構 1. C地区溝11・12検出状況(南より) 2. E地区足跡検出状況(南より)
- 図版6 遺構 1. F地区溝13検出状況(南東より) 2. F地区溝13土層断面(南西より)
- 図版7 遺構 1. A地区第7・8号方形周溝墓全景(南より) 2. A地区第8号方形周溝墓
全景(南より)
- 図版8 遺構 1. 第7号方形周溝墓木棺・土壤11検出状況(北より) 2. 第7号方形周溝墓
木棺検出状況(西より)
- 図版9 遺構 1. 第8号方形周溝墓木棺検出状況(南西より) 2. 第8号方形周溝墓木棺検
出状況(南より)
- 図版10 遺構 1. B～D地区環濠・柵列検出状況(東より) 2. D・E地区環濠・柵列検出
状況(西より)
- 図版11 遺構 1. C地区環濠・柵列検出状況(南より) 2. C地区環濠検出状況(北より)
- 図版12 遺構 1. E地区環濠断面(東より) 2. C地区環濠断面(東より)
- 図版13 遺構 1. C地区環濠遺物出土状況(南より) 2. C地区環濠遺物出土状況(上より)
- 図版14 遺構 1. B地区環濠木製品(鋤・鍬)出土状況(西より) 2. B地区環濠遺物出土状
況(南より)
- 図版15 遺構 1. B地区環濠・柵列検出状況(北より) 2. D地区柵列検出状況(西より)
- 図版16 遺構 1. D地区ピット117検出状況(上より) 2. D地区ピット立割状況(南より)
3. E地区ピット179立割状況(東より)
- 図版17 遺構 1. E地区ピット127立割状況 2. C地区ピット189・190立割状況
3. E地区ピット138立割状況
- 図版18 遺構 1. D地区環濠・柵列検出状況(南より) 2. E地区環濠・柵列検出状況(南
より)
- 図版19 遺構 1. B地区土壤12検出状況(北より) 2. B地区土壤12遺物出土状況(北より)
- 図版20 遺構 1. C地区土壤16検出状況(北東より) 2. D地区土壤22検出状況(南より)
- 図版21 遺構 1. B地区溝17遺物出土状況(南より) 2. B地区溝17検出状況(西より)
- 図版22 遺構 1. B地区溝17断面(南より) 2. F地区落ち込み2検出状況(南より)

- 図版23 古墳時代以降遺物 土師器ミニチュア甕(14) 須恵器甕(30) 延喜通宝(107)
寛永通宝(103~106)
- 図版24 古墳時代以降土器 1. 須恵器(1~3・19~27・33~39)
2. 須恵器(4~13・28・29・40~48)
- 図版25 古墳時代以降土器 1. 土師器(51・52・61~68・70・72~76・78・79)
2. 土師器(53~55・57~60・69・71・77・80~85)
- 図版26 古墳時代以降遺物 1. 陶磁器(16・31・49) 緑釉陶器(32) ミニチュア甕(15)
瀬戸焼椀(17・18) 他
2. 泥面子(88・89・91~99) 土鈴(84・108) 土馬(109)
- 図版27 環濠出土弥生土器 壺A(3・6・7・205)、B(17)
- 図版28 環濠出土弥生土器 1. 壺A(1・2・5・10)
2. 壺A(4・8・9・206・207)
- 図版29 環濠出土弥生土器 1. 壺B(11・15・20・21) 2. 壺B(13・16・18・19)
- 図版30 環濠出土弥生土器 1. 無頸壺B(22) 壺底部(145) 2. 壺A(208~214)、B(12・14)
- 図版31 環濠出土弥生土器 鉢A(34) 高杯A(39) 甕蓋A(47)、B(46・48)
- 図版32 環濠出土弥生土器 1. 鉢A(64・66~69)
2. 無頸壺A(24)、B(23・25) 細頸壺(35・36) タコ壺(37)
鉢A(27・33)、B(28~30)
- 図版33 環濠出土弥生土器 鉢A(60~63・65・70・71)、B(31)
- 図版34 環濠出土弥生土器 1. 高杯A(40) 高杯脚部(41~45) 2. 甕蓋(49・51~59)
- 図版35 環濠出土弥生土器 甕A(82)、B-2(100)、B-3(88) 鉢A(26)、B(32)
高杯B(38)
- 図版36 環濠出土弥生土器 甕A(74)、B-1(116)、B-2(105)、B-3(89・93)
山城系(111)
- 図版37 環濠出土弥生土器 1. 甕A(72・77・80・81・83・84)
2. 甕A(73・75・76・78・79)
- 図版38 環濠出土弥生土器 1. 甕B-2(95・98・102・103・106~108)
2. 甕B-2(96・97・99・101・104・109・110)
- 図版39 環濠出土弥生土器 1. 甕B-3(113・114・119~122)
2. 甕B-1(117・118)、B-3(112・115)、C(123・124)
- 図版40 環濠出土弥生土器 1. 壺体底部(138・144)
2. 壺・鉢底部(126・127・141) 甕底部(142・146)
- 図版41 環濠出土弥生土器 1. 壺・鉢底部(143) 甕底部(129・130・133~136)
2. 甕底部(131・132・137・139・147~149・151)
- 図版42 土壙12出土弥生土器 壺A(157) 甕A(162・164)、B-3(163・165・168)

- 図版43 土壌12出土弥生土器 1. 鉢B(153) 壺体部(159) 壺・鉢底部(155)
甕底部(156・161)
2. 甕A(166・167・169~171)、B-3(172・173)
- 図版44 環濠他出土弥生土器 壺A(154・158) 鉢A(152) 甕蓋(50・151) 壺底部(201)
- 図版45 環濠他出土弥生土器 壺B(175) 甕C(180) 甕(204) 鉢B(191) 壺蓋B(193)
壺・鉢底部(128)
- 図版46 環濠他出土弥生土器 1. 甕B-3(86・87・90~92)
2. 壺A(188) 壺(202) 細頸壺(195) 甕A(190)、
B-3(196・197) 鉢A(192・199・200) 高杯B(189)
壺蓋B(194)
- 図版47 遺構出土弥生土器 1. 甕A(182)、B-2(181・183)、B-3(178・215・216)
鉢A(184) 壺底部(186)
2. 壺A(176)、B(175) 鉢A(177) 甕底部(189)
鉢底部(179)
- 図版48 環濠出土弥生土器 1. 壺口縁部文様 2. 壺・鉢体部文様
- 図版49 土製品 小型瓢形壺(1・2) 板状土製品(3)
- 図版50 土製品・石器 1. ミニチュア土器(4) 土製円盤(5~16)
2. 石斧(29) 磨石(8・18・36) 砥石(35) 不明石製品(34)
- 図版51 石器 石鏃(1~4) 石錐(5) 楔形石器(6・7) 複刃削器(9)
削器(12・13・15) 叩き石(10)
- 図版52 石器 削器(11・16・19~22)
- 図版53 石器 1. 石庖丁(31) 石庖丁未製品(32) 扁平片刃石斧(24) 不明石製品(33)
2. 太型蛤刃石斧(25~27・30) 扁平片刃石斧(23) 石斧(28)
- 図版54 環濠出土木製品 平鍬(1) 鋤(12)
- 図版55 環濠出土木製品 平鍬(1~3)
- 図版56 環濠出土木製品 平鍬(4~6・10) 又鍬(11)
- 図版57 環濠出土木製品 平鍬(7・8) 鋤(14~16) 用途不明木製品(64)
- 図版58 環濠出土木製品 橋(18) 梯子(54) 弓(59)
- 図版59 環濠出土木製品 橋(19) 容器(24) 用途不明木製品(71)
- 図版60 環濠出土木製品 高杯(20)
- 図版61 環濠出土木製品 高杯(21) 高杯か、鉢(22) 四脚付円形容器(25) 木錐(62)
- 図版62 環濠他出土木製品 把手付円形容器(23) 二脚付円形容器(26) 円形容器(28)
容器(75) 紡錘車(55)
- 図版63 環濠出土木製品 円形容器(27) 小型臼(29・30) 用途不明木製品(65・69)
- 図版64 環濠他出土木製品 平鍬(9) 鋤(13) 刺突具(32~40) 刀子状木製品(57)

石斧の柄(58) 弔(60) 鳥形木製品(61)

用途不明木製品(63・67)

図版65 環濠他出土木製品 柱材(44・46・48) 板状木製品(72・76)

図版66 環濠他出土木製品 大型臼(31) 柱材(45・47)

図版67 環濠出土木製品 杭(50) 腰当具(56)

図版68 環濠出土木製品 杭(51・52) 板状木製品(74・77)

図版69 環濠出土纖維製品 1. 檜出面 2. 檜出面の裏面

図版70 環濠出土纖維製品 1. 檜出面裏面 モジリ編みの状況

2. 檜出面裏面 紐状部分

図版71 動植物遺存体 炭化稻束(1) ウリ類の種子(2) シカ(3) イノシシ(4~10)
サメ(11)

図版72 弥生土器細部 1. ヘラミガキ 2. ヘラケズリ 3. 細かいタテハケ
4. 粗いタテハケ 5. 接合痕(外傾) 6. 栓圧痕

表 目 次

表1 古墳時代以降遺物一覧.....47

表2 弥生土器観察表.....94

表3 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットRf値と色調118

表4 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調118

I. はじめに

この報告書は、鬼虎川遺跡第19次調査によって明らかになった事実をまとめたものである。本遺跡は、昭和38年に、国道170号線建設に伴う工事で土器や木棺などが出土したことによって存在が確認された。以来、今日まで（昭和62年3月現在）30次を越える調査が実施されている。

今回行った調査以前に、本遺跡は、低湿地に位置する弥生時代前～中期の集落遺跡で、現地表下約4～5mの所に当時の遺跡と遺物包含層が存在することが明らかとなっていた。遺構は木棺墓を主体とする方形周溝墓・溝・掘立柱建物などが検出されており、遺物は、土器・石器・木製品・金属器・骨角器・動植物遺存体などが出土し、通常の遺跡では、保存状態の悪い木製品や動植物遺存体などの遺物が低湿地に営まれた集落跡のため、良好な状態で保存されていることが明らかになっていた。

遺跡の範囲は、具体的には後述するが、東西約400m、南北約500m以上に及ぶと想定され、規模の大きさと出土遺物の質量ともに豊富なことから、河内地方を代表する弥生時代の集落遺跡の一つと考えられていた。

奈良県北部が大阪のベッドタウンとして開発が進んだ結果、この間を結ぶ既存の近鉄奈良線の輸送力が、限界に近づいたのを緩和するためと、東大阪市の北部の開発のために、鉄道の新線が計画された。鉄道建築予定地と、これに合わせて計画された国道308号線拡幅工事予定地は、鬼虎川遺跡上を通るため、これに伴う事前調査が、大規模に行われた。

今回、報告する第19次調査も鉄道新線工事に伴う調査の一つである。調査は、東大阪生駒電鉄株式会社の委託を受け財団法人東大阪市文化財協会が実施した。現場調査は、昭和58年5月9日～11月18日まで行った。出土した遺物の整理は、近畿日本鉄道株式会社及び阪神高速道路公団との協定にもとづき、昭和62年3月31日まで行った。調査組織は、以下の通りである。

（昭和62年4月1日現在）

理 事 長 木寺 宏（東大阪市教育委員会教育長）

事務局長 寺澤 勝（東大阪市社会教育部参事）

庶務部長 下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）

庶務部 安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）

調査部長 原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）

調査部 上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）

調査担当 福永信雄（東大阪市教育委員会文化財課）

菅原章太（東大阪市教育委員会文化財課）

調査補助 辻栄二、越野一郎、柾木久弥、宮川孝司、寺川寛、玉井朋巳、板倉陽二、青木芳光、山本祐子、津田美智子、芦田尚子、国分政子、川村美保、岡崎由子、岩倉有佐、西山篤子、川上信子、石渡玲子、松井朋子。

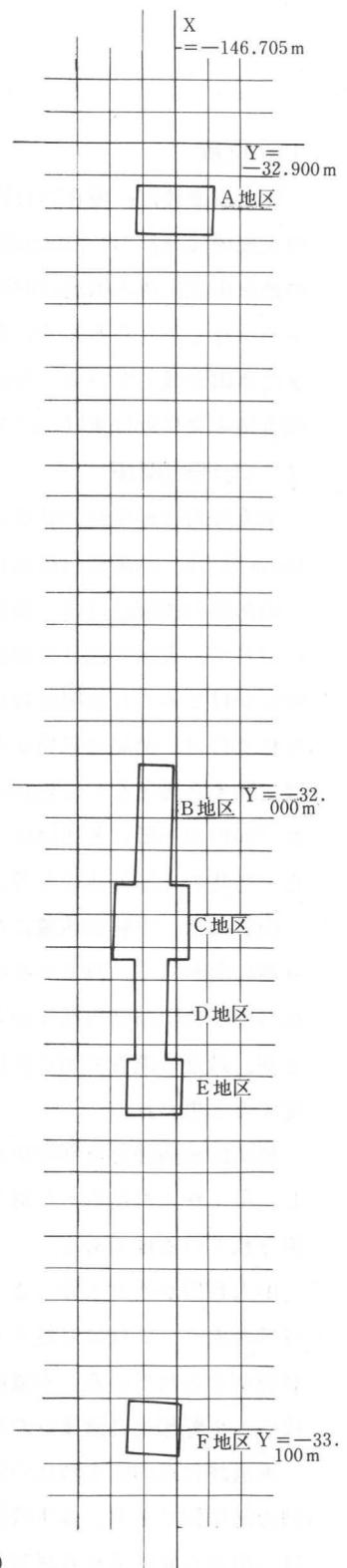
本報告はV章－1、V章－木製品、VII章カゴ状纖維製品についてを菅原が執筆し、VI章を除く執筆と編集を福永が行った。VI章は1. を大阪市立大学医学部多賀谷昭氏、2. を武庫川女子大学薬学部安田博幸・井村由美氏に鑑定を依頼し、執筆していただいた。3. は京都大学原子炉実験所の藁科哲男・東村武信氏に委託した結果を掲載した。

本書に掲載した遺構の実測図及び写真は、現場調査に参加した全員で作成した。出土遺物の実測と整図は、古墳時代以降の遺物と木製品を津田美智子、弥生土器を山本祐子を中心、国分政子、森田浩史が、石器を、津田美智子、山本祐子が行った。遺構実測図の整図は、芦田尚子が主として行った。遺物観察表は、山本と福永が作成した。

今回の調査と報告書の作成に際し以下の方々に多大な御教示と御指導を得た。記して謝意を表する。

秋山浩三、金関恕、佐原真、樽野博之、都出比呂志、中村俊亀智、中村友博、那須孝悌、西谷真治、西口陽一、畠本政美、宮崎幹也、宮崎泰史、渡辺誠（敬称略）。

最後に、本報告書は、当初61年度末に出版の予定であったが、諸般の事情から遅れ、今回刊行する運びとなった。ご迷惑をかけた方々に、深くお詫びするとともに、御寛恕を願う次第である。



第1図 地区割図 (1/500)

II. 位置と環境

1. 位置

鬼虎川遺跡は、現在の行政上の地名では東大阪市弥生町、西石切町二丁目、宝町に所在する。国土地理院発行の1/25000地形図「生駒山」では、左下隅付近にあたる。遺跡の現状は、西よりの地を南北に通る国道170号線と、北端付近を通る国道308号線沿いに民家・病院・工場・レストランなどが立ち並んでいるが、集落の中心と推定される地は市街化の進んだ市域には珍しくまだ水田が残っている。今回の調査地は、西石切町二丁目地先の国道308号線の中央分離帯内で、調査地中央付近は東経 $135^{\circ} 38' 22''$ 、北緯 $34^{\circ} 40' 37''$ である。

2. 地理的環境

東大阪市は地理的に見ると東より西に、山岳部（最高峰の生駒山、標高643.3mを頂点に標高150m以上）、山麓部（標高150～10m）、平野部（標高10～5m）の3つに大別される。

山岳部の稜線はほぼ、南北に大阪府と奈良県を画している。奈良県側の傾斜がゆるやかなのに対して、大阪府側は急斜面を成す。山岳部の基盤岩類のうち、東大阪市上石切町から横小路町にかけてみられる閃緑岩は、角閃石、長石、雲母などの鉱物を多量に含む。閃緑岩が風化した粘土には、前記の鉱物が多量に含まれる。この粘土を用いて作られた縄文～古墳時代の土器は、胎土と褐色をした色調から他地域産の土器と比較的容易に識別でき『生駒山麓の土器』とか『河内の土器』と呼ばれる。この土器は各地にもたらされており、産地が識別できることから、当時の土器の流通を考える上での指標となる重要なものとされている。

山麓部は、生駒山西麓にひろがる扇状地の性格をもつ低位段丘が発達している。生駒山地より西に向かって、西下する中小の河川が、0.7～1kmの間をおいてこの段丘を開拓している。これら中小の河川は当然ながら山麓部や平野部では、時代によって徐々に流れが異なっていることが、最近の調査で明らかになりつつある。今後調査が進めば、各時代ごとの河川の流路が確定すると思われる。

標高20m前後を東高野街道が南北に走る。この道は沿道に縄文時代以降各時期の遺跡が存在し、早くから利用された道と考えられる。市域で最も多く遺跡が所在し、今も居住地として利用されている地である。

旧大和川が運ぶ土砂によって形成された平野部は、標高からも明らかなように低湿な地で水はけが悪く、これに対処するため現在でも本遺跡付近の耕作地では掘り上げ田と呼ばれる耕作形態がとられている。本遺跡は平野部に位置するが、すぐ東に低位段丘が存在し段丘西端に隣接する平野部上に営まれた集落跡といえる。

本遺跡付近の弥生時代の旧地形は、東側の段丘西端は第25次調査などで縄文海進に伴う河内湾の海岸線であり、弥生時代には高さ2mほどの急な崖であったことが判明している。西側には、南から北に流れる恩智川が存在する。現在の恩智川自身は新しい時代に流路が整えられた



第2図 周辺遺跡位置図

と思われるが、本来この付近を流れていた河川の後身と考えられる。北は、西ノ辻遺跡第9次調査などで鬼虎川の前身と思われる河川が縄文時代後期以降、中世まで国道308号線より本遺跡の北100m内外に南東から北西にかけて流れていたことが想定されている。南側は、不明であるが現在、鬼虎川の南1kmを額田谷から西に向かって流れ恩智川に合流する番匠川の前身の川が流れていたことは間違いない。

これらの崖や河川によって本遺跡の範囲が画されていたと考えられる。従前の調査結果からみてこの範囲（東西400m、南北500m前後）の中に、居住区・墓域・水田等が存在したのであろう。ただ水田などの耕作地は、範囲外にも存在した可能性が考えられる。²⁾

3. 歴史的環境

本遺跡の位置する場所は既に述べたとおり縄文時代前期の海進時には、河内湾の海岸線にあたる。現在の市域の平野部は全てこの時代の湾内にあたる。当時の人々は、海を見下す、すぐ東の山麓部に住んでいたことが、海岸に捨てられた土器（縄文時代前期～中期初頭）や、獸骨などの出土によって想定される。旧石器時代から縄文時代早期にも、山麓部に人々が活動していたことが、本遺跡、正興寺山遺跡（旧石器時代）や神並遺跡（旧石器～縄文時代早期）などから出土している遺物によって明らかになっている。

縄文時代中期～晚期前半の遺跡も、平野部に河内湾から河内潟に変化する水域が広がっていたため山麓部に存在する。中期後半以降、生駒山地から西下する小河川によって南と北を画された段丘上（標高15m～25m）にほぼ1ヶ所ずつ集落が存在する。北より南に善根寺（縄文時代中期末）日下（縄文時代後期～晚期）芝が丘（縄文時代後期末～晚期）鬼塚（縄文時代中期末～晚期）繩手（縄文時代中期末～晚期）馬場川（縄文時代中期～晚期）の遺跡である。出土している土器から見ると、同時期に存在したのは晚期でも2～3遺跡と思われるが、この時代の遺跡の数少ない畿内にあってはかなり濃厚に分布していることが知られる。

弥生時代の開始期に存在した主な遺跡は、本遺跡の西約200mに存在する水走遺跡と南東約900mの鬼塚遺跡が挙げられる。水走遺跡は、河内湖の縁辺の低湿な地にこの時代になって営まれた集落と考えられ、鬼塚遺跡は前代から引き続いて人々が居住した地である。本遺跡は、前期終わり頃に居住が開始される。この地に移り住んだ人々は水走遺跡から移ったか、山麓部の集落から移住したかは、定かでないが今後検討を要する問題である。

弥生時代中期には、山麓部に芝が丘、植附・西ノ辻・鬼塚・繩手・馬場川遺跡が存在する。水走遺跡もこの時代の遺物が検出されており、出土範囲などから見て小規模な集落が存在したと見られる。西ノ辻、植附遺跡は本遺跡の東に隣接して南北に並び存在している。それぞれの遺跡は河川、海蝕崖が変化した崖など自然地形で画されているとはいえ、出土遺物からみて、同時期に営まれたことは確実で密接なつながりがあったことは間違いない。この3遺跡を1つの集落と見れば、少なくとも範囲は東西約700m、南北約700mにおよぶ大集落が想定される。規模からみて、河内における拠点的な集落のなかでも有力なものであったろう。

弥生時代後期には、本遺跡が廃絶し西ノ辻遺跡が拡大する。この時期には恩智川以東の平野

部では、本遺跡の南約2.5kmの北鳥池遺跡が知られるが小規模な集落と考えられる。むしろ、山麓部に主な居住地は移った感があり平野部は耕作地となつたようである。古墳時代以降歴史時代の集落も山麓部が中心である。わずかに平野部では、本遺跡の東端で山麓部とまたがるように5世紀後半から6世紀前半の集落が、南約3kmには池島東遺跡が認められるが短期間のものである。これらの集落は、当時の集落が一般に従前に比べ分散して営まれることと期を一にしている。

古墳は本遺跡の北東約500m、標高12m付近に中期古墳と考えられる塚山古墳が、背後の山麓標高50～150mの間の各河川沿いに、後期群集墳が営まれている。古墳の被葬者の居住地は、未だ明確ではないが、この時期の遺物の出土が知られる山麓部に存在した可能性が高い。

本遺跡の位置する恩智川以東の平野部が、居住地として利用されたのは主として弥生時代前期から中期にかけての限られた時期である。他の時代は、古墳時代の短期間を除きすべて山麓部に居住地を設け平野部は、耕作地として利用された。何故、弥生時代の限られた時期のみ居住地であったのか、地理的、歴史的に今後検討していく必要がある。

注

1) 「しがい」あるいは「柳田」とも呼ばれる。1枚の田の所々を掘り下げ、溝とし残りの部分に溝を掘った際に出た排土を盛り上げて高くし、この部分で稻作を行うものである。現在市内では、本遺跡付近にわずかにみられるだけであるが本来は、恩智川沿いの石切～河内町にかけて存在した。近世以降に行われた耕作形態と考えられている。なお、掘り上げ田に伴う溝は、深さ2.5mに及ぶものがあり、溝の底は、弥生時代の遺構面まで達している。

芋本隆裕「皿池の調査報告」(『東大阪の歴史1』1976年) 東大阪市遺跡保護調査会

2) 第16次調査で、今回検出した環濠の南端にあたると思われる大溝の一画を検出している。環濠の北端と南端の距離は約380mである。

福永信雄「鬼虎川遺跡第16次発掘調査概報」(『財東大阪市文化財協会年報1983年度』P1～P12 1984年) 財団法人東大阪市文化財協会

参考文献

枚岡市史編纂委員会(『枚岡市史』1965年)

財団法人東大阪市文化財協会(『甦る河内の歴史』1984年)

東大阪市教育委員会(『発掘20年のあゆみ』1987年)

III. 調査概要

1. 調査方法と目的

今回の調査地点は第12次調査と第15次調査箇所に東と西をはさまれた東西に長い場所である。調査区の平面形は橋脚部分にあたる正方形と、それをつなぐ形でやや幅を狭めた長方形を交互に連ねた形の中央部分とこの部分から東と西に1ヶ所ずつ離れた場所の橋脚に当たる正方形部分である。これらの調査区を東より西にA地区（東端）B～E地区（中央部分）F地区（西端）と仮称した。調査面積は537m²である。あわせて第12次調査以降使用している国家座標に基づく地区割も用いることにした。

A地区は、第12次調査で良好な状態で検出された方形周溝墓を保存するために、橋脚位置をずらす必要が生じたため設定した。F地区は、E地区と国道163号線を挟んで造られる橋脚部分にあたる。A～D地区は、長さ10mの鋼矢板を周囲に打設し、E、F地区は、国道163号線の両側にあたるため、長さ15mのH鋼とモルタルを用いた工法で、土留を行った後、調査を実施した。

調査の目的は、従前の調査で調査地が遺跡集落部分の北辺にあたると想定されていたことから、その実態を明らかにすることを主とした。具体的には第12次調査で検出された大溝の延長を明らかにすることや、第15次調査では、遺構、遺物ともに希薄であったことから、どのあたりまで濃密な遺物包含層や遺構が分布するのかを確認すること、従前の調査では、あまり明確でなかった上層の弥生時代以降の遺構について明らかにすることを目的とした。

2. 調査経過

現場調査は矢板打設や仕保工などの関係で、A地区を昭和58年5月9日～11月7日、B～E地区、5月24日～11月18日、F地区は5月30日～10月8日の間に実施した。掘下げは上部の盛り土を機械を用い、旧耕土以下の掘削を人力で行った。土の排出はベルトコンベアーアを使用したが最終段階で一部、レッカーカー車にワイヤー製のモッコを吊るして行った。

調査途中で、弥生時代の遺構が明瞭になった10月8日に現地説明会を催した。当日はあまり天候が良くなかったが約70人の参加を得ることができた。また、A地区で検出した方形周溝墓主体部の木棺の切り取り保存を行った。木棺は、現在東大阪市文化財協会で保管している。

調査の成果は、後述するが、代表的な遺構を検出した月日を順に以下列記する。6月11日B～E地区で近世～近代の掘り上げ田の溝、6月11日F地区中世の耕作に伴うと考えられる溝、8月1日B～F地区、平安時代の洪水によると思われる砂層と下層上面で足跡、溝、8月25日A地区方形周溝墓の木棺、9月8日B～E地区大溝（畿内第2様式）、11月7日B～E地区大溝の南肩より棚列、土壙などを検出した。

IV. 遺 跡

1. 層序

A～F 地区の間は、東西200mに及ぶため、層序も複雑である。特に、A 地区は、B～E 地区の東に、F 地区は西に距離を置いた調査区であり、それぞれの層序も異なる。したがって、ここではA・B～E・F の3 地区に分けて記述する。なお、弥生土器の所属時期に関してはたとえば畿内第II様式とすべきであるが、繁雑になるため、以下、本文中では畿内を略し第II様式とのみ記す。

A 地区（南壁断面）

第1層 旧耕土 厚さ20cm以上で国道308号線開設以前の耕土。耕土の上に約1mの厚さで盛土が認められる。

第2-U層 赤褐色砂質粘土（床土） 上面はT.P 3.2mで厚さ24cm。耕作に伴う溝、ピットなどを検出。近世～近代の弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などの細片出土。
第1遺構面。

第2-L層 赤褐色シルト（床土） 厚さ16cmで第2-U層と分層されるが、基本的には上層と併せいわゆる床土である。

第3層 暗青灰色粘土 上面はT.P 2.8mで厚さ40cm、河川1を検出。層中に同色の砂質粘土のブロックを含む。土師器・須恵器と13～14世紀代に属す瓦器椀など出土。第2遺構面。

第3-A層 青灰色シルトと青灰色粘土の互層 厚さ40cmで河川1の堆積土である。13世紀代に属す瓦器・土師器など出土。

第3-B層 暗黄灰色粘土 厚さ6cmで河川1の1次堆積土である。

第4層 暗青灰色砂質粘土 上面はT.P 2.3mで、厚さ40cm。土師器・須恵器や13世紀代に属す瓦器と、ウマの歯など少量出土。

第5層 黒灰色砂質粘土 上面はT.P 2.1mで厚さ8cm。溝1・土壙1・杭を検出する。土師器・須恵器と12世紀代に属す瓦器など出土。第3遺構面。

第5-A層 青灰色砂質粘土 厚さ16cmで溝1の堆積土である。黒灰色粘土のブロックを含む。弥生土器・土師器・須恵器と12～13世紀代に属す瓦器微量出土。

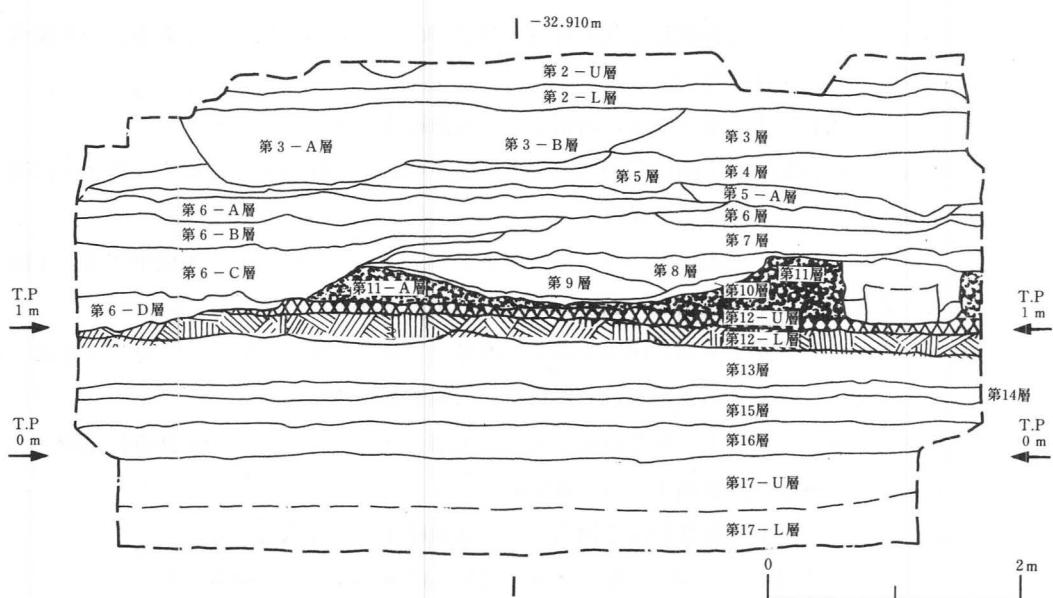
第6層 暗灰色砂混じりシルト 厚さ12cmで河川2が切り込む。弥生土器と奈良時代以降と考えられる土師器が微量出土。第4遺構面。

第6-A層 青灰色シルト 厚さ20cmで河川2の上部堆積土。炭を微量含む。

第6-B層 暗灰色砂混じりシルト 厚さ24cmで河川2の堆積土。炭を微量含む。

第6-C層 暗青灰色シルト 厚さ40cmで河川2の堆積土。炭を多量に含み弥生土器と12世紀代に属す土師器少量出土。

第6-D層 暗青灰色シルト 厚さ28cmで河川2下部堆積土。12-U・L層のブロックを、含む。
 第7層 暗青灰色シルトと暗黄灰色砂の互層 厚さ32cmで、第III様式に属す弥生土器少量出土。
 第8層 暗灰色シルト 厚さ28cmで第7号方形周溝墓の上部を覆う層である。
 第9層 暗茶褐色細砂 厚さ24cmで第7号方形周溝墓の溝内堆積土。
 第10層 暗灰色粘土 厚さ4cmで第7号方形周溝墓の溝内1次堆積土。
 第11層 黒色粘土 (第12-U～第15層) 黄灰色粘土 (第16層) のブロック混じり土 厚さ48cm
で上面はT.P1.5m。第7号方形周溝墓の盛土で弥生土器微量出土。
 第11-A層 基本的には第11層と同じであるが、黄灰色粘土のブロックが大きい。厚さ24cm。
溝15の盛土で弥生土器微量出土。
 第12-U層 黒色粘土 上面のT.Pは1.2mで凹凸が認められ、厚さは8cm。第7・8号方形周溝墓・土壙11検出。上部で第II様式に属す弥生土器少量出土。第5遺構面。
 第12-L層 黒色粘土に砂がブロック状に含まれる。上面はT.P1.1mで厚さ20cmである。
 以下、第13層暗灰色粘土と青灰色シルトの互層、第14層緑灰色粘土と黒色粘土の互層、第15層黒色粘土、第16層黄灰色粘土、第17-U層暗灰色シルト質粘土、第17-L層暗灰色シルトと地山が続く。本遺跡で一般にみられる第16層上面はT.P0.3mで厚さ24cmである。
 各層の所属時期は、出土遺物や上面の遺構からみて、第3層(南北朝～室町時代)第4層(鎌倉時代)第5層(平安時代後期)第6層(奈良時代以降)第7層(弥生時代中頃)第12-U層(弥生時代中期初頭)に比定できると考える。弥生時代後期から古墳時代に属す層は、検出できなかった。



第3図 A地区南壁断面図

B～E地区（北壁断面）

第1-U層 旧耕土 厚さ約15cmで、国道308号線開設以前の耕土。C～F地区で掘り上げ田の溝を埋めて存在する。上面のT.P2.9m（C地区）～T.P2.7m（E地区）である。上部に盛土が約1mの厚さで存在する。

第1-L層 旧耕土 厚さ約20～25cmで、掘り上げ田の溝と同時期ないし以前に属す耕土。近世～近代の瓦・陶磁器・瓦器・土師器・須恵器出土。

第1-L-A層 茶褐色粘土・黒褐色粘土・黄灰色粘土がブロックとなって混じり合った層。厚さ80～120cmで、掘り上げ田の溝上部の埋土。

第1-L-B層 暗黄褐色シルト質粘土 厚さ40～120cmで、掘り上げ田の溝内堆積土。近世～近代の陶磁器やシジミなどの貝も出土した。

第1-L-C層 緑灰色粘土 厚さ20～40cmで第12-L・第13層をブロックで含む。掘り上げ田の溝の下部堆積土で、溝を掘った際の排土と考えられる。

第2-U層 暗赤褐色砂質粘土（床土） 厚さ20cm前後でA地区からB地区まで存在する。上面はT.P2.7mで耕作に伴う溝・ピットなどを検出。近世～近代の陶磁器・土師器・須恵器・弥生土器出土。第1遺構面。

第2-L層 茶灰色砂質粘土（床土） 厚さ13～20cm。C地区中央付近からE地区までの床土はこの層のみであるが、北壁断面では、掘り上げ田の溝のため表れていない。以下の層でも同じ理由によるものは他の場所で確認した状況を記述する。出土遺物は第2-U層と同様のものである。第1遺構面。

第3層 黄褐色粘土 厚さ9～20cmで西に行くほど土色は黒ずむ。黒灰色砂質粘土のブロックを含み客土層と考えられる。土質はやや異なるがA地区の第3層もほぼ同様の層である。上面のT.P2.7m（B地区以下同じ）～T.P2.4m（E地区以下同じ）。B・C地区で溝2～4・土壙2・ピット1・落ち込み1を検出。土師器・瓦器・陶器・須恵器・弥生土器など出土。第2遺構面。

第3-A層 暗緑灰色粘土 厚さ40cmで溝2の上部堆積土。

第3-B層 暗緑灰色粘土 第3-A層に比べて少量の砂を含む。厚さ24cmで溝2の下部堆積土。

第3-C層 青灰色粘土に緑灰色粘土のブロックが混った層。厚さ80cmで落ち込み1の上部堆積土。

第3-D層 暗褐色砂質粘土。厚さ40cmで落ち込み1の下部堆積土。

第3-E層 緑灰色粘土 厚さ76cmで溝3の上部堆積土。

第3-F層 青灰色砂質粘土 厚さ78cmで溝3の堆積土。

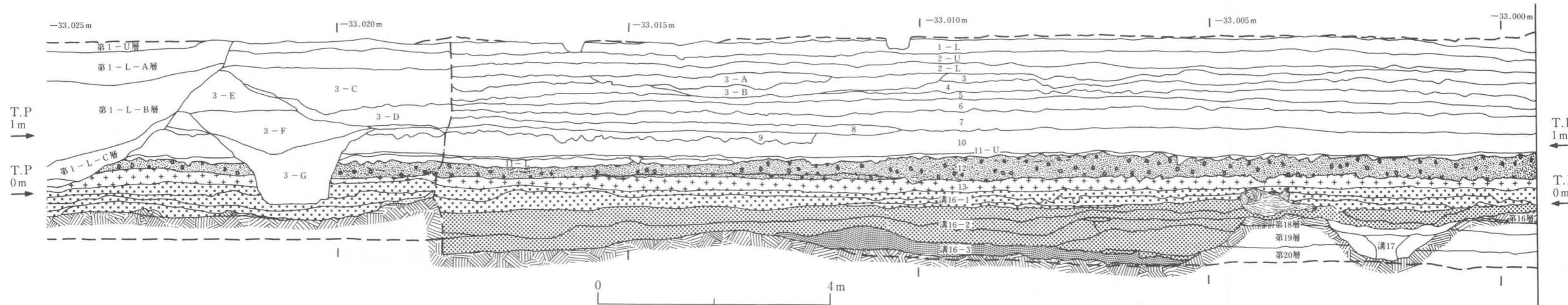
第3-G層 暗青灰色砂質粘土 厚さ88cmで溝3の下部堆積土。植物遺存体中量含む。

第4層 青灰色粘土 厚さ13～16cmで、上面はT.P2.5～2.2m。D・E地区では第5層のブロックを含む。上面で溝5～9、土壙3～5などの遺構検出。土師器・須恵器細片微量

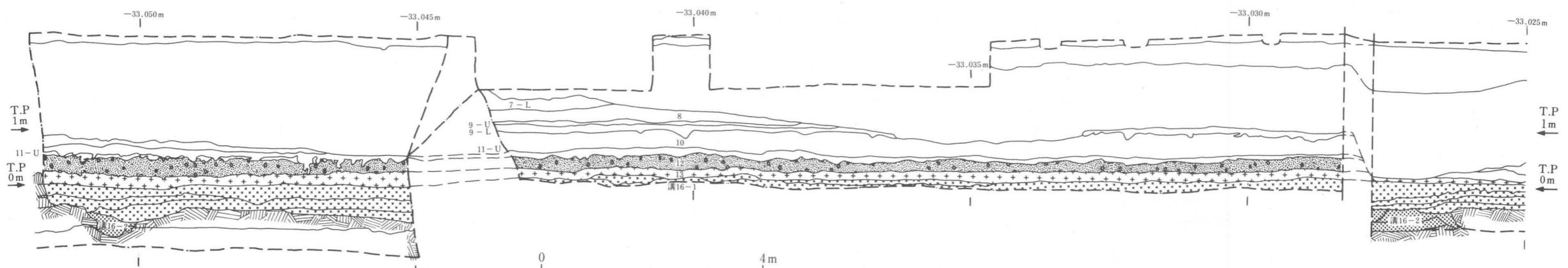
出土。第3遺構面。

- 第5層 緑灰色粘土 厚さはB・C地区で16~20cm、D・E地区で4cmで上面の凸凹が激しい。上面はT.P2.3~2.1mで土壌6~10・ピット2~3・溝10の遺構検出。弥生土器・須恵器・土師器と、12世紀代に属す瓦器など少量出土。第4遺構面。
- 第6層 暗青灰色砂混じり粘土 厚さはB・C地区で20cm、D・E地区で28~35cm。D・E地区では砂が含まれず第6-L・Uの2層に分層される。第6-U層はL層に比べて色調が黒みを帯びる。B・C地区では黒色粘土のブロックを含み、D・E地区ではアシの葉などの植物遺存体や炭を多量に含む。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・黒色土器と12世紀代に属す瓦器少量出土。
- 第7層 暗緑灰色粘土 厚さはB・C地区で8~28cm、D・E地区では56~60cmで西に行くほど上面の凹凸が激しい。D・E地区では砂を含む第7-L層と分層できる。D・E地区ではアシの葉などの植物遺存体を含む。弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器と、12世紀代に属す瓦器少量出土。
- 第8層 暗緑灰色砂質粘土 B地区中央付近からE地区まで存在する。厚さ12~36cmでD・E地区では砂分がなくなる。弥生土器・土師器・須恵器少量出土。上面で竹杭・溝11、12検出。第5遺構面。
- 第9層 暗緑灰色中粒砂 厚さ12~28cm、B地区中央付近よりE地区まで存在する。D・E地区では、暗灰色砂質粘土（第9-U層）と2層に分かれる。須恵器・土師器・黒色土器・延喜通宝など出土。遺物は、D・E地区より多く出土した。F地区や第15次調査では検出されておらず凹地に堆積した層と考えられる。
- 第10層 青灰色粘土 厚さ9~40cm、E地区は薄い堆積しか認められない。弥生土器・土師器・須恵器少量出土。土師器・須恵器は奈良~平安時代に属す。弥生土器には第IV~V様式に属すものが認められる。上面で足跡を検出。第6遺構面。
- 第11-U層 青灰色シルト 厚さ4~12cm、上面のT.P1.0m~0.7mである。弥生土器・土師器と奈良時代に属す須恵器が少量出土。
- 第11-L層 黄褐色シルト質粘土 B地区中央部より、C地区東端付近の狭い範囲に存在。厚さ8~12cmで弥生土器と古墳時代に属す土師器微量出土。
- 第11-M層 灰色中粒砂 厚さ9cmでE地区のみに部分的に認められ、ごく狭い凹地に堆積した層と思われる。遺物は出土しなかった。
- 第12層 黒灰色粘土 厚さ20~32cm、上面はT.P0.8(B地区)~0.5m(E地区)で上面の凸凹が激しい。第II・III様式に属す弥生土器中量出土。F地区でも認められる。
- 第13層 暗黄褐色砂質粘土 厚さ16~20cmで第6遺構面を覆う層である。溝16の名残の凹地に厚く、それ以外は比較的薄く堆積する。弥生土器中量出土し、大半は第II様式に属すが少量の第III様式に属す土器も認められる。
- 第14層 黒灰色粘土 厚さ12~24cm。上面は、T.P0.5~0.35mで、第18層黄灰色粘土のプロ

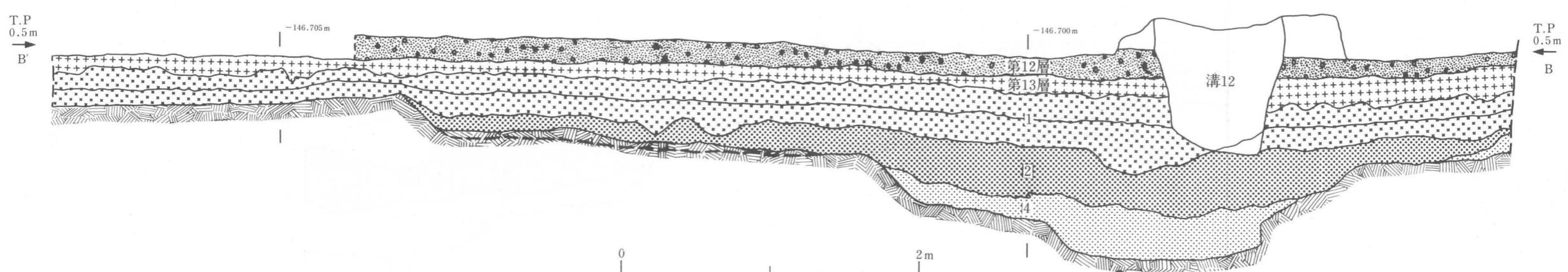
第4図 (折込1) 土層断面図



B・C地区北壁断面図



C～E地区北壁断面図



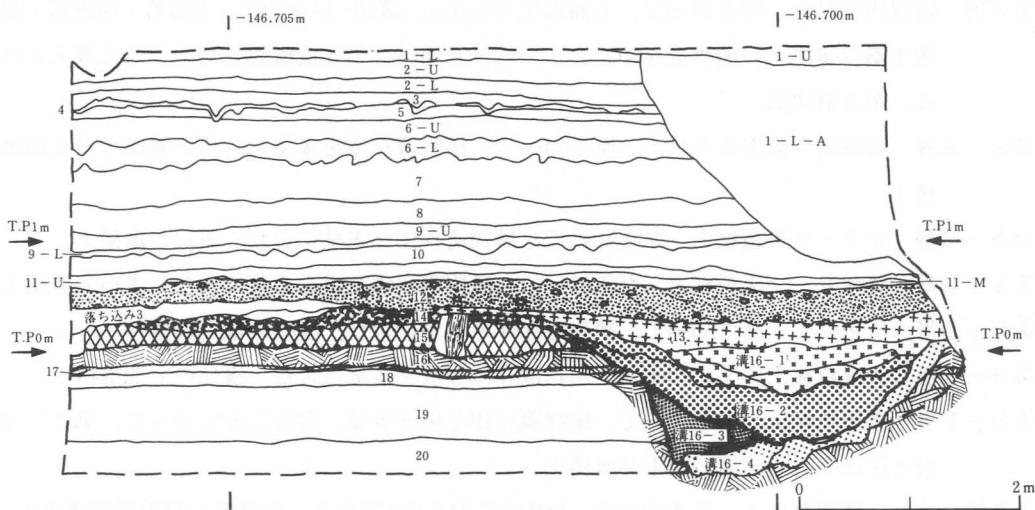
C地区環濠（溝16）南北断面図

ックを含み、溝16などを掘り込んだ際に出た排土を盛土とした層。この層は本遺跡で弥生時代の遺構面を形成する一般的な層であるが溝16の堆積土のため、北壁断面には表れていない。D地区では黄灰色粘土のブロックの大小から2層に細分される。第II様式に属す弥生土器少量出土。上面で柵列・土壤・溝16などが検出された。第7遺構面。

第15層 黒色粘土 厚さ20~44cmで、西に行くほど厚くなる。A地区第12層、F地区第16層と同一層で、本遺跡に一般的に見られる。溝16・17などは本来、この層の上面より切り込まれたと考えられる。

以下、第16層が青灰色粘土（上面のT.P 0.1~-0.15m）第17層、黒色粘土（上面のT.P 0.06~-0.2m）A地区第16層と同一層と考えられる第18層、黄灰色粘土（上面のT.P 0~-0.3m）第19層、黄灰色シルト質粘土（上面のT.P -0.8m）と地山層が続く。弥生時代の遺構の堆積土については、本章-2. 弥生時代の遺構で詳述するので省略した。

各層の所属時期は、第3層（室町~江戸時代）第4層~第8層（鎌倉~室町時代）第9層（平安時代）第10層（奈良~平安時代）第11層-U・L層（古墳時代後期~奈良時代）第12-L層・第13層（弥生時代中期中頃）第14層（弥生時代中期初頭）第15層（弥生時代前期末~中期初頭）と考えられる。弥生時代中期末~古墳時代中期の層は認められなかった。



第5図 E地区西壁断面図

F 地区（西壁断面）

第1-U層 旧耕土 厚さ12cmで、国道308号線開設以前の耕土、上面はT.P2.6mである。C～E地区と同じく掘り上げ田の溝を埋めた土。上部に、盛り土が厚さ約1.5m存在する。

第1-L層 旧耕土 厚さ20cmで、近世～近代の掘り上げ田の溝と同時代ないし以前に属す耕土である。瓦・土師器・陶磁器などが出土。

第2層 茶褐色砂質粘土（床土） 上面はT.P2.3mで厚さ20cm。上面で耕作に伴うと思われるピットを検出。弥生土器・土師器・須恵器少量出土。第一遺構面。

第3層 暗黃灰色粘土 上面はT.P2.1mで厚さ8cmである。黒灰色砂質粘土のブロックを含み、客土層と思われる。弥生土器・須恵器微量出土。

第4層 暗灰色粘土 厚さ12cmで第5層緑灰色粘土のブロックを含む。

第5層 緑灰色粘土 厚さ4cm。不連続な層で上面の凹凸が激しい。第4層上面から掘り起こされブロックとなって第4層に混入し、殆ど消滅したものと考えられる。

第6-U層 暗褐色粘土 厚さ12cmで上面に凹凸が見られる。草の根などの植物遺存体を含む。弥生土器・土師器微量出土。

第6-L層 暗青灰色粘土 厚さ12cmで、F地区北半分に存在。第6-U層と同じく植物遺存体を含む。

第7-U層 暗緑灰色粘土 厚さ12cmで、上面はT.P1.7m。上面の一部に凹凸が認められる。植物遺存体を含む。

第7-L層 暗緑灰色砂質粘土 厚さ20cmで、上層に比べて砂分がやや多い。植物遺存体を含む。弥生土器・土師器と6世紀後半に属す須恵器微量出土。

第8層 暗緑灰色粘土 厚さ20cmで、上面はT.P1.4m。溝13・14を検出。土師器・須恵器・黒色土器少量出土。植物遺存体を含む。B～E地区の第5遺構面と対応すると考えられる。第2遺構面。

第8-A層 暗緑灰色砂混じり粘土 厚さ24cmで、植物遺存体を多量に含む。溝14の最上部堆積土。

第8-B層 オリーブ黒色粘土 厚さ16cmで、植物遺存体を多量に含む。溝14の堆積土。

第8-C層 暗オリーブ灰色粘土 厚さ52cmで、植物遺存体と炭を多量に含む。溝14の堆積土。

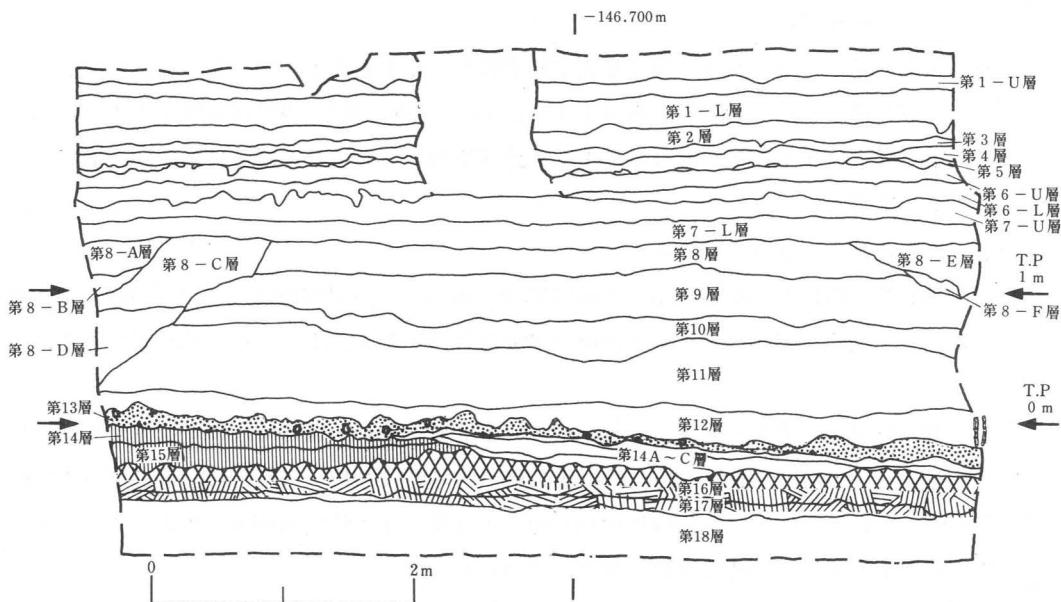
第8-D層 灰色粘土 厚さ60cmで、植物遺存体を多量に含む。溝14の最上部堆積土。

第8-E層 青灰色粘土 厚さ40cmで、植物遺存体と炭を多量に含む。溝13の上部堆積土。

第8-F層 青灰色粘土 厚さ8cmで、植物遺存体と炭を少量、含むことによって、第8-E層と区別される。溝13の下部堆積土。

第9層 オリーブ灰色粘土 厚さ40cmで、上面はT.P1.2mである。土師器・須恵器微量出土。

植物遺存体を含む。E地区第9-U・L層は、この層と第8層に標高と出土遺物から見て対応する可能性が高い。



第6図 F地区西壁断面図

- 第10層 灰色粘土 厚さ32cmで上面に緩やかな凹凸が認められる。弥生土器・土師器少量出土。植物遺存体を含む。
- 第11層 青灰色砂質粘土 厚さ52cmで上面に緩やかな凹凸が認められる。弥生土器・土師器少量出土。
- 第12層 灰色シルト混じり粘土 厚さ24cmで、層中より竹杭が打ち込まれた状況で検出された。¹⁾ 弥生土器・須恵器穂出土。須恵器穂（第25図30）は、MT21型式に属す。竹杭は、第11層上面か第12層上面より打ち込まれたものと考えられるが、遺構面は確定できない。
- 第13層 黒灰色粘土 厚さ16cmで上面はT.P 0 m。上面は凹凸が激しく、南から北に向かって約30cmの傾斜がある。第II～第III様式に属す弥生土器少量出土。B～E地区第12層と対応する。
- 第14層 暗灰色シルト混じり粘土 厚さ12cmで上面はT.P -0.1 m、この層から（第45図191）の鉢をはじめ、最も多くの土器が出土した。弥生土器は第II様式に属す。上面で落ち込み²⁾ 2検出。この落ち込みは、第15次調査の埋没谷に相当すると思われる。第3遺構面。
- 第14-A層 灰褐色粘土 厚さ8cmで植物遺存体・弥生土器少量出土。落ち込み2の上部堆積土。
- 第14-B層 灰黄褐色粘土 厚さ10cmで自然木など植物遺存体と第III様式に属す甕（第23図）を含む弥生土器少量出土。落ち込み2の堆積土。
- 第14-C層 暗黄灰色粘土 厚さ12cmで自然木などの植物遺存体と弥生土器少量含む。落ち込

み 2 の下部堆積土。

第15層 暗褐色粘土 厚さ24cmで第II様式に属す弥生土器少量出土。

第16層 黒灰色粘土 厚さ32cmで上面はT.P - 0.4m。上面に激しい凹凸が認められた。上部で第II様式に属す弥生土器少量出土。A地区第12層・B~E地区第15層と同一層である。第4遺構面。

第17層 青灰色粘土 厚さ8cmである。

以下第18層黄灰色粘土 厚さ52cmで上面はT.P - 0.7m、第19層黄灰色シルト質粘土、第20層暗黃灰色粘土と続く。第20層よりサメの歯(図版71の11)が1点出土した。第17層以下地山である。

各層の所属時期は、第3~第7-L層(中世) 第8層(平安~鎌倉時代にかけて) 第9層(平安時代) 第10・第11層(奈良~平安時代) 第12層(古墳時代後期~奈良時代) 第13層(弥生時代中期中頃) 第14・第15層(弥生時代中期初頭) 第16層(弥生時代前期末~中期初頭)と考える。弥生時代中期末~古墳時代中期の層は、認められなかった。

2. 遺構

歴史時代の遺構

各地区の第1遺構面で、近世~近代の耕作に伴う遺構を各地区とも検出したが、今回は説明から割愛し、古代から中世に属すると考えられる遺構についてA地区・B~E地区・F地区の順に記述する。この時期の遺構は、A地区で3面、B~E地区で4面、F地区で1面検出している。遺構内の堆積土は、各地区的層序の項で述べたものは省略する。

A地区

第2遺構面(第3層上面遺構)

河川1 調査区のやや東よりに南から北へ向かって流れる自然河川。幅4m、深さ60cmで断面形は皿状を呈する。須恵器・土師器と13世紀代に属す瓦器の細片が少量出土。

第3遺構面(第5層上面遺構第7図)

溝1 調査区の西よりに南から北に向かって走る。幅2.2m、深さ16cm、断面形は浅い皿状を呈する。12~13世紀代に属す瓦器など微量出土。東肩に杭4本を検出した。

土壙1 調査区の北東隅で一部検出。平面形は楕円形を呈すものと思われる。長軸1.4m、短軸0.8m以上である。断面形は皿形を呈し深さ10cm。土師器と弥生土器少量出土。

第4遺構面(第6層上面遺構)

河川2 調査区の南東隅で一画を検出。南西から北東に向かって流れる自然河川と考えられる。幅2m以上、深さ1m以上で断面形は不明。12世紀代に属す土師器や弥生土器少量出土。

各遺構の時期は出土遺物や切り込まれた上・下の土層からみて、第2遺構面のものが鎌倉時代後半、第3遺構面の遺構は鎌倉時代中頃から後半、第4遺構面の自然河川が平安時代後半頃に比定できる。遺構の性格は不明である。

B～E地区

第2遺構面（第3層上面遺構 第8図・図版3）

溝2 B地区東端付近より南東から北西に向かって走り、調査区外に延びる。幅0.43m、長さ12.4m以上、深さ13cmである。遺物は出土せず。（以下、遺物の出土がなかった遺構はこの記述を略す。）

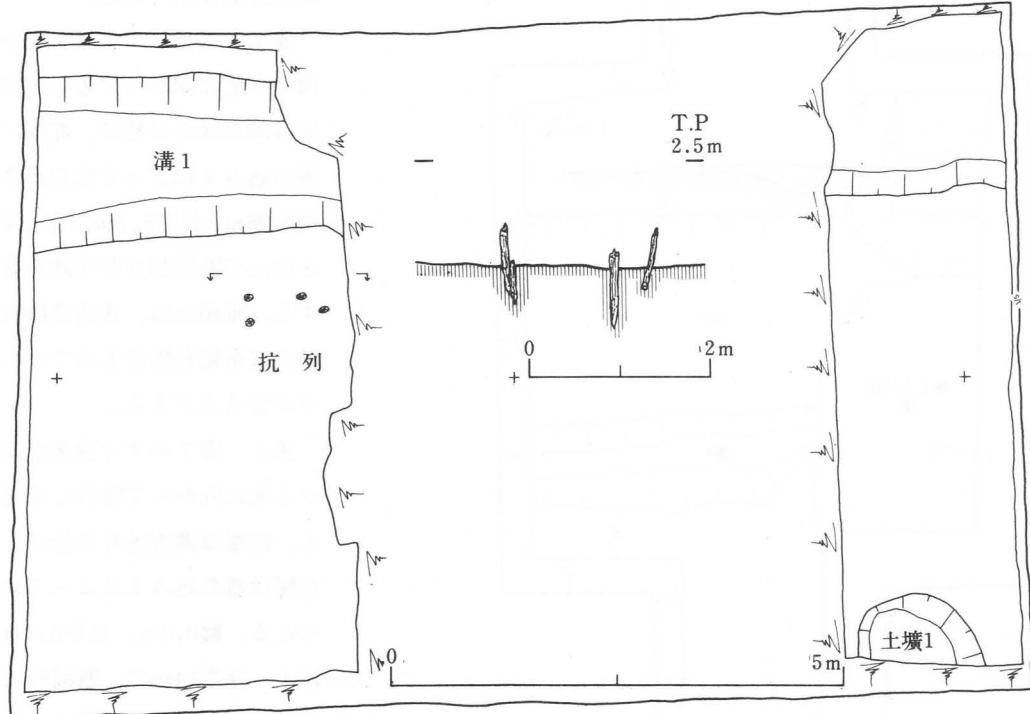
溝3 C地区のほぼ中央を南から北に向かって走り、南端は調査区外に延び、北端は第1遺構面の掘り上げ田の溝と落ち込み1によって切られる。西肩は、溝4によって切られる。幅4.4m、長さ8.4m以上、北に向かうほど深く最深部では深さ232cmである。

溝4 C地区の西より、南から北へ向かって走る。南端は調査区外に延び、北端は第1遺構面の掘り上げ田の溝によって切られる。幅2.1m、長さ6.3m以上、深さ60cmである。堆積土は、青灰色粘土である。

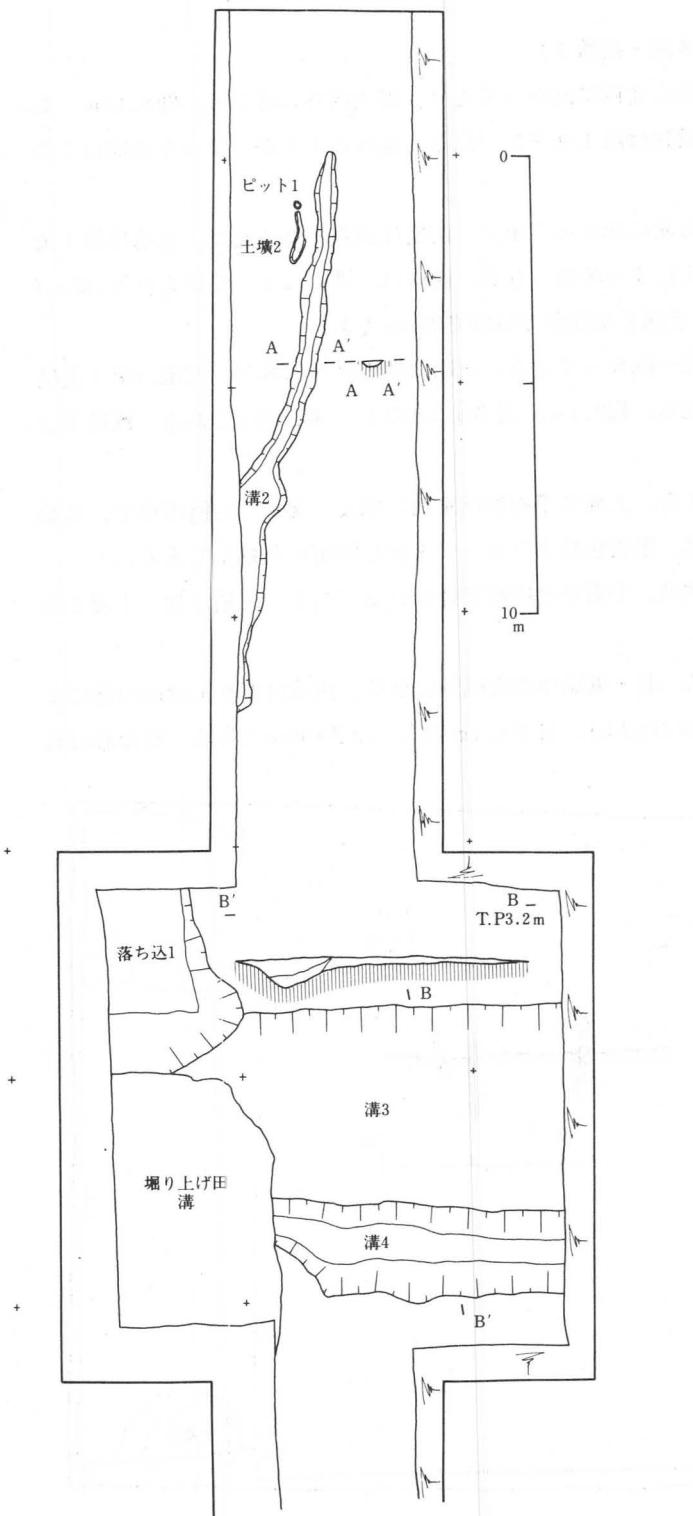
土壌2 B地区の西よりに存在する。上面の平面形は東西に細長い変形した楕円形で、長軸1.2m、短軸0.3mである。堆積土は、黒灰色粘土ブロックを含む暗黄灰色粘土である。

ピット1 土壌2の東端近くで検出。平面形は円形で径0.14mである。堆積土は、土壌2と同じである。

落ち込み1 C地区北東端で検出。北・東端は調査区外に延び、西端は掘り上げ田の溝によって切られる。平面形は不明で、幅5.8m以上、長さ4.4m以上、深さ100cmである。断面形は皿



第7図 A地区第3遺構面実測図



第 8 図 B～C 地区第 2 遺構面平面図

状を呈すようである。

第 3 遺構面(第 4 層上面遺構)

第 9 図・図版 4)

溝 5 B 地区西部よりに西から東南東へ向かって走り、東端は調査区外に延びる。幅 2.1 m、長さ 11.5 m 以上、深さ 14 cm である。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は、暗青灰色粘土である。

溝 6 B 地区中央より西で検出。西端は溝 7 に、東端は溝 5 に切られる。南端は調査区外に延びる。幅 3 m 以上、長さ 11.5 m 以上、深さ 14 cm である。断面形は浅い皿状を呈すと思われる。堆積土は、青灰色砂質粘土である。

溝 7 C 地区の東端付近を南から北に向かって走る。南端は調査区外に延び、北端は落ち込み 1 によって切られる。幅 0.98 m、長さ 8.7 m 以上、深さ 20 cm で断面形は U 字状を呈する。堆積土は、青灰色砂質粘土に茶褐色砂質土のブロックが混る土である。

溝 8 溝 7 のすぐ西側を南から北に向かって併行して走る。南端は調査区外に延び、北端は落ち込み 1 によって切られる。幅 0.6 m、長さ 8.4 m 以上、深さ 14 cm で、断面形は U 字状を呈する。堆積土は青灰色粘土である。

溝9 C地区の西端付近よりD地区にかけて東から西に向かって走る。東端は溝4によって切られる。幅2.2m、長さ17.2m以上、深さ13cmで、断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は、暗青灰色粘土である。

土壤3 C地区中央やや南よりで検出。南北に長い不整円形で、長軸2.8m、短軸0.8m、深さ12cmで断面形はU字状を呈する。堆積土は、青灰色砂質粘土で土壤4に比べて砂分が少ない。

土壤4 土壌3によって東端を切られる。東西に長い不整円形で、長軸1.5m、短軸0.52m、深さ16cm、断面形はU字状を呈する。堆積土は、青灰色砂質粘土である。

土壤5 C地区の南端中央付近で検出。北東端を土壤3に、西端を溝4に切られる。平面形は東西に長い不整円形で、長軸2.9m以上、短軸1.1m、深さ24cmで断面形はU字状を呈する。堆積土は青灰色粘土である。

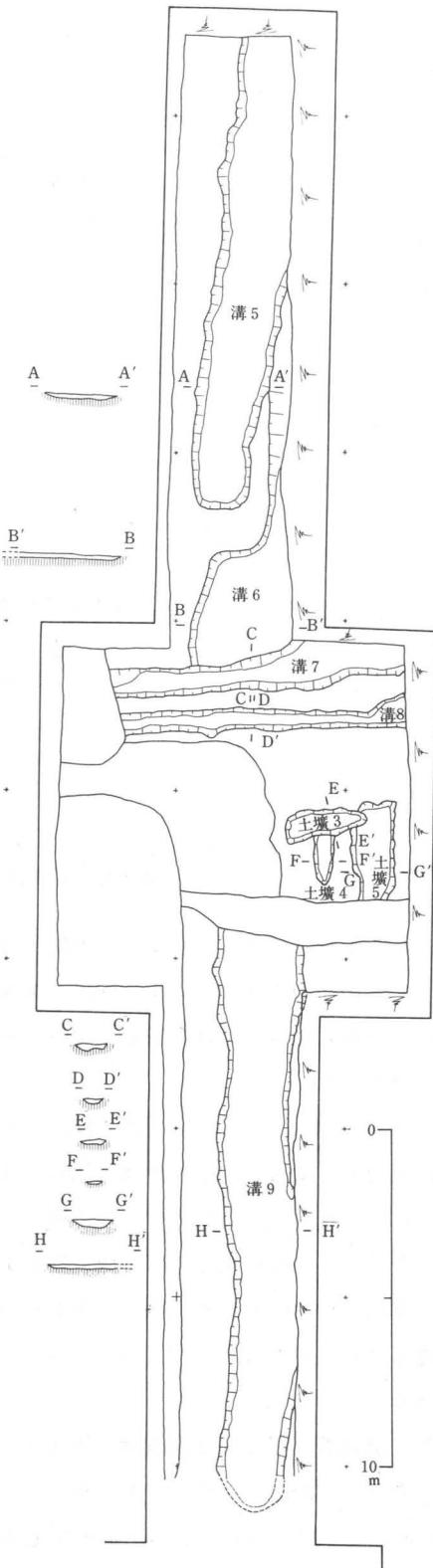
第4遺構面（第5層上面遺構 図版4）

土壤6 B地区西端付近で検出。平面形はやや不整形な橢円を示し、長軸0.72m、短軸0.56m、深さ20cmである。断面形はU字状を呈し、堆積土は暗灰色粘土である。

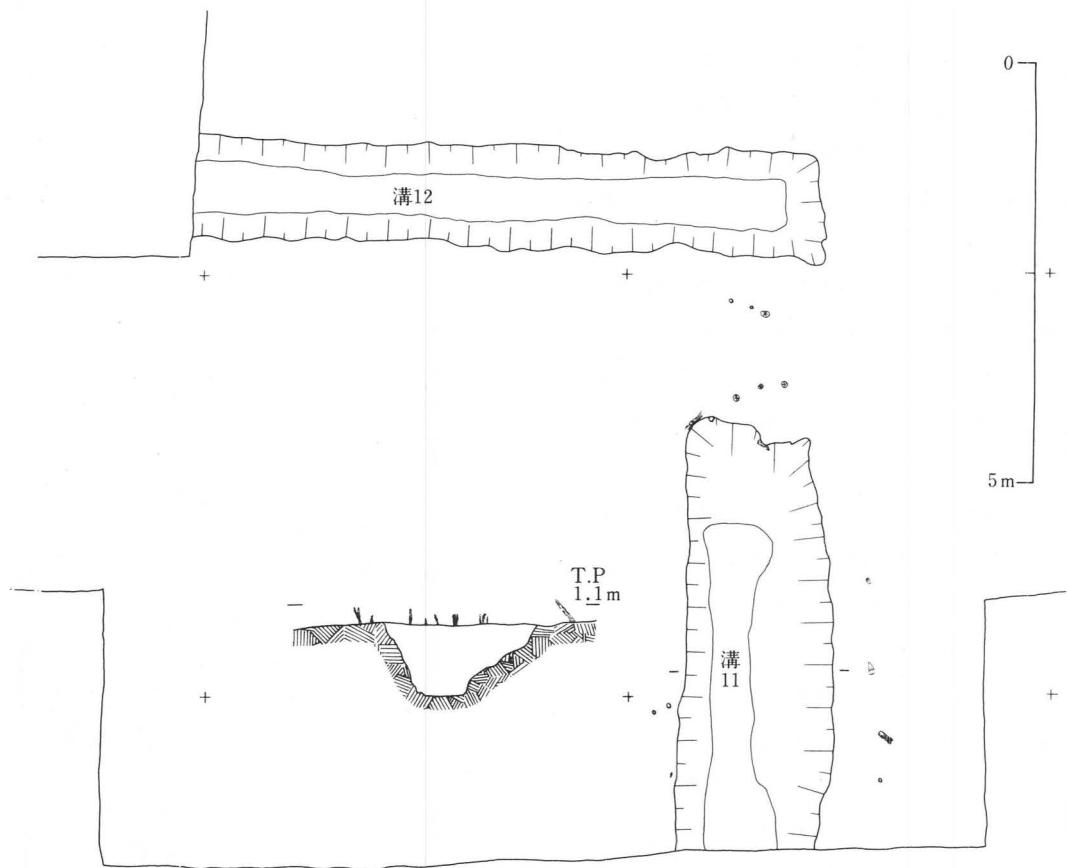
土壤7 B地区中央よりやや東で検出。平面形は不整形な橢円を呈し、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ20cmである。断面形はU字状を呈す。堆積土は、暗灰色粘土である。

土壤8 C地区中央よりやや南で検出。平面形は南北に長い不整円形で長軸1.1m、短軸0.56m、深さ11cmで断面形はU字状を呈する。須恵器少量出土。堆積土は、暗青灰色砂質土である。

土壤9 C地区南西隅近くで検出。平面形は隅丸三角形で、最大の辺は0.56m、深さ4



第9図 B~D地区第3遺構面平面図



第10図 C地区第5遺構面（溝11・12）平面図

cmで断面形はU字状を呈する。堆積土は、暗灰色砂質土である。

土壤10 土壌9のすぐ北で検出。東端は溝4によって切られる。平面形は東西に長い不整円形で長軸0.72m、短軸0.32m、深さ7cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土は、暗青灰色砂質土である。

ピット2 土壌10のすぐ西で検出。平面形は東西にわずかに長い楕円形で、長軸0.32m、短軸0.24m、深さ6cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土は、暗灰色砂質土である。

ピット3 ピット2のすぐ西で検出。平面形は円形で、径0.2m、深さ24cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土は、暗青灰色砂質土である。

溝10 C地区の南隅で検出。東から西に向かって走り東端は溝4、西端は調査区外に延びる。幅0.24m、長さ1.8m以上、深さ4cmで、断面形はU字状を呈する。堆積土は、青灰色砂質土である。

第5遺構面（第8層上面遺構 第10図・図版5）

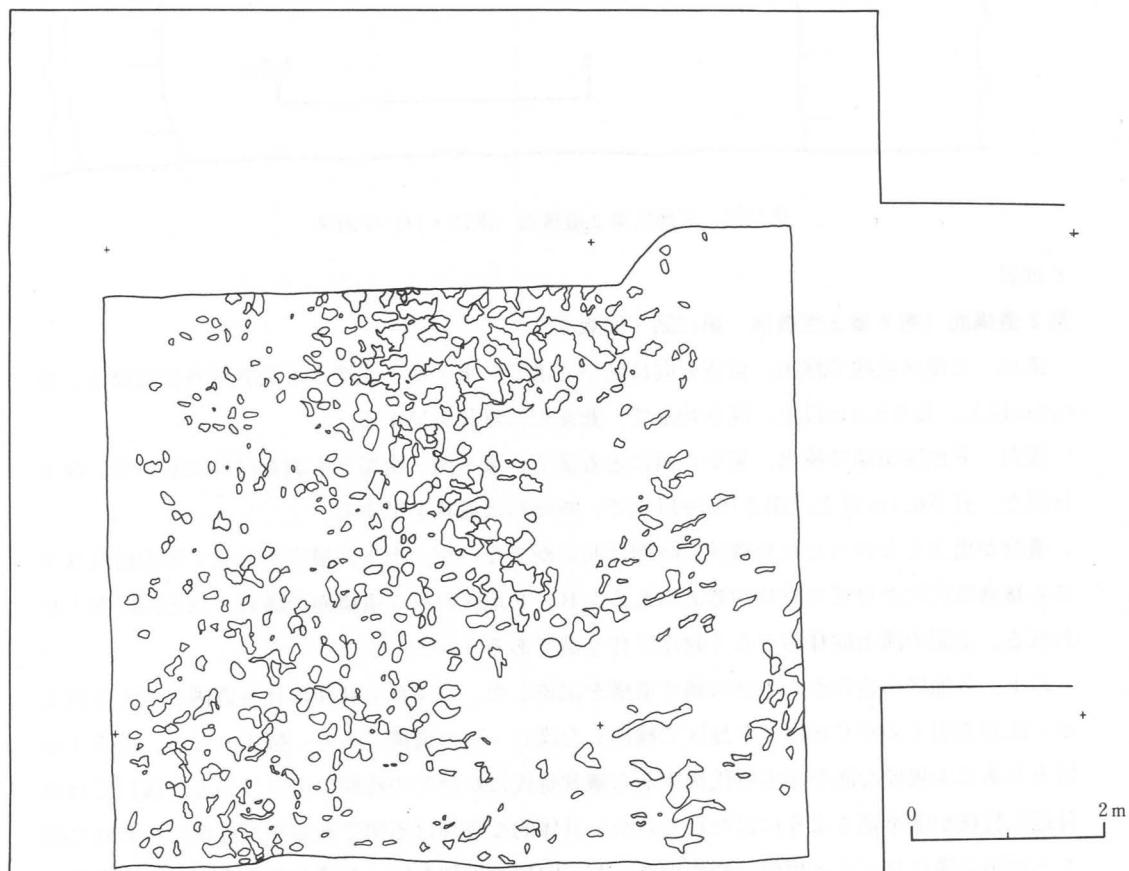
溝11 C地区の中央よりやや東よりで検出。南北に延びる溝で南端は調査区外に延びる。幅1.8m、長さ5.1m以上、深さ81cmで断面形は隅の角ばったU字状を呈する。溝の肩に竹杭を打っている。須恵器・土師器・瓦器と弥生土器少量が出土した。竹杭は検出時で長さ20cm、径5

cm前後のものである。堆積土は、緑灰色粘土で炭を多く含む黒褐色粘土のブロックが混じる。溝12 C地区の中央よりやや北で検出。東西に延びる溝で西端は、調査区外に延びる。上部は、掘り上げ田の溝によって削平されている。幅1m、長さ7.4m以上、深さ140cmで、断面形は隅の角ばったU字状を呈する。須恵器・土師器と弥生土器少量およびウシの歯1点が出土した。堆積土は、緑灰色粘土である。

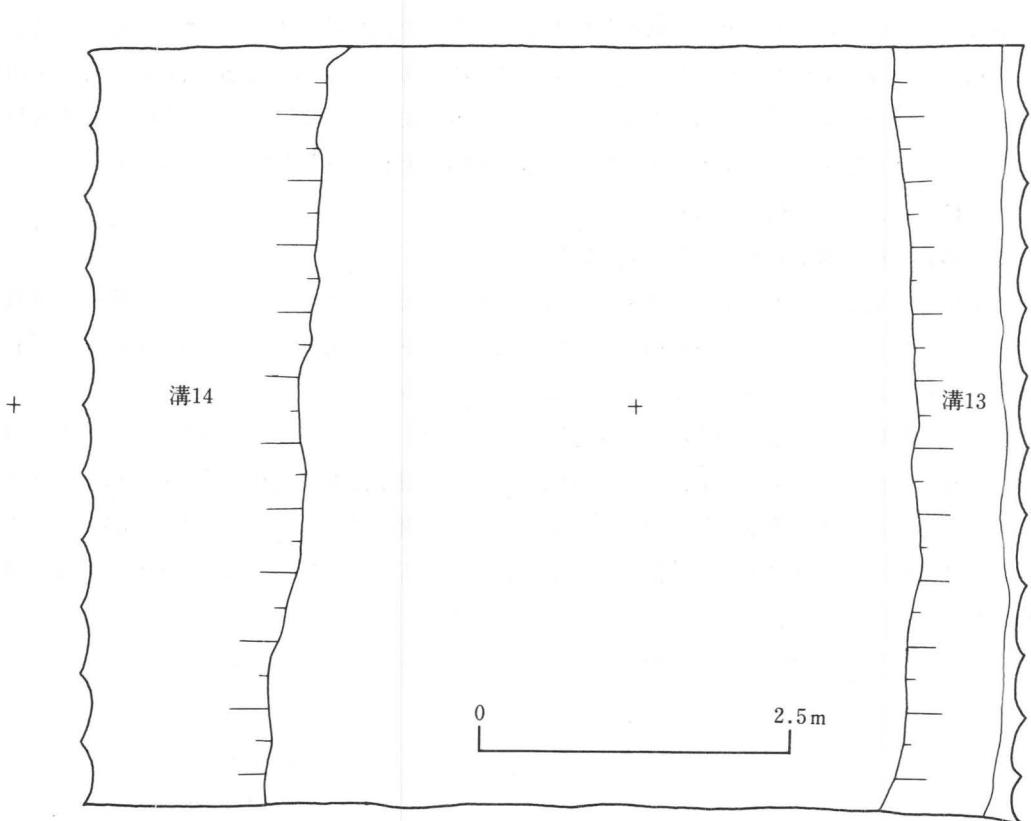
第6遺構面（第10層上面遺溝 第11図・図版5）

B地区の中央やや西よりからE地区まで検出。明瞭な足跡ではなかったが、この範囲に多数存在した。足跡内には第9層が堆積土として存在。大きさから見て人間の足跡が大部分と思われる。堆積土内より、土師器・須恵器等少量出土している。

各遺構の時期は、層序や遺構内の出土遺物から見て第2遺構面のものが室町時代頃、第3遺構面が鎌倉時代後半、第4遺構面が鎌倉時代前半、第5遺構面が平安時代後半から鎌倉時代にかけて、第6遺構面が平安時代前期に比定できる。各遺構の性格は不明であるが、遺物が少ないと云ふことや溝が大部分を占め、かつ散漫にしか存在しないことおよび本遺跡の立地から見て、耕作に伴うものと考えられる。



第11図 E地区第6遺構面（足跡）平面図



第12図 F地区第2遺構面（溝13・14）平面図

F地区

第2遺構面（第8層上面遺構 第12図・図版6）

溝13 F地区北端で検出。東西方向に延びる溝で、東・西・北端とも調査区外に延びる。幅0.9m以上、長さ6.1m以上、深さ40cmで、断面形は皿状を呈する。

溝14 F地区南端で検出。東から西に走る溝で、東・西・南端とも調査区外に延びる。幅2m以上、長さ6.1m以上、深さ100cm以上で、断面形は皿状を呈する。

遺物が出土しなかったため確実な時期は明らかでないが、上下の層序から見て平安時代後半から鎌倉時代にかけての時期が考えられる。B～E地区の第5遺構面の溝11・12と同時期と思われる。上記の溝と同様おそらく耕作に伴う溝であろう。

以上、各地区の古代から中世に属す遺構を記述した。いずれも耕作に伴う遺構と考えられるが、注意を引くのがC地区とF地区で検出した溝11～14の遺構である。幅1～2m、深さ1m以上もある大規模な溝を平安時代後半から鎌倉時代にかけての時期に造っている。溝11では肩付近に竹杭が溝を巡るように打たれていた。具体的な役割は不明であるが、近世に行われた掘り上げ田の溝に比べると規模はやや小さいが、同様の役割を持った溝と考えることが出来ないであろうか。

弥生時代の遺構

弥生時代に属す遺構は、各地区で検出された。検出した遺構は、A地区方形周溝墓・土壙・溝、B～E地区環濠・ピット群（柵列）・土壙、F地区落ち込み・ピットがある。以下A～F地区の順に記述する。

A 地区

第5 遺構面（第12-U層上面遺構 第13～15図・図版7～9）

第7号方形周溝墓 調査区の南西部で検出。第12次調査で、6基の方形周溝墓が検出されており今回確認分も、続けた番号を付すこととした。北辺は第12次調査区内に入り、西・南辺は調査区外に延び、北東の隅を検出した。³⁾墳丘の規模は東辺3m以上、北辺1.5m以上としか判明しない。築造面は本章1.で述べた如く第12-U層上面で、盛土は12-Uから16層がブロックとなって混在した土である。盛土の上面はほぼ平坦な面を成し、T.P1.6mである。築造面からの高さは48cm。

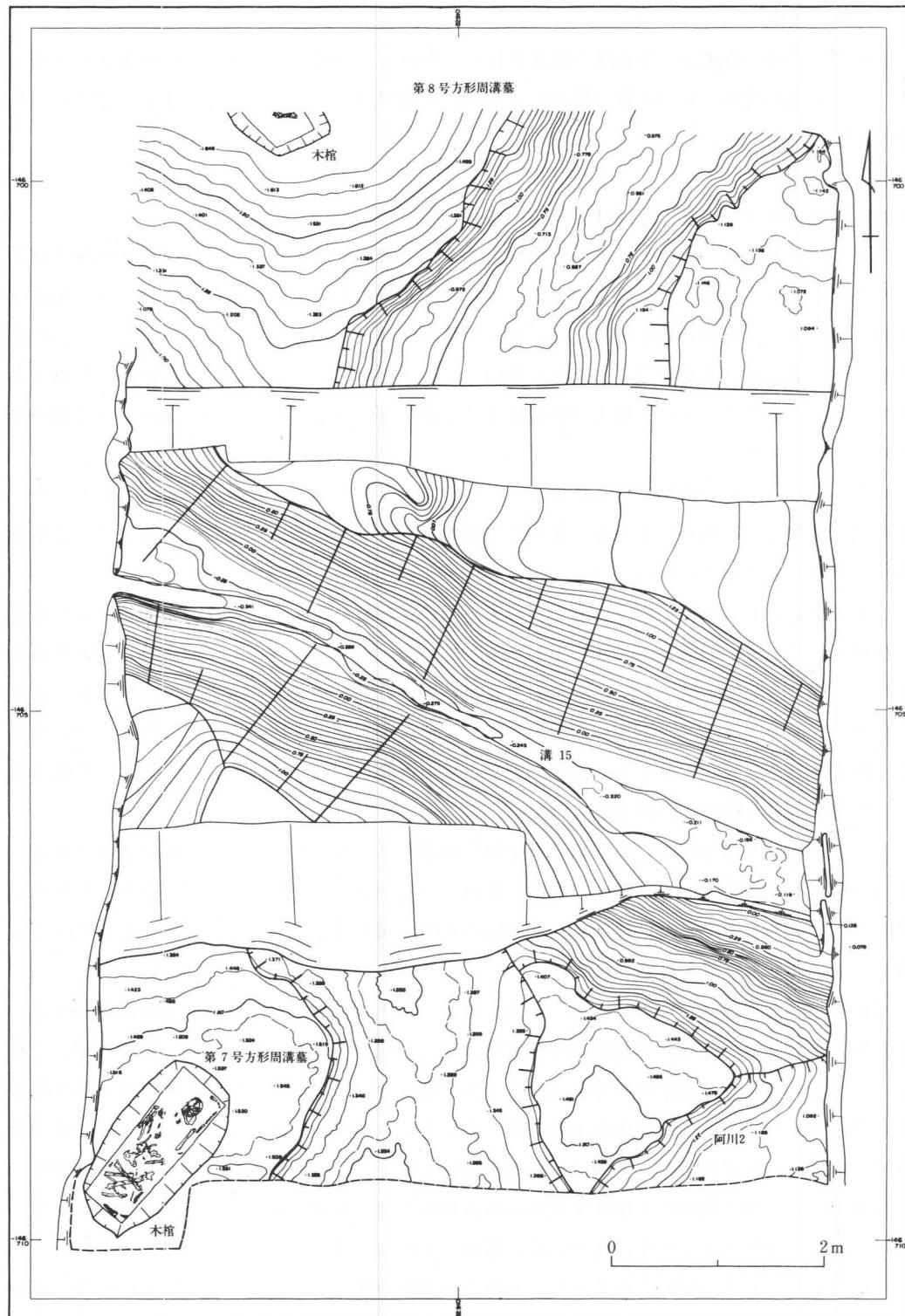
本来、盛土は瓜生堂遺跡で見られるように何回かに亘って積上げられているのであろうが、その単位は明らかに出来なかった。従って土盛の仕方は不明である。ただ土層断面で見る限り、盛土はほとんど流れていません。⁴⁾

周溝は築造面をほとんど掘り込んでおらず、前に存在した大溝（溝15）の肩に盛られた盛土の傾斜を利用して、周溝外側の立ち上がりとしている。周溝墓の盛土もこの大溝の盛土を再利用したようで、大溝の盛土とほぼ同一の土を用いている。ただ大溝のものに比べて混在する12-Uから16層のブロックが小さい。周溝の幅は2m、深さ28cmで底面の標高はT.P1.18mである。断面形は浅い皿状を呈する。周溝底面から見た周溝墓の高さは、0.42mである。供獻土器は、今回検出した範囲では出土していない。

主体部は木棺1基を検出した。周溝墓全体を確認していないため、本来の数は不明である。墓壙の掘り方は墳丘上面では検出できず、上面より約30cm下げた段階で人骨が出土したために明らかにすることが出来た。検出した位置は調査区の西南隅近くで、墳丘全体から見れば、中央から東によった位置と推定される。

木棺を収めた墓壙は、短辺0.91m、長辺1.72m、深さ52cmで、平面形は隅丸方形を呈する。断面形はU字状で、墓壙の壁面はほぼ垂直であり、木棺の立ち上がりに合わせて掘ったことを示す。また、墓壙と木棺の間の埋土は、上・下2層に分層出来た。上層は、暗黄灰色粘土層で第13層の青灰色シルトと暗灰色粘土のブロックを含み、木棺の上部および側面の上半を覆う状態で厚さ30cm前後存在した。下層は、暗黄灰色粘土層で、暗灰色粘土のブロックのみを含み、墓壙底面から木棺の側面の下間に厚さ20cm前後存在した。墓壙底面は墳丘盛土内に収まらず、12-U層を4cm掘り込んで作られている。墓壙の主軸は、N-46°-Eである。

木棺は墓壙の中央に収められていた。木棺の各部材の残りが悪く、わずかに木口板の一部が残存していたにすぎないため、構造は不明である。一番良く残っていた南側木口板は、検出時で厚さ5cmである。各部材の痕跡と土質の異なり（第13層のブロック土が掘り方埋土に比べ小



第13図 A地区第7・8号方形周溝墓平面図

さく密であったことから識別できた。)から、木棺の規模(長さ)が推定できた。北側木口板50cm、南側木口板45cm、東側側板150cm、西側側板150cm前後の木棺であると考えられる。

木棺内の人骨は、ほぼ原位置を保って検出された。詳細は第VI章-1を参照されたいが、頭位を北東に向けた成人女性が被葬者で、埋葬姿勢は仰臥屈肢である。木棺推定範囲から見て、被葬者を収めた棺は、遺体がゆったりとはいる程の大きさのものでなかったと思われる。

第8号方形周溝墓 調査区北側の中央よりやや西で検出。南辺は第12次調査区内に入り、北辺・西辺は調査区外に延びるため、南東の隅を検出したにすぎない。従って墳丘規模は東辺3.2m以上、南辺1.5m以上としか明らかに出来なかった。築造面は第7号方形周溝墓と同じであるが、上面に緩やかな凹凸が見られる。盛土は第7号方形周溝墓では分層出来なかつたが一応混入している第13層のブロック土の大小から、上(ブロック小さい)下(ブロック大きい)2層に分けられた。盛土の細かな積み方は不明であるが、まず下層は周溝沿いに厚く、中央寄りで薄く盛り、上層は下層の凹んだ中央部に盛っている。上層の最大の厚さ36cm、下層の最大の厚さ64cmで、両者を併せた盛土全体の厚さは68cmである。盛土はほとんど流れていらない。盛土上面はT.P1.7mではほぼ平坦である。

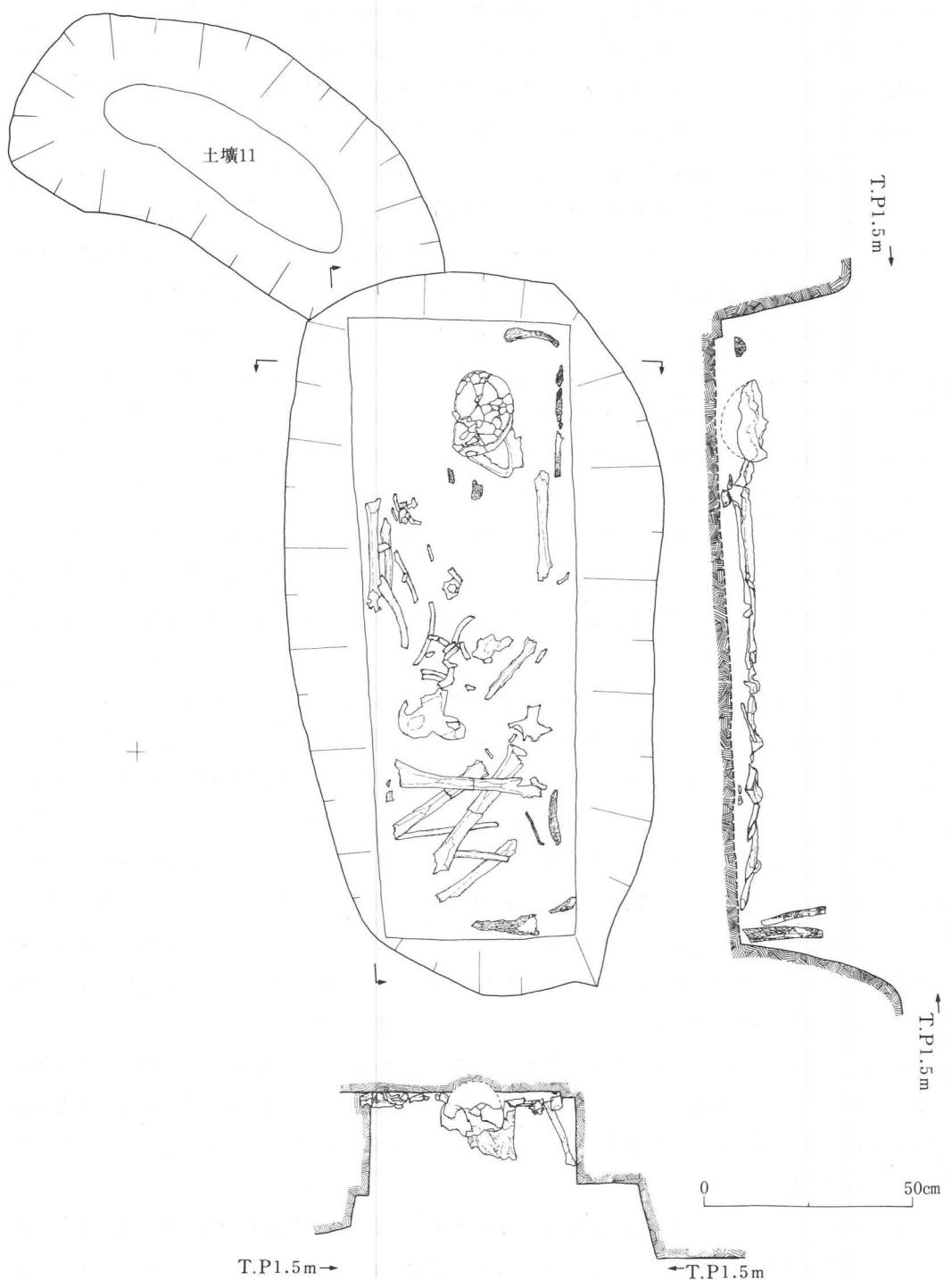
周溝は築造面を50cm前後掘り込んでいる。幅は2.2mで深さ52cm、底面のT.P0.6mである。従って見かけの周溝墓の高さは1.2mである。第7号方形周溝墓と比べると0.8m高い。現在知られている鬼虎川遺跡の方形周溝墓の中では最大規模のものといえる。供獻土器は今回検出した範囲では出土していない。

主体部は木棺1基を検出した。周溝墓全体を確認していないため、本来の数は不明である。木棺は墳丘上面では検出できず。上面より約70cm下げた段階で人骨が出土したため明らかにすることが出来た。調査区の中央部矢板際で検出したため、大部分が調査区外に延び、わずかに頭部付近の一部を認めたに留まる。墳丘の中央より、東南よりにあたる場所である。

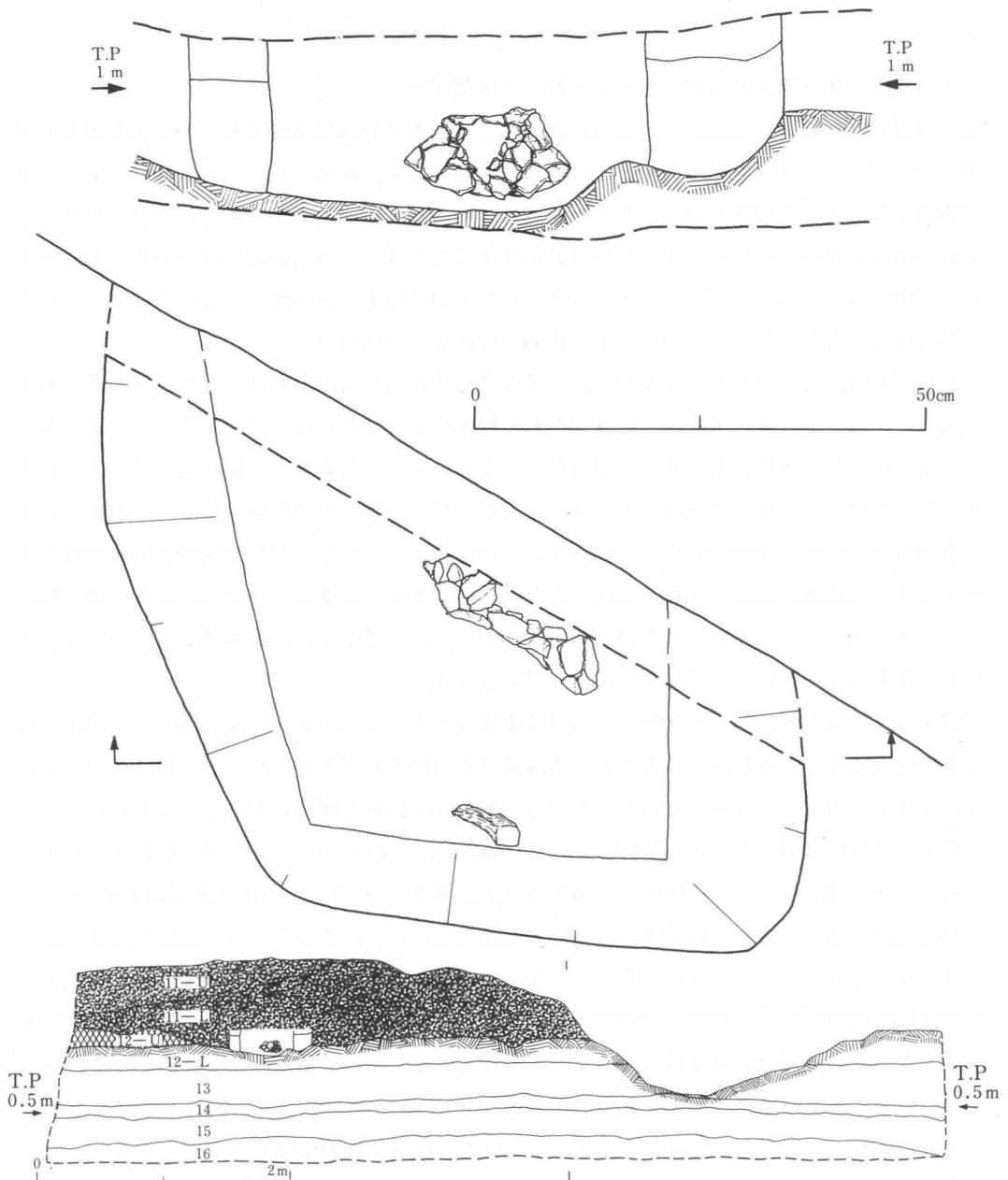
木棺を収めた墓壙は、全形は不明ながら短辺0.7m、長辺0.41m以上の平面形が隅丸長方形を呈すものと考えられる。墓壙底面は第12-U層を10cm前後掘下げておりわずかな凹凸が認められた。断面形は口状で深さは、盛土上面から掘られたとして、80cmである。墓壙と、木棺の埋置方法は第7号方形周溝墓と同様であり、墓壙の埋土に上・下2層が認められた。墓壙の主軸はS-62°-E前後と思われ、木棺の主軸もほぼ同一と考えられる。

木棺は、一部しか検出していないと棺材の残りが悪いため、規模や構造は不明な点が多い。埋土の異なり(1号木棺と同じ)から木棺痕跡が認められたが、痕跡から推定すると南側木口板40cm前後のものである。人骨は30才代の性別不明の頭骨を検出したに留まった。従って埋葬姿勢は不明である。

第7・第8号方形周溝墓の築造時期は、築造面である第12-U層が第II様式に属す土器を含み、周溝墓を覆う第8層より1層上の第7層から第III様式の土器が出土していることから、第II様式の時期と考えられる。今回検出した主体部は、墳丘中央部より外れた位置であり、2基の方形周溝墓とも別の主体部が存在することが考えられる。



第14図 第7号方形周溝墓木棺・土壤11実測図



第15図 第8号方形周溝墓木棺実測図

土壤11 第1号木棺墓に南端を切られている。長軸0.98m以上、短軸0.51mで、平面形はやいびつな橢円形である。第12-U層の上面で検出され、第7号方形周溝墓築造以前の遺構であるが、出土遺物もなく性格は不明。検出面よりみて第II様式に属す。

溝15 大部分は第12次調査で検出されており、今回は南肩の一画を検出。南東から北西に向かって流れる溝である。溝内より第II様式に属す弥生土器少量出土。詳細は第12次報告の溝15を参照されたい。第7・第8号方形周溝墓との前後関係は、不明である。

B～E地区

第7遺構面（第14層上面遺構 第16図～22図・図版10～22）

環濠（溝16） B地区東端からE地区の西端まで、調査区全域で北側にわずかに張り出した直線に近い緩やかな弧状を呈す大溝と主に肩口に当る部分を、検出した。この大溝は、第12次調査の西半部、A～C地区で34mの長さが確認された溝11と同一のものである。今回、各地区で南肩を検出したが、北肩を確認したのはB地区東端とE地区の西端付近だけである。北肩の大部分は検出しなかったが、B・C・E地区で立ち上がりの大部分を確認しているのと、第12次調査の検出状況から見て、調査地のすぐ北側に存在するのは間違いない。

C地区では、南南西から北北東に向かって大溝に流れ込む溝が掘られており、東・西の肩を検出した。この溝は後述するように溝16がある程度埋まってから掘られているが、一連のものである。従って今回検出した溝16の平面形は、第一段階で弧状を呈し、第二段階からT字状であったことになる。規模や遺物の出土状況などから見て、集落を囲む環濠の一つと考えられる。

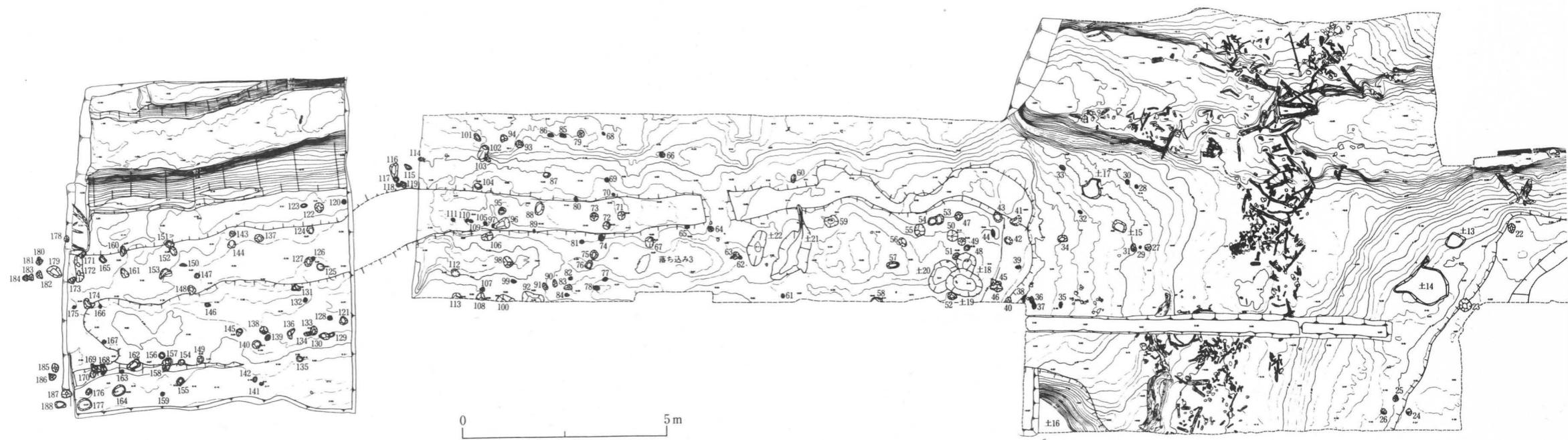
溝16の両側の立ち上がり部分に点々（6～8m前後の間隔）と、樹幹の径30cm前後の自然木が生えていた状況が確認できた。同様の状況は、第12次調査の溝15・16でも見られ、カシ類、ムクノキ、ケヤキ、ヤマグワ等の樹と同定されている。大溝などの肩を保護するために植えられたのであろうか。以下、溝16を環濠として記述する。

環濠は第14層上面で検出したが、この層は第IV章-1で述べたように濠を掘った際に出た堆土を用いた盛土であるため、本来のきり込み面は第15層上面である。しかし、環濠と盛土が同時に存在し一体として機能していることから、規模は第14層上面から測ることにしたい。

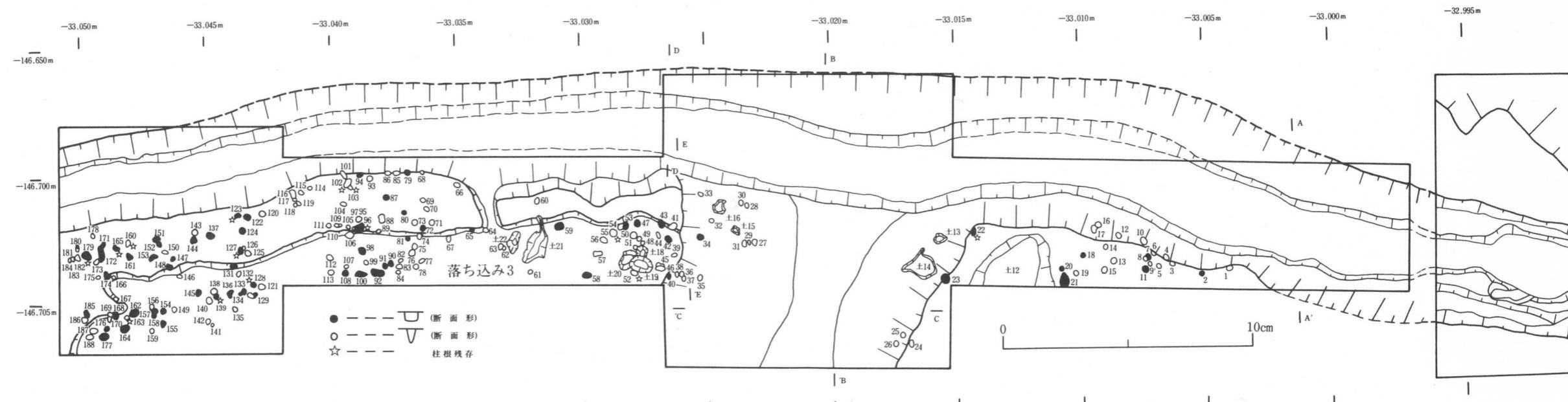
第一段階の規模は、B地区上場幅5.2m、下場幅2m、深さ1.2m、C地区上場幅4m以上、下場幅1.3m、深さ1.3m、D地区上場幅1m以上、深さ0.8m以上、E地区上場幅4m、下場幅1.7m、深さ1.5mである。底部は第19層にまで及んでいる。長さは今回検出部分53mで、前に検出されたものを加えると87mを確認したことになる。断面形は逆台形を呈する。立ち上がり部分は環濠南側が底部より70°の傾斜をもって立ち上がり、肩口より約50cm下った所で角度を30°に減ずる。北側は、約40°の傾斜をもって立ち上がる。したがって集落側が急傾斜になる様に掘られている。底部の標高はB地区東端T.P-0.7m、C地区中央T.P-0.9m、E地区西端T.P-1mで東から西に向かって緩やかに下がっている。以下、東西環濠として記述する。

第二段階の規模は、B地区幅4m、深さ0.6m、C地区幅7.6m、深さ0.78m（弧状部分は幅4m以上、深さ0.65m）、E地区幅3.5m、深さ0.6mである。C地区の南北方向の濠の底は、第18層上部まで達する。断面形は各地区とも皿状を呈する。立ち上がり部分は約10～20°の傾斜をもち、第一段階に比して緩やかである。底部の標高は、B地区東端T.P0m、C地区最深部T.P-0.2m（南北方向の濠の底部は、南端でT.P0m、合流点付近でT.P-0.1m）、E地区西端T.P-0.4mである。南北方向の環濠（以下、南北環濠として記述）が東西環濠に向かって掘られたことを示している。

濠内の堆積土は、地区によって多少異なるものの基本的には4層に分けられる。各層における

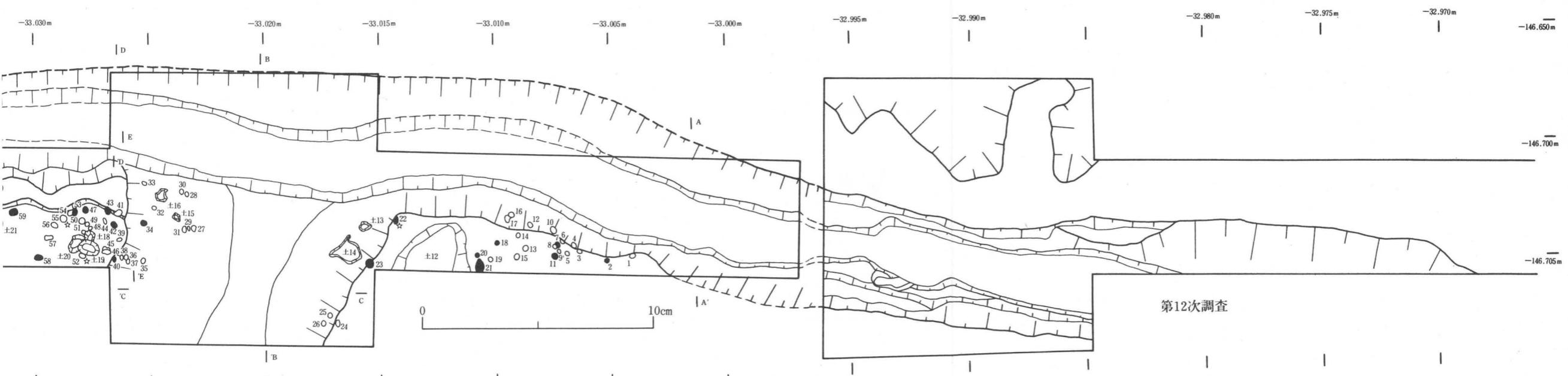
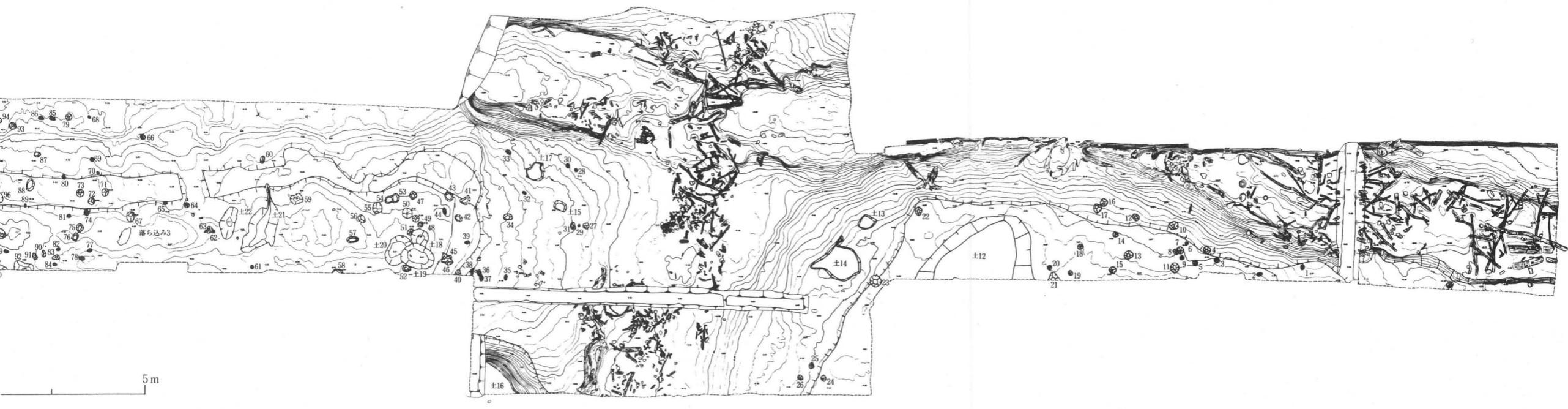


環濠遺物出土状況平面図



環濠平面図

第16図 環濠・柵列遺物出土状況平面図



環濠平面図

る遺物の出土状況と共に説明する。

1層 黒褐色粘土。厚さ16~28cmで上面が凹み、この部分に第13層が堆積し、下面是凹凸が認められる。B地区では、2層のブロック土を含む。櫂・梯子などの木製品や植物遺存体・土器中量出土。特に両環濠の合流点にあたるC地区中央付近で木製品などがかたまた状態で出土した。C地区南北環濠の堆積土で、細かくみれば2~3層に分層できる。

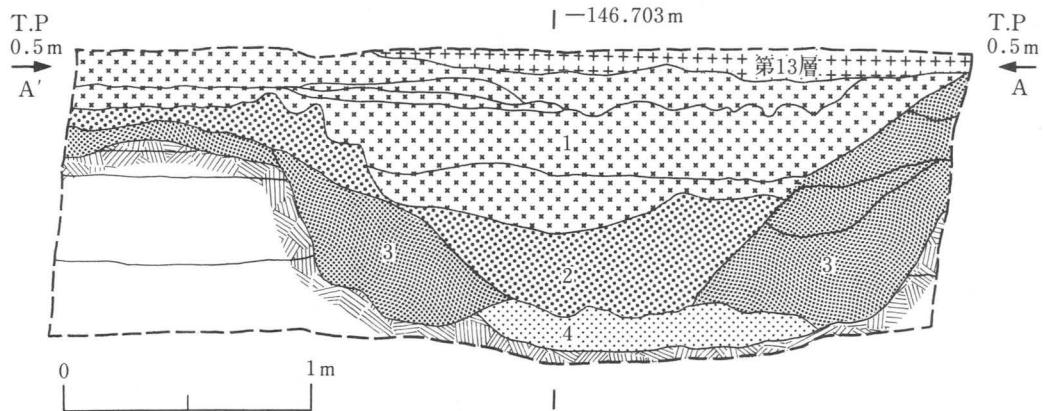
2層 暗灰色粘土に暗黄灰色粘土がブロックで混る。厚さ24~48cmで、各地区とも木製品・土器とも多量に出土した。下部は、第4層がブロック(1~5cm大)で中量混る。木製品は流れ込んだ状況を示していた。細かくみれば2~3層に分層できる。

3層 黒灰色粘土。厚さ24~80cm、第18層のブロック(1~10cm大)を中心に5層もブロック状に混る。東西環濠の立ち上がり部分に存在。植物遺存体・土器少量出土。堆積状況からみて、第1段階の東西環濠掘削が終わった後、余り時間を経ずして壁の整形を行った際に、人為的に盛られた土と考えられる。

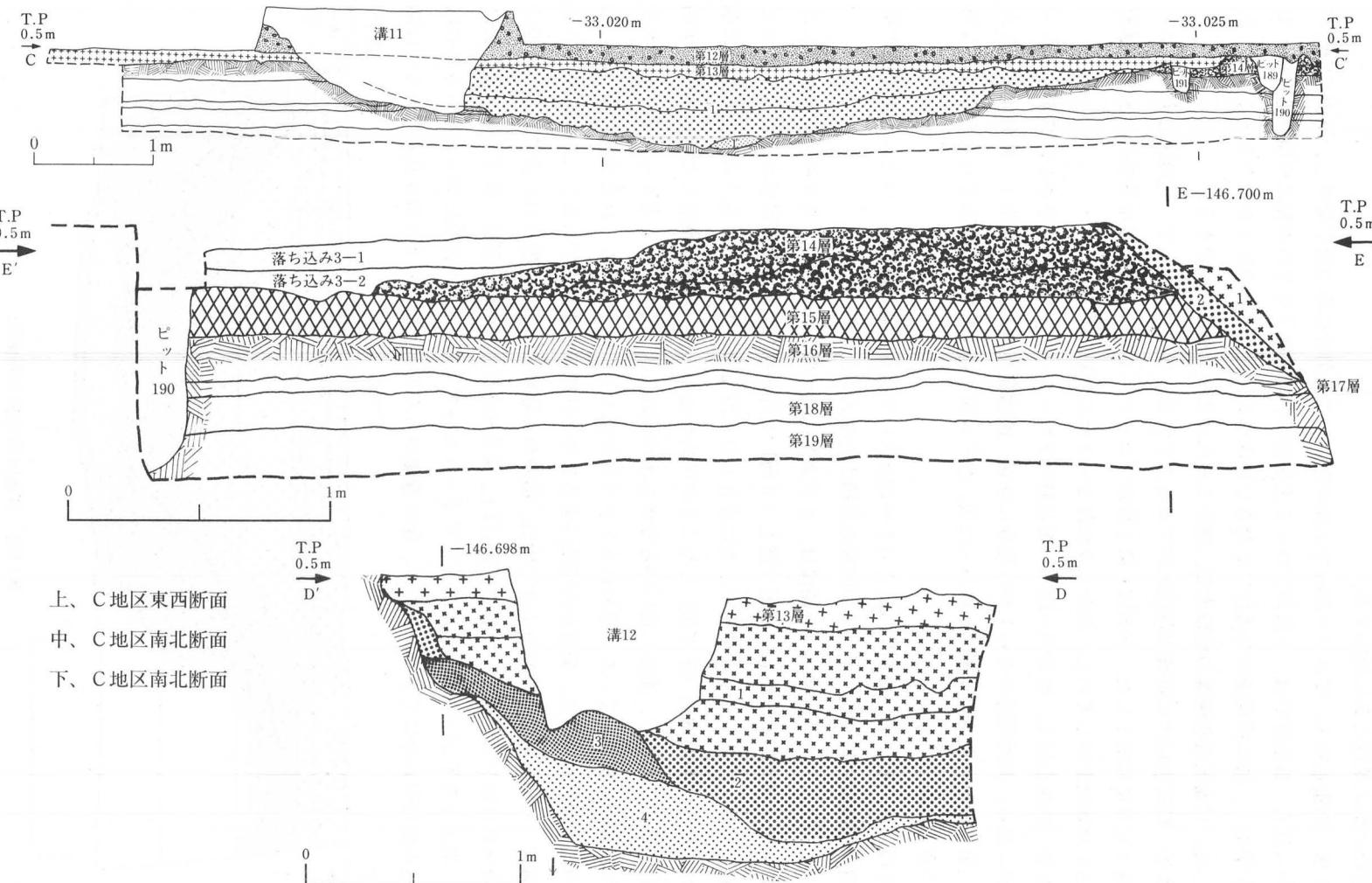
4層 第15層~第18層がブロック(5~10cm大)で混る土層。遺物は、ほとんど出土せず東西環濠掘削時の掘り残し土および直後の堆積土と考えられる。

以上のように、今回検出した環濠は、まず東西方向が掘られ(4層)、あまり時間を経ずして立ち上がり部分の壁を整形する掘り浚え(3層)が行われた。ある程度堆積が進んで埋まった段階(2層)で新しく南北環濠が、先に存在した東西環濠の底浚えとともに合流するように掘られ、一定の期間機能(第1層)したことが明らかとなった。環濠が機能した間は堆積土が粘土層であることから、滯水に近いゆるやかな水の流れる状況であったと考えられる。堆積土中より環濠内に生息していたと思われるシジミ貝が出土していることもこれを裏付けている。遺物の出土状況からみて、築造から廃絶に至るまで第II様式の時期内であることが明らかである。

溝17 B地区東端のやや西よりで検出。南西から北東に向かって掘られた溝である。両端は調査区外に延びる。幅2m・長さ4.2m以上、深さ80cm以上で、断面形は、皿状を呈する。底面は、南よりでT.P -0.83m、北よりでT.P -0.87mである。上部を溝16に切られているため掘り込み面は明らかにできなかったが、他の遺構からみて第15層上面より切り込んでいるのは確



第17図 B地区環濠南北断面図



第18図 環濠断面図 (C地区東西・南北断面)

実である。環濠と交差する部分では上半が削平されている。溝内の堆積土は、比較的残りの良かった北壁断面で観察した限りでは、大別して3層に分層できた。

1層 黒色粘土内に第16層のブロック（1～5cm大）を中量含む。自然木などの植物遺存体・土器を少量出土。

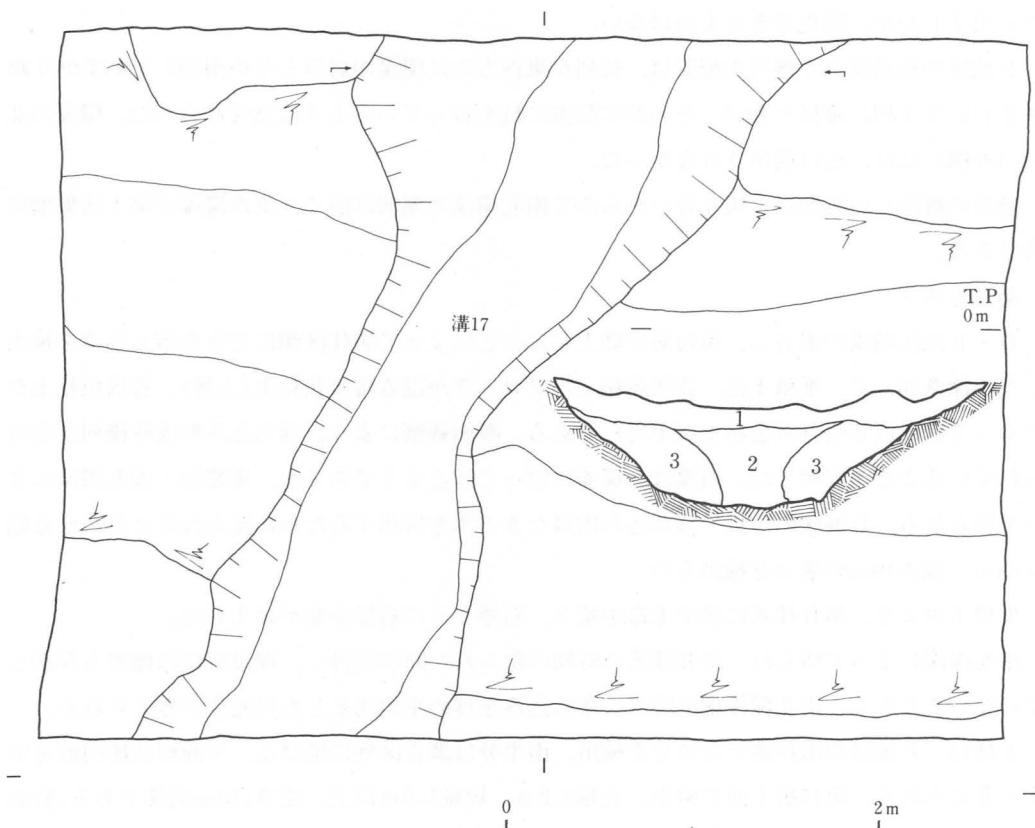
2層 暗褐色粘土内に第14層と第15層のブロック（1～2cm大）を少量含む。自然木などの植物遺存体・土器少量出土。

3層 底部付近の立ち上がり部に認められる。自然木などの植物遺存体と土器少量出土。

堆積土からみて、溝が掘られた後、第3層が堆積した段階で底の一部を掘り浚え、次に2層・1層と順に堆積したものと考えられる。溝16は、ほぼこの溝が機能しなくなった段階で掘られたものと思われる。機能した時期は出土土器からみて第II様式に属する。

柵列（ピット群）

B地区中央よりやや東からE地区の西端までの環濠の南肩で、柵列と考えられる計191個のピットを検出した。平面が円あるいは、楕円形を呈し、径6～39cmまでのものがあるが、径10cm前後から20cm前後のものが多い。ピットの底のレベルはT.P -0.1mまで達するものが多い。



第19図 B地区第7遺構面（溝17）実測図

深さは、20cm前後のものが多いが、最も深いものは、46cm（ピット13）を測る。これらのピットは、第14層上面から切り込んでいることが土層断面から明らかであるが、第14層が盛土層であったことから調査時には第15層上面で検出したものが大半である。したがって本来の深さは、今回確認したよりも20cm前後さらに深かったことになる。

検出したピットの立ち割りを行なった結果、断面形は、山形を呈するものが103個、V字形を呈するものが87個認められた。

ピット内の埋め土は、明緑灰色粘土をブロック状に含む暗黄灰色砂混じり粘土で砂粒の大きさなどわずかな土質のちがいが少数のもの（ピット4・14・19・26・153・165・168・174）にみられた。断面形や柱根から堀立柱と考えられるピットが13個（ピット20・67・70・72・81・85・88・96・99・107・127・163・179）認められ、うち3個は、明緑灰色粘土のブロックの大小で、3～4層に分層できた。他のピットは、すべて杭と考えられる。

切り合いを認めたピットは17個（ピット6・36・45・118・126等）であり、数は多くない。ピット内に柱根の残るものは、15個（ピット22・54・55・96・102・103等）存在した。柱根の径は、4～12cmまでみられる。径12cmのものは、堀立柱に用いられた柱根である。

遺物は、ピット59・72・92・157・162・168・169で、弥生土器の細片が1～8点（大半が1点）出土したが、図化できるものはない。

E地区の検出状況で柵列の配置は、杭列が東西方向に環濠の肩口とその南約2.5mばかり距離をおいて2列に雜然と並び、その間に散漫に杭を打っているように見受けられた。環濠の北肩（外側）には、杭は検出されなかった。

柵列の機能した時期は、切り合いからみて南北環濠の堀削以前で、東西環濠の第1次堀削以降である。

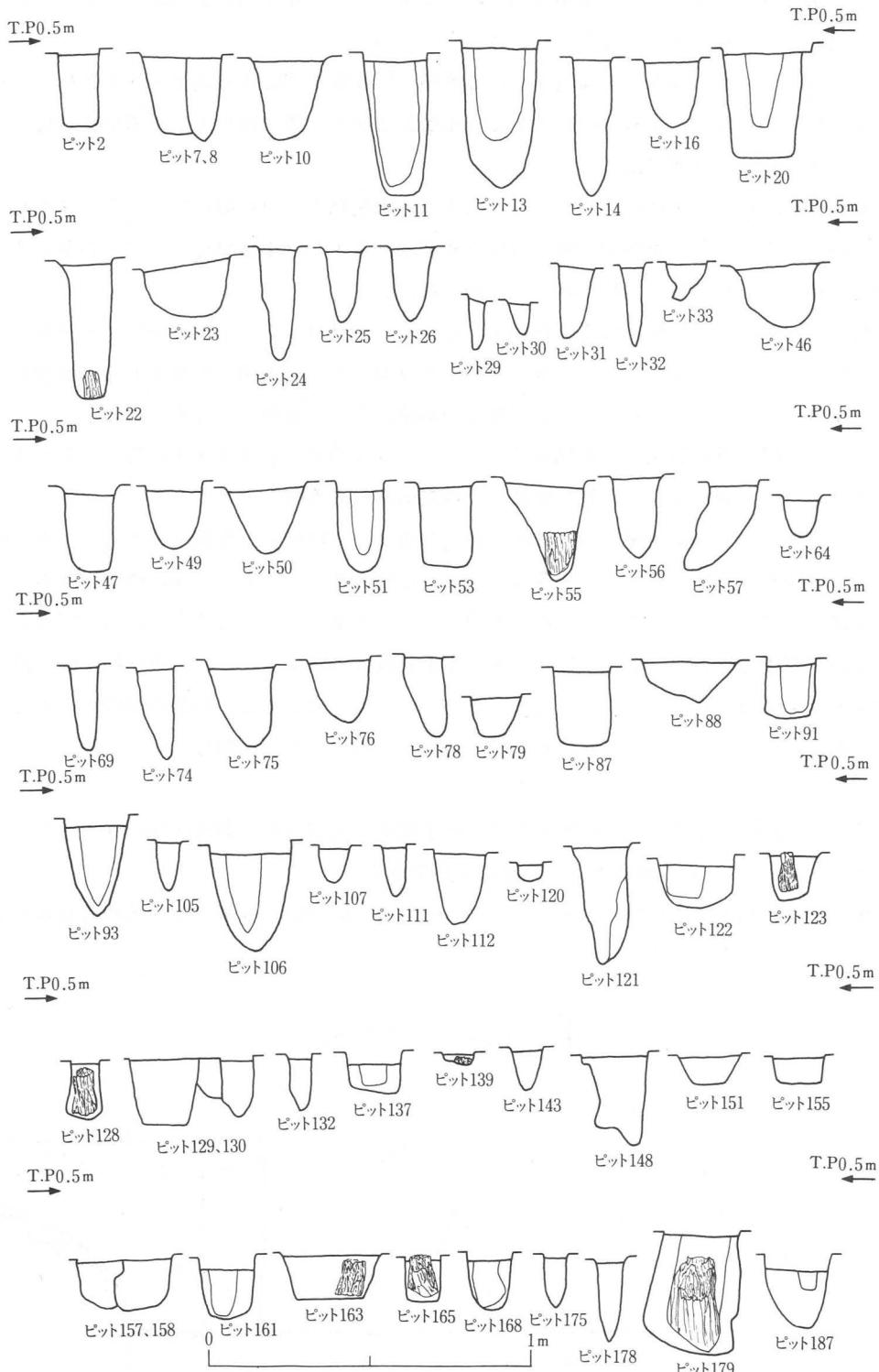
落ち込み3

D・E地区環濠の南肩に、第14層を盛土したことによって居住区側にできた落ち込みを検出した。深さ20cmで、堆積土は、青灰色粘土のブロックが混る暗灰色粘土（上層）、青灰色粘土がブロック状に混る暗茶灰色粘土（下層）である。断面観察により、落ち込み形成時柵列が設けられていることが判明した。西端は、環濠に沿って回るようであるが、東端は、南北環濠によって切られる。D地区の中央で落ち込み内にたまる水を排水するために掘られたと思われる幅0.65m、深さ10cmの溝18を検出した。

堆積土中より、第II様式に属す土器中量と、石斧などの石器少量が出土した。

南北環濠によって切られ、第II様式の時期の限られた間に埋没し、埋没時には柵列も存在していないことから、南北環濠堀削時に、落ち込みを埋め平坦地とした可能性が考えられる。

土壤12 B地区の南西端で北半分を検出。南半分は調査区外に延びる。平面形は楕円形を呈すと考えられる。第15層上面で検出。長軸3.2m、短軸1.6m以上、深さ110cm前後である。断面は、逆台形に近い形態を示す。底面は、T.P-0.8mである。堆積土は、大きく5層に分けることができた。



第20図 B～E地区第7遺構面(ピット)断面図

1層 最上部の堆積土で、土壌中央部の凹地に堆積。黒色粘土内に第16層のブロックを中量含む。遺物はほとんど出土しなかった。

2層 肩口から底に向かって傾斜をもって堆積。黒色粘土内に1cm前後の青灰色粘土ブロック（第16層）少量含む。土器・板状土製品・木製品と小さな焼土塊などが土壌中央付近にまとまって、捨てられた状態で出土。

3層 青灰色粘土（第16層）のブロックに少量の黒色粘土（第15層）ブロックが含まれる。遺物は出土しなかったが下層の4層との境の底部と立ち上がり中央付近で、アシの茎のような植物遺存体を部分的に敷いた様な状況が認められた。

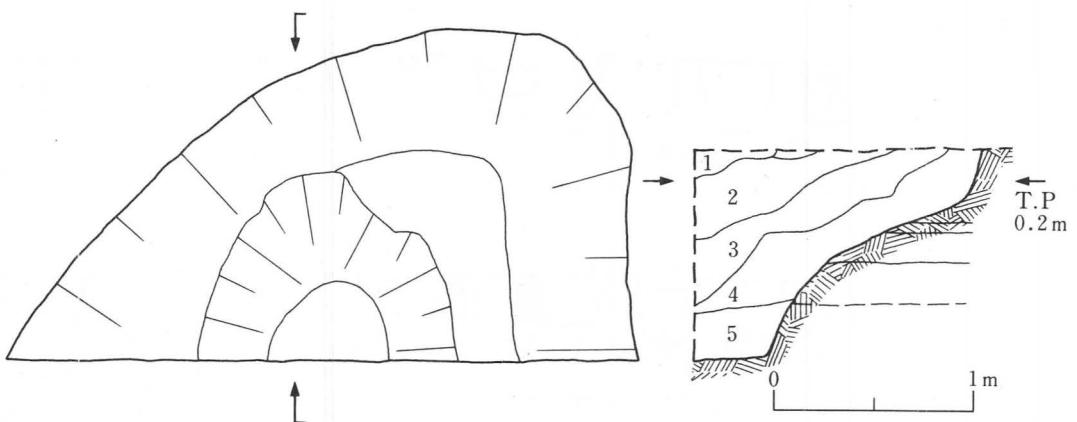
4層 黒色粘土（第15層）に青灰色粘土（第16層）のブロック（1～5cm）が中量含まれる。遺物はほとんど出土しなかった。土壌の立ち上がり面にそって堆積した層である。堆積状況からみて土壌が掘られた後、しばらくして壁面の崩壊によって堆積したと考えられる。

5層 最下層で黒褐色粘土に第16層のブロック（3cm前後）が少量含まれる。土器が少量出土。底部にはほぼ上面が水平な状態で堆積。土壌掘削直後の堆積と考えられる。

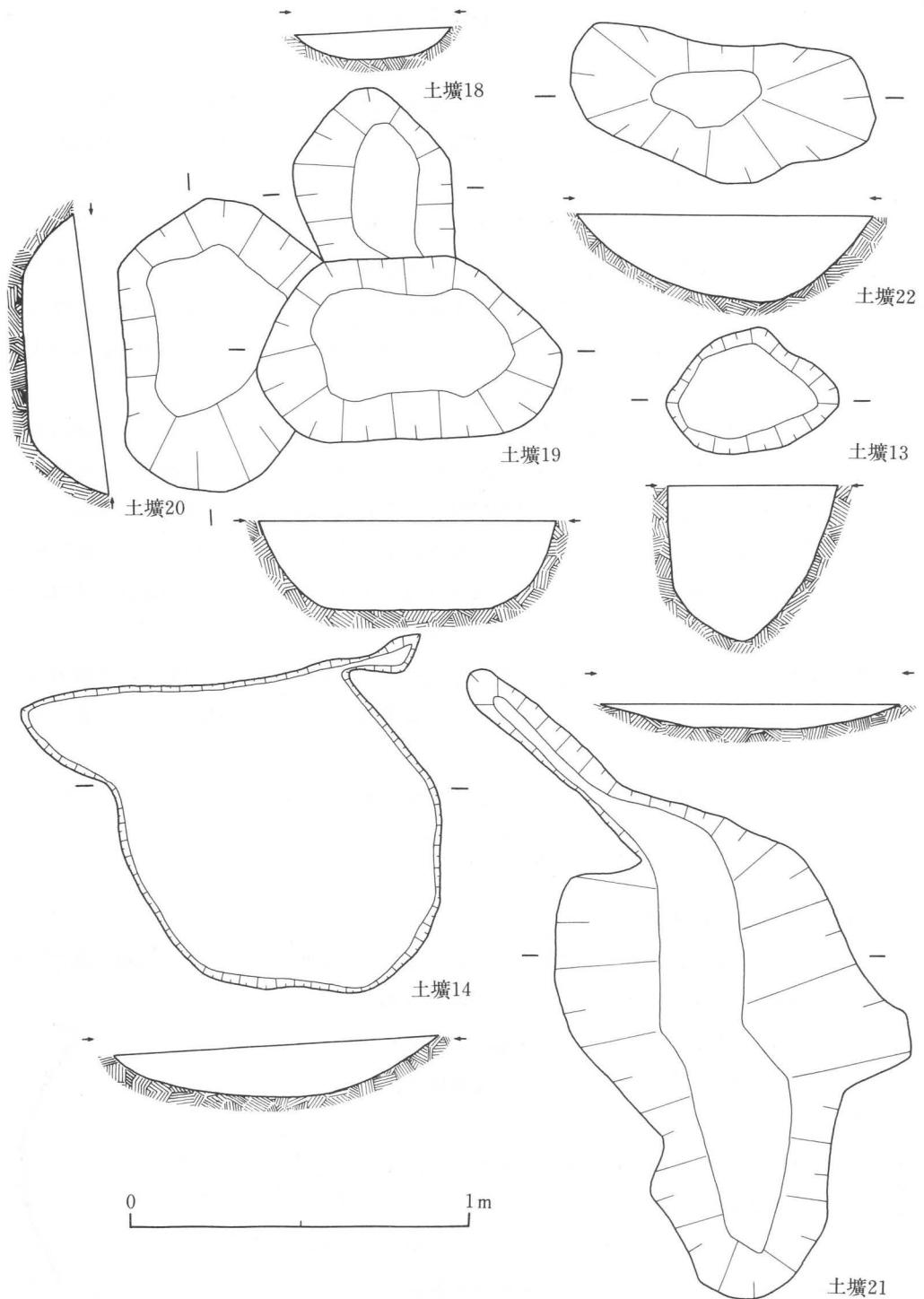
堆積土の状況からみて土壌12は、堆積が進んだ第2層の段階で一度掘り浚えられ、その際にどのような役割か不明ながらアシの茎などを浚えた底面及び立ち上がり面に敷き、さらに第3層が堆積した凹地に一括して土器・板状土製品などを遺棄したものと考えられる。環濠との時期関係は、明確でないが、出土土器が、すべて第II様式に属すことから、第15層上面で検出したが本来は第14層上面より掘られたものと考えられる。この土壌は、形態や規模からみて環濠の縁に掘られた井戸であった可能性が高い。後述する柵列との前後関係は明らかにできなかった。

土壌16 C地区の南西隅の第14層上面で一画を検出。大部分が、調査区外に延びるため平面形は不明。深さ1.4mで、堆積土は、3層に分層できる。

1層 暗灰色粘土中に第18層の小ブロック（0.5～1cm前後）を少量含む。植物遺存体・炭を中量と土器少量出土。



第21図 B地区第7遺構面 (土壌12) 実測図



第22図 B地区第7遺構面（土壌13・14・18～22）実測図

2層 黒灰色粘土内に第18層のブロック（1cm前後多量と5cm前後少量）を含む。植物遺存体・炭・第II・第III様式に属す土器少量と骨製刺突具出土。

3層 黒色粘土に第18層のブロック（1～2cm）を少量含む。

全形は不明であるが、検出状況からみて、南北環濠が埋没した段階で掘られた土壌と考えられる。作られた時期は典型的な簾状文をもつ土器が出土していることから第III様式の時期である。土壌12と同じ井戸の可能性が高い。

他にC・D地区で土壌を9基（土壌13～15・17～22）検出しているが、規模も小さく堆積土も単純であることからまとめて記述する。C地区南北環濠の合流点近くの東側立ち上がりに平面50×40cmの不整円形で深さ45cmの土壌13と、平面99×78cmの不整円形で深さ16cmの土壌14を、同西側立ち上がりで平面33×23cmの隅丸方形で深さ10cm以上の土壌15と、平面50×21cmの不整円形で深さ10cm以上の土壌17を第15層上面で検出した。

D地区東半の合流点近くの東西環濠南肩より少し集落によった附近で、平面46×40cm以上の楕円形で深さ11cmの土壌18、平面88×64cmの楕円形で深さ26cmの土壌19、平面84×40cm以上の楕円形で深さ19cmの土壌20を検出した。土壌19によって土壌18は南端を、土壌20は東端を切られる。これらの土壌より西に少し離れた所に、東西に並ぶように平面185×10cmの不整円形で深さ8cmの土壌21と平面88×40cmの楕円形で深さ24cmの土壌22を検出した。D地区の土壌は焼土・炭を含んでいたため落ち込み3上面で検出できた。

各土壌の堆積土は、土壌21（暗灰色粘土）を除き明緑灰色粘土をブロック状に含む暗黄灰色砂混じり粘土である。遺物は、土壌13・16～20で土器が出土しているが細片のため図化できるものはない。第II様式に属すものである。

土壌13～15と17は、南北環濠に切られている。東西環濠と共に存在したものと考えられる。土壌19～22は、落ち込み3が埋没した後に掘られたものである。

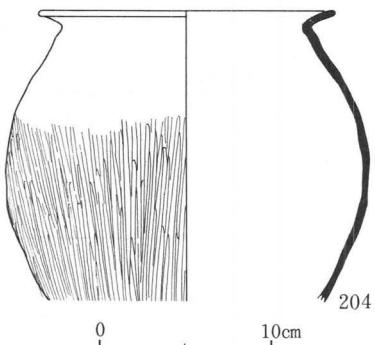
F地区

第3遺構面（第14層上面遺構）

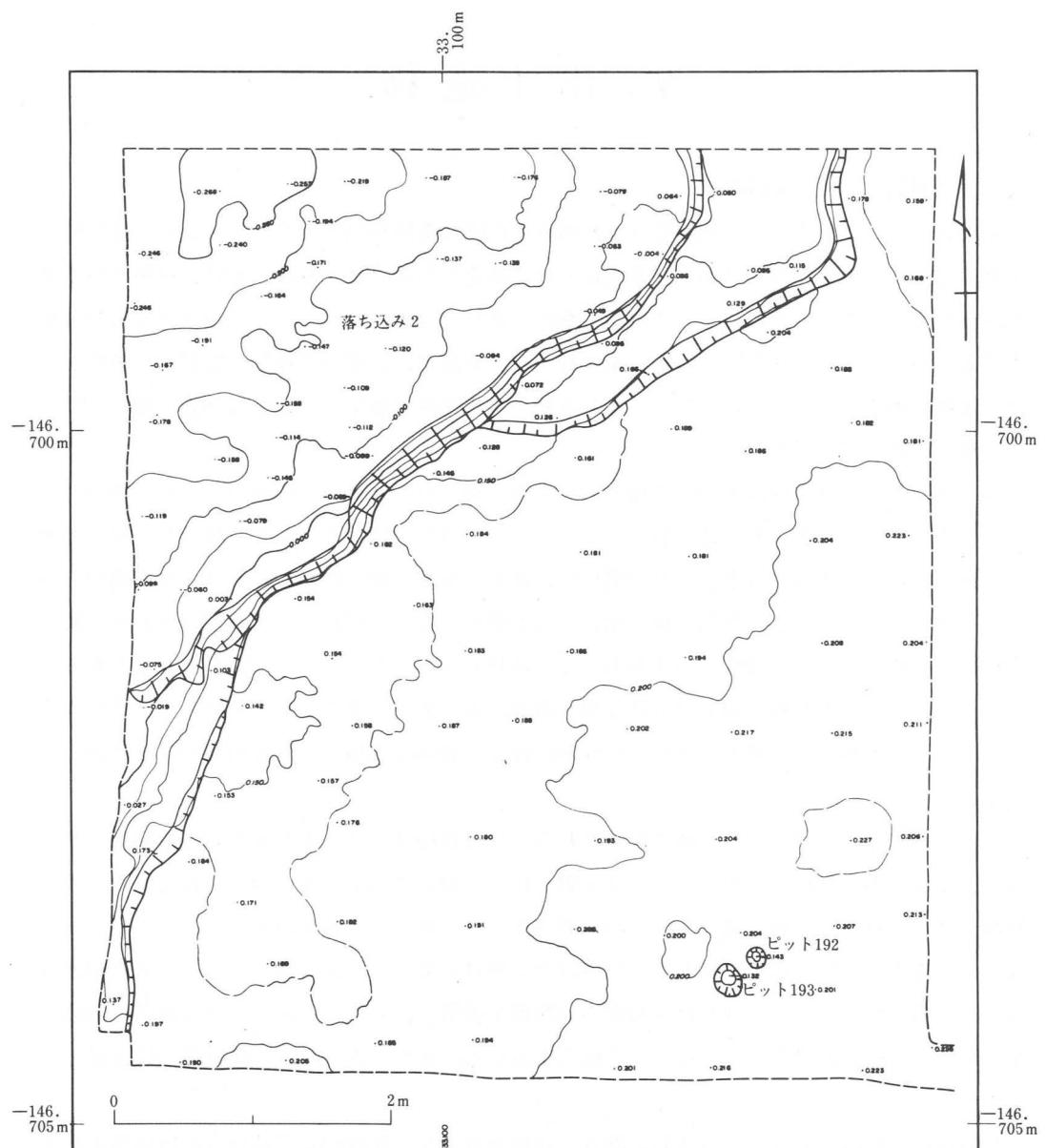
落ち込み2 調査区の南西隅から北東隅にかけて落ち込みを検出した。北・西端は調査区外に延びる。断面形は、浅い皿状を呈し、深さ30cmで北西に向かって下がる。堆積土中より、弥生土器（第23図）少量と自然木中量が出土した。弥生土器は、第III様式に属す。

他に平面が楕円形を呈す径14cmのピット192と径20cmのピット193を2個検出した。

落ち込み2は、第15次調査で埋没谷としたものに相当するが大規模なものではない。凹地状の地形がF地区から西と北に存在したものと考えられる。ピットの性格は不明である。この地区より西は、弥生時代の遺構が、希



第23図 落ち込み2出土土器



第24図 F地区第3遺構面（落ち込み2・ピット）平面図

簿である。環濠（居住区）の外にあるためであろう。

注

- 1) 田辺昭三（『須恵器大成』1981年）角川書店
- 2) 下村晴文、才原金弘他「鬼虎川遺跡」（『東大阪市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う発掘調査概要（その2）』P 10 1981年）国道308号線関係遺跡調査会
- 3) 上野利明、才原金弘（『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』P 4 1987年）財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 4) 今村道雄、曾我恭子他（『瓜生堂遺跡III』P 7 ~ P 71 1981年）瓜生堂遺跡調査会

V. 出土遺物

1. 古墳時代以降の遺物

本調査ではコンテナにして約3箱分の古墳時代以降の遺物が出土している。これは弥生時代中期の環濠が完全に埋没してから、調査地が耕作地化した際に伴う遺構や足跡、堆積土内で検出されたものである。土器については全て細片であり、全体の形状について知り得るものは稀少であるが、今回、可能な限り図化作業を行った。本節では、遺物の種類、器形毎に分類し、出土遺物の概要について報告したい。なお遺物の出土地区や層位については別表に掲げたい。

須恵器（第25図・図版24）

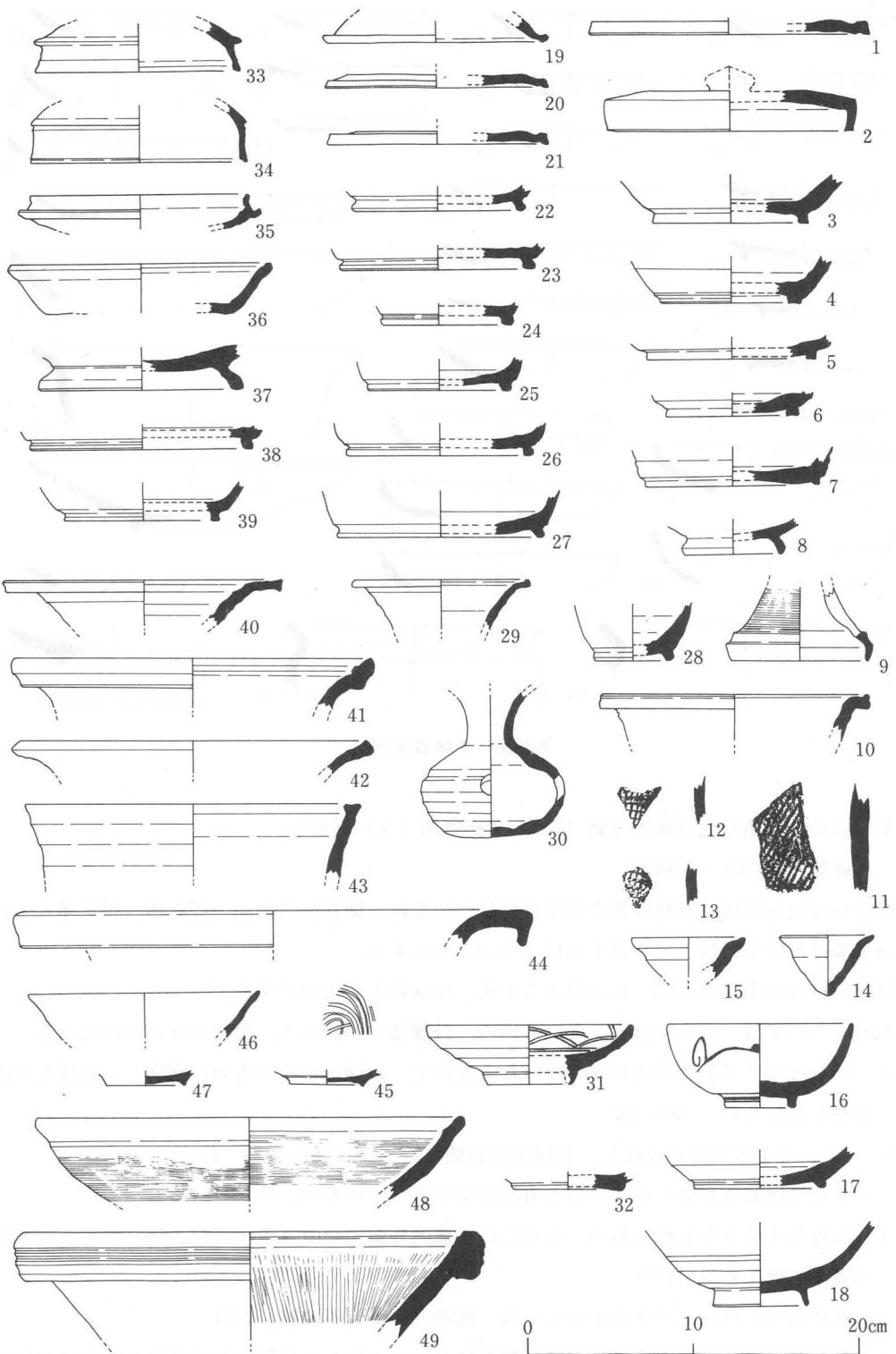
蓋 A、天井部と口縁部を分ける稜のあるもの（33・34）と、B、内面のかえりが消失しているもの（1・19・20・21）に大別される。Aのうち（33）は、天井部と口縁部とを分ける稜が突出し鋭い。口縁部は大きく外方に開いて下降し、先端は鋭く終わる。Bは、天井部から口縁部へゆるやかに下降し、端部を折り曲げて丸く納めるもの（19）と、天井部はきわめて低く、口縁部の屈曲部が短く、端部はつまみ出しによる稜のつくもの（1・20・21）とが見られる。なお（2）は平城宮器種分類表における須恵器壺A蓋¹⁾であり、薬壺とセットをなす。ややふくらみをもつ天井頂部から垂直に折れて口縁部に続く。端部は内傾し、断面角形のまま終わっている。

杯 形態によりA、B、Cの3種に大別される。Aは口縁部に立ち上がりを有する形態（35）。Bは、平城宮須恵器杯Bに相当し、ほぼ平坦な底部に斜上方にまっすぐ伸びる口縁部から成り、底部に高台を付す。今回の調査では、高台周辺部のみの破片で、底部以上は不明である。また、明らかに壺の高台片と認められるもの以外は全て杯B底部片と見做した。Cは、平城宮須恵器杯Cに該当する。同じく土師器杯A形態の口縁部を模倣したもの。（36）は口縁端部の内側の肥厚が極めて痕跡的であることから、平城宮土器Vの段階から長岡京土器併行期に位置付けられよう。

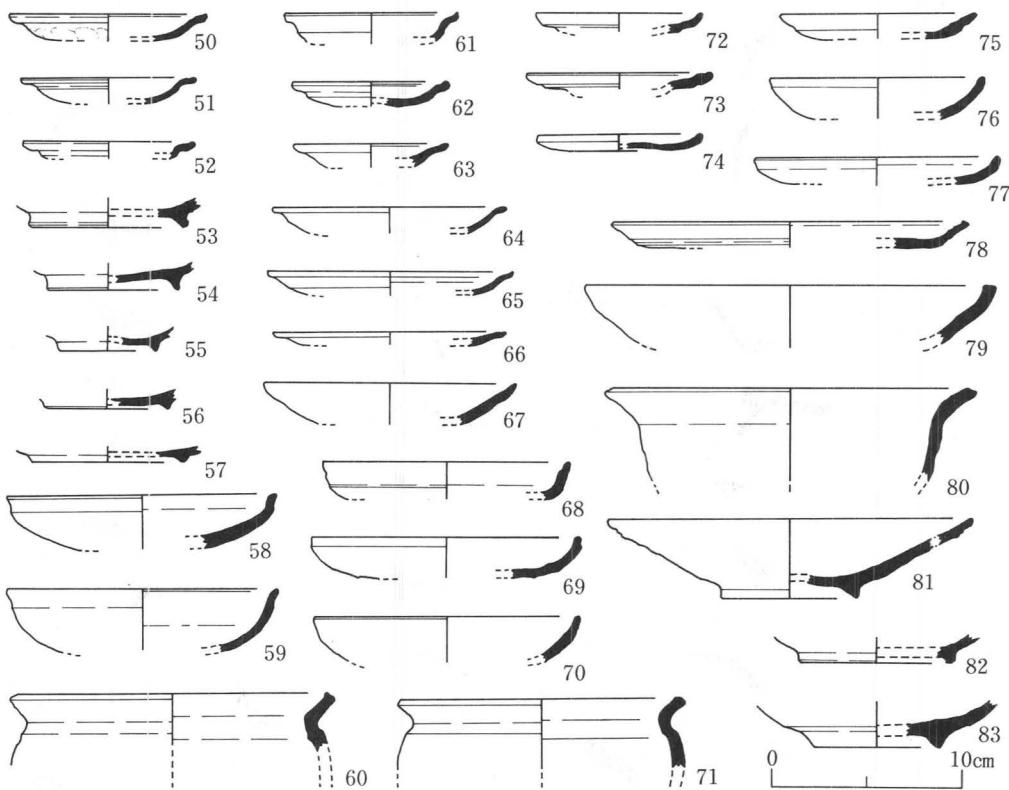
Bは高台の形状により、ハの字形に開き、底部中央よりに比較的高く貼付され内端部が接地するもの（8・37）と、底端部近くにはほぼ垂直に短く貼付されるものの2種がある。後者はさらに端部が平坦なものほか、断面が四角形のもの（6）、凸形のもの（24）、退化し丸く終わるもの（7）が見られる。前者は、高台を有する壺の底部片の可能性がある。時期としては、概ね奈良時代に属するものと考えられる。

壺 頸部片と底部片がある。（29）は平城宮壺Lの口頸部片と見られ、頸部より外反し水平方向に屈曲して、口縁端部は上方に肥厚させている。（28）は截頭円錐形の体部と、底部との境にハ字形に開く高台を貼付する。高台は内端部で接地面をもつ。

鉢 （43）は平城宮鉢Fに相当する。外反気味に開く体部から口縁部まで直線的に続き端部まで内方へ肥厚させる。（42）は東播系窯による所産か。やや小振りである。



第25図 須恵器・韓式系土器・ミニチュア土器・黒色土器・緑釉陶器・陶磁器等実測図



第26図 土師器実測図

そのほか、古墳時代に属する醴（30）、高杯脚部（9）がある。

土師器（第26図・図版25）

口径14cm前後の浅い供膳形態を示す器形については、便宜的に器高（現在値、推定値とも）2cm未満については皿、それ以上を杯と呼ぶことにする。

皿 口径11cm未満を小皿、11cm以上を中皿、18cm以上を大皿とする。

小皿については、出土量は多くないものの、口縁部の形状から、型式分類が可能である。

a. いわゆる「て」の字状口縁と呼ばれるもので、口縁部が水平方向に屈曲し、端部を内側に巻き込むもの。（50～52）

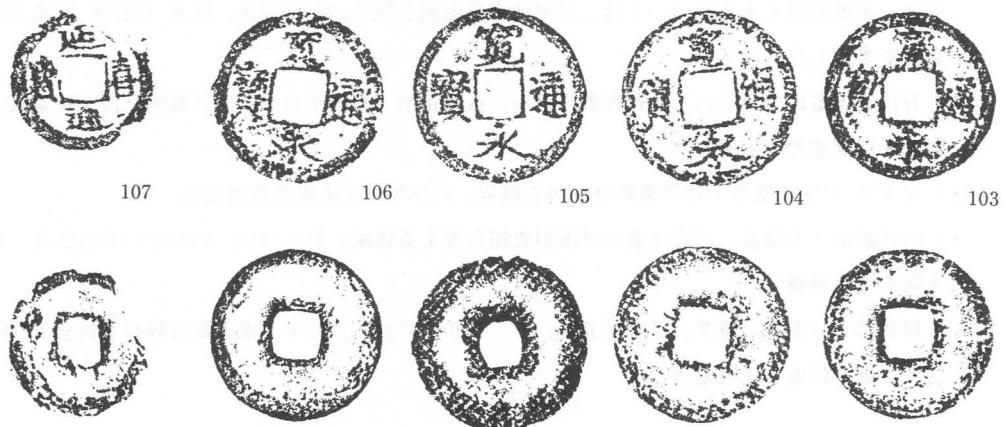
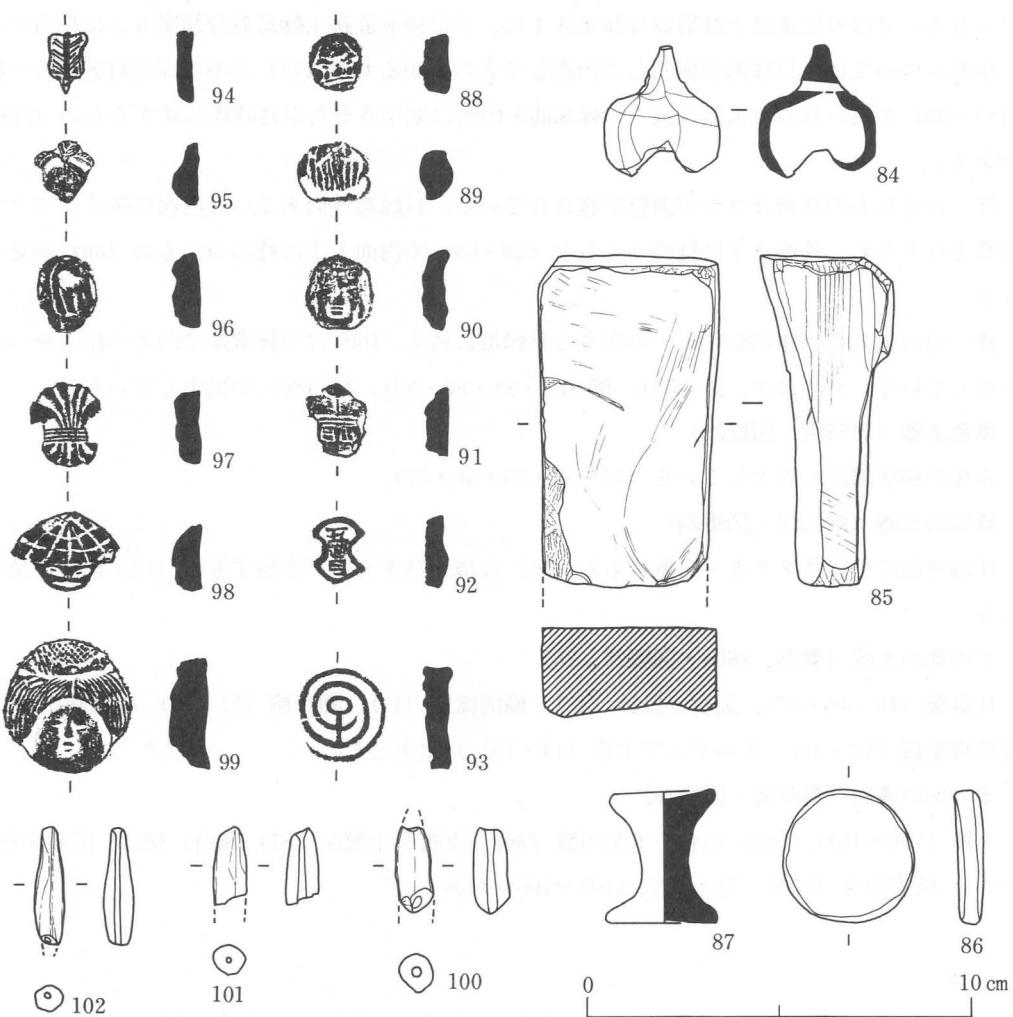
b. 「て」の字状口縁が退化し、口縁部の屈曲度がaより鈍いもの。（61）

c. さらに屈曲度が鈍くなり、斜上方に外反するだけのもの。（62～75）

d. 内弯気味に立ち上がるるもの。ただし口縁部内外面でのヨコナデ調整が強いため、底部との境が明瞭なもの。（72）

e. 直立気味に内弯して立ち上がるもの。底部との境は不明瞭。（74）

aからbの変化は、挟山遺跡の型式分類案におけるI期からII期の土師器皿の変化に対応する。³⁾ aは平安京跡出土例などから、平安時代中期（10世紀～11世紀）、黒色土器盛行期に位置付



1/1

第27図 泥面子・土錘・砥石・古錢・他実測図、拓影

けられる。d⁴⁾ は若江遺跡土師器皿分類案A 1に、e⁵⁾ は神並遺跡土師器皿分類案b 3に相当する。中皿については、口縁部が屈曲して内弯して立ち上がるもの(77)と小皿aに対応する一群(64~66)が見られる。大皿は浅く口縁端部を内側に肥厚させた奈良時代に属するもの(78)がある。

杯 いずれも内外面ヨコナデ調整が施されている。口縁部外面あるいは内面に強くヨコナデ調整を行うため、外面上半に稜のつくもの(59・69)や内面上半に稜のつくもの(68)が見られる。

甕 肩の張らない体部から短く外反する口縁部に続く。(60)は口縁端部で内方へ粘土をつまみ出している。そのほか、鉢(79)、椀(67・81・82・83)、鍋(80)が出土している。

黒色土器(第25図・図版25)

A類の椀底部片が出土している(53・54・55・56・57)。

韓式系土器(第25図・図版24)

体部外面に平行状タタキメを施すもの(11)と格子状タタキメを施すもの(12・13)が見られる。

その他の土器(第25、26図・図版25、26)

瓦器椀(45・46・47)、瓦質土器鉢(48)、備前擂鉢(49)、瀬戸椀(17・18)、縁釉陶器(32)、近世磁器椀(16・31)、ミニチュア土器(14・15)が出土した。

その他の遺物(第27図・図版26)

土錘(100~102)、土鉈(84)、土製円盤(86)、支脚形土製品(87)、砥石(85)、泥面子(88~99)、延喜通宝(107)、寛永通宝(103~106)がある。

注

1) 以下、本調査出土土器を平城宮出土土器に対比させる場合、「平城宮須恵器壺A蓋」と略記する。平城宮出土土器については、(『平城宮発掘調査報告』VII 1976年、同XI 1982年、同XIII 1985年)を参照した。

2) 長岡京土器については、各報告書のほか、百瀬正恒「長岡京の土器」(『長岡京古文化論叢』1986年)同朋舎を参照した。

3) 尾上実(『挟山遺跡・輕里遺跡発掘調査概要』1978年)大阪府教育委員会

4) 阿部嗣治「土師器」(『若江遺跡発掘調査報告書I 遺物編』P2~P6、1983年)財団法人 東大阪市文化財協会

5) 曾我恭子「土器の概要」(『神並遺跡』I P30~P32、1986年)東大阪市教育委員会・財団法人 東大阪市文化財協会

器種	器形	番号	地区	出土層位	備考	器種	器形	番号	地区	出土層位	備考
須 惠 器	蓋	図33	B	4層		土 師 器	杯	図69	E	9層	
		図34	A	攪乱部				図70	E	攪乱部	
		図19	E	9層				図58	F	11層	
		図20	A	5層				図59	B	11-L層	
		図21	C	8層			椀	図67	D	9-U層	
		図1	D	9層				図81	C	11-U層	
		図2	E	9層				図83	A	5層	
	杯	図35	C	10層			鍋	図82	D	9層	
		図38	D	9-U層				図80	D	9-U層	
		図39	D	9層				図60	D	9-U層	
		図22	E	9-U層			甕	図71	E	9層	
		図23	E	9層				図53	D	9層	
		図24	D	9-U層				図54	E	9層	
		図25	E	9層				図55	C	10層	
	壺	図26	C	溝12				図56	B	5層	
		図27	E	側溝内				図57	D	9層	
		図3	D	9-U層			韓 式 系	図12	C	掘り上げ田溝	
		図4	D	9-U層				図13	C	掘り上げ田溝	
		図5	E	9-U層				図11	A	3層	
	壺	図6	D	9-U層		ミニチ ュア	甕	図15	E	9-U層	
		図7	D	9-U層				図14	D	9-U層	
		図37	D	9層		瓦 器	椀	図46	D	9-U層	
		図8	E	9-U層				図47	C	掘り上げ田溝	
		図36	E	9層				図45	A	攪乱部	
土 師 器	壺	図28	E	11-U層		瓦質 土器	鉢	図48	A	3層	
		図40	D	9-U層				図31	E	掘り上げ田溝	
		図29	D	9層				図16	D	3層	
		図10	E	3層		瀬 戸	椀	図17	E	9-U層	
	鉢	図42	D	9層				図18	D	9-U層	
		図43	D	9層		縁釉	椀	図32	D	9-U層	
	甕	図30	F	12層				図49	D	掘り上げ田溝	
	高杯	図9	C	11-U層		備前	擂鉢	図102	D	8層	
	甕	図41	D	9-U層				図101	C	攪乱部	
		図44	D	9-U層		土 鍤	鉢	図100	A	2-U層	
	小皿	図50		4層	白色系			図84	B	1-L層	
		図51	E	4層	白色系	土製 円盤	鉢	図86	F	14層	弥生時代
		図52	D	9層	白色系			図87	D	掘り上げ田溝	
		図61	D	9層	白色系	支脚形 土製品	砥石	図85	C	1-U層	
		図62	E	9層	白色系			図94	D	1-U層	翠扇
		図63	D	9-U層	褐色系			図95	C	1-U層	カブラ
		図72	C	掘り上げ田溝	褐色系			図96	E	1-U層	不明
	中皿	図73	E	9層	白色系	泥 面	砥石	図97	C	1-U層	熨斗
		図74	E	攪乱部	褐色系			図98	B	1-U層	案山子
		図75	D	9層	褐色系			図99	D	攪乱部	顔
		図77	E	1-U層	褐色系	子	砥石	図88	B	1-U層	天狗
	大皿	図64	F	掘り上げ田溝	白色系			図89	C	掘り上げ田溝	貝
		図65	C	10層	白色系			図90	D	1-U層	顔
		図66	D	9-U層	白色系			図91	C	掘り上げ田溝	燈籠
		図78	D	9-U層	白色系			図92	B	1-U層	五貫目
杯	図79	D	9-U層	褐色系				図93	D	掘り上げ田溝	不明
		図76	E	8層							
		図68	D	9-U層							

表 I 古墳時代以降遺物一覧

2. 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、第12～第14層の包含層と、環濠などの遺構から出土している。遺物の内訳を出土量の多い順に記せば、弥生土器・木製品・石器・土製品となる。獸骨や自然木などの動植物遺存体も多量に出土した。以下、種類別に記す。

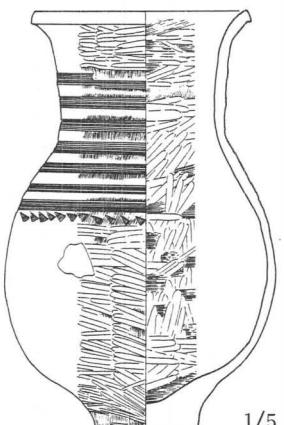
弥生土器（第28～45図・図版27～48）

今回出土した土器は大部分が第II様式（コンテナ65杯）のものである。他に微量の第I様式新段階と第III様式に属す土器がある。第I様式新段階の土器（甕・壺蓋の小破片6点）は環濠などから混入状態で出土し、第III様式の土器は、落ち込み3・土壌15・第13層などより出土したものである。

環濠をはじめとする遺構より出土した第II様式の土器は、この時期の良好な資料が数少ない河内地方において重要な一括資料と考えられる。個々の土器については別掲の観察表を参照されたいが、まず器種ごとに型式分類を行った後、個々の遺構出土の土器について概観していきたい。包含層などより出土した第II・第III様式の土器については、最後にまとめて記述する。なお、土器の点数は接合作業を終了した後、明らかに同一個体と考えられるものを除き、口縁部を主に、把手付鉢の把手、高杯の脚部も1点として計算した。また、在地産は角閃石ないし閃緑岩を含み、茶褐色を呈する生駒山西麓の土器とし、他地域産は上記鉱物と岩石を含まないものとした。

壺A 球形に近い体部から長い頸部へとつづき口縁部は、大きくひらき外反する丈の高い土器である。口縁端部は、丸く終わるもの、面をもつものが多いが、下方ないし上下に拡張するものもみられる。体部から頸部にかけての外面に単体の櫛描直線文を施すものが多数を占めるが1点（1）簾状文の祖形と思われるものがある。文様帶間にヘラミガキを施すものが少数存在する。口縁端部外面に文様をもたないものが多いが、持つものは、櫛描直線文・直線文に刻み目を付したもの・波状文・刻み目・孤状文などが認められる。底部は厚い平底ないし上げ底気味のものが多い。今回114点出土し、在地産76点、他地域産38点である。口径は、14.5～34cmまであり、口径18～22cmのものが多い。胎土中に含まれる砂粒は、最大のものが 5×5 mmの閃緑岩の亜角礫（在地産）と 5×6 mmの長石（他地域産）である。第II様式に属す一般的な壺であり、第I様式新段階のb形態につながるものである。¹⁾

壺B 球形に近い体部に短く直立気味に立ち上がる頸部と、あまり広がらず短く外反する口縁部をもつ土器である。体部と頸部の境は明確である。頸部から体部に櫛描直線文やそれに扇形文を加えた擬流水文を施すものが多い。文様帶間にヘラミガキを施すものも少數存在する。口縁端部は丸く終わるもの面をもつものが多いが、下ないし上下にわずかに拡張するものが壺Aに比して多く、併せて口縁端部外面に文様をもつものが多い。文様は、直線文・波状文・擬



第28図 壺B

流水文で直線文が最も多い。底部は厚い平底ないし、上げ底気味のものと思われる。今回22点出土し、在地産18点、他地域産4点である。口径は、14.6～30.2cmまであり、口径15～22cmのものが多い。胎土中の砂粒は、最大のものが 4×6 mmの閃緑岩の亜角礫（在地産）と 4×5 mmの長石（他地域産）である。

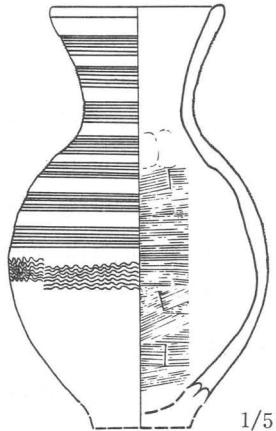
今回は、完形品が出土しなかったので、第12次調査出土、他地域産の口径13.3cm・高さ25.2cm・腹径16cmの土器²⁾（第28図）を図示する。

細頸壺 球形に近い体部に外上方に向かって立ち上がる頸部と、それに続く口縁部をもつ土器である。一般に頸部から体部に櫛描直線文や流水文などを施すことが多いが中には(25)のような無文様のものもみられる。今回の調査で、4点（在地産3点、他地域産1点）が出土した。口縁端部は丸く終わるものと尖り気味に終わるものがある。胎土中の砂粒は最大のものが 6×6 mmの長石と 2.5×3 mmの閃緑岩の亜角礫（在地産）と 2×3 mmの長石（他地域産）である。口縁部しか出土しなかったので第12次調査出土の口径8.4cm・高さ20.4cm（復元）・腹径12.4cmの完形に近い他地域産の土器³⁾（第29図）を図示する。

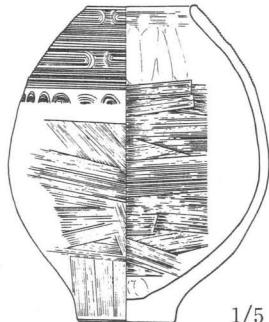
無頸壺A 球形に近い体部に内弯する口縁部をもつ土器である。一般に体部から口縁部にかけての外面に櫛描直線文・流水文・扇形文を施すことが多いが、無文様のものもある。今回体部外面に櫛描直線文をもつ2点出土（他地域産）した。口縁端部は角ばって終わるものと丸味をもって終わるものがある。胎土中の砂粒は、最大のものが 3.5×4 mmの長石である。口縁部の破片（口径6.4cmと口径7cm）であるため、第12次調査出土の口径6.5cm・高さ20.2cm・腹径16.4cmの完形の在地産の土器⁴⁾（第30図）を図示しておく。

無頸壺B 球形に近い器体に短く外反する口縁部をもつ土器である。一般に体部から口縁部にかけて櫛描文を施す例が多いようであるが、今回出土した3点（在地産2点、他地域産1点）はすべて無文様である。口縁部直下に2個1組の紐穴をあけたものがある。口縁端部は尖り気味に終わるものと丸みをもって終わるものがある。全形のわかる(22)は、底部は平底で最大腹径は体部中央にあり口径12.9cm・高さ16.4cmである。胎土中の砂粒は 2×4 mmの角閃石（在地産）と 1.5×3.5 mmの長石（他地域産）がある。

壺蓋A 円盤状を呈した無文様の土器である。相対して2個1対の紐穴を空けている。今回完形に復元できるものが1点出土した。口径11.4cm・高さ1.5cmの他地域産である。口縁部は角ばって終わる。胎土中の砂粒は最大 3×4 mmの長石と1～3mm大の石英とチャートなどを含む。



第29図 細頸壺



第30図 無頸壺A

壺蓋B 筐形で双頭のつまみをもつものと、単頭のつまみをもつものがある。相対して2個1対の紐穴を穿っている。今回5点出土し、うち3点が在地産である。5点とも無文様であるが他地域産に木葉压痕を下面に持つものがある。口縁端部は、角ばって終わるものと尖り気味に終わるものがある。口径は9~10cm・高さ2.5~3cmである。胎土中の砂粒は、在地産が最大 2×2.5 mmの角閃石、他地域産が 3×4 mmの長石を含む。

鉢A 外上方に延びる体部からそのまま続く口縁部をもつ直口の土器と口縁部が内弯する土器である。体部から口縁部にかけての外面に直線文や擬流水文等の文様を施すものも多いが、ヘラミガキだけで仕上げる無文様のものもみられる。今回79点出土した（在地産60点、他地域産19点）が、5点に口縁部と底部外面を結ぶ縦位の半環状把手をもつものが存在した。把手の外面は弧状文・直線文・波状文を施している。5点とも在地産の土器である。口縁端部は角ばって終わるものが多いが、尖り気味に終わるもの、丸味をもって終わるものもある。口径は12.6~32.4cmのものがある。高さは、10~24cmのものがある。底径は、6.0~10.6cmのものがある。内外面に黒色物質を塗布するものがある。胎土中の砂粒は、最大のものが 4×5 mmの閃緑岩の亜角礫（在地産）と 4×5 mmの長石（他地域産）がある。

鉢B 球形に近い体部に短く外反する口縁部をもつ土器と、底部から外上方に延びる体部から短く外反する口縁部をもつものがある。後者には、口縁部直下の相対する2方に瘤状把手の付くもののが存在する。今回出土した17点（在地産14点、他地域産3点）のうち4点（在地産）に瘤状把手がみられる。体部外面に文様を持つものは少ないが、図示したように少数ながら直線文を施すものが産地を問わず存在する。瘤状把手をもつものは、体部外面にハケないしヘラミガキを施す。口径15.4~41.9cmのものがみられる。鉢Aに比して出土量は少ない。口縁端部は、丸味をもって終わるものや角ばって下方に拡張気味に終わるものがある。文様を持つものは、在地産1点、他地域産2点で、いずれも直線文である。胎土中の砂粒は、最大のものが 3×5 mmの閃緑岩の亜角礫（在地産）と 5×6 mmの長石（他地域産）がある。

高杯A 楠形を呈する杯部に中実の脚部を付けた土器である。杯部は、鉢と形態的にほとんど変わらず、わずかに口径に対して深さが浅いかという程度と考えられる。したがって今回出土し高杯Aとした2点（39·

40 他地域産）は、鉢Aとなる可能性もある。口径14.2cmと22.4cmで、胎土中の砂粒のうち最大のものは、 2.5×3 mmの長石である。完形品が出土しなかったため、第12次調査出土の鉢Bに似た杯部をもつ口径26.4cm・⁵⁾高さ18cmの在地産の土器（第31図）を図示する。

高杯B 水平な口縁部を持ち外上方に向かって真っすぐにのびる杯部と、その境に内側に突き出る1条の凸帯をめぐらし中実の脚部を付けた土器である。脚部だけでは高杯Aとは区別できない。口縁部を残すものは図示した1点と他に包含層（第14層）出土の1点である。他に脚

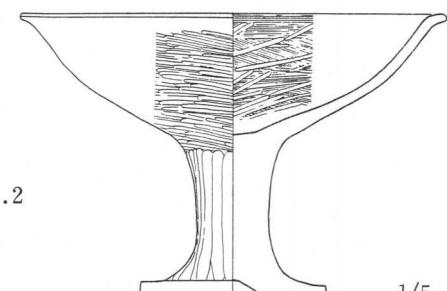


図31 高杯A

1/5

部が5点（在地産4点、他地域産1点）出土している。中実のもの4点（1点他地域産）と中空のもの1点である。胎土中の砂粒は、最大のものが 4×5 mmの閃緑岩の亜角礫（在地産）と 3×3.5 mmの長石（他地域産）である。

甕A 口縁部が外反する倒鐘形の土器である。口縁部は緩やかに外反するものが多いが、強く外反し、いわゆる「逆L字」状や、「く」の字状を呈すものが少数存在する。大半は口径が腹径をしのぐが、逆のものも少数みられる。体部外面はヘラミガキを施す。無文様のものが大部分であるが、口縁端部内外面に刺突文を施すもの（76）や、頸部から体部にかけての外面に流水文を配すもの（79）は少ない。底部は突出した厚い平底ないし上げ底気味のものが多い。口径は、15.4～40cmのものがあり、17cm前後のものと30cm前後のものが多い。口縁端部は、丸味をもって終わるもの、面をもつものが多い。今回127点出土（在地産109点、他地域産18点）した。在地産の胎土に含まれる砂粒のうち最大のものは 5×8 mmの閃緑岩の亜角礫で、他地域産は 5×8 mmの長石である。

甕B いわゆる「大和型」の甕である。口縁部の形態、調整法によりB-1・2・3の3タイプに分けた。

甕B-1 甕Aと形はさして違わないが、口縁端部外面にヘラによる刻み目をもつ土器である。口頸部内面をヨコハケで仕上げる。体部外面にタテハケを施すものが多い。口縁端部は角ばって終わる。口径15.6～39.2cmのものが、出土した。今回の調査で10点出土し、すべて、他地域産である。胎土に含まれる砂粒のうち最大のものは 2.5×3 mmの長石である。

甕B-2 倒鐘形の器体を持ち、口縁端部が巻き込んで終わる土器である。口縁部内面をヨコハケ、体部外面をタテハケで仕上げるものが多い。底部は厚く突出し、上げ底のものがある。今回の調査で54点出土し、在地産31点、他地域産23点である。在地産の胎土に含まれる砂粒のうち最大のものは、 3×5 mmの閃緑岩の亜角礫で他地域産は 5×8 mmの長石である。

甕B-3 倒鐘形の器体を持ち、口縁端部が丸味をもって終わる土器が多いが角ばって終わるものもある。口縁部内面をヨコハケ、体部外面をタテハケで仕上げるものが多い。底部は上げ底や平底のものがみられる。甕Aとの異なりはハケで仕上げる点である。今回の調査で100点出土し在地産85点、他地域産15点である。在地産の胎土に含まれる砂粒のうち最大のものは、 3×8 mmの閃緑岩の亜角礫で、他地域産は 4×6 mmの長石である。

甕C 倒鐘型の器体に強く外反する口縁部をもつ土器である。頸部から体部にかけて、櫛描直線文（複帶・単帶）を施す「播磨型」の甕である。今回の調査で3点出土（在地産）した。口径16.1～25cmで、胎土中の砂粒は、最大のものが 3×5 mmの閃緑岩の亜角礫である。

甕蓋 笠形の器体を持つ土器である。口縁端部は角張って終わるものが多い。口縁端部外面や、口縁部内面に櫛描波状文を施すものが少数見られる。今回の調査で32点出土し、在地産29点、他地域産3点である。口径18.5～28.3cmで、20cm前後のものが多い。在地産の胎土に、含まれる砂粒のうち最大のものは、 4×6 mmの閃緑岩の亜角礫で、他地域産は 3×3.5 mmの長石である。在地産が圧倒的に多いのが特徴といえる。

環濠（S D 16）出土土器（第32～第41図・図版27～41、44～46、48）

前述したように今回の調査で最も多くの遺物が出土した遺構のため各器種がそろう。遺物は分層して取り上げたが各層の型式差は認められないと考える所以一括して記述する。

壺A 88点（在地産62点、他地域産26点）出土している。（8）は黒色物質が塗布されたものである。他に4点同様のものが認められる。（1）は櫛描直線文を描く際に不規則に原体を停止させた簾状文の祖形と考えられる文様が施され、頸部に焼成前の穿孔をもつ他地域産の土器である。第II様式に属す土器のうち簾状文をもつのはこれ1点で他地域産であることが興味を引く。（5）は、口縁端部を上下に拡張し、刻み目を付した土器である。口縁端部を上下に拡張する土器は、33%（在地産15点、他地域産14点）存在する。口縁端部外面に文様を施すものは22%できほど多くない（在地産13点、他地域産6点）が、直線文・波状文・刻み目などがみられる。頸部から体部にかけての外面に単帯の櫛描直線文を時計回りに施すものが多い（在地産6点、他地域産1点）が、逆時計回りに施すのも少数（他地域1点）存在する。（2）のように文様帶間に1条のヘラミガキを施すものは、在地産1点・他地域産1点しか存在せず多くない。粘土紐の接合痕は、内傾・外傾が混在してみられる。

壺B 17点（在地産14点、他地域産3点）出土している。壺Aに比して出土量は少なく在地産の土器が多数を占める。他地域産の（16）のように無文のものは少なく頸部から体部外面に文様をもつ10点のうち、櫛描直線文を施すものが6点（単体5点、不明1点）、櫛描直線文上に扇形文をX字状に配した擬流水文ないし流水文が4点である。櫛描直線文は、時計回りに施すことが多い（3点）が、逆時計回りのものも少数（1点）みられる。（11）は、櫛描直線文（複帯）を時計回りに、その上に配したX字状の扇形文を逆時計回りに施すものである。口縁端部を上下に拡張するものが10点みられる。口縁端部外面に櫛描波状文・直線文・擬流水文を施すものが41%（7点）と多い。文様帶間に1条のヘラミガキを施すものは他地域産の（17）だけである。粘土紐の縫目は、内傾と外傾が混在する。壺Aに比して煤の付着や煤けたものが多い。

細頸壺 3点（在地産2点、他地域産1点）出土している。（35）は、口縁部外面に櫛描直線文を施し、（36）は無文様の在地産である。他地域産の1点は、櫛描直線文を施す。

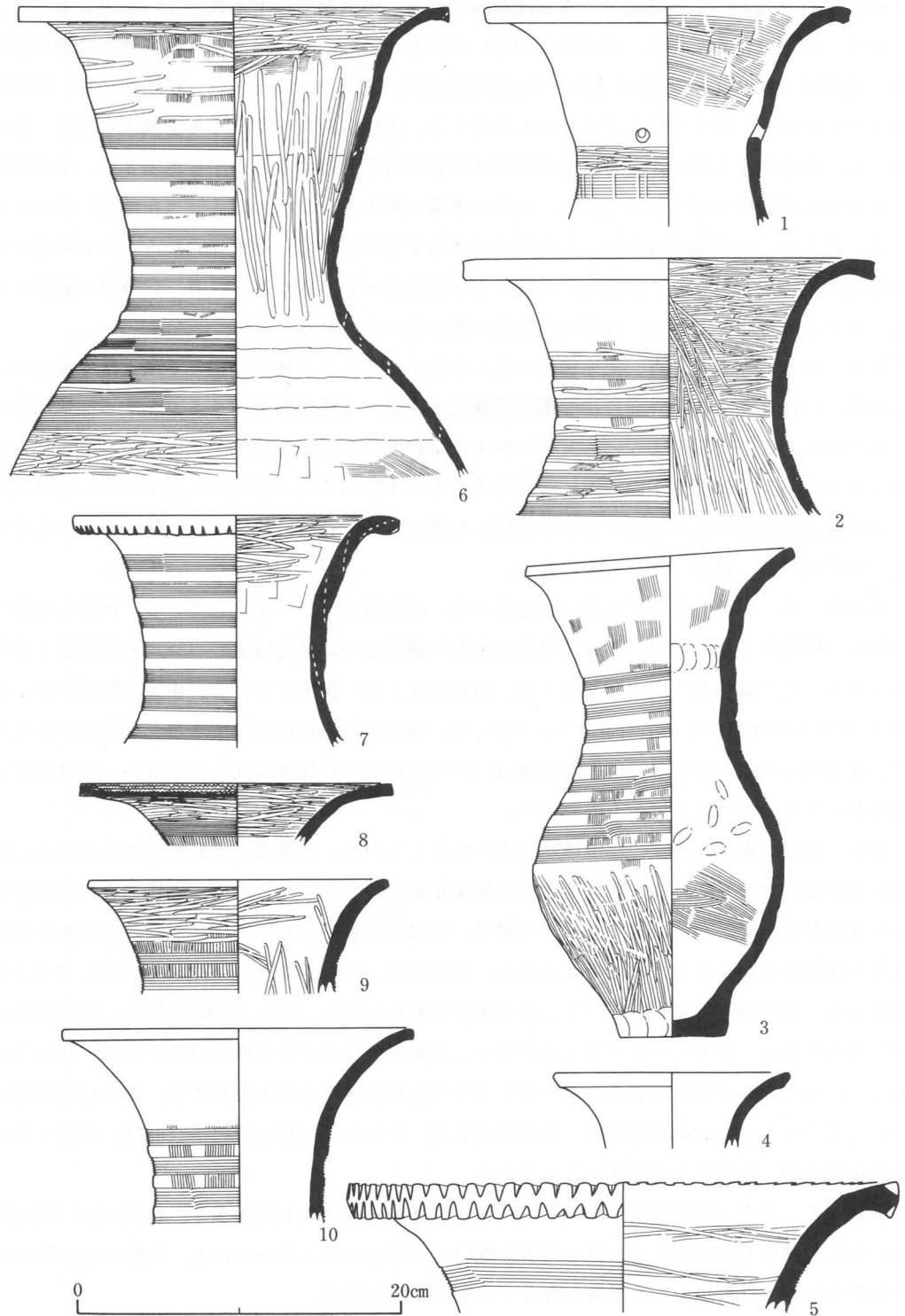
無頸壺A 2点（他地域産）出土している。（24）は、頸部から体部にかけて単帯の櫛描直線文（原体7条幅1cm）を施し、内傾の粘土紐の接合痕の残る他地域産の土器である。

無頸壺B 3点（在地産2点、他地域産1点）出土している。（22）は、在地産の完形に復元できた土器で口縁部直下に焼成前に外から内に向けて2個1対の紐穴を穿つが、1個は貫通していない。頸部内面と底部外面に指頭圧痕がみられる。外傾の粘土紐の接合痕が残る。

壺蓋A 1点（他地域産）出土している。（47）で壺蓋Bに比して出土量は、少ない。

壺蓋B 4点（在地産3点、他地域産1点）出土している。（46）・（48）は双頭形のつまみ部をもつ在地産の土器である。

たこ壺 1点（他地域産）出土している。（37）の筒状の体部と内傾する口縁部をもつ土器である。今回の調査で1点だけ出土した。外傾の粘土紐の接合痕が残る。胎土中の砂粒は、4×



第32図 環濠出土弥生土器（壺A）実測図

4 mmの長石を最大に 1 mm前後のくさり礫がみられる。本遺跡では本来数少ないものであろう。

鉢A 66点（在地産48点、他地域産18点）が出土している。口縁部から体部外面に櫛描直線文・波状文・孤状文・擬流水文などの文様を施すものが、56%と多い（在地産29点、他地域産8点）がヘラミガキで仕上げるものも存在する。文様帶間にヘラミガキを施すものは、在地産3点、他地域産1点存在する。また器面に黒色物質を塗布するものが在地産8点、他地域産1点存在し各器種の中では最もも多い。縦位の半環状把手を付すものは4個（在地産）出土している。把手は、口縁端部外面ないし直下から体部下半につけられ第Ⅲ様式にみられる把手とは付ける部位が少し異なる。底部は、平底・上げ底氣味・上げ底がみられる。（70）は、底面にまでヘラミガキを施している。外傾の粘土紐の接合痕がみられる。

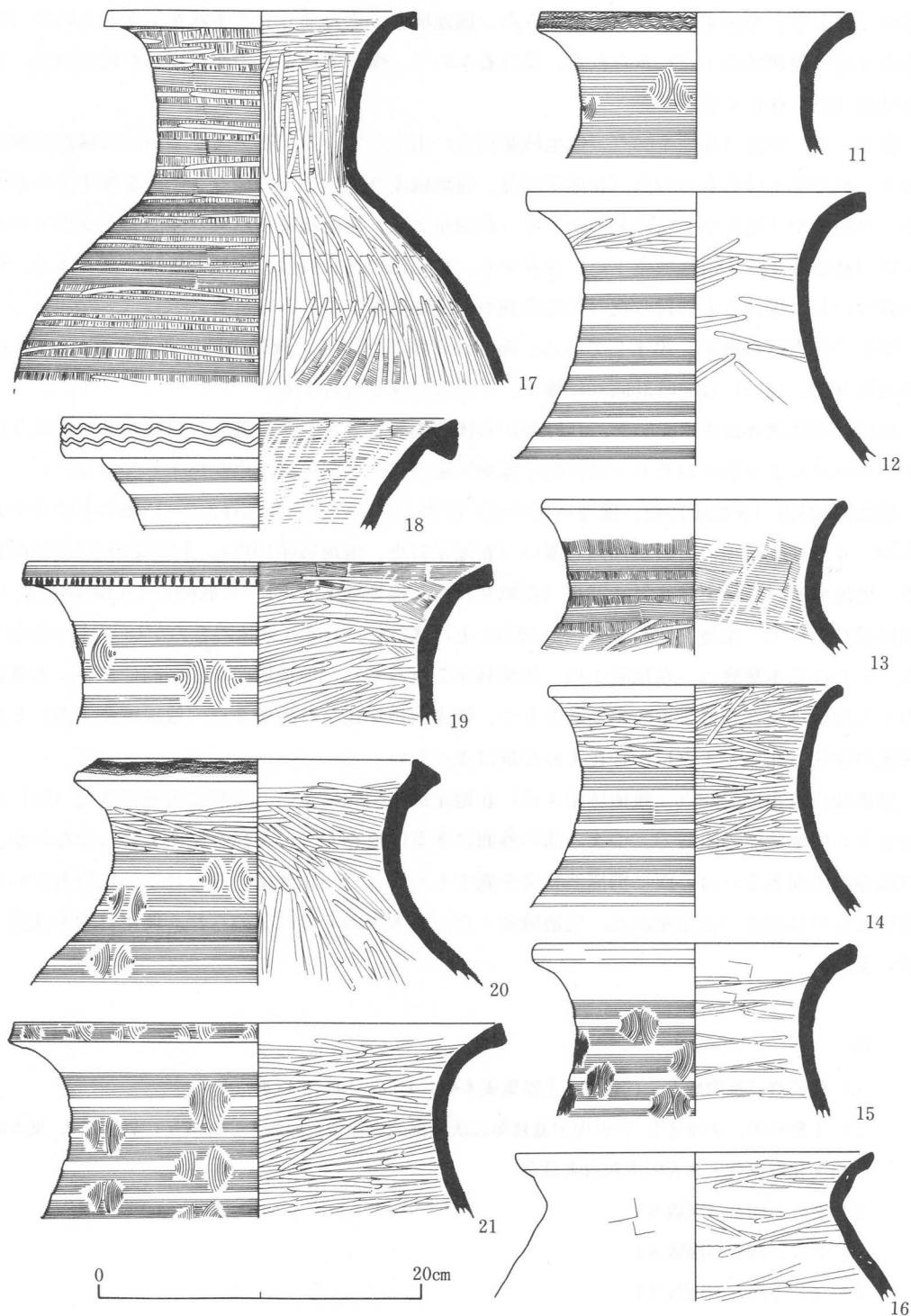
鉢B 12点（在地産9点、他地域産3点）が出土している。鉢Aに比して出土量は少ない。（31）は、口縁部から体部外面に雑な櫛描直線文を施し、文様帶間をヘラミガキする他地域産の土器である。この土器のように、文様を施すのは在地産1点、他地域産2点で25%と、鉢Aに比して少ない。口縁部直下の外面に瘤状把手をもつ土器は3点（在地産）出土した。瘤状把手は第I様式新段階のものに比べてやや委縮した感がある。（28）は外面に黒色物質を塗布しているが1点だけで、鉢Aに比して多くない。

高杯A・B 脚部も含めて8点（在地産4点、他地域産4点）出土している。前述した通り高杯Aの杯部としたものは、鉢Aの可能性があり確実なのは他地域産の（38）の高杯B1点だけである。ただ脚部が5点（在地産4点、他地域産1点）出土している。中実の脚部が多いが、（45）のように中空のものも存在する。（45）は、棒状工具を脚柱部に突きさして中空としたので、通有のものとは異なる。脚裾部の径は7.6～12.4cmで、口縁部に比して小さい。在地産は、脚部をヘラミガキで仕上げるものが多い。

甕A 94点（在地産81点、他地域産13点）出土している。在地産の土器が多数を占める。頸部から体部にかけての外面に櫛描流水文を施す在地産の（79）は、内面に黒色物質の塗布がみられ煤は付着していない。このタイプの甕で、同部位に装飾をもつのは、これのみであり何か特別の用途に用いられた土器と考えられる。口頸部は、「逆L字状」を呈するものが、7%（在地産5点、他地域産2点）あり、「く」の字状を呈するものが、6%（在地産5点、他地域産1点）存在するが、単純に外反するものが多い。外面をヘラミガキで仕上げるが（74）・（81）・（83）のようにヘラミガキの前に施されたヘラケズリやハケが残るものも存在する。煤の付着や煤けているものは、59%（在地産50点、他地域産5点）みられる。粘土紐の接合痕は、内傾・外傾が混在するが、外傾のものが多いようである。

甕B-1 8点（他地域産）出土している。口径20cm前後のものが多く、（116）のように39.2cmもある大型のものは珍しい。煤の付着や煤けているものが4点みられる。内傾の粘土紐の継目がみられるが点数が少なく外傾が存在するかは不明である。

甕B-2 46点（在地産27点、他地域産19点）出土している。（102）・（109）・（110）のように体部外面にヘラミガキを施し、口縁端部の形態以外は甕Aと変わらないものが52%（在地



第33図 環濠出土弥生土器（壺B）実測図

産18点、他地域産6点)みられる。粘土紐の接合痕は、内傾・外傾が混在して存在する。口頸部が「逆L字」を呈するもの(在地産5点、他地域産3点)、「く」の字状を呈するものが(在地産2点、他地域産1点)みられる。煤付着ないし、煤けているものが37点(在地産24点、他地域産13点)存在する。

甕B-3 79点(在地産66点、他地域産13点)出土している。在地産が多い。口縁部内面をヨコハケで仕上げるもの62点(在地産53点、他地域産9点)とその後ヨコナデを施すものがある。口頸部が「逆L字」状のものが3点(在地産2点、他地域産1点)、「く」の字状のものが5点(在地産4点、他地域産1点)存在する。粘土紐の接合痕は、内傾と外傾が混在する。煤付着ないし、煤けるものは57点(在地産48点、他地域産9点)みられる。

甕C 2点(在地産)出土している。頸部から体部外面に、複帯の櫛描直線文を、(123)は時計回りに、(124)は逆時計回りに施す。2点とも煤が付着する。

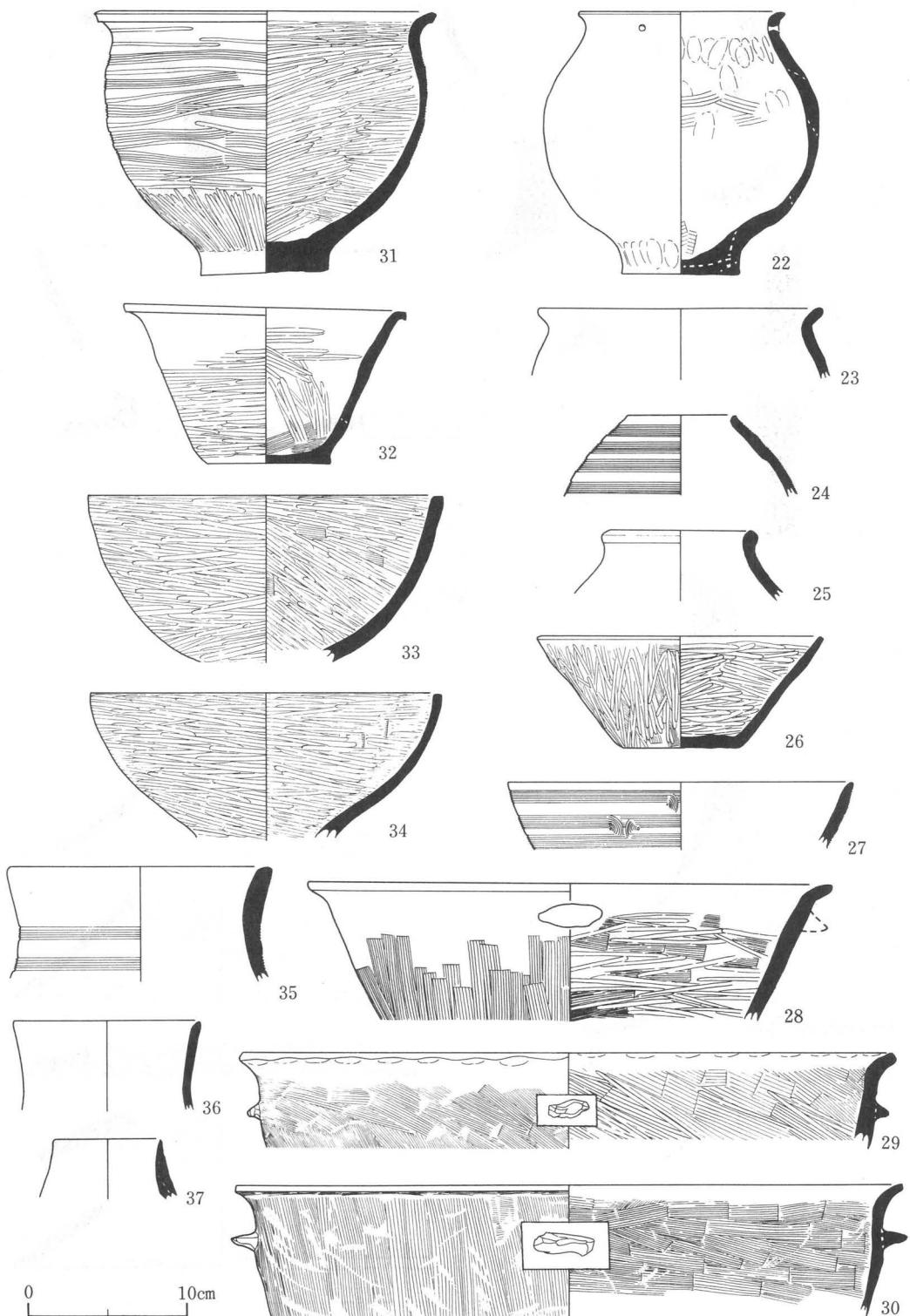
他に、頸体部外面をタテハケ、口縁部から体部内面にヨコハケを施し、口縁端部外面に3個1組のヘラによる刻み目を6ヶ所に施す他地域産の「山城系」甕1点が出土している。

甕底部125点(在地産79点、他地域産46点)が出土している。底部径2.2~13cmのものまであるが、6~8cm前後のものが76点と多い(在地産57点、他地域産19点)。上げ底28点(在地産17点、他地域産11点)上げ底気味23点(在地産15点、他地域産8点)、平底69点(在地産46点、他地域産23点)で、産地を問わず平底が55%、上げ底22%、上げ底気味のものが18%ずつ存在する。いわゆる木葉底は、在地産1点、他地域産7点みられ、他地域産が圧倒的に多い。木葉底のうち他地域産3点は二重の木葉底をもつ。焼成前の穿孔(在地産2点、他地域産1点)と焼成後の穿孔(在地産1点)が存在するが量は多くない。

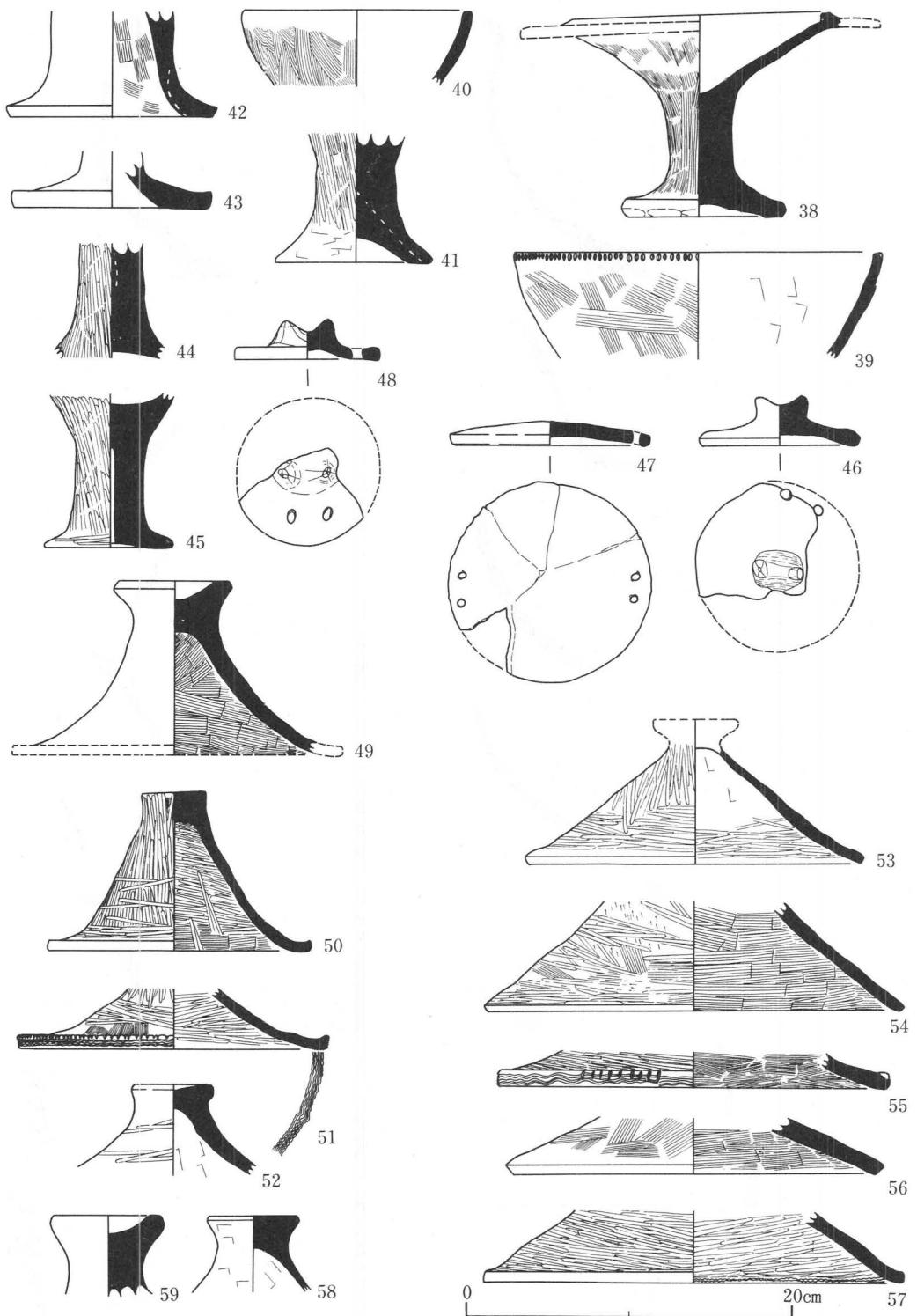
甕蓋32点(在地産28点、他地域産4点)在地産が圧倒的に多い。完形に復元できた(50)は数少ない他地域産の土器で、つまみ部の外面に木葉圧痕をもつ。文様を施すものは少ないが、口縁端部内面あるいは外面に櫛描波状文を施すものが3点(在地産)みられる。煤付着ないし煤けるものは28点(在地産24点、他地域産4点)と大半のものに認められ、使用目的を物語っている。

注

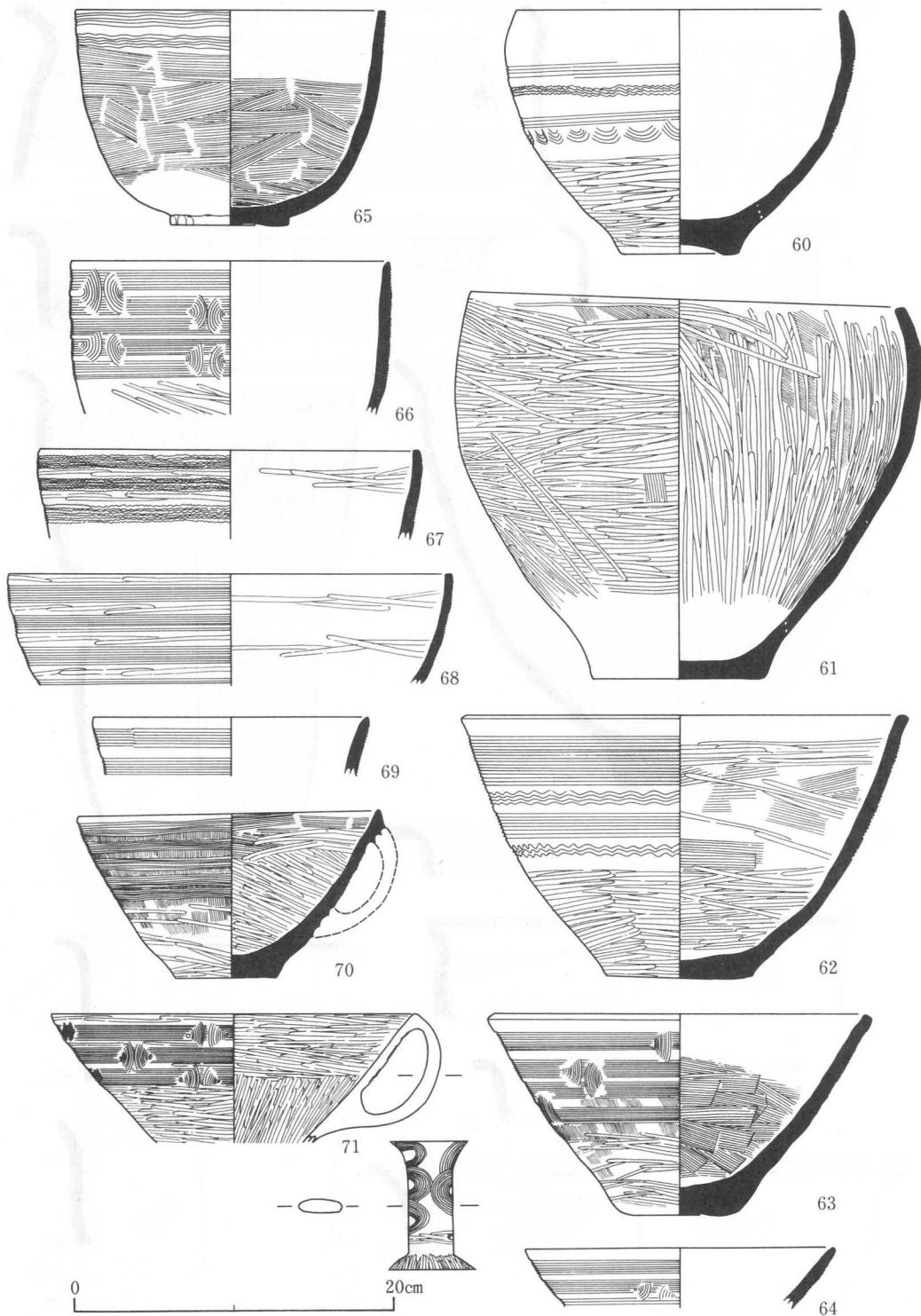
- 1) 佐原真「畿内地方」(『弥生式土器集成本編』P56 1968年) 東京堂
- 2) 上野利明、才原金弘(『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』図版1 1987年) 財團法人 東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 3) 2)と同じ(図版8)
- 4) 2)と同じ(図版8)
- 5) 2)と同じ(図版3)



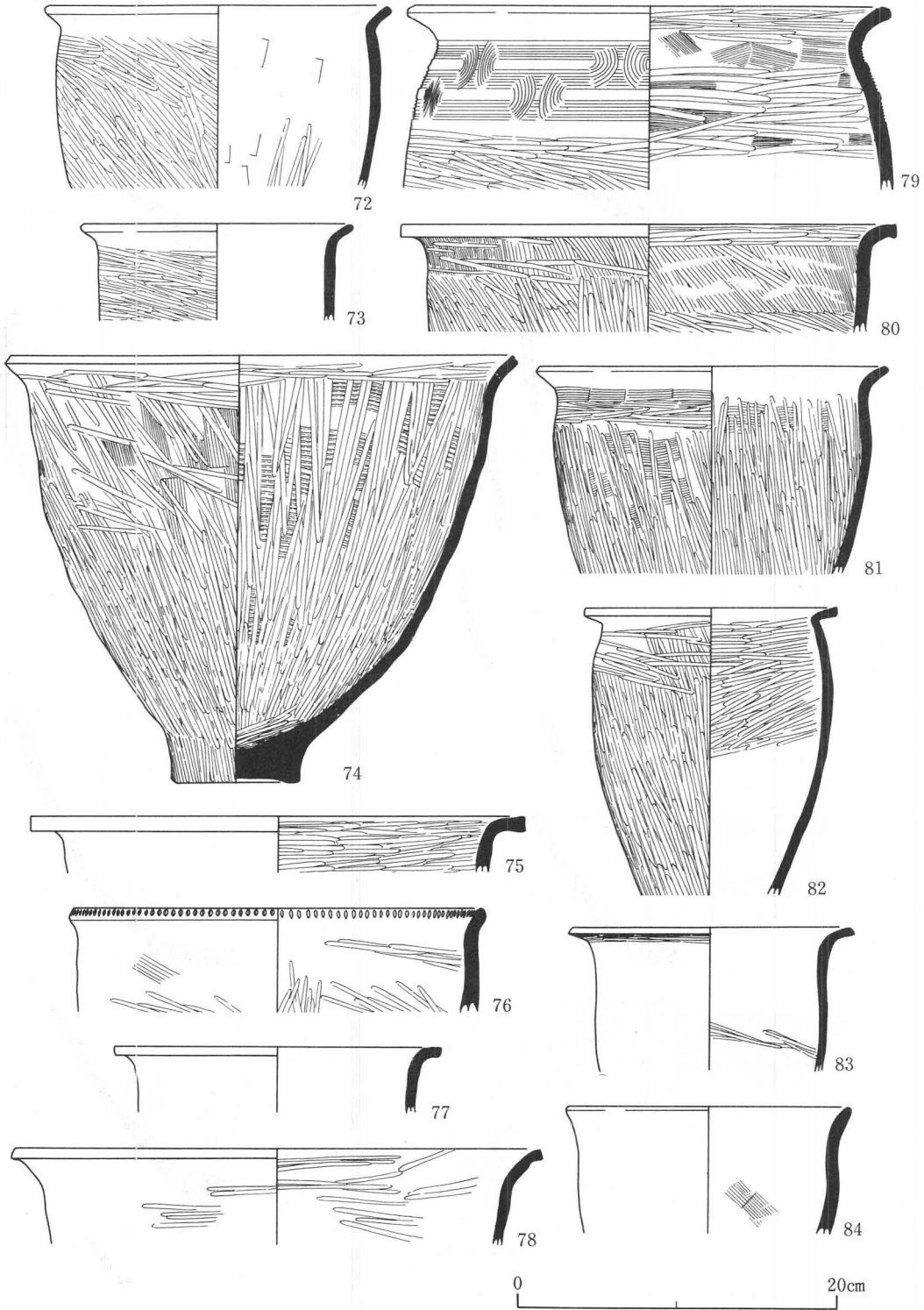
第34図 環濠出土弥生土器（細頸壺・無頸壺・たこ壺・鉢）実測図



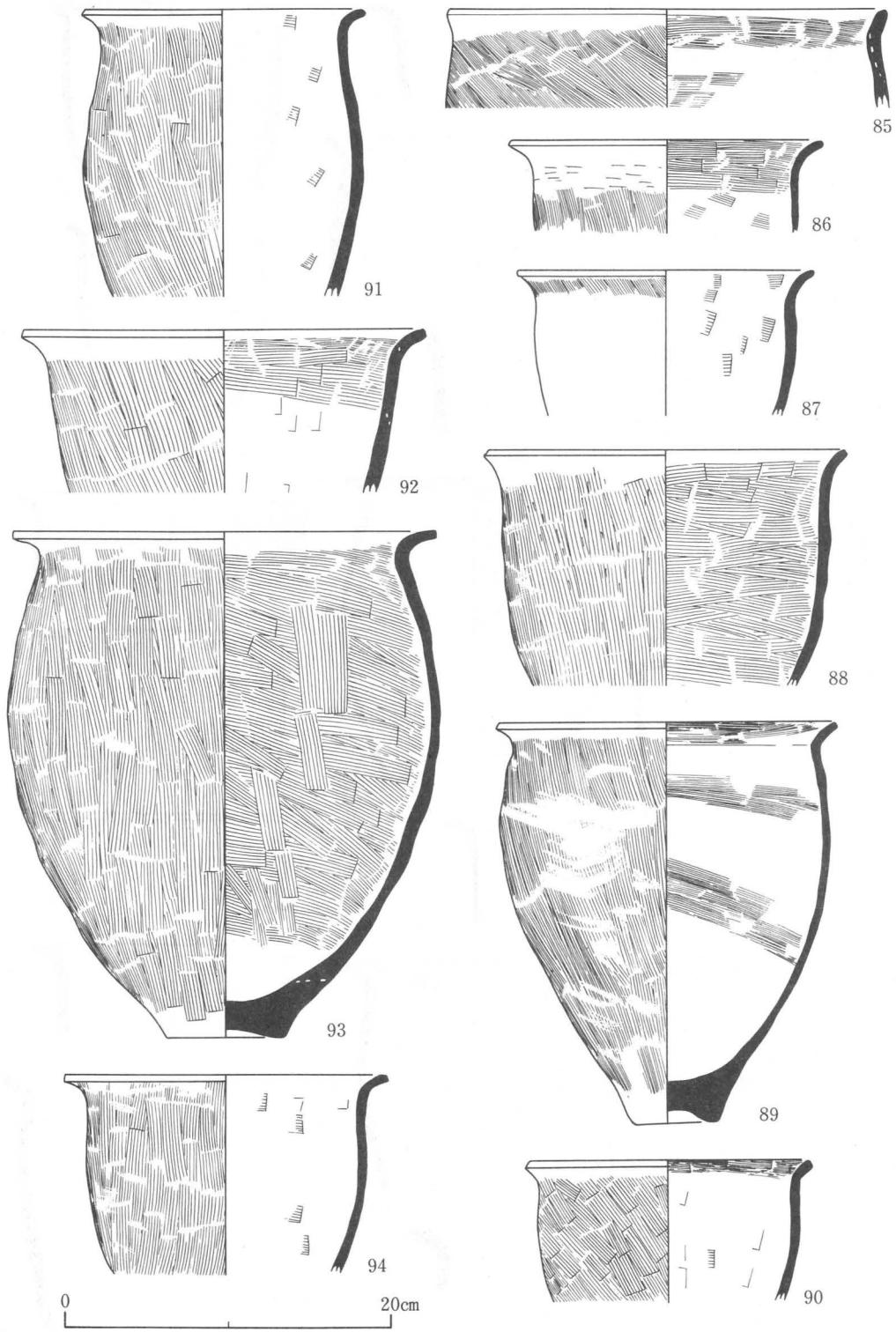
第35図 環濠出土弥生土器（高杯・壺蓋・甕蓋）実測図



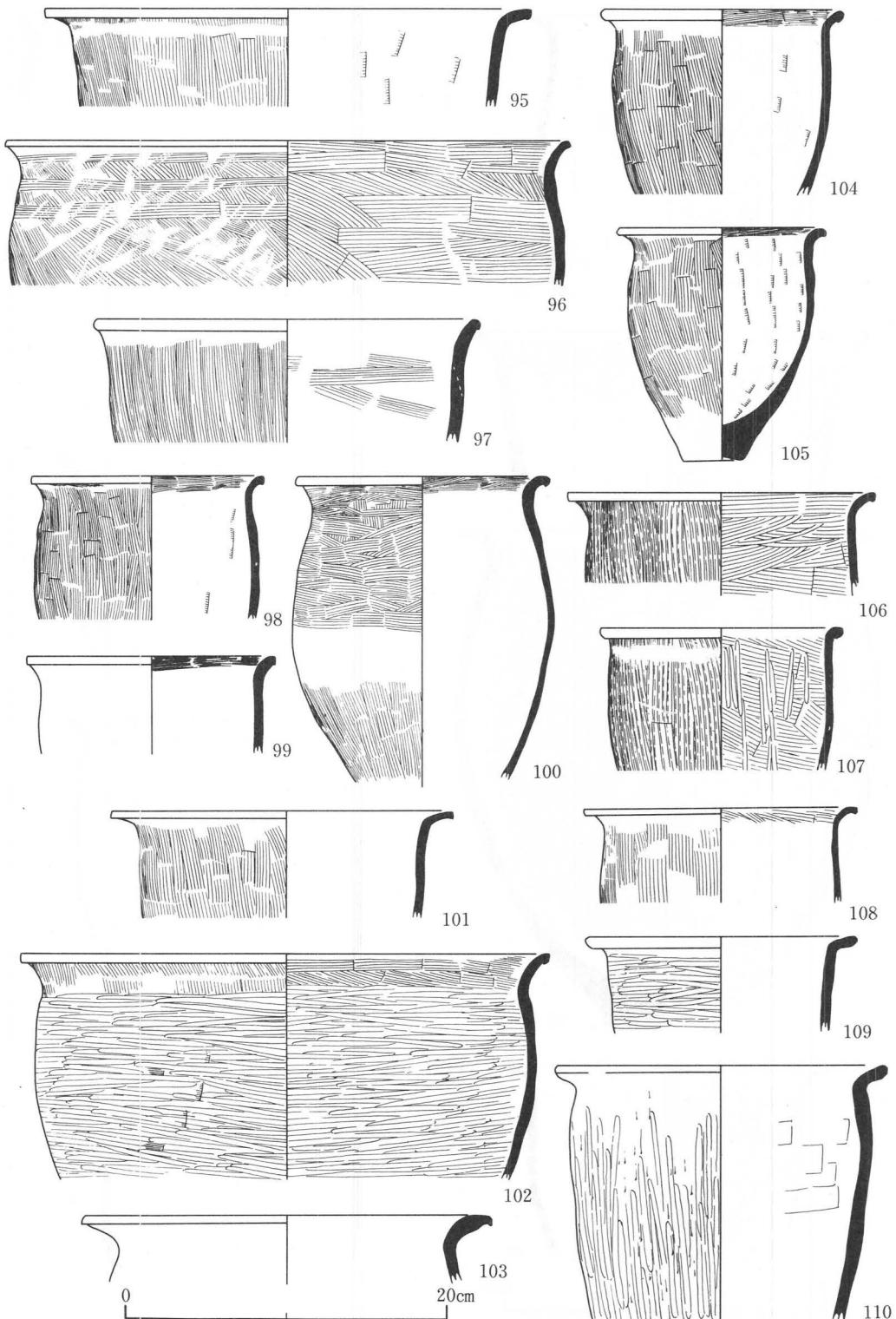
第36図 環濠出土弥生土器（鉢A）実測図



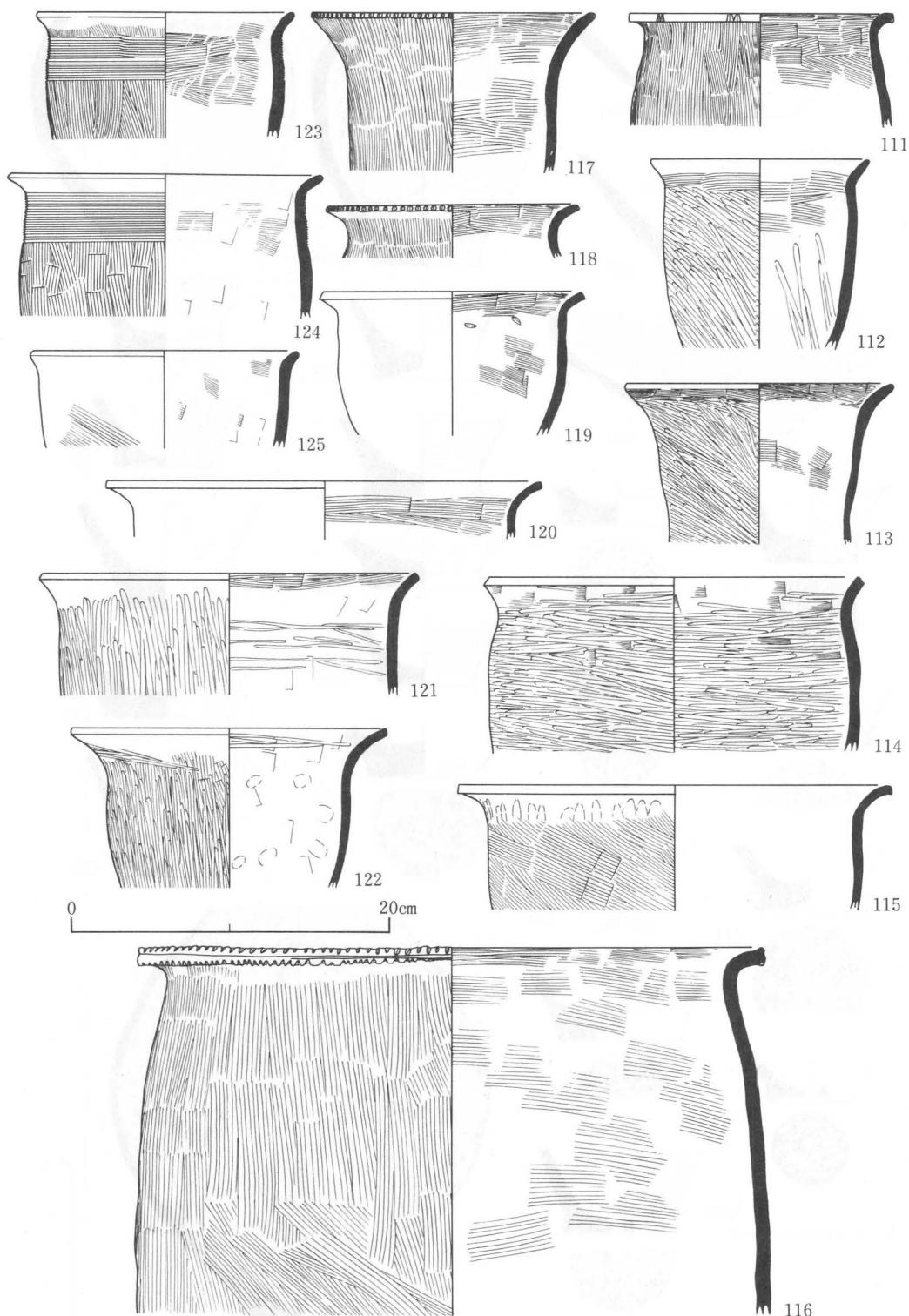
第37図 環濠出土弥生土器（甕A）実測図



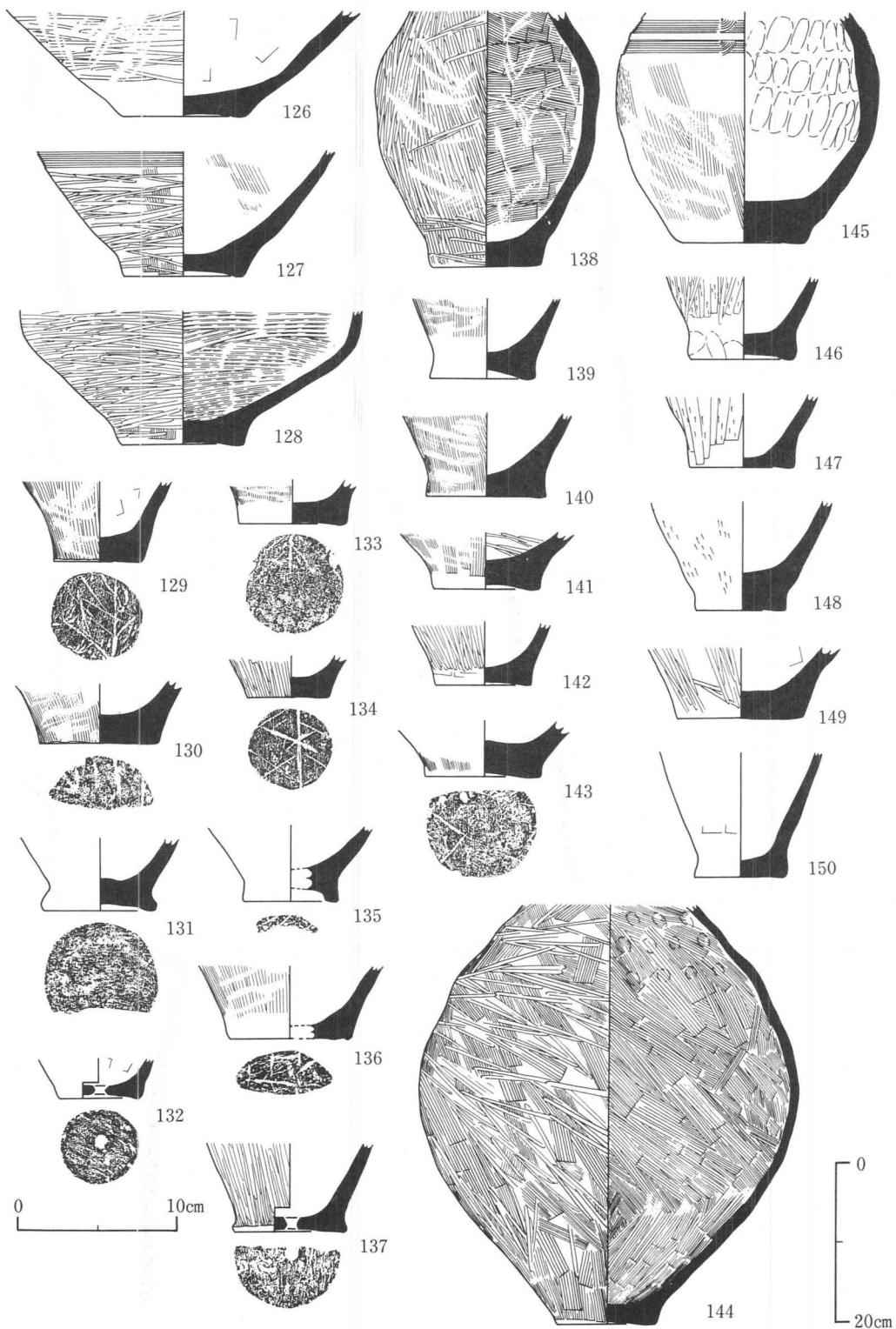
第38図 環濠出土弥生土器（甕B-3）実測図



第39図 環濠出土弥生土器（甕B-2）実測図



第40図 環濠出土弥生土器（甕B-1・B-3・C・山城系）実測図



第41図 環濠出土弥生土器（底部）実測図

土壌12出土土器（第42、43図・図版42～44）

壺A 4点（在地産3点、他地域産1点）出土している。（158）は、口縁部を欠失するがほぼ全形を残す。頸部から体部にかけての外面に櫛描直線文（単帶）を時計回りに施し、文様帶間にヘラミガキを巡らす。文様帶間にヘラミガキを施すものはこれ1点で他の2点（在地産1点、他地域産1点）にはみられない。（154）は在地産の無文様のもので雑なつくりである。他地域産の（159）は、内面煤け、外面には煤が付着している。粘土紐の継目は、内傾と外傾がみられる。

鉢A 2点（在地産）出土している。1点は（152）で把手を欠失するが口径19.4cm・器高8.8cm・底径6cmのほぼ完形の鉢である。体部外面に逆時計回りに櫛描直線文（単帶）を施した後、直線文上に下向きに、扇形文を配した擬流水文を描く。体部外面にはヘラミガキを施し、底部は上げ底氣味のものである。他の1点は、別個体の把手である。把手の外面に幅0.9cm、6条の櫛描直線文（単帶）を、4帶施す。胎土中の砂粒は、 2×2 mmの閃緑岩の亜角礫・角閃石が見られる。

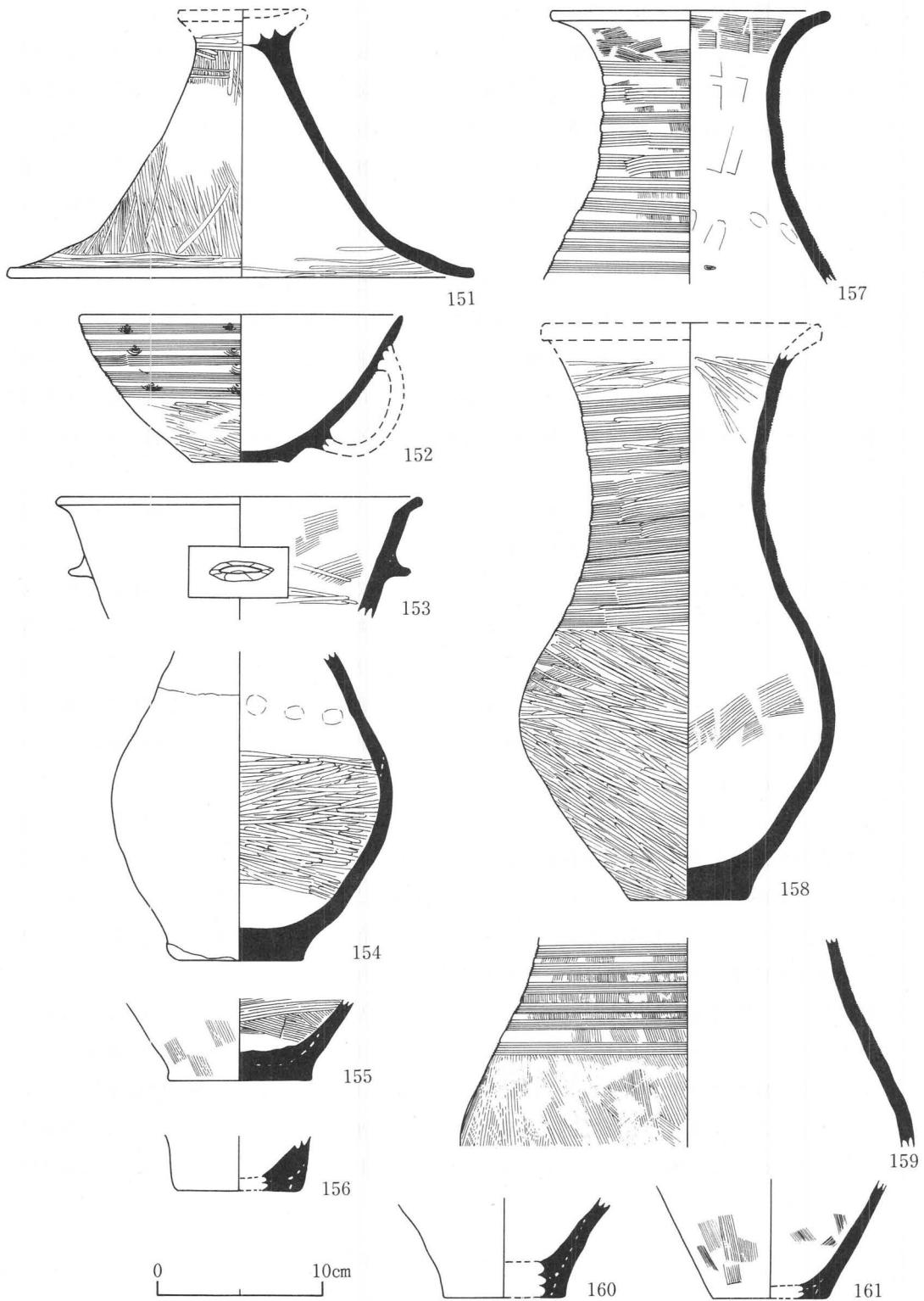
鉢B 1点（在地産）出土している。（153）で、体部上半に瘤状把手を付ける鉢である。口径21.4cmでこのタイプの鉢としては小型である。

甕A 10点（在地産）出土している。口縁部は緩やかに外反する。（162）・（164）は完形に復元できたものである。（162）は体部外面を下から上にケズリ、内面をヨコハケで仕上げる。体部外面をヘラミガキでなくケズリで仕上げるものは3点存在し、環濠出土のものに比べると目立つ。ケズリの方向は、すべて下から上に施す。底部は突出した平底と上げ底がある。煤付着ないし煤けるものは7点みられる。口縁部と体部を成形する際に残った外傾の接合痕が、（164）・（166）に認められる。

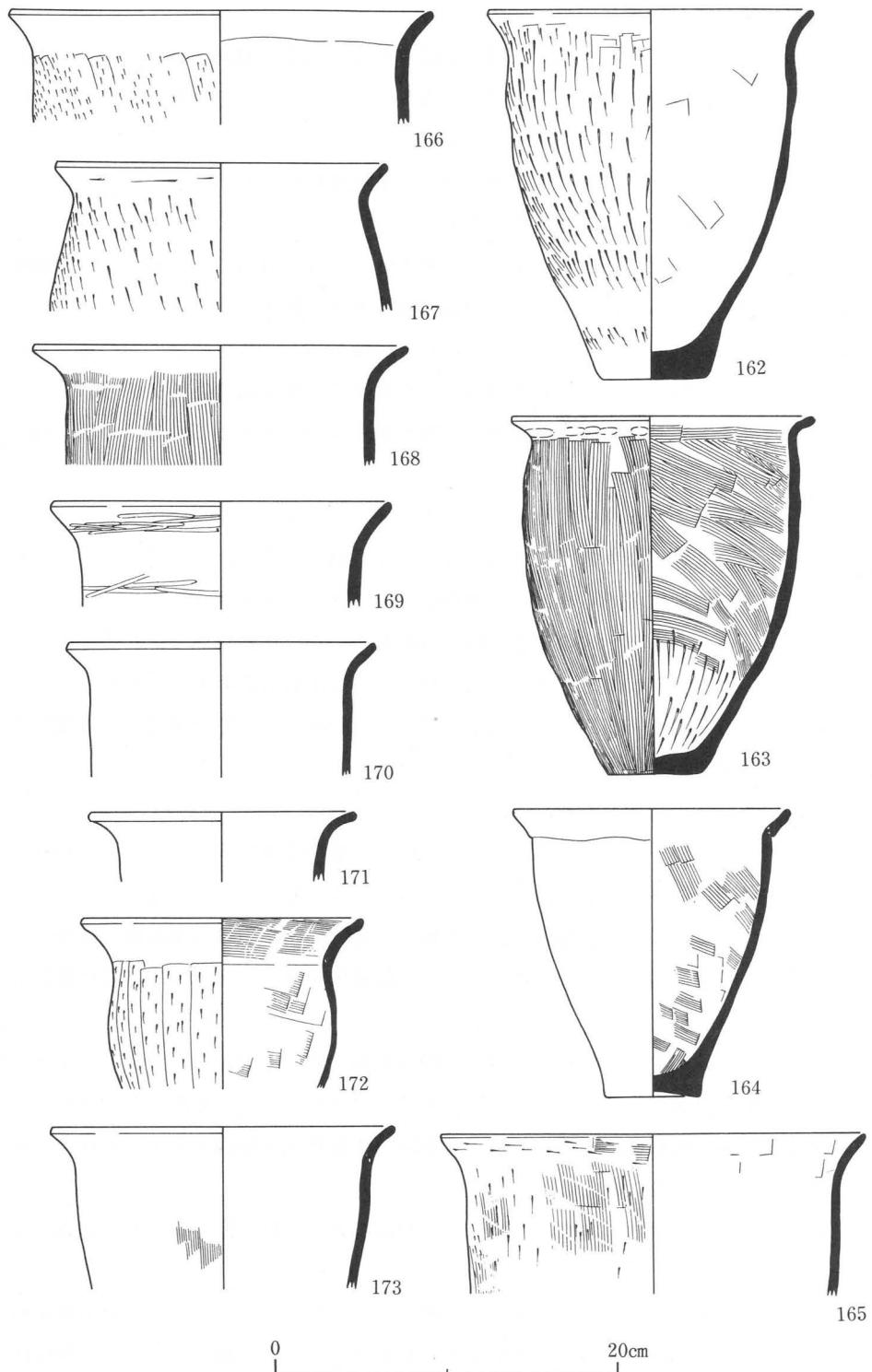
甕B-3 6点（在地産）出土した、外反する口縁部をもつ。（163）は、完形に復元できたもので、体部外面をタテハケ、内面を不定方向のハケで仕上げる。底部内面は下から上にケズリを施す。底部は平底である。（165）のように体部外面に下から上に向かってケズリを施した後、タテハケで仕上げるものもある。煤付着ないし煤けるものが5点存在する。（172）・（173）に、口縁部と体部を成形する際に残った外傾の接合痕がみられる。

甕蓋 1点（在地産）が出土している。つまみ部を欠失しているがほぼ完形のものである。内外面ともヘラミガキで仕上げる。外面は煤けている。口径20.3cmと大型のものである。

他に、壺・鉢底部（在地産）3点と甕底部2点（在地産）、体部の破片で櫛描直線文をもつ4点（在地産3点、他地域産1点）と、擬流水文をもつ在地産の1点等が出土している。環濠に比して在地産の土器の割合が高い。また板状土製品も出土しているが、これについては後述する。



第42図 土壙12出土弥生土器（壺・鉢・甕蓋）実測図



第43図 土壙12出土弥生土器（甕A・B-3）実測図

各遺構出土土器（第44図・図版45、47）

溝・土壙・落ち込みなどより第II様式に属す土器が出土したが、器種、量とも少なく完形に復元できるものはない。既に各器種に亘ってみてきたので、出土点数と特徴的なものについて記述する。

壺A 落ち込み3・14などより19点（在地産10点、他地域産9点）出土している。（176）は、無文様と思われる他地域産の口縁部の破片である。

壺B 落ち込み3などより3点（在地産3点）出土している。（174）は在地産で、口縁端部外面に櫛描波状文、頸部から体部にかけての外面に擬流水文を施す。

鉢A 落ち込み3・溝13などより5点（在地産4点、他地域産1点）出土している。（177）は在地産で、体部外面に擬流水文を施し、（184）は在地産で、無文様のものである。

甕A 落ち込み3などより23点（在地産18点、他地域産5点）出土している。（182）は「逆L字」状の口頸部をもつ他地域産のものである。

甕B-1 落ち込み3より2点（他地域産）出土している。2点とも煤が付着する。

甕B-2 落ち込み3などより8点（在地産4点、他地域産4点）出土している。（181）は胎土にチャートを含む他地域産のもので、体部外面に粗いタテハケを施す。

甕B-3 落ち込み3・溝13・17などより15点（在地産13点、他地域産2点）出土している。（178）は第III様式に属す土壙15出土であるが、形態からみて第II様式と考えられる。

甕C 落ち込み3より1点（在地産）が出土している。（180）の土器は頸部から体部にかけての外面に複帶の櫛描直線文を施す。

包含層出土土器（第45図・図版44～46）

前述した通り第12、13層から第II様式の土器を主体に少量の第III様式の土器と、第14層から第II様式の土器が量的には多くないが出土した。以下、主な土器について記述する。

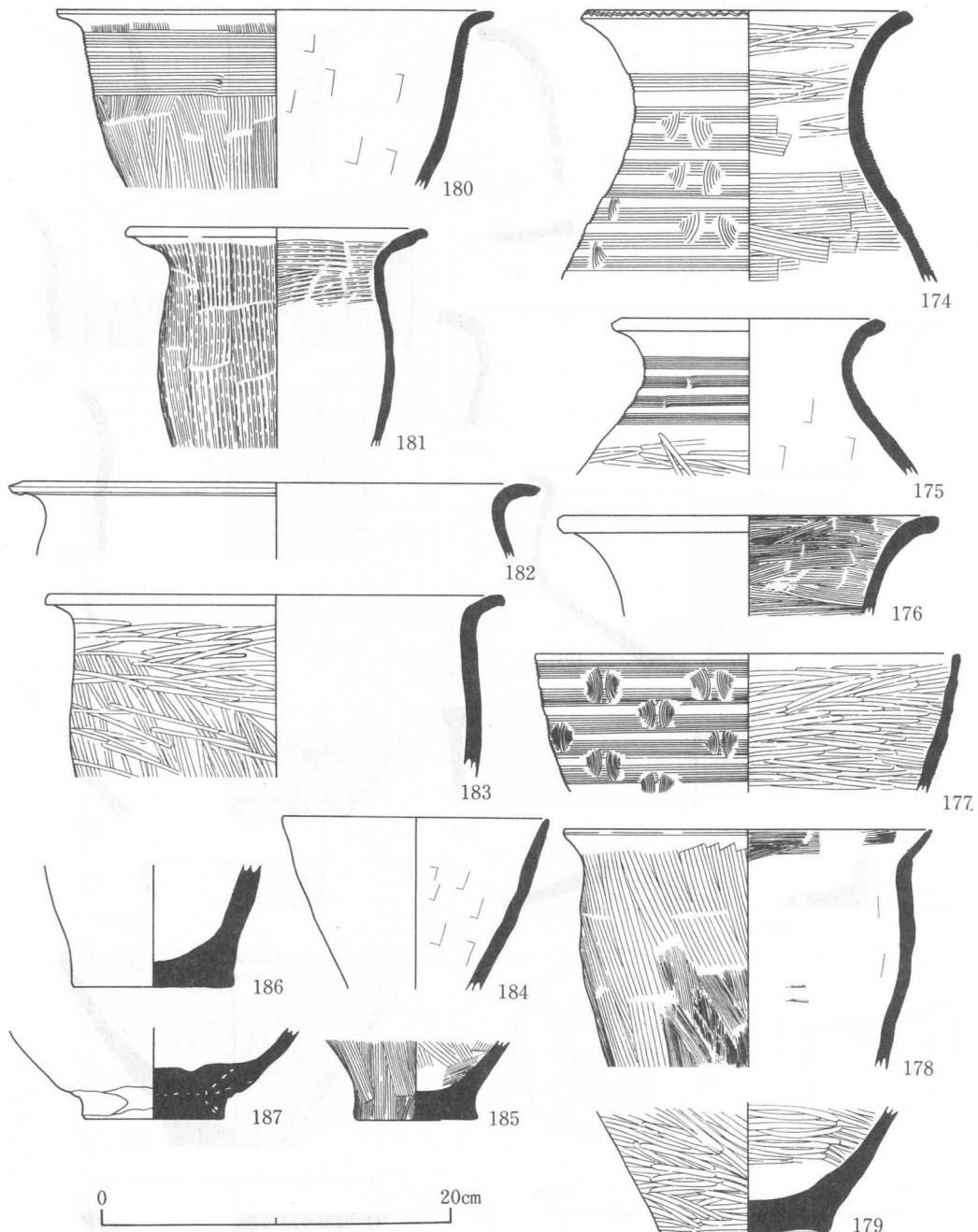
壺A （188）は、第12層出土の他地域産の無文様の土器で、頸部中位に焼成前に外から内に穿った孔を1孔もつ。同様の穿孔をもつ壺A（1）が環濠内より1点出土しているが性格は不明である。

鉢A （199）は、口縁部から体部外面に複帶の櫛描直線文と、その上に扇形文をx字状に配した擬流水文を施す第14層出土の在地産の土器である。（192）は、第13層出土の段状口縁をもつ土器で口縁端部外面に簾状文、上面に斜格子文を施し体部外面を櫛描直線文と波状文で飾る第III様式に属す在地産の土器である。

鉢B （191）は、F地区第14層出土の在地産の完形品である。無文様であるが、底部に焼成後の穿孔をもつ。

壺蓋B （193）は、第12層出土の他地域産で单頭のつまみをもつ。底面には木葉圧痕が残る。（194）は、C地区出土の在地産で外面に3葉1組の木葉文を4ヶ所に施す。第I様式新段階に属す混入品と考えられる。

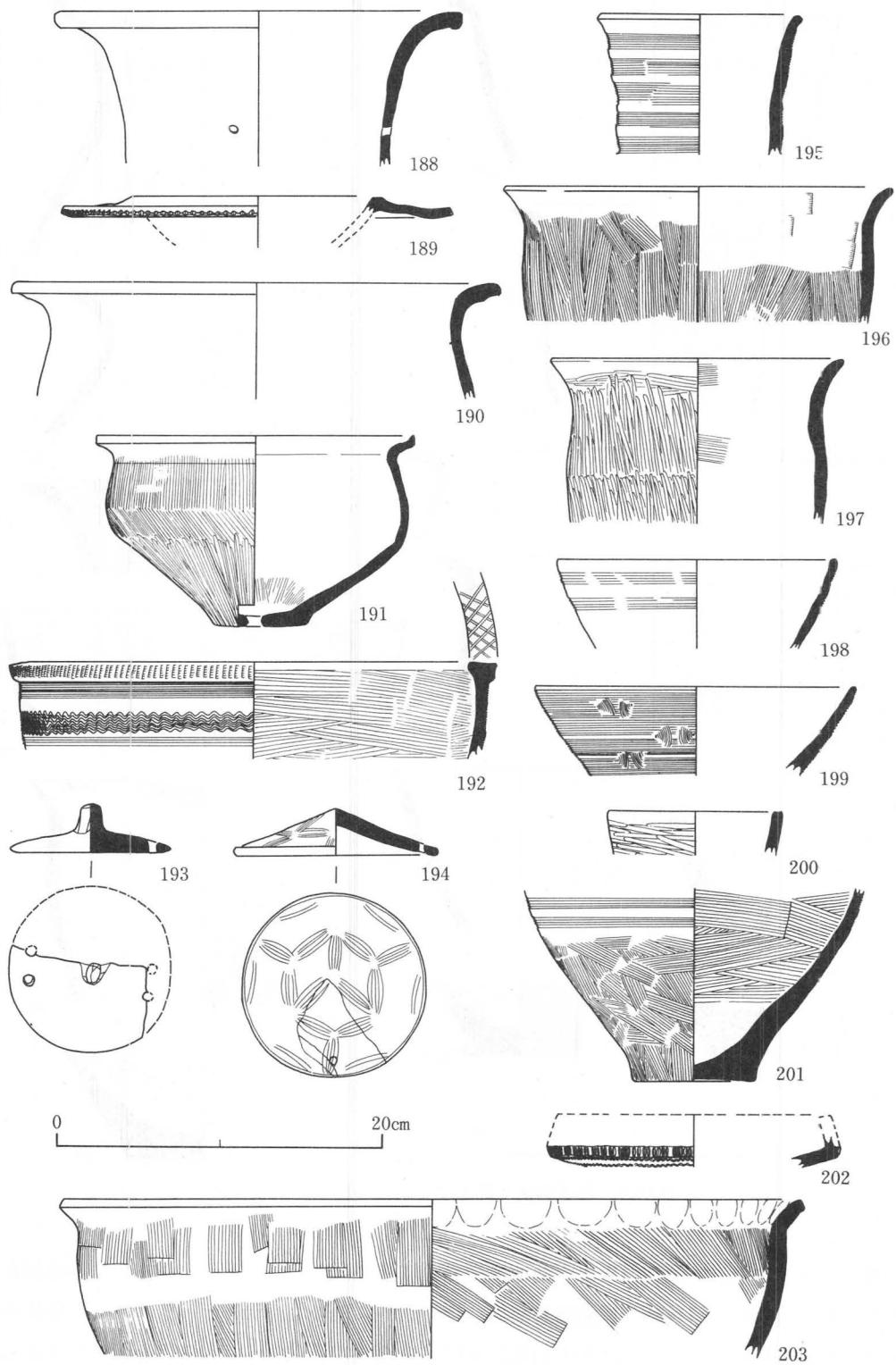
高杯B （189）は、第12層出土の他地域産で口縁部だけが出土したが、水平口縁端部外面に



第44図 各遺構出土弥生土器（壺・甕・鉢）実測図

ヘラによるV字状の刻み目を施す。

他に(202)の壺は、第12層出土の他地域産で受口状口縁をもつと考えられる。口縁端部を欠失するが、頸部から口縁部の屈曲部外面に、時計回りに施した波状文とヘラによるV字状の刻み目をもつ。形態からみて近江から山城にかけての地域で製作された壺ではないかと考えられ第II～第III様式に属す。



第45図 包含層出土弥生土器（細頸壺・鉢・高杯・壺蓋）実測図

弥生時代の土製品（第46図・図版49、50）

包含層および遺構内より少数ながら土製品が出土している。土製品の大半は土製円板である。

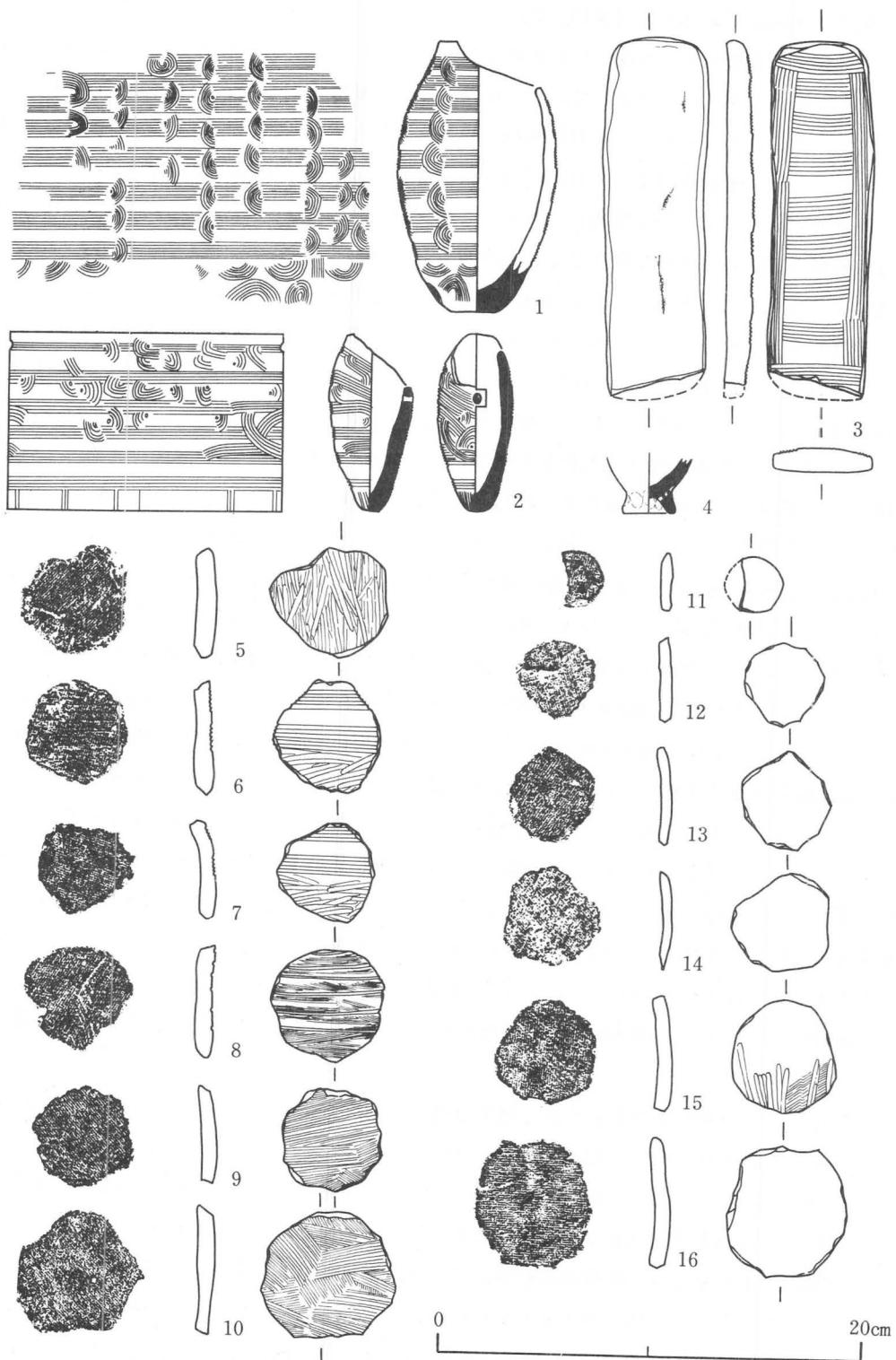
板状土製品 1点（3）出土している。在地産の平面が長方形を呈する土製品で、木口の1辺を欠失する。表面に、木口と並行に櫛描直線文を9帯と両側辺に沿って1帯ずつ施す。施文は、木口に並行の櫛描直線文を木口部の各1帯を除き、はじめに7帯、次に両側辺に沿って1帯、終わりに両木口部に各1帯施している。この文様構成から欠失した木口部はわずかと思われる。側縁及び裏面はナデで仕上げる。長さ現存16.4cm（推定17cm）、幅4.7cm、厚さ1.1cmで、土壌11より出土した。胎土に、3×4mmの閃緑岩、1mm前後の角閃石を多量に含む。

小型瓢形壺 2点（1・2）出土している。2点とも在地産の土器で、砲弾形の器体に斜めにつくられた口縁部をもつ。（1）は、一部を欠失するが、体部外面全面に時計回りの横描きの櫛描直線文とその上に扇形文を配した擬流水文を描き、横描きの櫛描直線文最下段に接して底部外面に縦描きの櫛描直線文と孤状文を施す。幅8.5mm・7条の同一原体を用いて施文する。施文順位は、横描きの直線文・扇形文・縦描きの直線文・孤状文の順で上から下に施されている。外面は、黒色物質を塗布した上に後述するように朱を塗っている。底部は小さな平底である。器高12.8cm、体部最大径9.6cmでC地区環濠第3層と第14層出土の破片が接合した。第14層より出土した破片は風化が激しい。胎土に最大2×4mmの閃緑岩の亜角礫を含む。

（2）は、（1）に比べて小型であるが完形で出土した。体部外面全面に横描きの櫛描直線文とその上に扇形文を配した擬流水文を描き、底部外面及び底面に、横描きの櫛描直線文最下段に接して縦描きの櫛描直線文を幅6mm・5条の原体を用いて施す。横描きの櫛描直線文の後、扇形文と縦描直線文を施しているのは明らかであるがどちらが先かは不明である。扇形文は（2）に比べてくずれたものである。外面に黒色物質の塗付がみられる。口縁部に焼成前に外から内に向かって孔が1個穿たれている。底部は小さい平底に近い丸底で正位置では立たない。口縁部に穿たれた孔に紐を通して吊り下げたものと思われる。器高8.4cm、体部最大径4.0cmでC地区環濠第3層から出土した。胎土に1×1.5mm以下の角閃石が多量に含まれる。

ミニチュア土器1点（4）出土している。体部上半を欠いた底径2.7cm・現存高3cm、上げ底の在地産の土器である。内外面に指頭圧痕が残る。胎土に0.5mmの角閃石を含む。C地区環濠より出土した。

土製円板 包含層および第II様式に属す遺構から13点（在地産11点、他地域産2点）が出土している。周縁を打ち欠いただけの簡単なつくりである。（5）5.2×5.4cm重さ34.3g （7）4.6×4.6cm重さ22g （9）4.6×4.8cm重さ19.9g （12）3.6×4cm重さ10.9g （15）5×5.4cm重さ21.3g （16）5.4×6cm重さ30.1g は環濠出土である。（16）は他地域産土器を転用したものである。（6）は溝17出土の壺ないし鉢体部の転用品で5×5.2cm重さ31.9g 表面に単帯の櫛描直線文が残る。（13）は、落ち込み3出土で4×4.8cm重さ12.9g である。（8）5×5.2cm重さ28g （11）3.6×2.8cm以上重さ3.6g以上 （14）4.4×4.4cm重さ9.4g・他地域産は第13層（10）6×6.2cm重さ42.4g は第14層出土である。（8）は、表面にヘラ描沈線がみられる。



第46図 弥生時代 土製品実測図

木製品（第47～57図・図版54～70）

鬼虎川遺跡第19次調査で出土した木製遺物はコンテナにして約100箱分におよぶ。そのうち明らかに製品と認められる木製遺物（以下木製品という）は74点であった。これらは柱材資料と、例外的に古墳時代以降の時期に属する1～2点の資料を除けば、全て、弥生時代中期初頭の環濠内より出土したものであり、伴出した畿内第II様式の土器群と併せ、一括遺物として包括しうるものである。時期を限定できる木製品として貴重な資料といえる。

これらの木製品74点は、農耕具をはじめ、生活用具、工具、紡織具、狩猟具、柱材、用途不明木製品など多岐にわたるが、以下の説明にあたっては、機能・用途上の種別と形態上の種別が便宜的に併存している点について御寛恕頂きたい。（例えば刺突具などが、単一の機能・用途に限定できないからである。）また挿図中、横断面のスクリーン・トーンは模式的に年輪を表し、木取り法を示している。

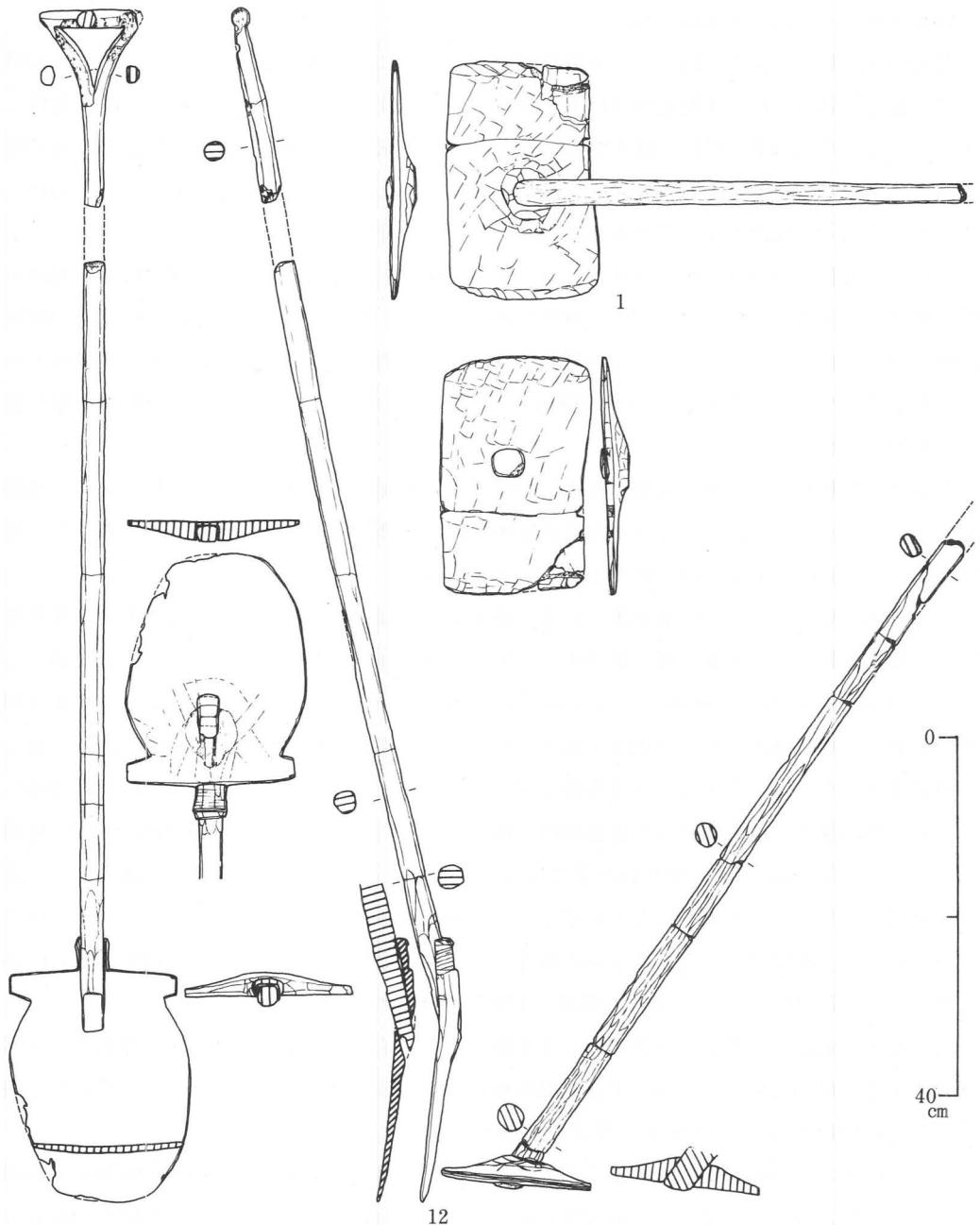
農耕具 農耕具は、平鋤、又鋤、組み合わせ鋤、一本鋤の完形品や破片、部材のほか、運搬具としての櫂がある。白ないし白状木製品は機能的には農耕具の範疇に入るものであるが、説明の都合上、容器状製品の項で取り上げることにする。

1は、柄と身が完存している平鋤である。着柄状況を知ることのできる資料である。芋本隆裕氏の型式分類¹⁾では、平鋤C類に相当すると思われる。身は横長の長方形を呈し、長辺26.4cm、短辺16.4cm、最大厚1.2cmを測る。いわゆる舟形突起はなく、原材の瘤状突起部分をそのまま利用する形で、柄孔周囲に若干の削りを加えている。その最大厚は2.8cm、柄孔は楕円形で、柄との装着部からみると、中央よりやや左側に穿たれている。隆起部を内側にした着柄角度は60°である。柄内側の長辺方向には刃部様の削り出しあはみられず、面をなし、両側縁の柄側と外側にわたって原体刃幅1.5cmの削り痕が認められる。このことから芋本氏が類推するように、本資料は耕起を目的とした平鋤ではなく除草などの用途に供されていた可能性が考えられる。柄の長さは88.3cm、断面は柄に近い部分が円形を呈し、握部は使用頻度のためか楕円形である。最大径3.0cm、最小径1.8cm。B地区、環濠、1層内より出土。樹種はカシである。

2は孤状の頭部から据広の刃部にいたる平鋤である。芋本氏分類のB II e類に相当か。刃部を欠損する。身の現存長21.4cm、刃部側現存幅12.4cm、最大厚0.8cm。柄孔は円形で突起部を内側にした着柄角度は71°。B地区、環濠、2層内より出土。樹種はカシである。

3は、横長の長方形を呈する平鋤である。1と同じ平鋤C類に相当。柄内側の長辺部を欠損する。長辺18.3cm、短辺15.2cm、最大厚1.3cm。突起部最大厚2.7cm。突起は不明瞭な円形を呈する。柄孔は穿孔時には方形であったと思われる。着柄角度は突起部を内側にして73°である。柄内側からみて右側縁外側に原体刃幅1.5cmの削り痕が2cmにわたって認められる。C地区、環濠、1層内より出土。樹種はカシである。

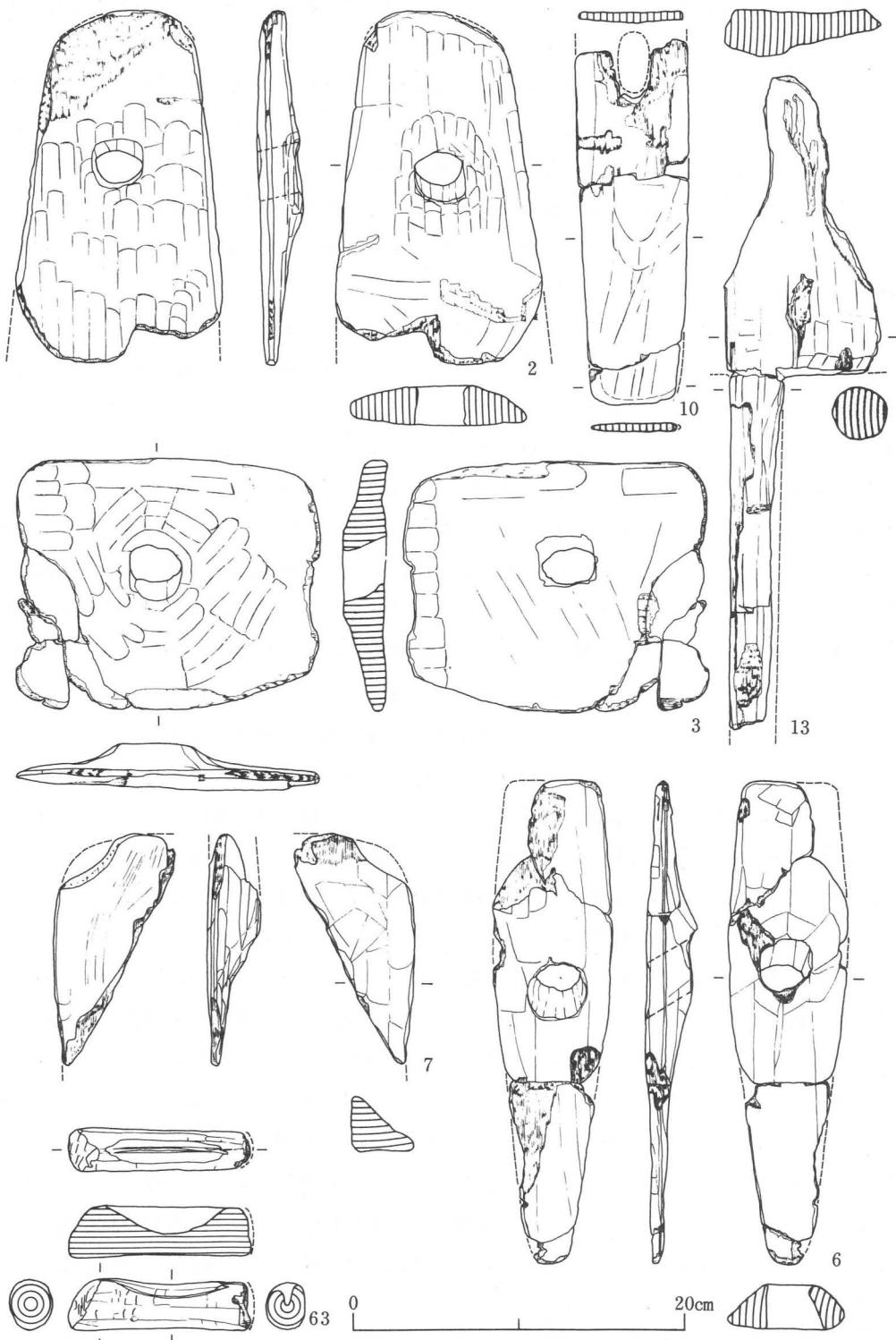
4は、突起部を削り出す以前の平鋤の未製品である。長辺22.3cm、短辺19.5cm、最大厚3.9cmを測る。長辺の一側縁には原体刃幅1.65cmの削り痕が認められる。E地区、環濠、1層内より出土。樹種はカシである。



第47図 環濠出土木製品（鍬・鋤）実測図

5は、平鍬の未製品で、側部一方を欠く。現存長の長辺は28.0cm、短辺は11.5cm、最大厚2.8cmである。中央部に削り出しによる突起部があり、最大厚4.9cmを測る。C地区、環濠、2層内より出土。樹種はカシである。

6は、扁平な頭部から、柄孔までやや巾広になり、刃部にいたり鋭く尖る平鍬である。A I d類に相当。長さ29.3cm、幅7.2cm、最大厚1.2cm。突起部は亀甲状をなし、最大厚2.7cmを測



第48図 環濠出土木製品（鋤・鍬・不明木製品）実測図

る。柄孔は円形で径3.0cm。刃部は丁寧に磨かれている。突起部を内側にした着柄角度は150°。C地区、環濠、1層内より出土。樹種はカシである。

7、8、9はそれぞれ平鋏の一部である。7は現存長で長さ13.9cm、幅7.3cm、最大厚1.1cm。形状から舟形突起を持つものと推定される。突起部最大厚は3.2cm。C地区、環濠。1層内より出土。樹種はカシ。8は現存長で長さ15.0cm、幅6.8cm、最大厚1.2cm。突起は方形状か。最大厚は2.8cm。柄孔は円形で3.0cm。突起部を内側にした着柄角度は107°。E地区、環濠内より出土。樹種はカシ。9はいわゆる狭鋏の頭部で、現存する長さ6.3cm、幅6.3cm、最大厚2.1cm。B地区、土壙11、1層内より出土。樹種はカシ。

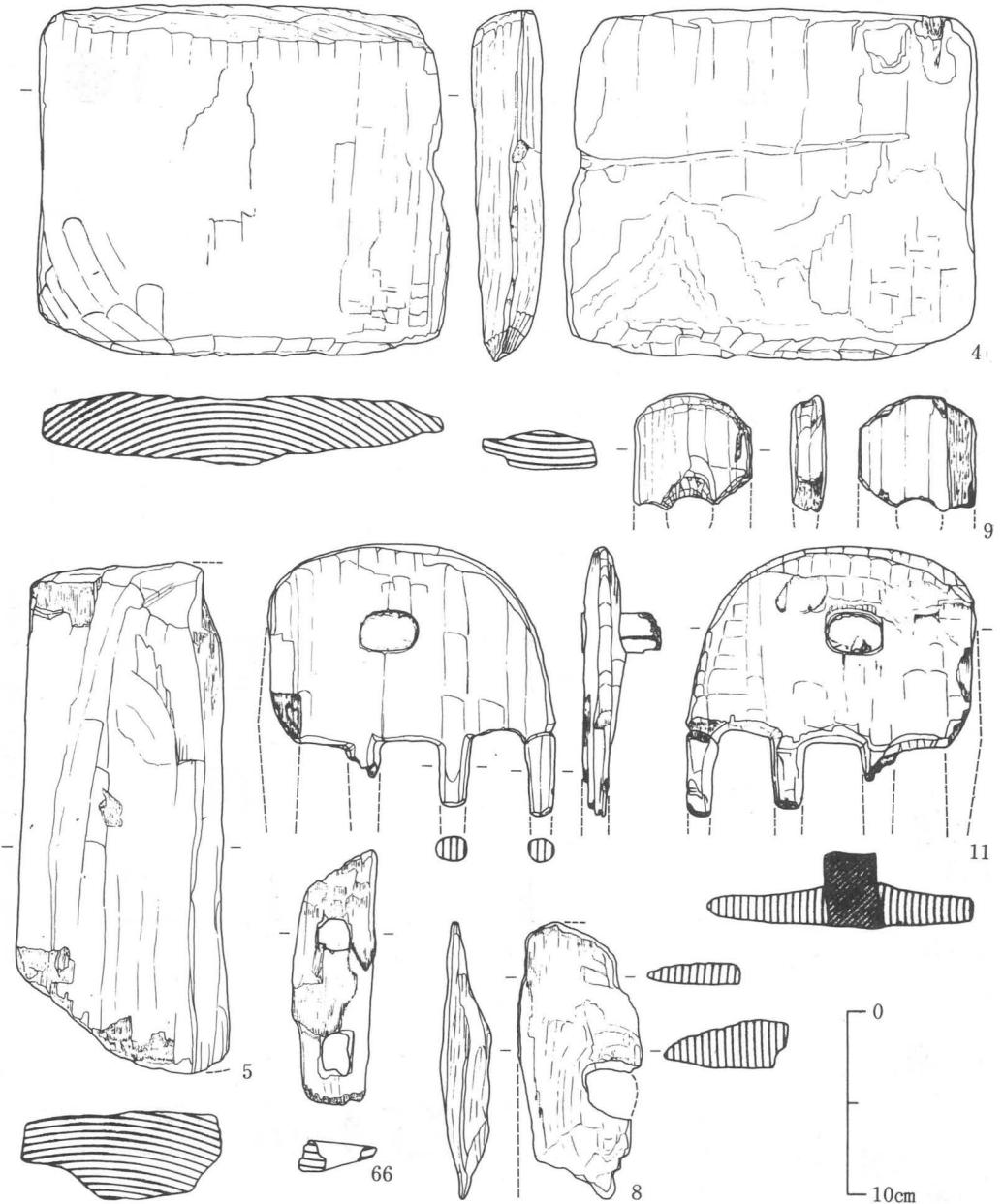
10は扁平な板状を呈する平鋏である。上方の割れを柄孔と認知したが、突起部のないこと、薄いことから検討を要する資料である。現存長で長さ22.1cm、幅6.9cm、最大厚0.6cmを測る。E地区、環濠内より出土。樹種はカシ。

11は身の平面形が半円形を呈する又鋏である。身の下端には3本の歯が現存し、さらにもう1本の歯を推定しうる。柄側の中央部は隆起し、歯部にいたり薄くなり、削り出しを行う。外側は平らである。身の長さ10.9cm、幅15.6cm、最大厚2.2cmである。歯は現存長で長さ4.6cm、最大幅1.6cm、最大厚1.4cmで、断面は隅丸方形状を呈する。柄側の頭部や側部には原体刃幅1.0cmの削り痕があり、柄孔より外縁にむかって削りを加えていることが知られる。柄は4.2cm現存し、長径3.0cm、短径2.1cmの楕円形を呈する。着柄角度は91°でほぼ垂直に取り付く。C地区、環濠、2層内より出土。樹種は刃部カシ、柄はヒノキ？。

12は、柄の一部を除いて、ソケット状の受部をもつ身と逆三角形状の把手がつく柄との組み合わせ鋏の完品である。身の柄受部は幅2.4cm、深さ1.3cmの断面凹形の溝が身の水平面に対し15°の角度で彫りこまれ、身の裏面まで貫通している。鋏は、柄を身の裏側までソケット状に差しこみ、身の柄受部と柄を樹皮により緊縛することで固定されている。身は受部先端から刃部先端まで29.6cm、最大幅20.1cmを測る。身の柄側は製作時と使用の摩耗によりきわめて平坦になっているのに対し、裏側は使用強度を持続するために、柄の装着部中央でふくらんでいる。中央部での最大厚は2.6cmを測る。また身の両側縁に各々2.5cmと1.4cmの抉りを入れている。刃部は水平面から8°上方に傾く。刃部の最大厚は0.7cmである。柄は113.8cm現存しているが、欠損部を入れると、約117cmの長さが推定される。把手は逆三角形でとくに握部は丸く仕上げている。把手幅は11.5cm、径は2.4cmで円形を呈するが、先端の身との装着部では 2.3×1.9 cmの断面長方形状になっている。B地区、環濠、1層内より出土。樹種はカシである。

13は、一本鋏の一部である。身のはほとんどを欠損するため全形の復元は困難であるが、柄の延長部が隆起しているところから、芋本氏分類の一木鋏B類に相当し、長方形の身をもつものと考えられる。身の現存長18.1cm、幅9.1cm、最大厚2.9cm。柄は21.0cm現存し、径3.2cm。C地区、環濠、2層内より出土。樹種はカシ。

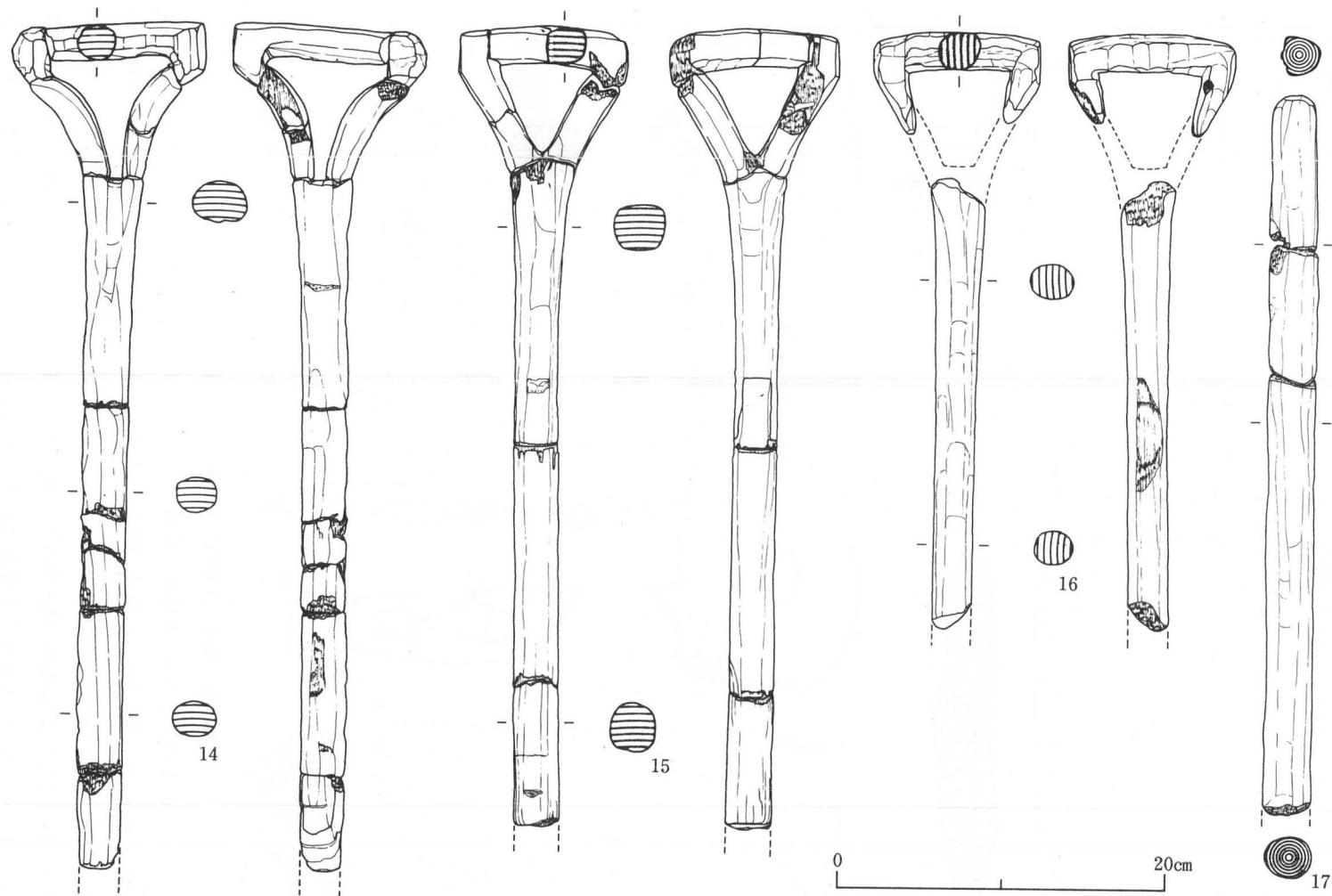
14~17は、鋏の柄である。14~16はいずれも逆三角形状の把手がつく。14は、長さ51.3cm、把手幅11.8cm、最大径3.3cm。C地区、環濠、1層内より出土。樹種はカシ。15は、長さ48.5cm、



第49図 環濠・土壤12出土木製品（鍬・板状木製品）実測図

把手幅10.4cm、最大径3.0cm。B地区、環濠、2層内より出土。樹種はカシ。16は長さ27.2cm、把手幅10.2cm、最大径3.3cm。C地区、環濠、1層内より出土。樹種はカシ。17は、柄の棒状部分のみ残存。長さ43.6cm、最大径2.9cm。C地区、環濠、1層内より出土。樹種はシイノキ。

18は、削り出しにより表面に隆起部をもつ橿である。長さ101.4cm、最大幅17.1cm、最大厚1.6cmを測る滑走板が中央部から上端部にかけて水平面に対し7°の傾斜をもって反り上がり、主軸との直交方向の反り上がりとも合わせ、滑走面は曲面を呈している。滑走面は主軸直交方向



第50図 環濠出土木製品（鋤）実測図

の擦痕が著しい。隆起部は上面を平坦に仕上げた高さ3.8cm、幅3.0cmの突起が先端から30cmのところで二叉状にわかかれている。これは、隆起部先端から32cmのところで、原材に長さ33.8cm、最大幅4.5cm、深さ2.3cmの溝を掘り凹めることにより造り出している。また隆起部側面には長辺2.3cm、短辺1.8cmの方形孔が4ヶ所穿たれている。方形孔や二叉状突起の位置関係からみて、二叉部は、負荷に対する強度を保持するための装置であり、荷台部は第2孔から第4孔にかけて紐縄により緊縛固定されたものとみられる。さらに滑走板上での隆起部が上からみて左に偏っているところから、本資料が一対の橇の右側の部材に相当することがわかる。C地区、環濠、1層内から出土した。使用樹種はカシである。

19も、18と同じく橇の一部分とみられる。このような形状をもつ木製品は、鎧の可能性が考えられるが、四辺がすべて折損しており、幅が現存長より大きくなることおよび、隆起部の立ち上がりの主軸が滑走板に対し78°の傾きをもつことなどから橇と考えている。現存長34.7cm、幅17.0cm、最大厚1.9cmを測り隆起部は、高さ9.2cm、幅4.0cmを測る。上端部より12.5cmのところで、3.2×3cmの方形孔が穿たれている。E地区、環濠、2層内より出土。樹種はマツ。

容器状製品 高杯、四脚付容器、臼などがある。

20は、枘穴結合の高杯の脚部である。現存する脚柱の高さは19.5cmを測り、径は5.8cmで円形を呈する。脚柱下端は折損している。脚柱上端より2.5cmのところに、結合部位がある。この結合部は、おそらく杯部と脚部とをつなぐものであろう。結合部が不齊一な割れ目を呈していることからすれば、一本から造り出そうとした高杯が何らかの理由で、製作過程で亀裂を生じ枘穴結合により利用に供したことが考えられる。今仮にこの割れ目から上を脚上部、下を脚下部とすれば、脚上部は1.9cmの正方形の枘を造り出し、脚下部は同寸法の穴を穿ってソケット状に差し込み、さらに5mm大の目釘を、上端より5cmと6.3cmの2方向より打ち込んで固定している。上方の目釘は裏面にまで貫通していた。B地区、環濠、2層内より出土。使用樹種は高杯杯部不明、芯サカキである。

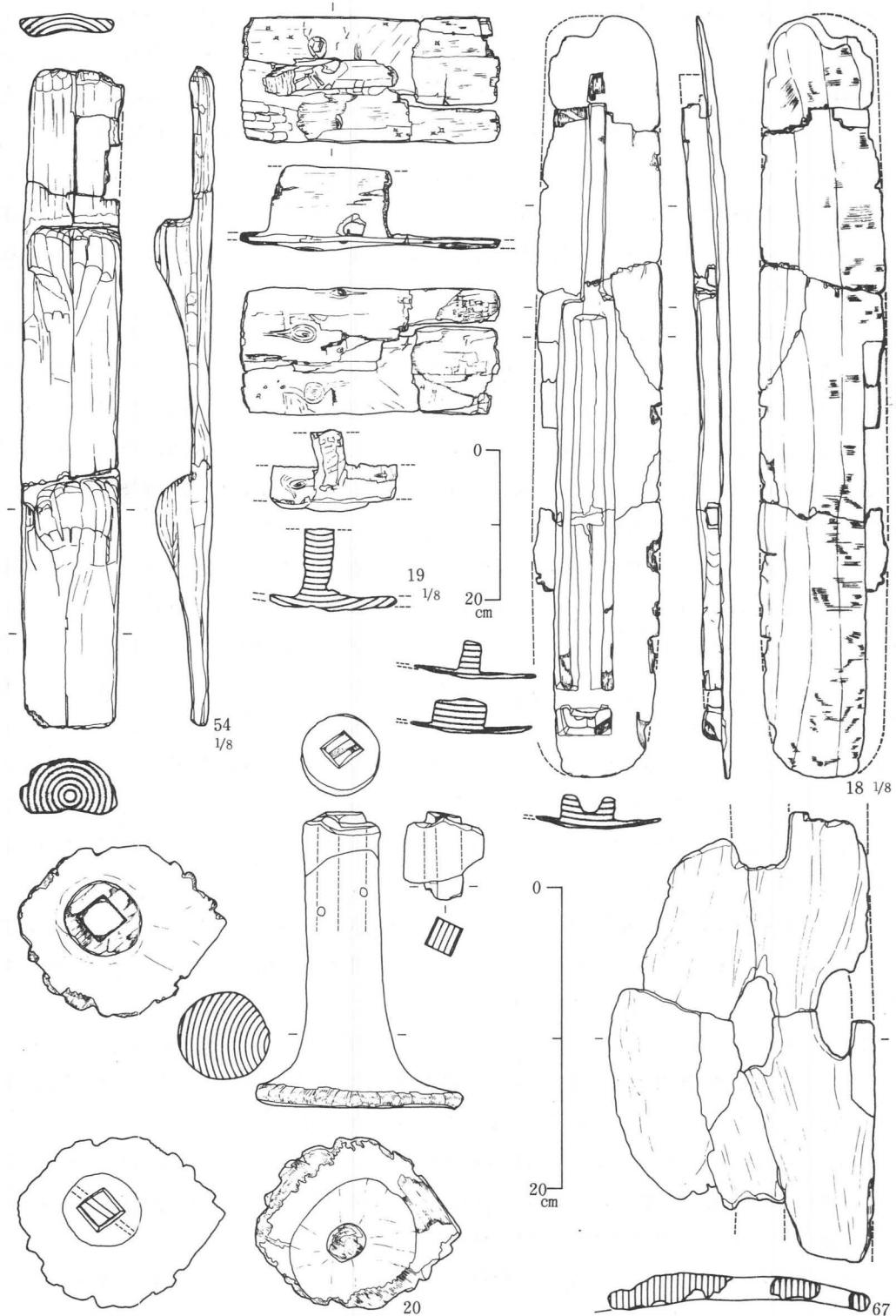
21は、高杯の杯部。口縁端部をわずかに外方へ拡張するため端面は水平面となる。内外面とも丁寧な削りが施されているため、その方向は不明。B地区、環濠、1層内より出土。樹種はケヤキ。

22は、高杯の杯部ないしは鉢。口縁端部の形状からすれば鉢か。ほぼ直線的に開き、端部にいたっている。口縁部内面はやや粗い斜め方向の削りが認められるものの、そのほかの部位は丁寧に削られている。E地区、環濠、1層内より出土。樹種はケヤキ。

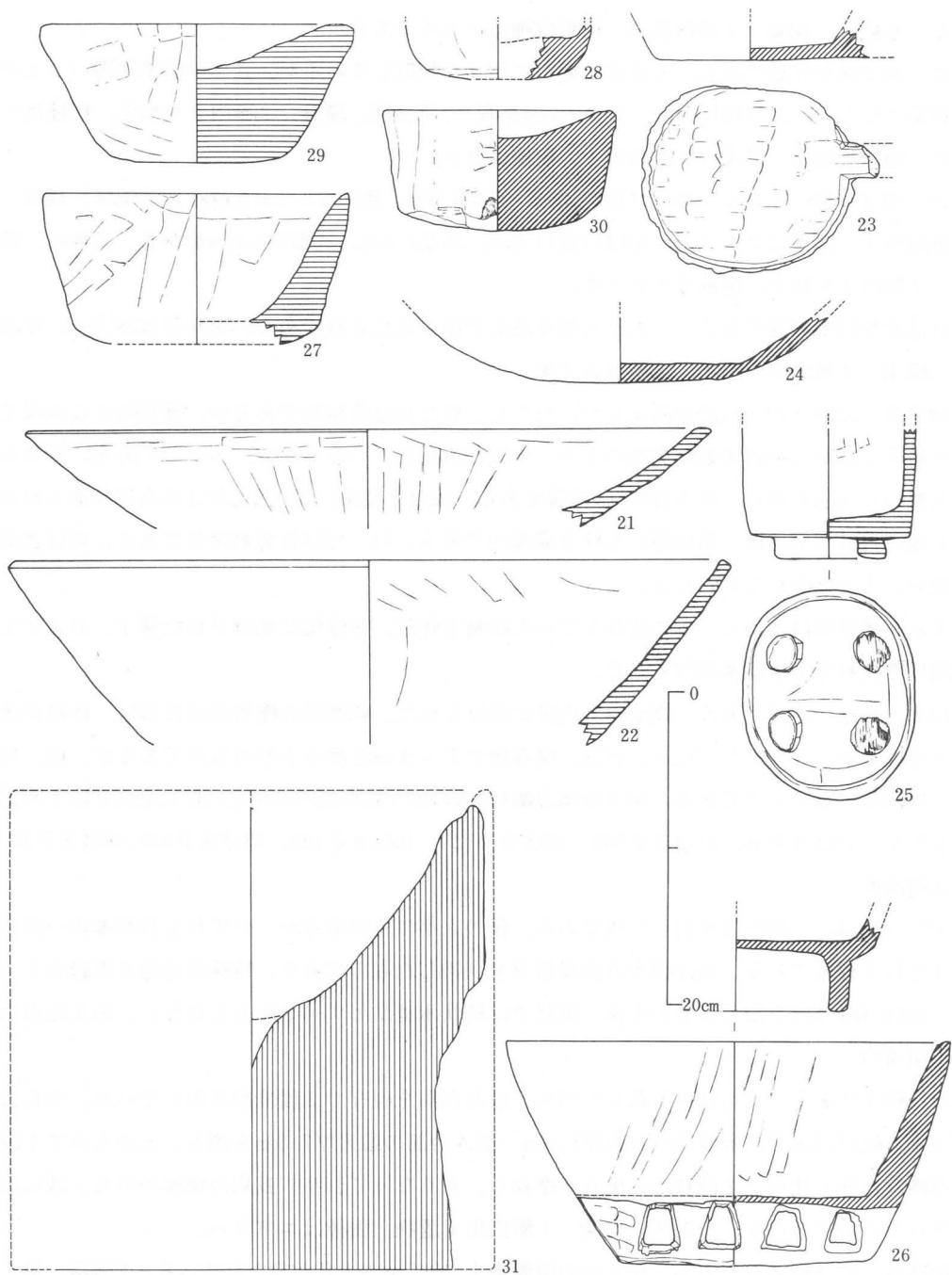
23は、把手付円形容器である。平面形は楕円形を呈し、容器の一端に断面正方形の把手がつく。内面は丁寧な削りが施されているが、底外面には原体刃幅1.0cmの削り痕が明瞭に認められる。C地区、環濠、2層内より出土。使用樹種はヤマグワ。

24は、容器の一部分である。残存状況が悪く、平面形は不明。C地区、環濠、2層内出土。樹種はイヌガヤ。

25は、四脚付円形容器である。平面形は楕円形を呈し、底部に4個の突起部を削り出して体



第51図 環濠出土木製品（櫛・高杯・梯子・板状木製品）実測図



第52図 環濠出土木製品（高杯・容器・臼）実測図

部を支える。底部で屈曲後、体部はほぼ垂直に立ち上がる。全面丁寧な削りが施されている。
C地区、環濠内出土。樹種は広葉樹。

26は、二脚付方形容器である。底部に横長の長方形を呈する脚を2本平行に削り出したものとみられる。脚部には台形を呈する透し孔が4ヶ所穿たれている。口径28.3cm、器高14.4cmを

測る。E地区、環濠、2層内出土。使用樹種はケヤキである。

27、28は円形容器である。ともに小型臼に形狀が類似しているが、底部の器壁が薄いことから容器とした。27は口径19.4cm、器高9.7cmを測り、E地区、環濠、2層内より出土。樹種はケヤキ。28はE地区、環濠、2層内出土。樹種はカシ。

29、30は小型臼である。29は口径20.0cm、器高8.9cm、底部厚5.9cmを測る。E地区、環濠、1層内出土。樹種はクスノキ。30は口径14.9cm、器高7.9cm、底部厚5.9cmを測る。B地区、環濠、2層内より出土。樹種はクスノキ。

31は大型臼の一部である。一木から削り込んで作られたものである。現存高は29.8cm。E地区、環濠、2層内より出土。樹種はエノキ。

刺突具 32から42の11点が出土した。ただし、41と42は骨製品であるが、便宜的にこの項で取り扱う。32から40の木製刺突具のうち、全長が遺存しているのは32、34～37である。それらは概14～16cmを測り、厚みは0.5cm前後である。32は上端部に削り出しによる凸部がみられる。出土地点は37（B地区、第13層）を除き環濠内である。41、42は骨製刺突具である。42は表面に使用による擦痕が認められる。

土木・建築部材 各ピットに遺存していた柱材と住居、倉庫他に使用された梯子、および土木関係の杭材を土木建築部材とした。

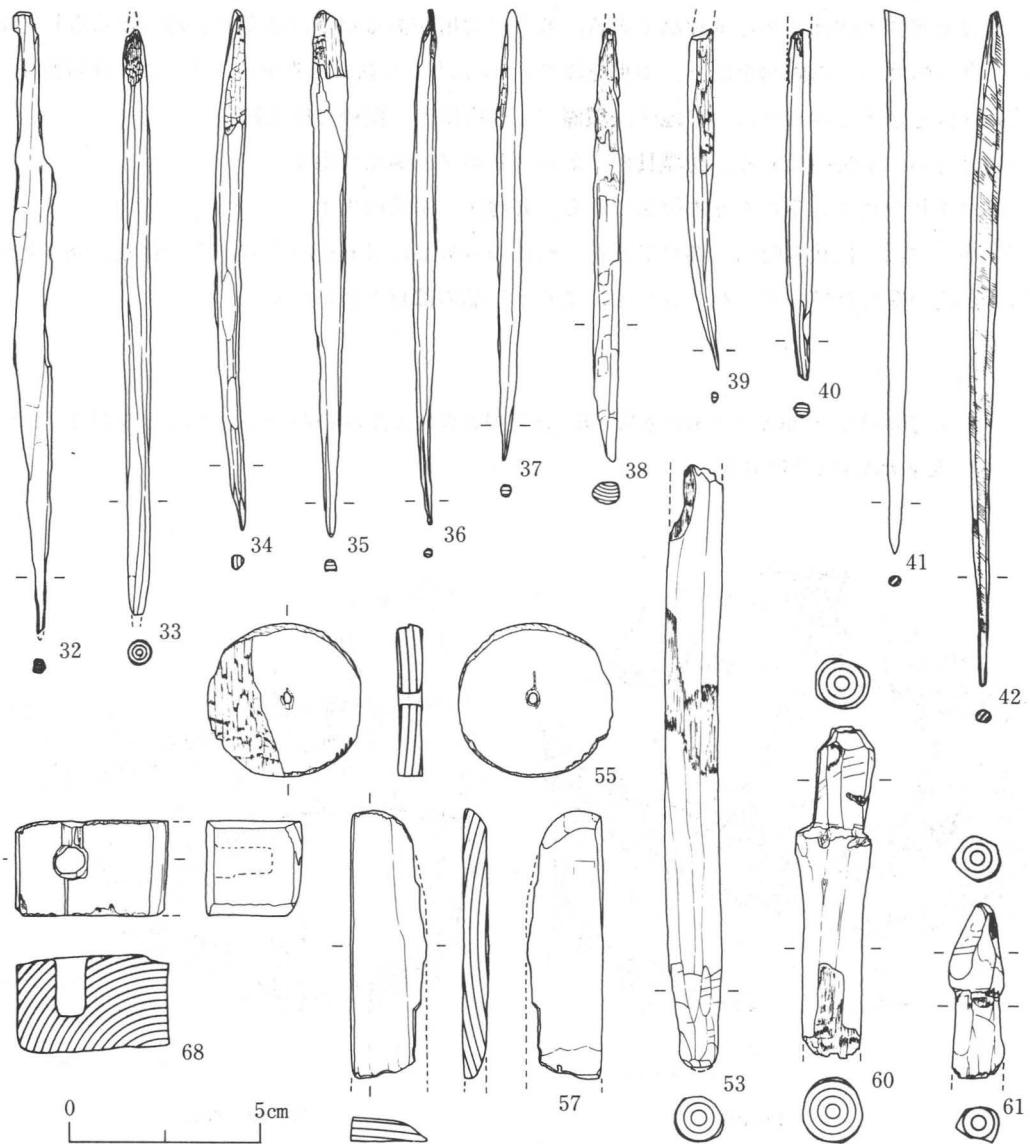
43から49は、柱材である。環濠の、内区に設けられた、防禦用の柵列の柱穴には、柱材が遺存するものが、みられた。43から47は、現存径で7～9cmを測る小型のものであるが、48、49は、径12cmに及ぶものである。48は原体刃幅1.5cmの削り痕が認められた。出土地点を以下列記しておく。43はS P 96、44はS P 102、45はS P 123、46はS P 128、47はS P 127、48はS P 179、49は環濠内。

50から53は、一端を削り出した杭である。径の大小に差はあるが、いずれも自然木の一部に削りを行う程度である。50は樹木の股状部分を利用したものであり、特殊な用途を想起せしめる。53は、径1.5cmを測る小型のもの。現状では杭状木製品とすべきかもしれない。出土地点は全て環濠内。

54は梯子である。丸太材を半截したのち、踏み台部を現存で2段分削り出している。全長は87.9cm、幅13.3cmで、板状部の最大厚1.9cm、踏み台部の最大厚7.3cmを測る。上からみて1段目の踏み台部と比べ、2段目の足掛けが摩耗し、丸くなつておらず、長期の使用ののち、溝に投棄されたものであろう。C地区、環濠、1層内出土遺物。樹種はユズリハ。

紡織具 55は紡錘車である。径4cmの円盤中央に3.5mmの小孔が穿たれている。F地区、第4層内出土。

56は機織りの腰当具である。弓なりに弧状をなす腰当部の両端は断面三日月状に削り出されている。両端には幅2.2cmの溝状の凹部がある。これは原始機本体と紐縄の緊縛により結合する部分である。全面に無数のノミ痕が認められる。C地区、環濠、1層内からの出土。樹種はヒノキ。



第53図 環濠・包含層出土木製品（刺突具・弭・鳥形木製品等）骨製品（刺突具）実測図

工具 刀子状の木製品（57）と石斧の柄（58）がある。いずれもC地区、環濠内より出土。

狩猟具 弓本体（59）と弭（60）がある。59は樹木の枝部の先端に加工を施したもの。現存長65cmを測り、握部径2.4cm。樹種はカヤ。

その他の木製品 61は鳥形木製品である。頭部を男根状に削り出す。B地区、環濠内より出土。62は木錘。丸木を断裁し、粗く削られた体部の中央に径2cmの円孔が穿たれている。C地区、環濠内より出土。樹種はナラ類。

63から74までは用途不明の木製品である。以下、用途・機能に関する説明はあくまで形態からみた類推であることとことわっておきたい。

63は薬研状の凹部のある木製品である。若干の欠損があるが、ほぼ全形を窺い得る資料である。丸木断載のうち両端を削り、中央を深さ1.6cmにわたり抉りこみを入れる。これは石器類の装着部位を示すとみられる。C地区、環濠、1層内出土。樹種は広葉樹。

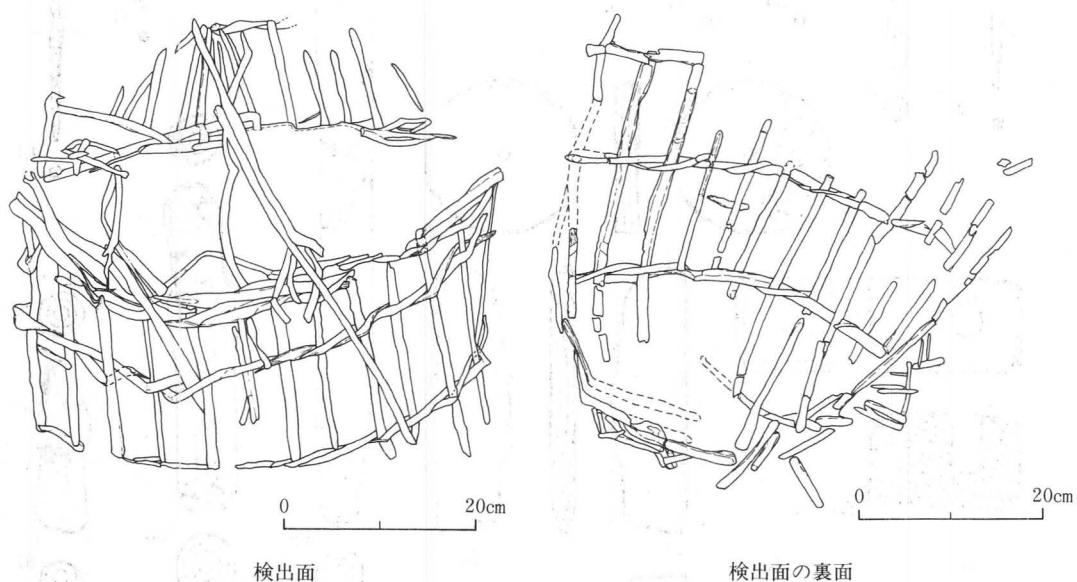
64は有頭の木製品である。紡織具の一部か。E地区、環濠内出土。

65は溝状の抉りこみのある木製品である。E地区、環濠内出土。

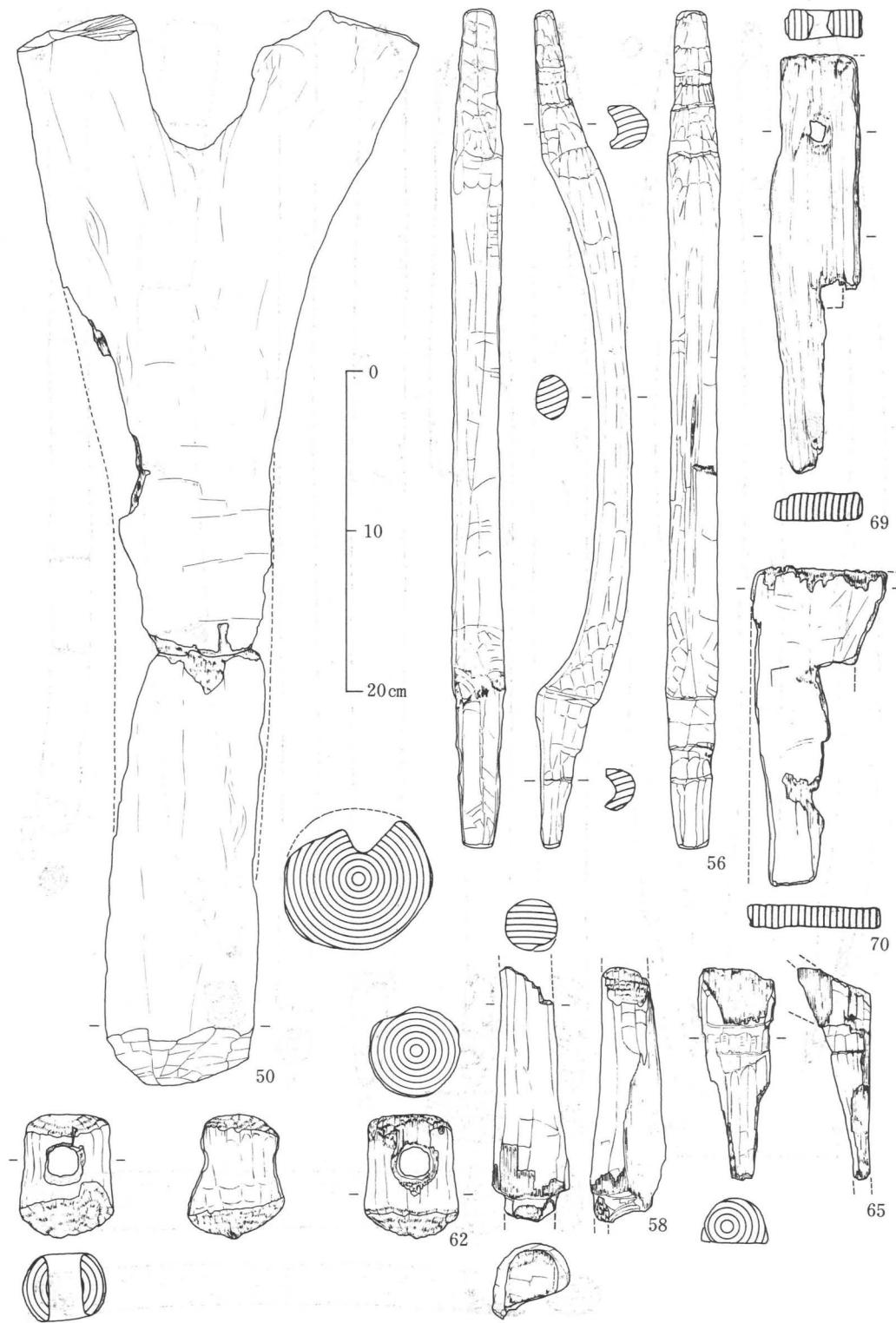
66から74は、板状木製品・部材である。板状の木製品には有孔のものがみられる。68の角材には小孔が穿たれており、組み合わせによる木製品の部材と思われる。

注

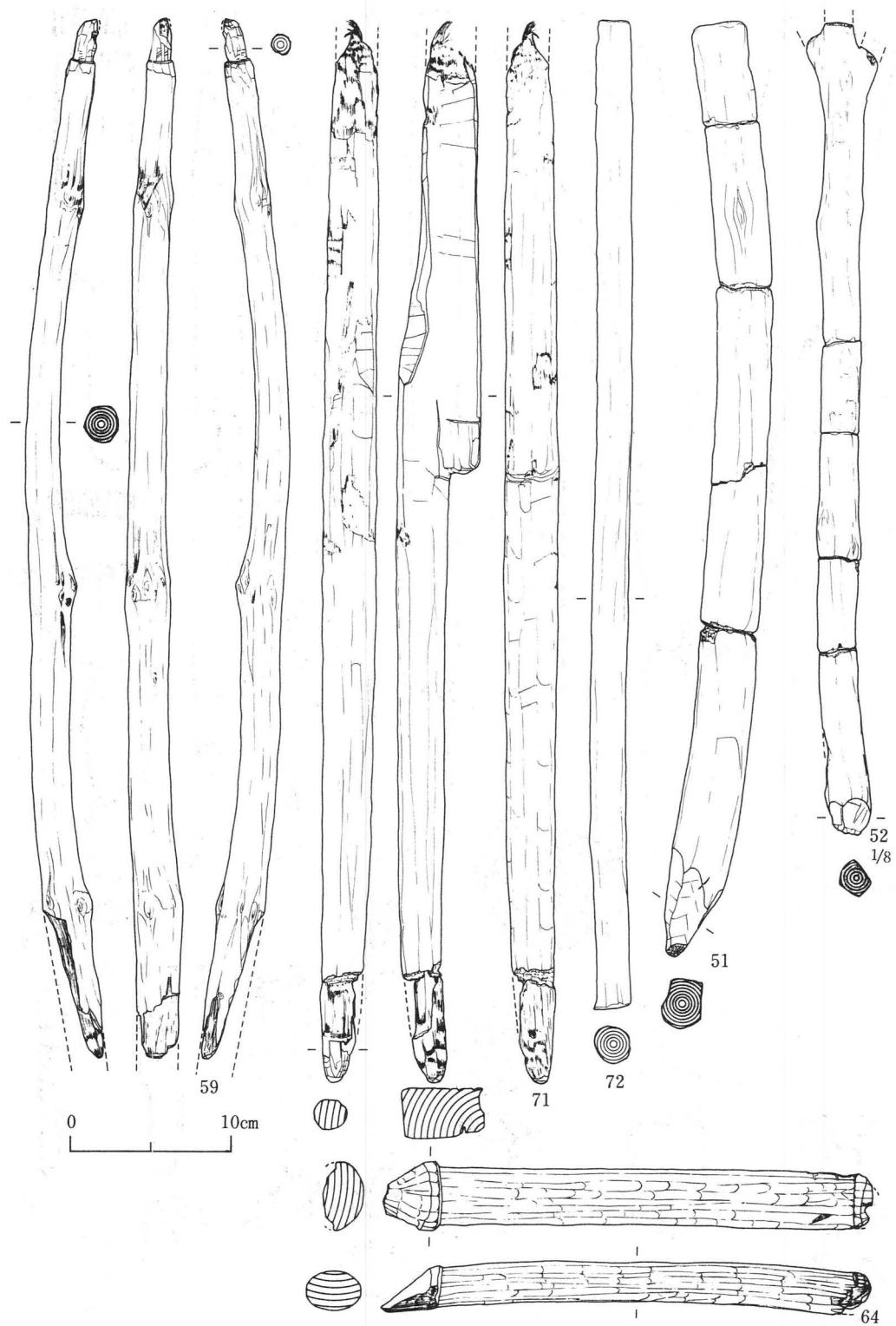
- 1) 芦本隆裕(『鬼虎川の木質遺物 第7次発掘調査報告書第4冊』P5~P32 1987年) 財団法人東大阪市文化財協会



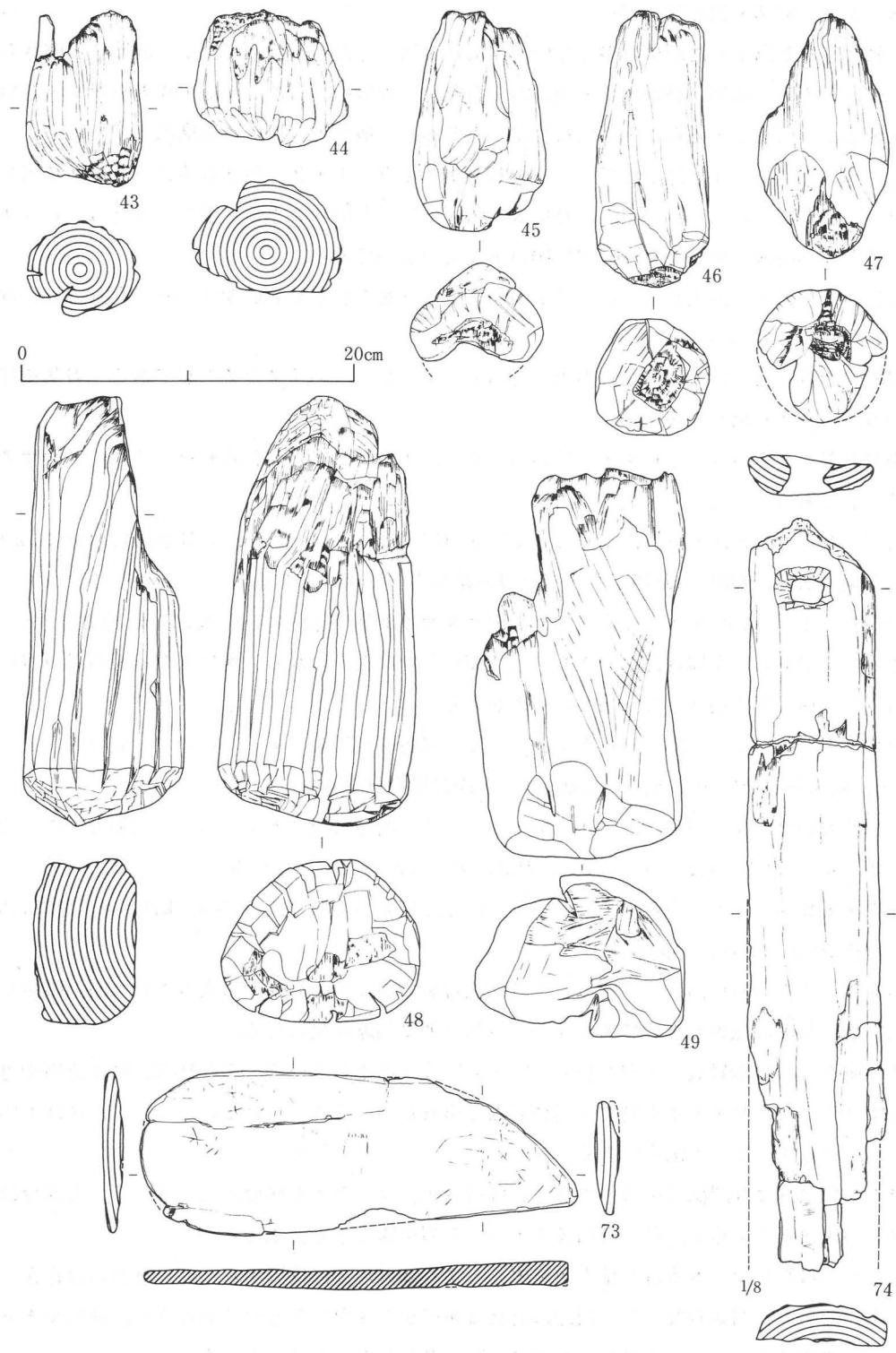
第54図 環濠出土木製品(カゴ状纖維製品)実測図



第55図 環濠出土木製品（杭・腰当具・石斧の柄・木錘・板状木製品等）実測図



第56図 環濠出土木製品（杭・弓・板状木製品・不明木製品）実測図



第57図 環濠・包含層出土木製品（柱材・板状木製品）実測図

石器（第58～62図・図版50～53）

各種の石器が出土したが量は多くない。環濠から出土した石器は、石錐1・削器8・叩き石1・楔形石器1・細部調整剝片4・剝片23・石核1・太形蛤刃石斧2・扁平片刃石斧1・石庖丁未製品1・磨石2・砥石1・不明石製品1点である。他は包含層、各遺構出土である。

石鏃 5点（1～4）出土している。平基無茎式2点（1・2）凸基有茎式（3）凸基無茎式（4）である。残り1点は破片の為型式不明。全て二上山サヌカイト製で、重さは1.4～2.6g、長さ3cm前後、幅1.6cm前後、厚さ0.4cm前後のものである。

石錐 1点（5）出土している。二上山サヌカイト製で長さ3.5cm、幅1.5cm、厚さ0.8cm、重さ4.4gの完形品である。

削器 12点（11～17・19～22）出土している。すべて二上山サヌカイト製である。刃部を押圧剥離により作り出している。

楔形石器 2点（6・7）出土している。6は、チャートと思われる石材で7は二上山サヌカイト製である。

磨石 3点（8・18・36）出土している。8（57.3g）36（983.1g）は閃緑岩、18（131g）は石英製である。（36）は破損した大型蛤刃石斧からの転用品である。

叩き石 1点（10）出土している。二上山サヌカイト製で長さ4.1cm、幅5.7cm、厚さ2.5cm、重さ96.7gである。全周縁部に叩き石として使用した痕がみられる。他に大型蛤刃石斧（27）が破損した後に叩き石として転用したものがある。

扁平片刃石斧 2点（23・24）出土している。黒色粘板岩製である。（23）は、完形で長さ8.5cm、幅3.6cm、厚さ0.8cm、重さ39.4g、全面に研磨痕が残る。

大型蛤刃石斧 4点（25～27・30）出土している。閃緑岩製である。（30）は完形で長さ11.2cm、幅4.4cm、厚さ4.4cm、重さ704gで刃部に刃こぼれの痕が見られる。

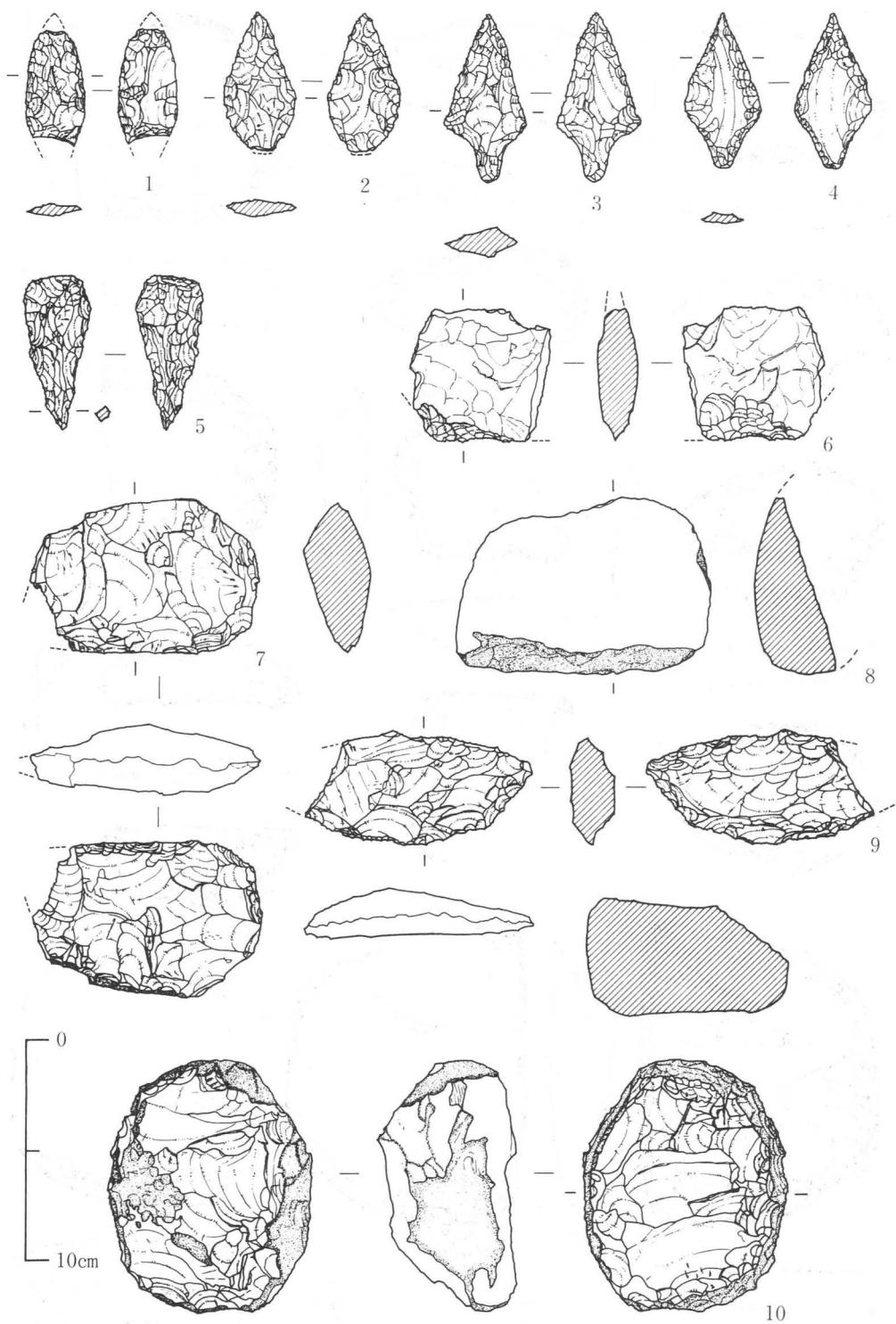
石庖丁未製品 1点（32）出土している。緑泥片岩製の完形で長さ17cm、幅7.8cm、厚さ1.9cm、重さ276gである。

石庖丁 1点（31）出土している。黒色粘板岩製で破片のため本来の大きさは不明。破損した後に他の製品に転用したのであろうか、刃部に押厚剥離が見られる。

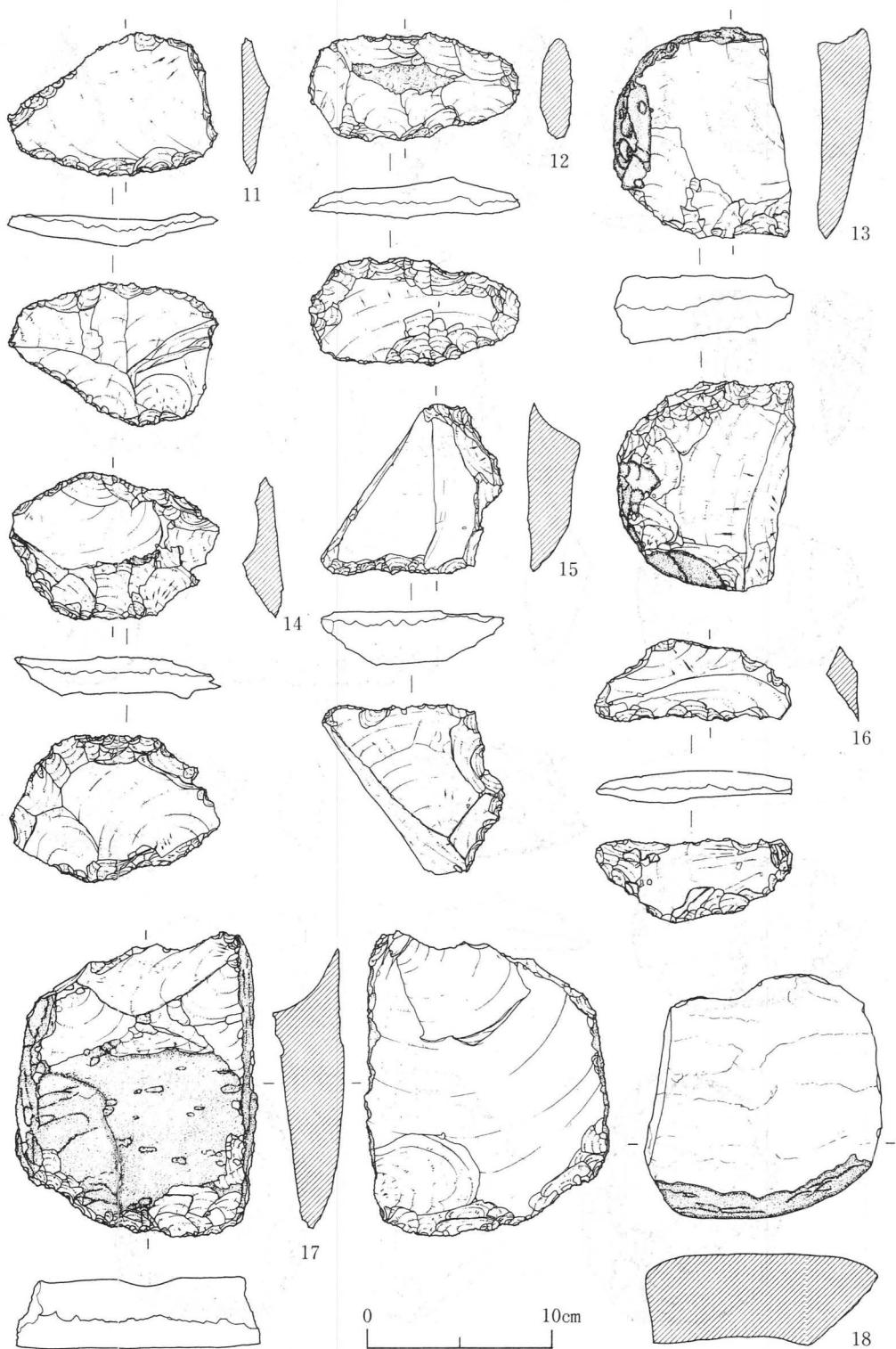
他に砥石（35）砂岩製の不明石製品（33・34）等が出土している。第II様式に属す遺構や包含層より出土したサヌカイト剝片・石核35点は第VI章-3で述べられているように、産地不明の1点を除きすべて二上山産である。

また、環濠内より閃緑岩をはじめとする自然石が、コンテナ6杯分出土している。大部分は閃緑岩の亜角礫であるが、砂岩の円礫やチャートの小礫なども含まれる。

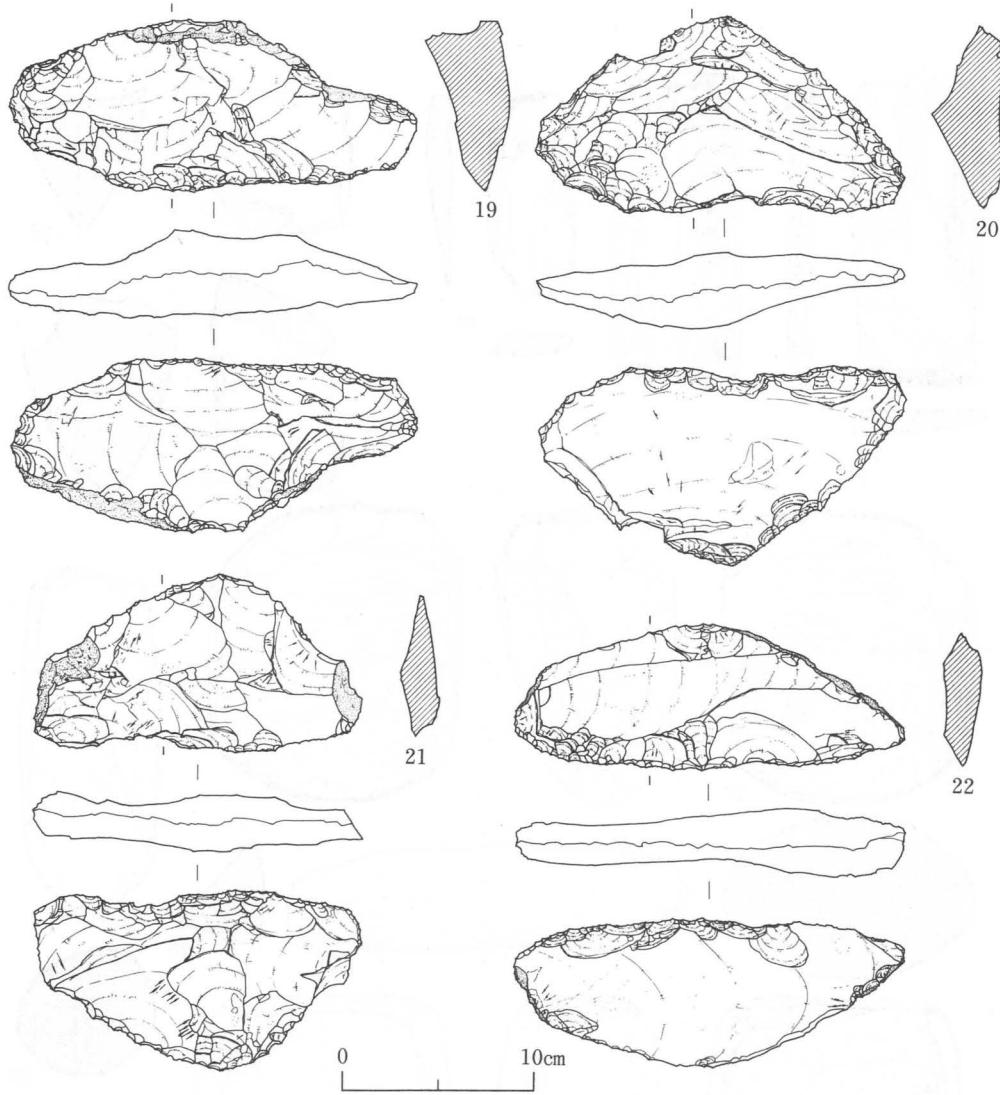
これらの自然石は、本遺跡が粘土層を中心とする低湿地に位置するため、自然には存在しないものである。閃緑岩などは、周辺に流れる河川から採取したものであろうが、砂岩やチャートは、他地域から何らかの目的のために、搬入されたものと考えられる。



第58図 石器（石鏃・石錐・楔形石器・叩き石・磨石）実測図



第59図 石器（削器・磨石）実測図



第60図 石器（削器）実測図

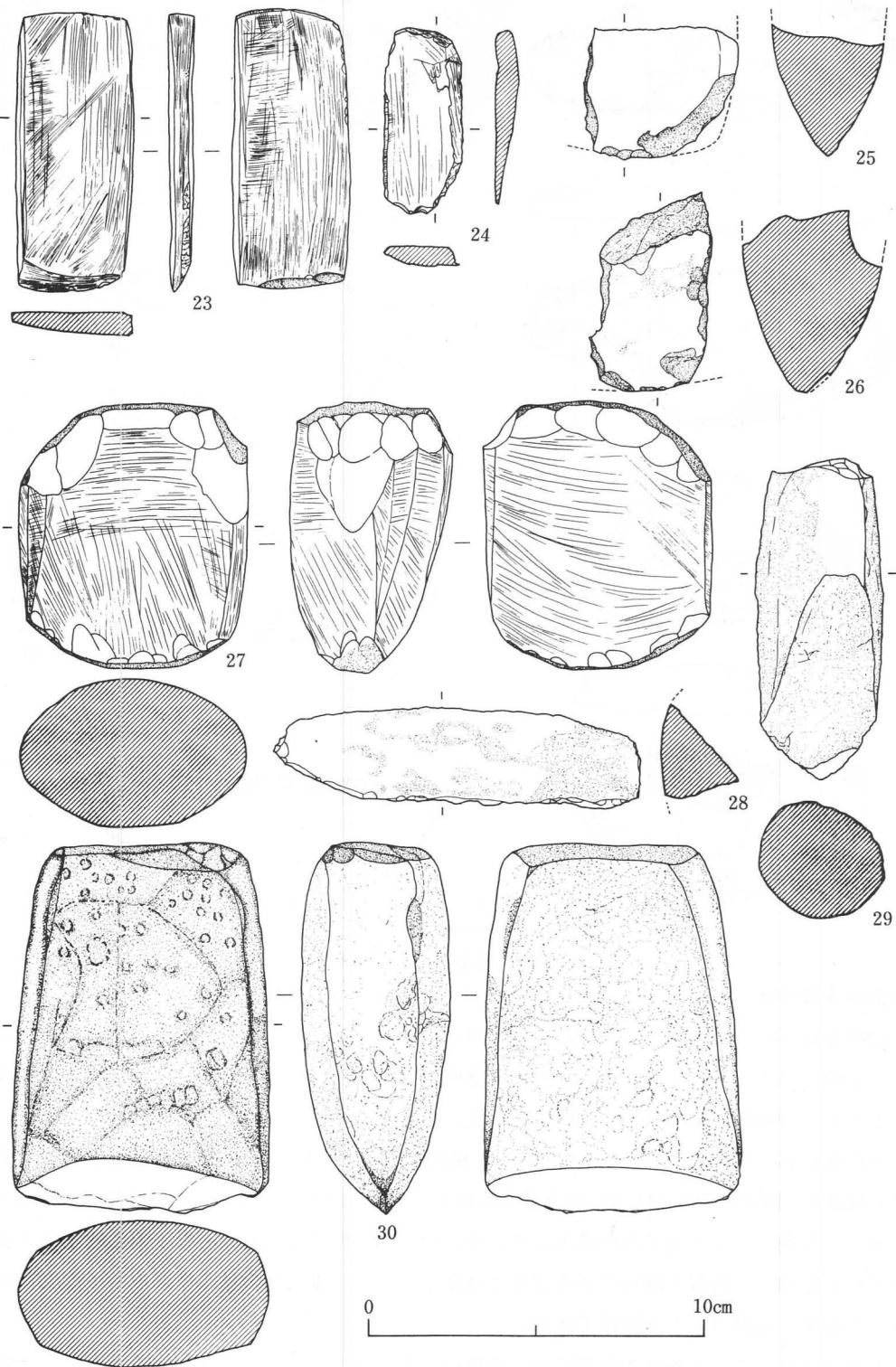
動植物遺存体他（図版71）

動物遺存体は、環濠より出土したものが多い。イノシシ（4～10）とシカ（3）を中心である。量的にはイノシシが多い。シカの角は落角ではない。また枝角の部分が人為的に切り取られている。骨角器の製作をするためであろう。

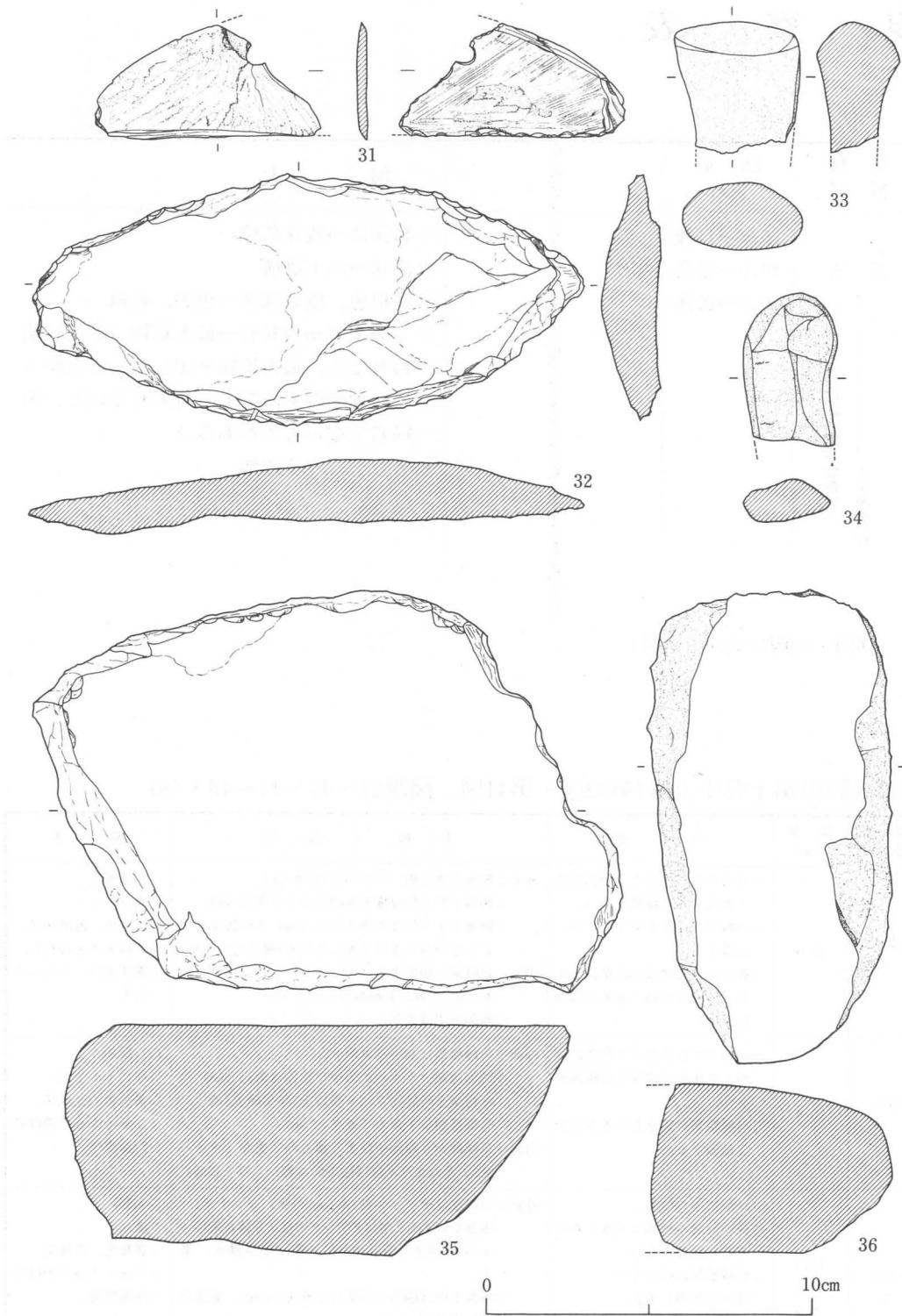
植物遺存体 環濠内より自然木や炭化した稲束（1）、ウリ類の種子（2）等が出土した。また出土状況から環濠内に生息していたと考えられるシジミと思われる貝（貝殻の痕跡）も検出した。

他に、土壌などより焼土塊が出土している。焼土塊の中には、角閃石などの在地産の土器に含まれる鉱物は、肉眼で識別できるほどには存在しない。第15層の粘土を採取して焼成実験を行った結果、同様のものが製作できた。

本遺跡で出土する在地産の土器には、同様の胎土を持つものが存在しないことから、土器製作の粘土は、本遺跡の周辺、おそらくは、段丘の粘土を使用したのではないかと考えられる。



第61図 石器（扁平片刃石斧・大型蛤刃石斧）実測図



第62図 石器（石庖丁・石庖丁未製品・砥石・不明石製品）実測図

観察表

凡例

器種番号	法量(cm)		備考
壺A 1 ↓ 型式番号 土器番号	16.6→口径 30.0→器高 6.5→底径		<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部→残存部位 ○溝16→出土遺構 ○淡橙色、他地域産→色調、产地 ○3 mm × 4 mmの長石→最大鉱物（产地に関わりなく、最大鉱物を記した。したがって在地産のものでも、角閃石ないし、閃緑岩でないものがある。） ○-----→その他

(挿図・図版は共通の番号)

環濠(溝16)出土弥生土器(第32図～第41図、図版27～41・44～46・48)

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
壺A 1	22.6	<ul style="list-style-type: none"> ○ゆるやかに外反する頸部に強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁部は面をもち下方に少し拡張する。 ○頸部中位に焼成前の穿孔1個有り(破片の為、本来の個数は不明) 	<p>外面</p> <ul style="list-style-type: none"> ○頸部上半は細いタテハケ(11本/cm)。 ○頸部下半位は横方向の密なミガキ(3 mm)。 ○頸部下半位は原体8条(1.7cm)の直線文を休止しながら1帯以上施している(簾状文の祖形)。 <p>内面</p> <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部、頸部上半は細いヨコハケ(右→左、11本/cm)の後に口縁部はヨコナデ。 ○頸部下半はナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○溝16-1。 ○淡橙色、他地域産。 ○3 mm × 4 mmの長石。 ○簾状文は、1点のみ出土。
壺A 2	25.4	<ul style="list-style-type: none"> ○ゆるやかに外反する頸部に外折して水平に伸びる口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち下方に少し拡張する。 	<p>外面</p> <ul style="list-style-type: none"> ○口縁端部は強いヨコナデ。 ○頸部は細いタテハケの後に原体8条(1.5cm)の直線文を時計回りに5帯以上(単帯構成)施す。 文様帶間に1条のミガキ(2 mm)。 <p>内面</p> <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部から頸部中位まで横方向に密なミガキ(2 mm)。それより下位は縦方向に粗いミガキ(2 mm)。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○溝16-1下部。 ○濁褐色、在地産。 ○3 mm × 5 mmの閃緑岩 ○内面黒斑。
壺A 3	16.6 30.0 6.5	<ul style="list-style-type: none"> ○球形に近い体部。 ○長い筒状の頸部に大きく外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。 ○底部は突出し平底。 	<p>外面</p> <ul style="list-style-type: none"> ○口縁部はタテハケ(11本/cm)の後にヨコナデ。 ○頸部から体部上半はタテハケの後に原体6条(0.9 cm)の直線文を時計回りに8帯(単帯構成)施す。 ○体部下位は縦方向の密なミガキ(4 mm)。底部附近に指頭圧痕残る ○底面はナデ。 <p>内面</p> <ul style="list-style-type: none"> ○頸部は細いヨコハケ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○完形。 ○溝16。 ○黄褐色、在地産。 ○3 mm × 4 mmの閃緑岩 ○外側黒斑。

器種号	法量 (cm)	形態	文様・技法	備考
壺A 4	14.5	○直立気味の頸部に大きく外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	内外面○ヨコナデ。	○口頸部。 ○溝16-2。 ○黄褐色、在地産。 ○3 mm × 6 mmの閃緑岩
壺A 5	34.0	○外反する口頸部。 ○口縁端部は面をもち下方へ拡張する。 ○器壁が厚い。	外面○幅広い口縁端部の上端、下端にヘラによるV字状の刻み目。 ○頸部は原体8条(1.7cm)の直線文を1帯以上(単帯構成)時計回りに施す。調整は風化の為不明。 内面○頸部は横方向の粗いミガキ。	○口頸部。 ○溝16-1上部。 ○にぶい黄橙色、他地域産。 ○5 mm × 6 mmの長石。 ○内外面一部煤ける。
壺A 6	26.6	○なだらかな体部に長い頸部をもつ。頸部は漏斗状に開き口縁部で強く外反する。 ○口縁端部は面を持ち下方にわずかに拡張する。	外面○口縁端部は強いヨコナデ。 ○口縁部はタテハケ(12本/cm)の後に横方向に密なミガキ(2 mm) ○頸部上半はタテハケの後に横方向に粗いミガキ。 ○頸部中位から体部上半にかけてタテハケの後に原体8条(1.1cm)の直線文を13帯(単帯構成)時計回りに施す。文様帶間は横方向のミガキ。 内面○口縁部はヨコハケ(12本/cm)の後に横方向に密なミガキ。 ○頸部は縦方向に粗いミガキ(2 mm)。 ○体部は細いタテ・ヨコ・ナナメハケ。 ○粘土紐の継目(内傾)が5ヶ所残る(幅2.5cm前後)。	○口頸部、体部。 ○溝16-2。 ○赤橙色、他地域産。 ○4 mm × 5 mmの長石。 ○体部外面に小黒斑。
壺A 7	20.3	○ゆるやかに外反する頸部に外折して水平に伸びる口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わり下方に少しふくらみをもつ。	外面○口縁端部下端にヘラによるV字状の刻み目。 ○頸部は原体8条(1 cm)の直線文を7帯(単帯構成)時計回りに施す。 内面○口縁部から頸部上位にかけて細いヨコハケ、(右→左)の後に横方向に密なミガキ(2 mm)。 ○粘土紐の継目(外傾)が4ヶ所残る(幅3.4×4.6cm)。	○口頸部。 ○溝16-1下部。 ○赤橙色、在地産。 ○4 mm × 6 mmの長石。 ○口縁部内面煤ける。
壺A 8	19.4	○大きく外反する頸部に水平近く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち角ばって終わる。	外面○口縁端部に原体5条の波状文を施す。 ○口縁部は横方向の密なミガキ(1.8mm)。 ○頸部はタテハケの後に原体9条(1.2cm)の直線文を施す。 内面○全面、横方向の密なミガキ(1.8mm)。	○口頸部。 ○溝16-1下部。 ○暗褐色、在地産。 ○2 mm × 2 mmの角閃石 ○黒色物質塗布。
壺A 9	18.4	○筒状の頸部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○口縁部は横方向の密なミガキ(1.5mm)。 ○口頸部はタテハケ(6本/cm)の後に横方向に粗いミガキ。 ○頸部はタテハケ(6本/cm)の後に原体5条(1 cm)の直線文を2帯以上(単帯構成)ほどこす。 内面○全面、不定方向の粗いミガキ(2.5mm)。	○口頸部。 ○溝16-2。 ○濁褐色、在地産。 ○2 mm × 2 mmの閃緑岩
壺A 10	21.6	○筒状の頸部と大きく外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもちごくわずか下方へ拡張する。	外面○頸部はタテハケ(8本/cm)の後に原体7条(1.4cm)の直線文を時計回りに4帯以上(単帯構成)施す。 内面○全面、ヨコナデ。	○口頸部。 ○溝16-2。 ○黄褐色、在地産。 ○2 mm × 2 mmの閃緑岩
壺B 11	19.2	○頸部は太く短く直し口縁部で短く外反する。 ○口縁端部は面をもち厚い。	外面○口縁端部は原体9条(1.1cm)の波状文を時計回りに1帯施す。 ○頸部は複帯構成の直線文を施した後x字状の扇形文を配した擬流水文。直線文は時計回りに扇形文は逆時計回りに施している。 内面○全面、風化の為不明。	○口頸部。 ○溝16-1上部。 ○濁橙色、在地産。 ○2 mm × 3 mmの閃緑岩 ○内外面所々煤ける。
壺B 12	21.1	○体部から短い頸部へとなめらかに移行し口縁部で小さく外反する。 ○口縁端部は面をもち、ごくわずか下方へ拡張する。	外面○口頸部はヨコナデの後横方向に粗いミガキ(2mm)。 ○頸、体部は原体8条(1.1cm)の直線文を8帯以上(単帯構成)時計回りに施す。 内面○頸、体部は風化及び剥離の為明確でないが横・斜方向のミガキ(2 mm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○橙色、在地産。 ○4 mm × 5 mmの長石。

器種 番号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
壺B 13	18.4	<ul style="list-style-type: none"> ○体部から太く短く直立する頸部へとつづき口縁部で短く外反する。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。 	<p>外面○頸、体部は細いタテハケの後、頸部に原体8条(1.2cm)の直線文を時計回りに3帯(単帶構成)施す。体部は細いヨコハケ(9本/cm)をさらに施しその後横方向に粗いミガキ(3mm)。</p> <p>内面○全面、細いヨコハケ(右→左、9本/cm)のあと口縁部はヨコナデ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○溝16-2。 ○褐色、在地産。 ○5mm×7mmの閃緑岩。 ○内面一部煤ける。
壺B 14	18.1	<ul style="list-style-type: none"> ○体部から頸部へとなめらかに移行し口縁部で短く外反する。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。 	<p>外面○口縁端部は強いヨコナデ。</p> <p>○口縁部は横方向に密なミガキ(2mm)。</p> <p>○頸部は細いナナメ・ヨコハケ(11本/cm)の後、原体8条(1.4cm)の直線文を逆時計回りに6帯以上施す。(単帶構成)</p> <p>内面○全面、横方向の密なミガキ(2mm)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○暗褐色。在地産。 ○3mm×5mmの長石。 ○内外面一部煤ける。
壺B 15	19.4	<ul style="list-style-type: none"> ○太く短く直立する頸部に外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。 	<p>外面○頸部は原体10条(1.1cm)の直線文を5帯以上施した後、同原体でx字状に扇形文を配した擬流水文。</p> <p>内面○頸部は細いヨコハケ(12本/cm)の後、横方向に粗いミガキ(2mm)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○溝16。 ○淡黄橙色、在地産。 ○2mm×2mmの閃緑岩。 ○内面黒斑。
壺B 16	22.0	<ul style="list-style-type: none"> ○体部と「く」の字形に短く外反する口頸部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもち下方に丸く拡張する。 	<p>外面○口縁端部付近を強くヨコナデすることによって厚みをもたせている。</p> <p>○頸、体部はタテハケの後ナデ。</p> <p>内面○頸、体部は横方向の粗いミガキ(2.5mm)。</p> <p>○粘土紐の継ぎ目(外傾)が2ヶ所残る。(幅4.9cm)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○灰白色、他地域産。 ○4mm×5mmの長石。
壺B 17	19.3	<ul style="list-style-type: none"> ○球形に近い体部から短く直立気味に立ち上がる頸部に続き口縁部で小さく外反する。 ○口縁端部は面をもち下方に拡張する。 	<p>外面○頸部から体部はタテハケ(下→上、6本/cm)の後に原体8条(1.1cm)の直線文を時計回りに11帯以上(単帶構成)施す。文様帶間に1条の横方向のミガキ(2mm)。</p> <p>内面○口縁部は横方向の密なミガキ(2mm)の後にヨコナデ。</p> <p>○頸部は密な横方向のミガキの後に縦方向に粗いミガキ。</p> <p>○体部は細いヨコハケの後に縦方向の粗いミガキ。</p> <p>○粘土紐の継ぎ目(内傾)が3ヶ所(幅4.3・7.2cm)残る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○浅黄橙色、他地域産。 ○4mm×5mmの長石。 ○内外面一部煤付着。
壺B 18	24.6	<ul style="list-style-type: none"> ○外反する口縁部。 ○口縁端部は面をもち下方に拡張する。 	<p>外面○口縁端部は原体2条(0.5cm)の波状文を2帯施す。</p> <p>○口縁端部と口縁部にヨコナデを施しているが粘土紐の継ぎ目が残る雑な調整。</p> <p>○頸部は原体7条(1cm)の直線文を3帯以上(単帶構成)施す。</p> <p>内面○全面、ヨコハケ(6本/cm)の後にナデ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○溝16-2。 ○橙色、在地産。 ○4mm×5mmの閃緑岩。 ○口縁端部外面黒斑。
壺B 19	29.3	<ul style="list-style-type: none"> ○短く外反する口縁部。 ○口縁端部は面をもち下方にわずか拡張する。 	<p>外面○口縁端部は原体6条(1cm)の直線文を1帯施した後下端にヘラによるV字状の刻み目を施す。</p> <p>○口縁部は細いヨコハケ(10本/cm)。</p> <p>○頸部は原体9条(1.7cm)の直線文を3帯以上(単帶構成)施した後x字状に扇形文を配す擬流水文。</p> <p>内面○口縁部は細いヨコハケ(右→左、10本/cm)。</p> <p>○頸部は横方向の密なミガキ(3mm)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○溝16。 ○褐色、在地産。 ○3mm×4mmの閃緑岩。 ○頸部内外面所々煤け
壺B 20	19.8	<ul style="list-style-type: none"> ○体部につづく頸部は太く短く直立し口縁部で短く外反する。 ○口縁端部は面を持ち上方に拡張する。 	<p>外面○口縁端部は原体8条(1.3cm)波状文を逆時計回りに1帯施す。</p> <p>○口縁部は細いヨコハケ(9本/cm)の後縦にナデを施している。</p> <p>○頸部上半は横方向の密なミガキ(2.5mm)、下半から体部は細いタテハケの後原体8条(1.3cm)の直線文を6帯以上(単帶構成)時計回りに施した後、同原体でx字状に扇形文を配す擬流水文。</p> <p>内面○口縁部の拡張した部分はヨコナデ、以外は頸部と同時の横方向の密なミガキ(3mm)。端部を拡張した際の粘土の継ぎ目が一部残る。</p> <p>○頸部上半は横方向の密なミガキ。下半から体部は縦方向の粗いミガキ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×3mmの閃緑岩 ○口頸部外面一部煤ける。

器種号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
壺B 21	30.2	○頸部と短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち厚い。	外面○口縁端部は原体8条(1cm)の直線文を1帯とその上にx字状に扇形文を配した擬流水文。 ○頸部は原体11条(1.6cm)の直線文を5帯以上(单帶構成)施した後x字状に扇形文を配した擬流水文。直線文は水平に施されていざ一部重複する。 内面○頸部は横方向の密なミガキ(2mm)。	○口頸部。 ○溝16-1下部。 ○暗褐色、在地産。 ○1mm×1.5mmの閃緑岩。 ○内面煤け、外面一部煤ける。
無頸壺B 22	12.9 16.4 7.4	○球形に近い体部に短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。 ○頸部の相対する位置に紐穴1孔を焼成前に外から内に穿っているが、1孔は貫通していない。 ○底部は突出し平底。	外面○体部は風化の為不明。 ○底面は未調整。 内面○体部はヨコハケの後にナデ、一部指頭圧痕残る。 ○粘土紐の縫目(外傾)4ヶ所残る(幅5.6×4.8×3.8cm)。	○完形。 ○溝16-1上部。 ○赤橙色、在地産。 ○2mm×4mmの閃緑岩。 ○内面煤け、底部外面一部煤ける。
無頸壺B 23	9.8	○体部と短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部は風化の為不明。 内面○全面にヨコナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×3mmの長石。
無頸壺A 24	6.7	○球形に近い体部と内傾する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○体部は原体7条(1cm)の直線文を4帯以上(单體構成)施す。調整は風化の為不明。 内面○全面風化の為不明。 ○粘土紐の縫目(内傾)1ヶ所残る。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○橙色、他地域産。 ○3.5mm×4mmの長石。
無頸壺B 25	8.6	○体部とほぼ直立気味に短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもち外側に肥厚する。	内外面○風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○灰黄色、他地域産。 ○1.5mm×3.5mmの長石。
鉢A 26	17.6 7.0 7.3	○平底の底部とそのまま斜外上方に立ち上る直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸味をもって終わる。	外面○口縁部に直線文ないしハケ(施文後にミガキを施している)。 ○口縁、体部は細かいタテハケの後縦方向に密なミガキ(2mm)。 ○底面はナデ。 内面○口縁、体部は横方向の密なミガキ(2mm)。	○完形。 ○溝16。 ○褐色、在地産。 ○2mm×3mmの角閃石。 ○底部外面黒斑。
鉢A 27	21.8	○外上方に伸びる体部に直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口縁、体部は原体8条(1.1cm)の直線文を3帯以上(单體構成)施した後、x字状に扇形文を配した擬流水文。風化の為調整不明。 内面○風化の為不明。	○口縁部、体部上半。 ○溝16。 ○暗褐色、在地産。 ○1mm×1.5mmの角閃石。 ○外面黒色物質。 ○内面煤ける。
鉢B 28	32.4	○斜外上方に伸びる体部に短く外反する口縁部をもつ。 ○体部上位に瘤状把手痕有り(破片の為1個のみ確認)。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部は細いタテハケ(上→下、1.2cm幅)。 内面○頸、体部は細かいヨコハケ(右→左、1.2cm幅)の後に横方向の粗いミガキ(2mm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○褐色、在地産。 ○2mm×2mmの角閃石。 ○外面黒色物質。
鉢B 29	40.9	○体部とゆるやかに短く外反する口縁部をもつ。 ○体部上位に小さい瘤状把手有り(破片の為1個のみ確認)。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○口縁端部付近に指頭圧痕残る。 ○体部はナナメハケ(14本/cm)。 内面○口縁端部付近に指頭圧痕残る。 ○体部はナナメハケ(5本/cm)の後に斜方向の粗いミガキ(2mm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16。 ○濁黄橙色、在地産。 ○4mm×4mmの長石。
鉢B 30	41.9	○体部とゆるやかに短く外反する口縁部をもつ。 ○体部上位に瘤状把手有り(破片の為1個のみ確認)。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口縁部はヨコハケの後ヨコナデ。 ○頸部はヨコハケの後(8本/cm)。 ○体部はタテハケ。 内面○頸体部は細かいヨコハケ(12本/cm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16。 ○濁黄橙色、在地産。 ○3mm×3mmの閃緑岩。 ○内外面黒斑。

器種 番号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
鉢 B 31	20.6 16.2 8.0	○半球形の体部に短く外反する口縁部をもつ。 ○底部は突出し平底。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○体部上半は原体5条(0.8cm)の直線文を5帯時計回りに施す。(原体の目は浅く粗雑、施文も稚に施している。)文様帶間に横方向に1条のミガキ(2.5mm)。 ○体部下半は縦方向に密なミガキ。 ○底面はナデ。 内面○体部は横方向の密なミガキ(2.5mm)。	○完形。 ○溝16-2。 ○淡橙色、他地域産。 ○3mm×4mmの長石。
鉢 B 32	17.7 10.0 7.6	○底部からそのまま斜外上方に立ち上がる体部へとつづき口縁部で短く外反する。 ○底部は平底。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○体部中位に直線文を1帯施す。 ○タテハケの後横方向の密なミガキ。 ○底面はナデ。 内面○体部は細かいヨコハケの後に横、斜方向のミガキ(2.5mm)。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○完形。 ○溝16-2。 ○濁褐色、在地産。 ○2mm×5mmの角閃石。 ○内面一部煤ける。外 面煤付着。
鉢 A 33	22.0	○内窵して立ち上る体部に直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口縁、体部は横方向の密なミガキ(2.5mm)。 内面○口縁、体部はヨコハケの後横、斜方向の密なミガキ(2.5mm)。	○口縁部、体部。 ○溝16-1。 ○濁褐色、在地産。 ○4mm×5mmの閃綠岩。 ○外面一部煤ける。
鉢 A 34	21.8	○内窵して立ち上る体部に直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口縁、体部は横方向の密なミガキ(2mm)。 内面○口縁、体部はヨコハケの後横方向に密なミガキ(2mm)。	○口縁部、体部。 ○溝16-1上部。 ○浅黄橙色、他地域産。 ○3mm×3.5mmの長石。 ○内面黒斑。
細頸壺 35	16.0	○筒状の頸部にやや斜外上方に伸びる口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸部は原体6条(1cm)の直線文を2帯以上施す。 内面○全面、ヨコナデ。	○口頸部。 ○溝16-1。 ○濁橙色、在地産。 ○5mm×5mmの長石。 ○内外面一部煤ける。
細頸壺 36	11.8	○筒状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。	内外面○風化の為不明。	○口頸部。 ○溝16-2。 ○濁黃褐色、在地産。 ○6mm×6mmの長石。
たこ壺 37	6.6	○筒状の頸部は内傾しながら口縁部へとつづく。 ○口縁端部は尖って終わる。	外面○風化の為はっきりしないがナデか？ 内面○ナデ。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○口頸部。 ○溝16-2。 ○橙色、他地域産。 ○4mm×4mmの長石。
高杯 B 38	22.0(推) 12.6 9.4	○外上方に伸びる浅い杯部から外折してやや下り気味に水平に伸びる口縁部をもつ。 ○口縁端部は欠失して不明。 ○直立する中実の脚柱部と斜めになだらかにひろがる脚裾部をもつ。 ○底面はくぼむ。 ○脚裾端部は厚く丸みをもって終わる。	外面○杯部は風化の為明確ではないがタテハケの後ナデ。 ○脚柱部はタテハケ(上→下、8本/cm)。 ○脚裾部はヨコナデ。 内面○杯部はナデの後不定方向の粗いミガキ。 ○脚裾部はケズリの後ナデ。	○口縁端部欠失。 ○溝16-1下部。 ○灰白色、他地域産。 ○3.5mm×5.5mmの長石。 ○杯部内面一部煤付着。
高杯 A 39	22.4	○ゆるやかに外上方に伸びる椀形の杯部、口縁部で少し内窵する。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○口縁端部はハケ原体によるV字状の刻み目。 ○杯部はナナメ・タテハケ(8本/cm)。 内面○細かいヨコハケ。	○杯部。 ○溝16-1下部。 ○淡橙色、他地域産。 ○2.5mm×3mmの長石。
高杯 40	14.2	○内窓しながら斜外上方に立ち上がる杯部。 ○口縁端部は厚みを持ち角ばつて終わる。	外面○杯部はナナメハケ(右下→左上 10本/cm)。 内面○全面、ヨコナデ。	○口縁部、体部。 ○溝16-1上部。 ○灰白色、他地域産。 ○2.5mm×3mmの長石。 ○外面煤ける。

器種 番号	法量 (cm)	形態	文様・技法	備考
高杯 41	9.0	○中実の脚柱部とそのままならかにひろがる脚裾部をもつ。 ○脚裾端部は丸みをもって終わる。 ○底面は強くくぼむ。	外面○脚柱部はタテハケの後に縦方向の密なミガキ(2.5mm)。 ○脚裾部はタテハケの後にナデ。 内面○脚裾部は不定方向の粗いミガキ。 ○粘土紐の継目残る。	○脚部。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×3mmの角閃石。
高杯 42	12.4	○中空の太い脚柱部(短いと思われる)となだらかに水平に開く脚裾部をもつ。 ○脚裾端部は面をもつ。	外面○全面風化の為不明。 内面○脚柱部は細かいタテハケ。 ○脚裾部はナデ。 ○粘土紐の継目残る。	○脚部。 ○溝16-1。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×3mmの角閃石。
高杯 43	12	○水平に開く脚裾部をもつ。 ○脚裾端部は面をもち上方へ少し立ち上がる。	外面○脚裾部はナデ。 ○脚裾端部付近はヨコナデ。 内面○脚柱部は横方向のケズリの後ナデ。 ○脚裾部は横方向のケズリ。	○脚部。 ○溝16。 ○濁黄褐色、他地域産。 ○3mm×3.5mmの長石、チャート。 ○外面一部煤ける。
高杯 44		○長い中実の脚柱部。	外面○脚柱部はタテハケの後縦方向の密なミガキ(2mm)。 内面○脚裾部は細いハケか? ○粘土紐の継目残る。	○脚部。 ○溝16。 ○濁黄褐色、在地産。 ○4mm×5mmの閃緑岩。 ○外面煤ける。
高杯 45	7.6	○細く直立する中空の脚柱部から外折して短く伸びる脚裾部をもつ。 ○棒に粘土を巻きつけて成形している。 ○脚裾端部は丸みをもって終わる。 ○底面はくぼむ。	外面○脚柱部は縦方向の密なミガキ(2.5mm)。 ○脚裾部はヨコナデの後一部横方向の粗いミガキ。 内面○脚裾部はナデ。	○脚部。 ○溝16。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×2.5mmの角閃石。
壺蓋B 46	9.5 3.0	○笠形で口縁端部は角ばって終わる。 ○上面より下面の径が小さい。 ○双頭のつまみをもつ。 ○相対して2個1対(残存は1対のみ)の紐孔を焼成前に上面から下面に穿つ。	外面○つまみ部はナデ。 ○ナデ。 内面○不定方向のミガキ(2.5mm)。	○完形(復)。 ○溝16-2。 ○濁黄橙色、在地産。 ○1mm×1mmの角閃石。 ○内面黒斑。
壺蓋A 47	11.4 1.5	○円盤状で口縁端部は角ばって終わる。 ○下面是くぼむ。 ○端部は面をもつ。 ○相対して2個1対の紐孔を焼成前に上面から下面に穿つ。	外面○約2/3剥離。 ○不定方向のミガキ。 内面○ナデ。	○完形。 ○溝16-2。 ○淡橙色、他地域産。 ○3mm×4mmの長石。 ○外面煤ける。
壺蓋B 48	9.0 2.5	○笠形で口縁端部は面をもつ。 ○上面中央部はふくらみ双頭のつまみをもつ。 ○下面是くぼむ。 ○相対して2個1対(残存は1対のみ)の紐孔を上面から下面に穿つ。	内外面○風化の為不明。	○完形。 ○溝16。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×2.5mmの角閃石。
甕蓋 49	6.8(推) 20.0(推)	○笠形。 ○つまみ部上面はくぼむ。	外面○つまみ部上面はケズリ。 ○体部は風化の為不明。 内面○細かいヨコハケ(12本/cm)。	○口縁部欠失。 ○溝16-2。 ○濁褐色、在地産。 ○4mm×5mmの閃緑岩。 ○つまみ部外面黒斑。 ○内面煤付着。

器種番号	法量(cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
甕蓋 50	15.8 9.6 4.0	○笠形で口縁部は水平に開く。 ○つまみ部上面は平面。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○つまみ部は木葉痕。 ○体部はタテハケ(上→下)の後縱方向(下→上)の密なミガキ(2.5mm)その後横方向の粗いミガキ。 内面○体部上半は横方向の密なミガキ(2.5mm)。 ○体部下半、口縁部はヨコハケ(12本/cm)の後、縱・横方向に粗いミガキ。	○完形。 ○溝16-2。 ○不明。 ○黄橙色、他地域産。 ○3mm×3mmの輝石。 ○内外面煤付着。
甕蓋 51	18.5	○笠形。 ○口縁端部は面を持ち上方に少し拡張する。	外面○口縁端部に原体5条(0.6cm)の波状文を1帯時計回りに施す。上端にヘラによるV字状の刻み目を施文の後に施す。 ○体部は部分的にタテハケ、全体にナデの後に縱・斜方向のミガキ(2mm)。 内面○口縁部は原体7条(0.8cm)の波状文を時計回りに施す。 ○体部は横方向の密なミガキ(2.5mm)。	○口縁部、体部。 ○溝16-1下部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×2mmの角閃石。 ○口縁部内外面煤付着他は煤ける。
甕蓋 52	5.1	○笠形。 ○つまみ部上面はややくぼむ。	外面○体部は細いタテ・ヨコハケの後一部横方向の粗いミガキ。 ○つまみ部上面はナデ。 内面○体部は細いヨコハケの後ナデ。	○体部つまみ部。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、他地域産。 ○2.5mm×1.5mmの長石。 ○内外面煤ける。
甕蓋 53	20.1	○笠形。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○不定方向の密なミガキ(3mm)。 内面○上半は細いヨコハケの後ナデ。 ○下半(口縁付近)は横方向の密なミガキ。 ○粘土紐の継目(内傾)1ヶ所残る。	○口縁部、体部。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○4mm×6mm閃綠岩。 ○内面一部黒斑。 ○外面一部煤ける。
甕蓋 54	23.2	○笠形。 ○口縁端部は厚みにばらつきがあるが面をもつ。	外面○縱方向(下→上)横方向(右→左)のケズリの後にタテ、ヨコハケ(7本/cm)、その後に横方向のミガキ。 内面○ヨコハケ(7本/cm)。	○口縁部、体部。 ○溝16-2。 ○褐色、在地産。 ○2mm×3mmの長石。 ○内面煤付着。
甕蓋 55	23.6	○笠形。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口縁端部は原体5条(0.7cm)の波状文を時計回りに施した後ヘラによるV字状の刻み目を施す。 ○体部はナナメハケ(5本/cm)の後不定方向のミガキ(2mm)。 内面○ヨコハケ(8本/cm)。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3.5mm×3.5mmの閃綠岩。
甕蓋 56	22.3	○笠形。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○全面細いヨコハケの後タテハケ(7本/cm)。 内面○細いヨコ・ナナメハケ(14本/cm)。 ○粘土紐の継目残る。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁黄橙色、在地産。 ○3mm×5mmの閃綠岩。 ○内面煤付着。外面煤ける。
甕蓋 57	25.6	○笠形。 ○口縁端部はわずかに外側にむいて、拡張気味に角ばって終わる。	外面○横方向の密なミガキ(2mm)。 内面○口縁部は原体7条(0.7cm)の波状文を時計回りに1帯施す。 ○全面横方向の密なミガキ(2mm)。	○口縁部、体部。 ○溝16-1下部。 ○濁赤褐色、在地産。 ○3mm×4mmの閃綠岩。 ○内外面煤ける。
甕蓋 58	5.4	○笠形。 ○つまみ部上面は平面。 ○器壁はうすい。	外面○ヨコハケの後ナデ。 ○つまみ部上面はナデか? 内面○細いヨコハケの後ヨコナデ。	○つまみ部。 ○溝16-1上部。 ○浅黄橙色、他地域産。 ○3mm×3.5mmの長石。 ○内面煤付着。外面煤ける。
甕蓋 59	6.6	○笠形。 ○つまみ部上面はくぼむ。	外面○風化の為不明。 ○つまみ部上面はナデ。	○つまみ部。 ○溝16。 ○褐色、在地産。 ○3mm×4mmの角閃石。

器種 番号	法量 (cm)	形態	文様・技法	備考
鉢 60	20.5 15.3 7.0	○なだらかに内弯する口縁部をもつ。 ○底部は突出して上げ底。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部上半はナデの後、上から原体4条(0.9cm)の直線文、波状文、直線文、弧状文を時計回りに施す。 ○体部文様以下は横方向の密なミガキ(2mm)。 ○底面はナデ。 内面○体、底部はナデ。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○完形。 ○溝16-1上部。 ○褐灰色、他地域産。 ○4mm×5mmの長石。 ○内外面黒色質。
鉢A 61	27.1 24.2 10.6	○内弯する口縁部をもつ。 ○底部は平底。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○器体全面にナナメ・タテハケの後に横方向の密なミガキ(3.5mm)。 ○底面はナデ。 内面○器体全面にヨコ・ナナメハケ(8本/cm)の後、縦方向の密なミガキ(3.5mm)。 ○底部は風化の為不明。 ○粘土紐の継目(外傾)2ヶ所残る(幅8.7cm)。	○完形。 ○溝16-1。 ○浅黄橙色、在地産。 ○4mm×6mmの長石。 ○内外面黒斑。
鉢A 62	28.0 16.6 9.0	○底部とゆるやかに斜外上方に伸びる直口の口縁部をもつ。 ○底部は平底。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○体部上半はハケ調整の後上から順に原体8条(1.9cm)の直線文を2帯(複帶構成)、原体4条(0.9cm)の波状文を1帯、原体8条(1.9cm)の直線文を1帯、原体3条(0.8cm)の波状文を1帯、逆時計回りに施す。 ○体部は文様以下横方向の密なミガキ(3mm)。 内面○体部はヨコハケの後横方向の粗いミガキ(2mm)。 ○底部はヨコハケの後横方向の密なミガキ。	○完形。 ○溝16-2。 ○橙色、他地域産。 ○2mm×3mmのチャート、長石。 ○外面黒斑。
鉢A 63	23.5 12.6 7.2	○底部とゆるやかに斜外上方に伸びる直口の口縁部をもつ。 ○底部は平底。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○体部はハケ調整の後、原体10条(1.2cm)の直線文を4帯(単帶構成)施した後、同原体でx字状の扇形文を配す流水文、文様以下はタテ・ナナメハケ(8本/cm)の後、横方向の密なミガキ(2mm)。 ○底面はミガキ。 内面○体、底部は細かいヨコハケ(右→左、10本/cm)。	○完形(復)。 ○溝16-2。 ○黄褐色、在地産。 ○2mm×2mmの角閃石。
鉢A 64	19.5	○斜外上方に伸びる直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。	外面○体部は風化の為明確ではないが原体7条(1cm)の直線文を3帯以上(単帶構成)時計回りに施した後同原体で直線上から文様帯間にかけてx字状に扇形文を配す擬流水文。 内面○風化の為不明。	○口縁部、体部上半。 ○溝16。 ○黄褐色、在地産。 ○3mm×3.5mmの閃緑岩。 ○外面黒色質。
鉢A 65	18.5 13.6 7.4	○楕形の体部にはほぼ直立気味に伸びる直口の口縁部をもつ。 ○底部は突出しやや上げ底。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○体部上半は不揃いの波状文を2帯施す(風化の為原体が5条[0.9cm]なのか、5条と3条なのか不明)。 ○体部は文様以下細いヨコハケ。 ○底面は未調整、底部と体部の粘土紐継目残る。 内面○体、底部細かいヨコハケ(10本/cm)。	○完形。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×5mmの閃緑岩。 ○外面2ヶ所黒斑。 ○内外面煤ける。
鉢A 66	19.9	○ほぼ直立気味の直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部は原体8条の直線文(1.2cm)を5帯(単帶構成)施した後同原体でx字状の扇形文を配した流水文。 ○体部は文様以下斜方向のミガキ(風化の為幅不明)。 内面○風化の為不明。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-1。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×5mmの閃緑岩。
鉢A 67	23.6	○ほぼ直立気味に斜外上方に伸びる体部から続く口縁部でわずかに内弯する。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部は原体8条の波状文(0.9cm)を3帯以上時計回りに施す。文様帯間に横方向に1条のミガキ(3mm)。 内面○体部はヨコナデの後に粗いミガキ。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×3mmの長石。
鉢A 68	27.6	○ほぼ直立気味に内弯する体部に直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口縁部は横方向のミガキ(2mm)。 ○体部はヨコナデの後に原体8条(1.1cm)の直線文を4帯以上施す。文様帯間横方向に1条のミガキ。 内面○全面ヨコナデの後横方向の粗いミガキ(2mm)。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-2。 ○淡橙色、他地域産。 ○3mm×4mmの長石。 ○外面一部黒斑。

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
鉢A 69	17.2	○直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。	外面○体部は原体7条(1.2cm)の直線文を2帯以上(単帶構成)時計回りに施す。 内面○ヨコナデ。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁橙色、在地産。 ○1mm×1.5mmの角閃石。
鉢 70	18.6 10.4 6.4	○底部とゆるやかに斜外上方に伸びる直口の口縁部をもつ。 ○底部は平底。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。 ○口縁部真下と底部を結ぶ半環状把手が縦位に付いた痕残る。	外面○体部はタテハケ(10本/cm)の後上半に原体7条(0.9cm)の直線文を逆時計回りに5帯施す。把手をつけた後に施す。文様帯以下は同ハケの後に不定方向の粗いミガキ(2mm)。 ○底面は不定方向の粗いミガキ。 内面○体部はヨコハケの後に横方向のミガキ。	○完形(把手欠失)。 ○溝16-2。 ○濁黄橙色、在地産。 ○2mm×2.5mmの角閃石。 ○外面黒色物質。
鉢A 71	22.6	○斜外上方に伸びる体部に直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。 ○口縁部真下と底部を結ぶ半環状把手が縦位に付く。	外面○口縁部は横方向のミガキ(1.5mm)。 ○体部上半は原体10条(1cm)の直線文を、3帯(単帶構成)時計回りに施した後、同原体で直線文上に扇形文をx字状に配す擬流文式。文様帶間に1条の横方向のミガキ(2mm)。体部文様以下は横方向の密なミガキ。 内面○口縁、体部上半は横方向の密なミガキ(2.0mm)。 体部下半は風化の為はつきりしないが縦方向のミガキ。 把手○上半は縦方向のナデの後に体部と同原体で扇形文を上から下へ施す。下半は横方向(右→左)のミガキ(1.5mm)。 ○下端挿着部は縦方向(下→上)のミガキ(2.5mm)。	○口縁、体部。 ○溝16-1上部。 ○濁褐色、在地産。 ○1mm×1.5mmの角閃石。 ○外面黒色物質。
甕A 72	21.2	○張りの少ない体部と「く」の字形に外反する口頸部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○体部は斜方向の密なミガキ(3mm)。 内面○頸、体部は細いヨコハケ(10本/cm)の後にナデ、体部に一部ミガキ(3mm)がみられる。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○暗褐色、在地産。 ○4mm×7mmの閃緑岩。 ○内外面煤付着。
甕A 73	16.8	○張りのない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部は斜め方向の密なミガキ(2mm?)。 内面○頸、体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○にぶい橙色、在地産。 ○2.5mm×3mmの角閃石。 ○内外面煤ける。
甕A 74	31.6 26.9 8.2	○斜外上方に立ち上がる体部とゆるやかに短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面を持つ。 ○底部は突出し上げ底氣味。	外面○口縁部はタテハケ(8本/cm)の後に横方向の粗いミガキ(2.5mm)その後ヨコナデ。 ○頸、体部上半はタテハケの後不定方向の粗いミガキその後頸部ヨコナデ。体部下半は縦方向(下→上)のケズリの後に縦方向に密なミガキ。 ○底面は不定方向のミガキ。 内面○口縁部はヨコナデの後に横方向(右→左)の粗いミガキ(2.5mm)。 ○頸、体部はヨコハケ(4本/cm)の後に縦方向の粗いミガキ。 ○粘土紐の継ぎ目(外傾)が4ヶ所残る(幅5.8・6.8cm)。	○完形。 ○溝16-2。 ○にぶい橙色、他地域産。 ○3mm×6mmの長石。 ○内外面黒斑。 ○外面煤ける。
甕A 75	31.1	○「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。 ○器壁は厚い。	外面○口縁端部、口縁部は強いヨコナデ。 ○頸部は風化のため不明。 内面○口縁部は強いヨコナデ。 ○頸部は横方向に密なミガキ。	○口頸部。 ○溝16-1下部。 ○濁橙色、在地産。 ○3mm×4mmの長石。 ○口縁部内面に楕円痕。 ○内外面煤ける。
甕A 76	25.7	○張りの少ない体部と頸部でしまらずに短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○口縁端部は布巻棒によるV字状の刻み目。 ○体部は斜・横方向の粗いミガキ(2.5mm)。 内面○口縁部は外面と同原体による刻み目の後ヨコナデ。 ○体部は横・斜方向の粗いミガキ(2.5mm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○黄褐色、在地産。 ○2mm×2mmの閃緑岩。 ○体部内外面煤ける。

器種 番号	法量 (cm)	形態	文様・技法	備考
甕A 77	19.9	○張りのない体部と「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	内外面○風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○明橙色、他地域産。 ○2.5mm×3.5mmの石英。
甕A 78	33.0	○張りのない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口縁部は強いヨコナデ。 ○頸、体部は横方向のミガキ? 内面○頸、体部はナナメハケ(8本/cm)の後横方向の粗いミガキ(2mm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○灰色、在地産。 ○1.5mm×2mmの角閃石。 ○外面黒斑。 ○内面煤付着。
甕A 79	29.4	○口径とほぼ等しい体部とややしまって外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸、体部上半は原体7条(1.5cm)の直線文を、3帯(単帯構成)施した後同原体でx字状に扇形文を配した流水文。 ○体部文様帶より下位は細いヨコハケの後、不定方向の粗いミガキ(2mm)。 内面○口縁部は横方向の密なミガキ(3mm)の後にヨコナデ。 ○頸、体部は細いヨコハケの後に横方向に密なミガキ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16。 ○橙色、在地産。 ○3mm×3.5mmの閃綠岩。 ○外面黒斑。 ○内面黒色物質塗布。
甕A 80	31.1	○張りのない体部と強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもちごくわずか下方に拡張する。	外面○口頸部はタテハケ(6本/cm)の後に横方向の粗いミガキ(2.5mm)。 ○体部は縱方向(下→上)のミガキを密に施す。 内面○口頸部は横方向の密なミガキ(2.5mm)の後ヨコナデ。 ○体部上位はナナメハケ(6本/cm)。体部下位は斜方向の粗いミガキ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○橙色、他地域産。 ○3mm×3mmの長石。
甕A 81	21.4	○張りの少ない体部と頸部でややしまって外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口縁端部、口縁部は強いヨコナデ。 ○頸部はヨコハケ(9本/cm)、一部指頭圧痕残る。 ○体部はヨコハケの後上位は横方向、中下位は縱方向の粗いミガキ(2.5mm)。 内面○口頸部は強いヨコナデ。 ○体部は細いヨコハケの後縱方向の密なミガキ(2.5mm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○黄褐色、在地産。 ○2mm×3mmの閃綠岩。 ○内外面煤付着。
甕A 82	16.0	○やや張りのある体部と「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸部は不定方向の粗いミガキ(2mm)。 ○体部は縱方向の密なミガキ(2mm)の後上位は横方向のミガキ。 内面○頸、体部上半は横・斜方向の密なミガキ(2mm)。 ○体部下半は煤けていて不明。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○1mm×2mmの長石。 ○内外面煤付着。
甕A 83	17.2	○張りの少ない体部と強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○口縁部はヨコハケの後横方向の密なミガキ(2.5mm)。 ○頸、体部は煤付着の為不明。ミガキか? 内面○頸、体部は細いヨコハケの後不定方向の粗いミガキ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16。 ○暗褐色、在地産。 ○4mm×4mmの閃綠岩。 ○内面煤ける。
甕A 84	17.4	○張りの少ない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	内外面○風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○赤橙色、在地産。 ○3.5mm×4mmの閃綠岩。
甕B-3 85	26.4	○頸部でしまらずに弱く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸、体部はナナメハケ(10本/cm)。 内面○口頸部はヨコハケ(10本/cm)の後ヨコナデ。 ○体部はヨコハケ。 ○粘土紐の縫目(外傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○灰黄色、在地産。 ○3mm×5mmの長石。
甕B-3 86	18.8	○張りのない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸部は横方向(右→左)のケズリの後、一部口縁部と同時にヨコナデ。 ○体部はタテハケ(下→上)。 内面○全面、細いヨコハケ(右→左)の後ヨコナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1。 ○暗褐色、在地産。 ○2mm×4mmの角閃石。 ○内外面煤ける。

器種 番号	法量 (cm)	形態	文様・技法	備考
甕B-3 87	18.3	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口頸部はナナメハケの後にヨコナデ。 ○体部はナデ。 内面○口頸部は粗いヨコハケ(7本/cm)。 ○体部は粗いハケの後にナデ。	○口頸部・体部上半。 ○溝16-1下部。 ○濁黄橙色、在地産。 ○3mm×3mmの角閃石。 ○頸部・体部外面上位煤付着。内面煤ける。
甕B-3 88	21.4	○張りの少ない体部と弱く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○頸、体部は縦方向(下→上)のケズリの後に纖維状原体によるタテハケ(下→上、11本/cm)。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左、7本/cm)。 ○体部は纖維状原体によるヨコハケ。	○口頸部・体部上半。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○4mm×4mmの角閃石。 ○体部外黒斑。
甕B-3 89	20.1 24.4 5.2	○体部上半に最大径をもち「く」の字形に外反する口頸部へとづく。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。 ○底部は突出し上げ底。	外面○頸部はタテハケ(9本/cm)の後にヨコナデ。 ○体部はタテハケ(15本/cm)。 ○底面はナデ。 内面○口縁部はヨコハケの後にヨコナデ。 ○頸、体部は細いヨコハケ(2本/cm)。 ○底部はナデ。 ○粘土紐の継目(内傾)4ヶ所残る(幅1.5cm)。	○完形。 ○溝16。 ○橙色、他地域産。 ○4mm×6mmの長石。 ○内外面煤付着。
甕B-3 90	16.8	○張りの少ない体部と「く」の字形に短く外反する口頸部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口頸部はナナメハケ(8本/cm)の後にヨコナデ。 ○体部はナナメハケ。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左、8本/cm)。 ○体部は細いナナメハケ。	○口頸部・体部上半。 ○溝16-1下部。 ○褐色、在地産。 ○3mm×3mmの角閃石。 ○口縁部煤ける。
甕B-3 91	16.8	○張りの少ない体部と短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○全面、タテハケ(頸部上→下、体部下→上 7本/cm)、頸部に口縁部成形時の指頭圧痕残る。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左、7本/cm)の後に口縁部はヨコナデ。 ○体部は細いヨコハケ。	○口頸部・体部。 ○溝16-1上部。 ○暗褐色、他地域産。 ○4mm×5mmの長石。 ○内面煤け、外側煤付着。
甕B-3 92	24.0	○張りのない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○口縁端部は強いヨコナデ。 ○体部はナナメハケ(7本/cm)。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左、7本/cm)の後に口縁部はヨコナデ。 ○体部は細いナナメハケ。 ○粘土紐の継ぎ目(外傾)2ヶ所残る(幅4.0cm)。	○口頸部・体部上半。 ○溝16-1上部。 ○暗褐色、在地産。 ○4mm×5mmの閃緑岩。 ○内外面煤付着。
甕B-3 93	25.6 31.0 7.4	○体部中位よりやや上に最大径をもち丈高で丸みのある体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。 ○底部は上げ底。	外面○器全体面にタテハケ(体部下→上、8本/cm)の後に頸部及び底部はヨコナデ。 ○底面は不定方向の粗いミガキ。 内面○口縁部はヨコハケの後にヨコナデ。 ○頸、体部は細いヨコハケ(11本/cm)。 ○底面に粘土紐の継ぎ目残る。	○完形。 ○溝16。 ○灰白色、他地域産。 ○4mm×5mmの長石。 ○内外面黒斑。
甕B-3 94	19.6	○張りの少ない体部と強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○全面タテハケ(頸部上→下、11本/cm)。 内面○口頸、体部はヨコハケ(右→左、11本/cm)。	○口頸部・体部上半。 ○溝16-2。 ○灰白色、在地産。 ○2mm×4mmの長石。 ○体部外黒斑。
甕B-2 95	30.4	○張りのない体部と「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み気味で丸みをもって終わる。	外面○口頸部はタテハケ(上→下、7本/cm)の後にヨコナデ。 ○体部はタテハケ。 内面○口頸、体部は細いヨコハケの後口縁部ヨコナデ。	○口頸部・体部上半。 ○溝16。 ○灰白色、他地域産。 ○5mm×8mmの長石。 ○体部内面煤ける。
甕B-2 96	35.0	○やや張る体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部はわずかに巻き込み気味で丸みをもって終わる。	外面○口縁端部はヨコハケ(口縁部内面と同原体で成形時に施している)。 ○頸、体部はナナメハケの後ヨコハケ(6本/cm)。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左)。 ○体部はヨコ、ナナメハケ(右下→左上、11本/cm)。	○口頸部・体部上半。 ○溝16-1。 ○灰黄色、在地産。 ○3mm×5mmの角閃石。 ○外側一部煤ける。

器種号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
甕B-2 97	23.5	○張りのない体部とゆるやかに弱く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み丸みをもって終わる。	外面○頸、体部はタテハケ(7本/cm)。 内面○口縁部はヨコハケ(7本/cm)の後ヨコナデ。 ○頸、体部はヨコハケ。 ○粘土紐の継目(外傾)2ヶ所残る(幅2.5cm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○灰黄褐色、在地産。 ○2mm×3mmの閃綠岩。 ○外面煤付着。
甕B-2 98	14.4	○張りの少ない体部とゆるやかに短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み気味で所々角ばって終わる。	外面○口縁部はタテハケの後ヨコナデ。 ○頸、体部はタテハケ(7本/cm)。 内面○口縁部はヨコハケ(右→左、10本/cm)。 ○頸、体部は細いヨコハケの後ナデ。 ○粘土紐の継目(内傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○濁橙色、他地域産。 ○2mm×3mmの長石。 ○内面煤け、外面煤付着。
甕B-2 99	15.4	○張りのない体部とゆるやかに弱く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み気味で丸みをもって終わる。	外面○口頸部はヨコナデ。 ○体部は煤付着の為はつきりしないがタテハケか? 内面○口縁部ヨコハケ(12本/cm)。 ○頸、体部は煤付着の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○濁黄褐色、他地域産。 ○2mm×2mmの長石。
甕B-2 100	15.4	○張りのある体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込んで終わる。	外面○頸、体部上半はタテハケ(上→下、8本/cm)の後にヨコハケ。体部下半はタテハケ。 内面○口頸部は細いヨコハケ(右→左)の後にヨコナデ。 ○体部は煤付着の為不明。	○口頸部、体部。 ○溝16-1下部。 ○濁橙色、在地産。 ○1mm×2mmの長石。 ○外面煤付着。
甕B-2 101	21.0	○張りのない体部と「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は巻き込んで終わる。	外面○頸、体部はタテハケ(6本/cm)。 内面○体部は細いナナメヨコハケ(右→左)の後ナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、他地域産。 ○2mm×3mmの長石。 ○内面煤け、外面煤付着。
甕B-2 102	32.6	○丸みのある体部となだらかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち巻き込んで終わる。	外面○口縁部はナナメハケ(7本/cm)の後ヨコナデ。 ○頸部はタテハケ(9本/cm)の後ヨコナデ。 ○体部はヨコハケの後横方向の密なミガキ(3mm)。 内面○口縁部はヨコハケ(9本/cm)の後ヨコナデ。 ○頸部はナナメハケ。 ○体部はヨコ方向の密なミガキ(3mm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○明橙色、他地域産。 ○5mm×5mmの長石。 ○内外面一部煤ける。
甕B-2 103	25.0	○強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み、丸みをもって終わる。 ○体部に比べて口縁部の器壁が厚い。	内外面○風化の為不明。	○口頸部。 ○溝16-1下部。 ○橙色、他地域産。 ○4mm×4.5mmの長石。
甕B-2 104	14.6	○張りのない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み丸みをもって終わる。	外面○口縁端部はヨコハケ。 ○頸、体部はタテハケ(上→下、8本/cm)。 内面○口縁部はヨコハケ(8本/cm)。 ○頸、体部は細いヨコハケ(右→左)の後ナデ。 ○粘土紐の継目(内傾)1ヶ所残る。	○口縁部、体部上半。 ○溝16-1。 ○浅黄橙、他地域産。 ○4mm×5mmの長石。 ○体部内面煤け、口頸部外面煤付着。
甕B-2 105	12.4 14.5 3.8	○倒鐘形の器體に短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部はわずかに巻き込み気味で丸みをもって終わる。 ○底部は上げ底。	外面○底部を除く全面にタテハケ(8本/cm)。 内面○口縁部はヨコハケ(右→左、8本/cm)。 ○頸、体部は細いヨコハケ(右→左、10本/cm)。	○完形。 ○溝16-1。 ○橙色、在地産。 ○1.5mm×2mmの角閃石。 ○体部内面煤け、外面上面煤付着。
甕B-2 106	19.2	○張りの少ない体部と強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は所々面をもち巻き込んで終わる。	外面○全面タテハケ(口頸部8本/cm、体部5本/cm)の後口頸部ヨコナデ。 内面○全面ヨコハケ(右→左、4本/cm)。 ○粘土紐の継目(内傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1。 ○明橙色、他地域産。 ○2mm×3mmの長石。 ○内外面一部煤ける。

器種 番号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
甕B-2 107	15.0	○張りの少ない体部と外折する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み丸みをもって終わる。	外面○頸部はタテハケ(上→下、4本/cm)の後ヨコナデ。 ○体部はタテハケ。 内面○頸・体部はナナメハケ(4本/cm)の後に縦方向の粗いミガキ(1.5mm)。 ○粘土紐の継目(内傾)2ヶ所残る(幅3.6cm)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○橙色、在地産。 ○2mm×2mmの長石。
甕B-2 108	17.0	○張りの少ない体部とながらかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み、丸みをもって終わる。 ○全体に薄い器壁。	外面○口頸部はタテハケの後ヨコナデ。 ○体部はタテハケ(6本/cm)。 内面○口頸部はヨコハケ。 ○体部は風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○明赤橙色、他地域産。 ○3mm×3mmの長石。
甕B-2 109	16.6	○張りのない体部と「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は巻き込み気味で丸みをもって終わる。	外面○体部は横方向のミガキ(2mm)。 内面○頸・体部は風化の為はっきりしないが横方向のミガキ?	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○暗黄褐色、在地産。 ○3mm×4mmの長石。 ○内外面煤ける。
甕B-2 110	20.4	○張りの少ない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部はわずかに巻き込み気味で丸みをもって終わる。 ○全体に器壁が厚い。	外面○体部は縦方向(下→上)のケズリの後縦方向の密なミガキ(2mm)。 内面○全面に細かいヨコハケ(右→左、11本/cm)の後口頸部はヨコナデ。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部。 ○溝16-1下部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2.5mm×3mmの閃緑岩。 ○外面煤付着。
甕(山城系) 111	16.5	○張りの少ない体部と強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面を持ち巻き込み気味に終わる。	外面○口縁端部はヘラによる刻み目(3個1組)。 ○全面、タテハケ(6本/cm)。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左、6本/cm)。 ○体部は風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○濁黄褐色、他地域産。 ○2mm×3.5mmの長石。 ○外面煤付着。
甕B-3 112	13.8	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸部はヨコハケ(6本/cm)を体部のミガキより後に施す。 ○体部は斜方向の密なミガキ(2.5mm)。 内面○口頸部はヨコハケ(5本/cm)。 ○体部はヨコハケの後に粗いミガキ。	○口頸部、体部。 ○溝16-1下部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×3mmの角閃石。 ○内外面煤付着。
甕B-3 113	16.8	○張りのない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口縁部はヨコハケ。 ○頸・体部は斜方向の密なミガキ(1.5mm)。 内面○全面、ヨコハケ(右→左)の後にナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○灰黄色、他地域産。 ○3mm×4mmの長石。 ○口頸部外面煤ける。
甕B-3 114	23.2	○張りの少ない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口頸部はヨコハケ(右→左)の後に横方向の粗いミガキ(右→左、2mm)。 ○体部はヨコハケの後に斜・横方向の密なミガキ。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左)。頸部は横方向の粗いミガキ(右→左、2mm)。 ○体部はヨコハケ(右→左)の後に横方向の密なミガキ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○濁橙色、在地産。 ○2.5mm×2.5mmの閃緑岩。 ○外面一部煤付着。
甕B-3 115	27.3	○張りの少ない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口頸部はヨコナデ、一部指頭圧痕残る。 ○体部はナナメハケ(6本/cm)。 内面○頸・体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2.5mm×3mmの閃緑岩。 ○外面煤付着。
甕B-1 116	39.2	○張りの少ない体部と「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は面をもち、上方に少し拡張する。	外面○口縁端部は上・下端にヘラによる刻み目、端面に二条の沈線。 ○口頸部はタテハケ(5本/cm)の後にヨコナデ。 ○体部はタテ・ナナメハケ。 内面○口頸部はヨコハケ(5本/cm)。 ○体部はヨコ・ナナメハケの後ナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1上部。 ○橙色、他地域産。 ○3.5mm×4mmの長石。 ○外面一部煤ける。
甕B-1 117	18.0	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口縁端部はヘラによるV字状の刻み目を施す。 ○頸・体部はタテハケ(4本/cm)。 内面○全面ヨコハケ(右→左、4本/cm)。 ○粘土紐の継目(内傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○淡橙色、他地域産。 ○2.5mm×3mmの長石。

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
甕B-1 118	15.6	○ややしまる頸部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口縁端部は刻み目を施す。 ○頸、体部はタテハケ(下→上、6本/cm)。 内面○口頸部はヨコハケ(右→左、6本/cm)。 ○体部はナデか?	○口頸部。 ○溝16-1上部。 ○暗褐色、他地域産。 ○1.5mm×2mmの石英。 ○内外面煤付着。
甕B-3 119	16.2	○やや張る体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○体部はナデ。 内面○口頸部はヨコハケの後ヨコナデ。 ○体部はナメハケ(右下→左上)の後ナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○淡黄橙色、在地産。 ○3mm×3mmの角閃石。 ○内外面一部煤ける。 ○頸部内面に2個の粒状痕残る。
甕B-3 120	27.4	○頸部でしまらずにそのままゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。 ○器壁薄い。	外面○口頸部は強いヨコナデ。 内面○口縁部は細かいヨコハケの後ヨコナデ。 ○頸部は細かいヨコハケ。	○口頸部。 ○溝16-1下部。 ○濁橙色、在地産。 ○2.5mm×3mmの長石。 ○外面一部煤付着。
甕B-3 121	23.7	○張りのない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○頸、体部は縦方向(下→上)のミガキ(3mm)。 内面○口縁部はヨコハケ(右→左、8本/cm)。 ○頸、体部は横方向の粗いミガキ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁橙色、在地産。 ○3mm×8mmの閃綠岩。 ○外面黒斑。
甕B-3 122	19.8	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○口縁部はヨコナデの後、一部横方向のミガキ。 ○頸部はタテハケ(4本/cm)の後にヨコナデ、その後横方向のミガキ(2mm)を施す。 ○体部はタテハケの後に縦方向のミガキ。 内面○口縁部は細いヨコハケ(右→左)の後一部横方向のミガキ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁橙色、在地産。 ○2.5mm×4.5mmの閃綠岩。
甕C 123	16.1	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸部から体部にかけてタテハケの後原体9条(1.4cm)の直線文を2帯(複帶構成)時計回りに施す。 内面○頸、体部は細いヨコハケの後ナデ。	○口頸部、体部上半。 ○溝16。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×2.5mmの閃綠岩。 ○外面煤付着。
甕C 124	19.4	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸、体部はタテハケ(下→上、7本/cm)を施した後、原体不明(5条か?)の直線文を20条逆時計回りに施す(複帶構成)。 内面○頸、体部は細いヨコハケ(右→左)。	○口頸部、体部上半。 ○溝16-1下部。 ○濁橙色、在地産。 ○3mm×5mmの閃綠岩。 ○内面煤け、外面煤付着。
甕B-3 125	16.6	○張りの少ない体部と短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口頸部は強いヨコナデ。 ○体部はナデ、一部ナナメハケ(10本/cm)。 内面○頸、体部は風化の為はっきりしないがナナメハケか?	○口頸部、体部上半。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○4mm×5mmの長石。 ○外面煤付着。
壺 126	7.6	○上げ底気味に突出する平底と大きく斜外上方に開く体部をもつ。	外面○体部は不定方向のミガキ(3mm)。 ○底面はナデ、一部ミガキ。 内面○細いハケの後ナデ。	○体部、底部。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、他地域産。 ○4mm×6mmのチャート。 ○外面煤ける。
壺 127	6.4	○突出する上げ底と球形に近い体部をもつ。	外面○体部は原体8条?(1cm?)の直線文を1帯以上施す。 ○体・底部はタテハケの後横方向のミガキ(2.5mm)。 ○底面はナデ、一部ミガキ。 内面○全面、細いハケの後ナデ。	○体部、底部。 ○溝16-2。 ○浅黄橙色、他地域産。 ○3mm×4mmの長石。 ○外面一部煤付着。

器種 番号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
鉢 128	7.8	○突出する上げ底氣味の厚い平底に内窓しながら斜外上方に開き屈折して立ち上がる体部をもつ。 ○木葉底(二重)。	外面○体・底部はタテハケ(12本/cm)の後横方向に密なミガキ(3mm)。 内面○全面、ヨコハケ。	○体部、底部。 ○溝16-2。 ○橙色、他地域産。 ○3mm×3mmの長石。
甕 129	5.4	○平底で厚い。 ○木葉底(二重)。	外面○体・底部はタテハケ(5本/cm)。 内面○全面、細いヨコハケ。	○体部、底部。 ○溝16-2。 ○濁黄橙色、他地域産。 ○2mm×2mmの長石。 ○内外面煤付着。
甕 130	7.4	○平底で厚い。 ○木葉底。	外面○底部はタテハケ(風化の為原体不明)。 内面○剥離の為不明。	○底部。 ○溝16-1上部。 ○明橙色、他地域産。 ○3mm×4mmの長石。
甕 131	6.8	○突出した上げ底。	外面○底部は剥離の為不明。 ○底面はナデ。 内面○風化の為不明。	○底部。 ○溝16-2。 ○灰白色、他地域産。 ○2mm×2mmの長石。 ○内外面煤付着。
甕 133	6.6	○上げ底氣味の平底。 ○木葉底。	外面○底部はタテハケ(9本/cm)。 内面○全面剥離の為不明。	○底部。 ○溝16-1上部。 ○淡橙色、他地域産。 ○2mm×4mmの長石。
甕 134	5.0	○平底。 ○木葉底(二重)。	外面○底部は縦方向のミガキ(2.2mm)。 内面○風化の為不明。	○底部。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、他地域産。 ○3mm×5mmの長石。 ○内外面煤ける。
甕 137	6.8	○突出し上げ底氣味。 ○底部中央に焼成後内外面よりの穿孔有り。	外面○底部は縦方向のミガキ(2mm)。 内面○風化の為はっきりしないがハケか?	○底部。 ○溝16。 ○濁黄色、在地産。 ○4mm×7mmの閃綠岩。 ○内外面煤ける。
壺 138	7.0	○突出する平底と球形に近い体部をもつ。	外面○体部は縦方向のミガキ(2mm)。 ○底部はケズリまたはハケの後縦方向のミガキ、その後ヨコ方向のミガキ。底面はナデ。 内面○全面、ヨコハケ(右→左、10本/cm)。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○体部、底部。 ○溝16-1。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×5mmの長石。 ○内外面煤ける。
甕 139	6.6	○突出した上げ底で厚い。	外面○体・底部はタテハケ(10本/cm)。 ○底面はナデ。 内面○全面、ナデ。	○体部、底部。 ○溝16。 ○浅黄色、在地産。 ○2mm×3mmの角閃石。 ○底部に紐圧痕。 ○内面煤付着。
甕 140	7.4	○突出した底で厚い。	外面○体・底部はタテハケ(5本/cm)の後一部ヨコナデ。 ○底面はナデ。 内面○全面、風化の為不明。	○体部、底部。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○5mm×6mmの閃綠岩。 ○外面所々煤ける。
壺 141	6.6	○突出した上げ底で厚い。	外面○底部はタテハケ(9本/cm)の後一部ヨコナデ。 ○底面は纖維状原体の不定方向ハケ。 内面○全面、横方向の粗いミガキ(3mm)。 ○粘土紐の継目残る。	○底部。 ○溝16。 ○灰白色、他地域産。 ○2mm×2.5mmの長石。

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
甕 142	6.0	○上げ底氣味。	外面○底部はタテハケの後縦方向のミガキ(3mm)。 ○底面は不定方向ハケ(10本/cm)。 内面○全面、風化の為不明。	○底部。 ○溝16-1。 ○淡橙色、在地産。 ○1mm×1mmの角閃石。
壺鉢 143	7.2	○突出した上げ底。 ○木葉底(二重)。	外面○底部はタテハケ(8本/cm)の後ヨコナデ。 内面○全面、剥離の為不明。	○底部。 ○溝16-1。 ○灰白色、他地域産。 ○3mm×3.5mmの長石。
壺 144	12.0 52.0(残)	○大型壺。 ○上げ底氣味の平底と球形に近い体部をもつ。	外面○体部はタテハケ(下→上、9本/1.2cm)の後、上半分は不定方向の粗いミガキ(2.2mm)。以下は縦方向の粗いミガキ(2.2mm)。 ○底面は不定方向のミガキ。 内面○体部は細いタテ・ヨコハケ(1.2cm)指頭圧痕残る。 ○底部は細かいヨコハケ。 ○粘土紐の跡目(外傾)1ヶ所残る。	○体部、底部。 ○溝16-1上部。 ○濁黄橙色～濁褐色、在地産。 ○4mm×6mmの閃綠岩。 ○内外面煤付着。
壺 145	7.5	○上げ底氣味の平底と球形に近い体部をもつ。 ○底部は厚い。	外面○体部上半は原体7条(1.2cm)の直線文を2帯以上(単帶構成)時計回りに施した後、直線文上に扇形文を配す擬流水文。 ○体部下半はタテハケ(8本/cm)。 ○底部はケズリ後ナデ。 内面○体部上半はナデ。指頭圧痕残る。	○体部、底部。 ○溝16-2。 ○浅黄橙色、在地産。 ○3mm×4mmの長石。 ○外面黒斑。
甕 146	6.2	○突出した上げ底。	外面○体・底部はケズリの後にタテハケ、その後に縦方向のミガキ。底部に指頭圧痕残る。 ○底面は未調整。 内面○煤付着の為不明。	○体部、底部。 ○溝16-1上部。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×4mmの角閃石。 ○外面煤ける。
甕 147	6.4	○上げ底氣味の平底。	外面○体・底部は縦方向のケズリ。 ○底面はナデ。 内面○全面、ナデ。	○体部、底部。 ○溝16-2。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×2mmの角閃石。 ○内外面煤付着。
甕 148	5.6	○上げ底氣味の平底で厚い。	外面○体・底部はケズリの後ナデ。 ○底面はナデ。 内面○全面、ナデ。	○体部、底部。 ○溝16。 ○濁黄橙色、他地域産。 ○1mm×1mmの長石。 ○内外面煤ける。
甕 149	7.6	○平底で厚い。	外面○底部は縦方向(下→上)のケズリの後、不定方向のミガキ(2.5mm)。 ○底面はナデ。 内面○全面、細いハケ。	○底部。 ○溝16-1。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×4mmの閃綠岩。 ○内外面煤付着。
甕 150	6.3	○突出した平底。	外面○体・底部はタテハケか？(風化の為不明)。 ○底面はナデ。 内面○全面、ナデ。	○体部、底部。 ○溝16-1上部。 ○橙色。在地産。 ○2mm×2mmの角閃石。 ○内外面煤ける。

土壤12出土弥生土器(第42図～第43図、図版42～44)

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
甕蓋 151	28.3	○笠形。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部上半は縦方向のミガキの後横方向にミガキ(2.5mm)。 ○体部、口縁部はタテハケの後縦方向にミガキその後口縁部に横方向のミガキ。 内面○体部は風化の為不明。 ○口縁部はヨコナデの後横方向に粗いミガキ。	○つまみ部欠失。 ○土壤12。 ○黄褐色、在地産。 ○2mm×4.5mmの閃綠岩。 ○内面黒斑。 ○外面煤ける。

器種 番号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
鉢 A 152	19.4 8.8 6.0	○上げ底気味の底部と直口の口 縁部をもつ。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。 ○把手付。	外面○体部上半は原体6条(0.9cm)の直線文を5帯(單 帶構成)逆時計回りに施した後直線文上に横位 の扇形文を施している。 ○体部下半は風化の為はっきりしないが横方向の ミガキ(3mm)。 ○底面はナデ。 内面○全面、ナデ。	○完形。 ○土壤12。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×4mmの閃綠岩。 ○外面一部黒斑。
鉢 B 153	21.4	○斜外上方に伸びる体部と短く 外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。 ○瘤状把手(破片のため1個確 認)。	外面○風化の為不明、口縁部に指頭圧痕残る。 内面○全面細いヨコハケの後、口縁部はヨコナデ。 ○体部は横方向に粗いミガキ(2.5mm)。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○濁黄褐色、在地産。 ○2mm×5mmの閃綠岩。
壺 A 154	8.2	○体部中央に最大径をもつ体部。 ○底部は突出した平底。	外面○風化の為不明。 ○底面は未調整。 内面○体部上半はナデ、一部指頭圧痕残る。 ○体部下半は横方向の密なミガキ(4mm)。 ○底部はナデ。 ○粘土紐の継目(内傾)2ヶ所残る(幅4.3cm)。	○体部、底部。 ○土壤12。 ○黄褐色、在地産。 ○3.5mm×4.5mmの閃綠岩。 ○外面黒斑。
壺・鉢 155	8.8	○突出した平底と斜外上方へ伸 びる体部をもつ。 ○底部は厚い。	外面○底部は細いナメハケ(11本/cm)の後、ナデ。 ○底面は未調整。 内面○細いヨコハケ(右→左、12本/cm)。 ○粘土紐の継目残る。	○底部。 ○土壤12。 ○濁褐色、在地産。 ○3mm×3mmの閃綠岩。 ○くさり疊多い。
甕 156	7.4	○やや上げ底気味の平底。	外面○体部はナデ。 ○底面は未調整。 内面○剥離の為不明。 ○粘土紐の継目残る。	○底部。 ○土壤12。 ○褐色、在地産。 ○5.5mm×7.5mmの閃綠岩。 ○外面煤ける。
壺 A 157	16.6	○体部から長く直立する頸部へ とつづき口縁部はゆるやかに 外反する。 ○口縁端部は丸みをもって終わ る。	外面○頸、体部はタテハケの後原体6条(1.1cm)の直 線文を10帯以上(単帶構成)時計回りに施す。 内面○全面に細いヨコハケ。 ○体部に指頭圧痕残る。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○黄褐色、在地産。 ○3mm×6mmの閃綠岩。 ○糊圧痕が一つ見られ る。
壺 A 158	16.4(推) 34.8 7.0	○球形に近い体部からあまりし まらずに斜外上方へ長く伸び る頸部をもつ。 ○底部は突出し平底。	外面○頸部は横方向の粗いミガキ(2mm)。 ○頸部から体部上半はタテハケの後原体7条(1cm) の直線文を10帯(単帶構成)時計回りに施す。文 様帶間は1条横方向のミガキ。 体部下半はヨコハケの後斜方向のミガキ(2.5mm)。 ○底面は未調整。 内面○頸部上半は細いヨコハケの後斜方向の粗いミガ キ(3mm)。 ○頸部下半は縦方向のナデ。 ○体部はヨコハケの後ナデ。	○口縁部欠失。 ○土壤12。 ○濁黄褐色、在地産。 ○5mm×5mmの閃綠岩。 ○底部外面一部煤付着。
壺 A 159	不明	○太い頸部と球形に近い体部を もつ。	外面○頸部から体部上半は、タテハケ(11本/cm)の後 原体6条(0.8cm)の直線文を6帯以上(単帶構 成)施す。 ○体部中位は剥離が激しい。ナナメ・タテハケ (11本/cm)。 内面○剥離が著しく不明。	○体部。 ○土壤12。 ○灰白色、他地産。 ○4.5mm×4.5mmの長石。 ○外面黒斑。 ○内面煤け、外面煤付 着。
壺 160	7.5	○平底から斜外上方に立ち上が る。	内外面○風化の為不明。	○体部、底部。 ○土壤12。 ○濁黄褐色、在地産。 ○3mm×6mmの閃綠岩。

器種号	法量 (cm)	形 態	文 様 ・ 技 法	備 考
甕A 161	6.9	○平底から鋭角に斜方向に立ち上がる。	外面○体部は横方向のミガキ(2.5mm)。 ○底面はナデ。 内面○不定方向のハケの後ナデ。	○体部、底部。 ○土壤12。 ○濁褐色、在地産。 ○2mm×2mmの閃綠岩。
甕A 162	18.6 21.6 6	○倒鐘形の体部と頸部でしまらずになだらかに外反する口縁部をもつ。 ○底部は突出し平底。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸部はヨコナデの後に縦方向(下→上)のケズリ。 ○体部は縦方向(下→上)のケズリ。 ○底面は未調整。 内面○体部は風化の為はっきりしないが、細いヨコハケ？	○完形。 ○土壤12。 ○暗褐色、在地産。 ○4mm×7mmの閃綠岩。 ○内外面煤ける。
甕B-3 163	17.6 21 5.6	○倒鐘形の体部と頸部でややしまって外反する口縁部をもつ。 ○底部は平底。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○頸、体部はケズリ状のタテハケ(下→上、7本/cm)頸部に一部指頭圧痕残る。 ○底面は未調整。 内面○口頸部はヨコハケ(7本/cm)の後口縁部ヨコナデ。 ○体部は不定方向のハケ。 ○体部下半は縦方向(下→上)のケズリ。	○完形。 ○土壤12。 ○濁黃褐色～暗褐色、在地産。 ○2mm×3mmの閃綠岩。 ○内外面煤付着。
甕A 164	16 16.8 5.4	○倒鐘形の体部と頸部で段をなし内窩氣味に斜外上方に開く口縁部をもつ。 ○底部は突出し上げ底。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口頸、体部は煤と剥離の為不明。口縁部成形の際、頸部との境に生じた粘土紐の継目がそのまま段となっている。 ○底面はナデ。 内面○体部は不定方向のハケの後にナデ。	○完形。 ○土壤12。 ○暗褐色、在地産。 ○4mm×4mmの閃綠岩。 ○内面煤付着。
甕B-3 165	24.6	○張りのない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸味をもって終わる。	外面○口頸部は横方向(右→左)のケズリの後に、細いヨコハケ。 ○体部は縦方向(下→上)のケズリの後にタテハケ。 内面○口頸部は、細いヨコハケ(右→左)。 ○体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○濁黃褐色、在地産。 ○3mm×6mmの閃綠岩。
甕A 166	24.6	○張りのない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○体部は縦方向(下→上)にケズリ。 内面○全面、ナデ。 ○頸部に粘土紐(外傾)の継目残る。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○淡橙色、在地産。 ○2.5mm×4mmの角閃石。
甕A 167	19.0	○張りのある体部と頸部でしまってゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○口縁部は横方向(左→右)のケズリの後にヨコナデ。 ○頸、体部は縦方向(下→上)のケズリ、その後にナデ。 内面○体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○暗褐色、在地産。 ○2.5mm×2.5mmの角閃石。 ○内外面煤付着。
甕B-3 168	21.8	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○頸、体部はタテハケ(下→上)。 内面○体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○暗褐色、在地産。 ○3mm×3mmの閃綠岩。 ○内外面煤付着。
甕A 169	19.6	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口頸部は横方向(右→左)のミガキ(2mm)。 ○体部はナデ、一部ミガキ。 内面○体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○濁黃橙色、在地産。 ○4mm×4mmの長石。 ○外面黒斑。
甕A 170	18	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	内外面○風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○淡橙色、在地産。 ○2mm×4mmの閃綠岩。 ○口縁部外面煤ける。

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
甕A 171	15.4	○張りの少ない体部とゆるやかに大きく外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	内外面○風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○淡橙色、在地産。 ○5mm×5mmの閃緑岩。
甕B-3 172	16.3	○上半に最大径をもつ丸味のある体部とゆるやかに長く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸味をもって終わる。	外面○体部は縦方向(下→上)のケズリの後タテハケ。 内面○口頸部はヨコハケ。 ○体部はヨコハケ(右→左、2cm幅)。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○暗褐色、在地産。 ○3mm×5mmの閃緑岩。 ○体部外面一部煤ける。
甕B-3 173	20	○張りのない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○体部はタテハケの後にナデ。 内面○頸、体部はナデ。 ○粘土紐の継目(外傾)1ヶ所残る。	○口頸部、体部上半。 ○土壤12。 ○暗褐色、在地産。 ○2mm×3.5mmの閃緑岩。 ○内外面煤付着。

各遺構出土弥生土器(第44図、図版45・47)

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
壺B 174	18.3	○球形に近い体部に太く短い頸部から短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち厚手に仕上げている。	外面○口縁端部は原体3条の波状文。 ○頸、体部は原体6条?(1.1cm?)の直線文を8帯(單帯構成)施した後x字状に扇形文を配した擬流文水。 内面○口縁部は横方向の粗いミガキ(2.5mm)の後にヨコナデ。 ○頸部は横方向の密なミガキ。 ○体部は粗いヨコハケ(右→左、3本/cm)。	○口頸部、体部上半。 ○落ち込み3。 ○在地産。 ○4mm×4.5mmの閃緑岩。 ○内外面煤ける。
壺A 175	14.6	○短く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち下方へも面をもって拡張する。	外面○頸体部は原体7条(0.8cm)の、直線文を時計回りに4帯(単体構成)施す。以下は横方向・縦方向の粗いミガキ(2mm)。 内面○体部は細いヨコハケの後ナデ。	○口頸部、体部上半。 ○落ち込み3。 ○濁褐色、在地産。 ○2mm×3mmの角閃石。
壺A 176	21.2	○頸部と斜外上方に大きく外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもち下方へわざかに拡張する。	内外面○風化の為不明。	○口頸部。 ○落ち込み3。 ○橙色、他地域産。 ○4mm×5.5mmの長石。
鉢A 177	24.2	○直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。	外面○体部は原体9条(1cm)の直線文を5帯以上(單帯構成)施した後、同原体でx字状に扇形文を配した擬流文水。 内面○体部は横方向の密なミガキ(2mm)。	○口縁部、体部。 ○落ち込み3。 ○濁褐色、在地産。 ○2mm×2mmの角閃石。
甕B-3 178	21.2	○少し張る体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。	外面○口縁部下端に1条の沈線を思わず様なくぼみがある。 ○頸、体部はナナメハケ(5本/1.6cm)、体部下半に細いハケ(19本/cm)。 内面○口縁部は細いヨコハケ。	○口頸部、体部上半。 ○土壤16。 ○褐色、在地産。 ○5mm×5mmの閃緑岩。 ○外面黒斑。
甕A 179	9.4	○上げ底氣味の底部と斜外上方へ立ち上がる体部をもつ。	外面○体部は斜方向の密なミガキ(3.5mm)。 ○底部は不定方向のミガキ。 内面○体部は横方向の密なミガキ(3.5mm)。 ○底部はナデ。	○体部、底部。 ○土壤16。 ○濁褐色、他地域産。 ○5mm×3mmの石英。 ○内外面煤付着。
甕C 180	25.0	○張りの少ない体部と外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸、体部はタテハケ(7本/cm)の後に頸、体部上半に原体7条?(1.2cm)の直線文を3帯?(複帯構成)逆時計回りに施す。 内面○頸、体部は細いヨコハケ(右→左)の後にナデ。	○口頸部、体部上半。 ○落ち込み3。 ○濁褐色、在地産。 ○1.5mm×2mmの閃緑岩。 ○外面煤ける。

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
甕B-2 181	16.8	○少し張る体部と強く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部はごくわずか巻き込み丸みをもって終わる。	外面○口縁端部に強いヨコナデを施しごくわずか下方に拡張している。 ○頸、体部は粗いタテハケ(4本/cm)。 内面○頸、体部上半位は粗いヨコハケ(4本/cm)。 ○体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○落ち込み3。 ○濁橙色、他地域産。 ○1.5mm×2mmの石英。 ○体部下半内外面煤ける。
甕A 182	29.2	○張りのある体部と「逆L字」状の口頸部をもつ。 ○口縁端部は尖り気味に終わる。	内外面○風化の為不明。	○口頸部、体部上半。 ○落ち込み3。 ○橙色、他地域産。 ○5mm×5mmの長石。
甕B-2 183	26.0	○張りの少ない体部に強く外反する口頸部をもつ。 ○口縁端部は巻き込んで終わる。 ○全体に厚手。	外面○口頸部はヨコナデ。 ○体部は縦・横・斜方向の粗いミガキ(2mm)。 内面○頸体部はナデ。	○口頸部、体部上半。 ○落ち込み3。 ○淡黄色、他地域産。 ○3mm×7mmのチャート。
鉢A 184	15.4	○内湾気味に外上方に立ち上る体部に直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○口縁部は強いヨコナデ。 ○体部はナナメハケ(風化の為はっきりしない)。 内面○体部は細いヨコハケ(右→左)の後ナデ。	○口縁部、体部。 ○土壤16。 ○暗褐色、在地産。 ○3mm×4mmの閃綠岩。 ○内外面煤ける。
甕 185	7.2	○突出した平底。	外面○体、底部は細いタテハケ(下→上、13本/cm) ○底面はナデ。 内面○体部はナナメハケ(6本/cm)の後、不定方向の細いハケ(13本/cm)底部は細いハケ。	○体部、底部。 ○溝17。 ○濁黄色、在地産。 ○4mm×8mm閃綠岩。 ○内外面煤ける。
甕 186	9.0	○平底に内湾しながら斜外上方へ立ち上る体部をもつ。 ○器壁が厚い。	外面○体部は風化の為はっきりしない。 ○底面は未調整。 内面○全面、風化の為不明。	○体部、底部。 ○落ち込み3。 ○濁褐色、在地産。 ○3.5mm×7mmの長石。 ○外面黒斑。
甕 132	4.9	○上げ底。 ○底面中央に焼成前内から外の穿孔有り。	外面○底部はヨコナデ。 ○底面はケズリ。 内面○細いヨコハケ(9本/cm)。	○底部。 ○落ち込み3。 ○濁橙色、在地産。 ○2mm×2mmの長石。 ○外面1/3煤ける。
鉢 187	不明	○突出した平底に丸みをもって斜外上方へ立ち上る球形に近い体部をもつと思われる。 ○底部の器壁は厚い。	外面○風化の為不明。 内面○底部中央付近、指ナデにより輪状に凹んでいる。 調整は風化の為不明。	○体部、底部。 ○土壤16。 ○淡黄色、他地域産。 ○4mm×4mmの長石。

包含層出土弥生土器(第45図、図版44~46)

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
甕 135	5.8	○突出し上げ底。 ○木葉底。	外面○底部は風化の為はっきりしないがタテハケか? 内面○煤付着の為不明。	○底部。 ○12層。 ○灰白色、他地域産。 ○2mm×3mmの長石。 ○外面煤ける。
甕 136	7.4	○平底。 ○木葉底(二重)。	外面○底部はタテハケ(5本/cm)。 内面○風化の為不明。	○底部。 ○13層。 ○淡黄色、他地域産。 ○2.5mm×2.5mmの長石。 ○外面煤ける。

器種番号	法量(cm)	形態	文様・技法	備考
壺A 188	25.6	<ul style="list-style-type: none"> ○直立気味に立ち上がる細く長い頸部に水平近く外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもちわずかに下方へ拡張する。 ○頸部に焼成前に外から内へ施した穿孔1個有り。 	内外面○風化の為不明。	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○12層。 ○淡橙色、他地域産。 ○3.5mm×3.5mmの長石。
高杯B 189	23.8(推)	<ul style="list-style-type: none"> ○体部上端で段をなしてから水平に伸びる口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面○口縁端部、下端はヘラによるV字状の刻み目を施す。 ○口縁部上面は風化の為不明。 ○口縁部下面はナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部。 ○12層。 ○淡橙色、他地域産。 ○3.5mm×3.5mmの長石。
甕A 190	23.7	<ul style="list-style-type: none"> ○張りのある体部と「く」の字形に外反する口頸部をもつ。 ○口縁端部は丸味をもって終わる。 	内外面○風化の為不明。	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部、体部上半。 ○橙色、他地域産。 ○4mm×5mmの長石。
鉢B 191	19.2 11.8 5.6	<ul style="list-style-type: none"> ○突出した平底から大きく斜外上方に開き腰部で屈折して内弯気味に立つ体部と「く」の字形に外反する口頸部をもつ。 ○口縁端部は面をもち上方につまみ上げている。 ○底部中央付近に内外両方から施した焼成後の穿孔(直径6.0~7.0mmの隋円形)1個。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面○頸部から体部上半にかけてタテハケ(5本/cm)その後頸部はヨコナデ。 ○体部中位はナナメハケの後にナデ。 ○腰部から体部下半にかけてタテ方向の密なミガキ(1.8mm) ○底面はケズリ。 <p>内面○体部上半はナデ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○腰部から体部下半にかけて不定方向のハケの後にナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○完形。 ○F地区14層。 ○橙色、在地産。 ○3×7の閃緑岩。 ○内外面黒斑。
鉢A 192	30.0	<ul style="list-style-type: none"> ○直立気味に内弯する体部と直口の口縁部をもつ。 ○段状口縁で端部は内側へも拡張する。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面○口縁端部は列点文を時計回りに1帯施す。 ○口縁端部上面は原点2条の斜格子文を内側上方からみて左上→右下右上→左下の順に施す。 ○体部は同一原体9条(1cm)で直線文、波状文、直線文の順に施す。 <p>内面○全面、ヨコハケ(4本/cm)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部、体部上半。 ○13層。 ○黄褐色、在地産。 ○2mm×3mmの閃緑岩。 ○外面一部煤ける。
壺蓋B 193	10.0 3.0	<ul style="list-style-type: none"> ○下面是平坦、上面は口縁端部から中央に向けて徐々にわずかづつくらむ。 ○口縁端部は尖って終わる。 ○上面中央に突出する円柱状つまみ1個。 ○相対して2個1対の紐孔を焼成前に上面から下面に穿つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面○風化の為不明。 内面○木葉压痕。 ○粘土紐の継目残る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○完形。 ○12層。 ○灰白色、他地域産。 ○1.5mm×2.5mmの長石。
壺蓋B 194	12.2 2.9(推)	<ul style="list-style-type: none"> ○笠形で口縁端部は角ばって終わる。 ○下面から上面に焼成後の紐孔有り(残存は1個)。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面○体部は沈線4条からなる三葉一組の木葉文を4ヶ所に配している。1組の施文は右葉→下葉→左葉の順に時計回りに行っている。 <p>内面○ナデ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○1/9残存。 ○黄褐色、在地産。 ○3mm×3.5mmの角閃石。 ○I様式。
細頸壺 195	12.6	<ul style="list-style-type: none"> ○ほぼ直立気味に伸びる頸部とわずかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面○頸部は原体8条の直線文(1.1cm)を5帯以上(全体構成)時計回りに施す。 <p>内面○全面ナデ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部。 ○13層。 ○黄褐色、在地産。 ○1mm×1.5mmの角閃石。
甕B-3 196	24	<ul style="list-style-type: none"> ○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面○頸、体部はタテハケ。 内面○口頸部から体部上半に細いヨコハケ。 ○体部は細いタテハケ(11本/cm)。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口頸部、体部上半。 ○13層。 ○灰黄色、在地産。 ○1.5mm×1.5mmの閃緑岩。 ○外面煤付着。

器種 番号	法量 (cm)	形態	文様・技法	備考
壺B-3 197	18	○張りの少ない体部とゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○頸、体部はタテハケの後に頸部は横方向、体部は縦方向の密なミガキ(2mm)。 内面○口頸、体部はヨコハケ(9本/cm)の後ナデ。	○口頸部、体部上半。 ○12層。 ○黄褐色、在地産。 ○3mm×5mmの閃緑岩。
鉢A 198	16.8	○斜外上方に伸びる体部と直口の口縁部をもつ。口縁部はわずかに内弯気味。 ○口縁端部は丸みをもち内側にごくわずか肥厚する。	外面○直線文を2帯施す。 ○風化の為調整は不明。 内面○風化の為不明。	○口縁部、体部。 ○明褐色、在地産。 ○2.5mm×2.5mmの角閃石。
鉢A 199	19.8	○斜外上方に伸びる体部と直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸みをもって終わる。	外面○全面に原体10条(1.1cm)の直線文を時計回りに5帯以上(複帯構成、一部単帯構成)施した後に同原体でx字状に扇形文を配す擬流水文。 内面○風化の為不明。	○口縁部、体部。 ○12層。 ○褐色、在地産。 ○3mm×5mmの閃緑岩。
鉢A 200	10.8	○ほぼ直立気味の体部と直口の口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	外面○体部は風化の為はっきりしないが横方向のミガキ。 内面○全面、ヨコナデ。	○口縁部、体部上半。 ○13層。 ○橙色、在地産。 ○3mm×3mmの閃緑岩。
壺 201	7.6	○上げ底気味の突出した底部と斜外上方に開く体部をもつ。	外面○体部は原体5条(0.8cm)の直線文を2帯以上(単帯構成)時計回りに施している。 ○体部下半にナナメハケ(8本/cm)の後一部細いヨコハケ(11本/cm)。 ○底部はタテハケ(8本/cm)の後ヨコナデ。 内面○体部はヨコハケ(右→左、5本/cm)。 ○底部はナデ。	○体部、底部。 ○14層。 ○暗褐色、他地域産。 ○2mm×2mmの長石。 ○内面煤け、外縁煤付着。
壺(山城系) 202	16.6(推)	○受口状口縁。	外面○口縁屈曲部にヘラによるV字状刻み目を間隔狭く施している。 ○頸部から屈曲部間に原体5条(0.7cm)の波状文を時計回りに2帯以上施す。 内面○ヨコナデ。	○口縁部。 ○12層。 ○灰白色、他地域産。 ○1mm×1.5mmの長石。
鉢B 203	45.0	○「く」の字形に外反する口頸部をもつ。 ○口縁端部は角ばって終わり一部巻き込気味。	外面○全面タテハケ(1.5cm幅)。 内面○口縁部に指頭圧痕残る。 ○体部上半位はナナメハケ。 ○体部下半位はナナメハケの後ナデ。	○口縁部、体部上半。 ○12層。 ○濁黃橙色、在地産。 ○2mm×3mmの閃緑岩。 ○瘤状把手がつくと思われる。

VI. 附 編

1. 鬼虎川遺跡第19次調査出土人骨について

大阪市立大学医学部解剖学第2講座 多賀谷 昭

弥生中期の方形周溝墓の2基の木棺から各1体の成人骨が出土している。

第7号方形周溝墓木棺人骨

北北東を頭位とする仰臥伸展葬人骨で、胸骨を除くほぼ全身の骨が出土している。頭蓋骨の残存部位は、前頭骨および左右頭頂骨の大部分と左右側頭鱗、下顎骨体で、頭蓋底と顔面の大部分を欠いている。胸骨では中位の肋骨片1個のみが残存する。上肢では、右の肩甲骨と鎖骨、左右上腕骨、左尺骨のほか、右の橈骨および尺骨と思われる骨が残存し、下肢では、右寛骨の大部分と左寛骨の寛骨臼付近、左右の大腿骨、脛骨、腓骨が残存する。四肢の長骨は何れも骨端を欠いている。

下顎骨を含む頭蓋骨は左に約150°回転して下面が右上方に向き、右の鎖骨と肩甲骨は腹部に移動しており、原位置ではない。また、下肢では、左の大腿骨と脛骨は関節せず、ともに遠位端を右に向けてほぼ平行し、その上に右大腿骨が交差した状態になっている。これらの移動は埋葬後の遺体の腐敗に伴って生じたものと考えられ、木棺の大きさを考慮すると、膝関節をやや強く屈曲して立て膝にした状態の仰臥伸展位で埋葬されたものと推定される。

出土した状態のまま木棺ごと樹脂で処理されて保存されており、取り上げて観察することができないので、人骨の詳細な特徴を知ることはできないが、頭蓋骨が比較的薄いことと四肢長骨がきしゃであることから、女性と判定した。矢状縫合は、保存状態が良くないので断定はできないが、内板では閉鎖しているように見える。骨の大きさや表面の状態からみても、成人であることは確実と思われる。

第8号方形周溝墓木棺人骨

南東を頭位として埋葬された人骨であるが、木棺の頭方の端付近のみが発掘され、残りの部分は調査されていないので、埋葬の姿勢は不明である。脳頭蓋を主とする頭蓋骨の多数の破片と5個の歯が出土している。

頭蓋骨片のうち部位が同定できたものは、右頭頂骨の大部分、左頭頂骨の一部、右側頭骨の側頭鱗の一部と錐体で、矢状縫合の頭頂孔付近を含む骨片も存在する。残存する歯は、左上顎の第1および第2小白歯と第1大臼歯、左下顎の第2小白歯と第1大臼歯である。

矢状縫合は内板が閉鎖、外板が半閉鎖の状態にある。歯の咬耗による象牙質の露出は上・下顎第2小白歯および下顎第1大臼歯では点状、上顎第1大臼歯では面状で、左上顎第1小白歯の咬耗はエナメル質内にとどまっている。これらのことから、年齢は壮年の後半（30代）と推定した。性別は判定できない。

2. 鬼虎川遺跡出土の弥生時代（畿内第II様式期）の異形土器ならびに織具腰当と想定される木製品に塗布された赤色顔料物質の化学分析

武庫川女子大学薬学部 安田 博幸 井村 由美

標記出土遺物に塗布されたとみられる赤色顔料物質について、筆者らの常法とする、ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行った結果、赤色顔料物質の成分を確認したので報告する。¹⁾

試料の外観および分析用試料の採取

試料1 鬼虎川遺跡出土の弥生時代（畿内第II様式期）に属する異形土器の、もと全面に塗布されたとみられるものの、いまは各所に薄く残存する赤色顔料物質。その表面の流水文沈線部分に固着して残留するものを、鋼針で注意深く搔き取るようにして採取した約1mgの赤色粉末を、分析用試料とする。

試料2 鬼虎川遺跡出土の弥生時代（畿内第II様式期）に属する織具の腰当と、想定される木製品の一方の端部に木地とほとんど識別しがたいぐらいたくに残存する赤色顔料物質で、その部分の一部を小スパートルで木質ごと約3mgけずり取り、分析用試料とする。

試料3 試料2の対照試料として、試料2と同じく木製品の赤色顔料物質のまったく認められない木質部分約3mgを小スパートルでけずり取り、試料2との対照用分析試料とする。

実験の部

試料検液の作製

上記採取試料1、2および、対照用試料の試料3をそれぞれガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温し、酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分と分離した上澄液を加熱、濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用試料検液とする。試料検液の番号は各試料番号に対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認。

東洋ろ紙No.53（2cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として試料検液と対照の鉄イオン（ Fe^{3+} ）と水銀イオン（ Hg^{2+} ）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのアルコール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞ

れの呈色スポットの位置 (Rf値で表現する) と色調を検した。

上記試料検液ならびに対照イオンの標準液について得られたる紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表3、表4のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド、アンモニアによる検出： (Hg²⁺は紫色、Fe³⁺は紫褐色のスポットとして検出される。)

表3 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットRf値と色調

	Rf値 (色調)
試料検液 1	0.11 (紫褐色)
試料検液 2	0.12 (紫褐色)
試料検液 3	0.11 (紫褐色)
Fe ³⁺ 標準液	0.17 (紫褐色)
Hg ²⁺ 標準液	0.91 (紫色)

- (2) ジチゾンによる検出： (Hg²⁺は橙色スポットとして検出され、Fe³⁺は反応陰性のため呈色せず。)

表4 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

	Rf値 (色調)
試料検液 1	呈色スポット発現せず
試料検液 2	呈色スポット発現せず
試料検液 3	呈色スポット発現せず
Fe ³⁺ 標準液	呈色スポット発現せず
Hg ²⁺ 標準液	0.82 (橙色)

判定

以上の結果のとおり、試料検液1・2からはFe³⁺のみが検出され、Hg²⁺はまったく検出されなかった。さらに、試料2の対照試料である試料3の検液からもFe³⁺のみが検出されたが、その呈色は試料2の呈色に比べて極めて淡いことが注目された。これらの事実から、まず、鬼虎川遺跡出土の異形土器を彩った赤色顔料はベンガラ (Fe₂O₃) であったことが確言される。

つぎに、織具の腰当てと推定される木製品では、調査者が肉眼的に赤色顔料塗布痕と指摘する部位の鉄成分の存在量が、対照部位のそれよりも著しく多いということが判明した。

一般に、ある木器が土中に長期間埋蔵されれば、当然、地下水による土壤からの鉄成分の吸着により、木器の全部位で、ほぼ等しい量の鉄分が検出されることが予想される。にもかかわらず、今回の実験で、調査者指摘の部位から、対照試料部位よりもはるかに著量の Fe^{3+} が検出されたことは、指摘部位にベンガラ (Fe_2O_3) 系の赤色顔料が塗布されていたことを証するものであって、この結果は、方法論的にも興味深い示唆を与えているといえよう。

(1986年 12月 分析)

注

- 1) 安田博幸・鶴崎暁子「尼崎市田能遺跡16号棺の人骨に付着の朱赤色物質の成分について」
(『古代学研究』第49号 P9 1967年)
- 安田博幸・鶴崎暁子「尼崎市田能遺跡17号棺からの水銀朱の検出」(『古代学研究』第53号 P27 1968年)
- 安田博幸「埋蔵文化財の分析化学」(『考古学と自然化学』第4号 P33 1971年)

3. 鬼虎川遺跡出土のサヌカイト遺物の石材産地分析

京都大学原子炉実験所 藻科 哲男 東村 武信

鬼虎川遺跡の第19次調査で出土した弥生時代中期初頭（畿内第II様式）のサヌカイト製石器、剝片など59点の産地分析の結果が得られたので報告する。

石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイト、黒曜石製遺物の産地推定を行なっている。¹⁾ 蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からぬという場合にはことさら有利な分析法である。

サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量元素組成には異同があると考えられるため、微量元素のK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの元素を中心に分析を行ない。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いた。これら分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物の元素組成を対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なう。今回分析したサヌカイト製遺物の結果を表¹に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するために原石群との比較をする。相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²検定である。これによつて、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する。²⁾ 遺物の産地推定の結果は、サヌカイト原産地23箇所の30個の原石群と比較して、確率の高い原石産地のものだけを選んで表⁽²⁾2に記した。

原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離D²の値で記した遺物については、このD²の値が原石群の中で最も小さなD²値である。この値が小さいほど、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。

今回分析した59点のサヌカイト製遺物のうち、試料番号17186の遺物の元素組成は、サヌカイ

ト原産地の中で二上山地域の原石群に似る傾向が見られるが、この遺物を二上山産と決定することができなかった。残りの58点の遺物には大阪、奈良の両府県に広がる二上山地域からのサヌカイト石材が使用されていると判定された。

参考文献

- 1) 薫科哲男、東村武信「石器原材の产地分析」(『考古学と自然科学』第16号 P 59~P 89
1983年)
- 2) 東村武信 (『考古学と物理化学』1980年) 学生社

編者注

(1)(2)に関しては、表を頂戴したが、紙数の都合で割愛させていただいた。

VII. まとめ

1. 遺構について

環濠

今回、検出した環濠の全長は、第12次調査分のものと合せ87mである。東西の両端が南に方向を変えていることから、ほぼ環濠の北辺全部を確認したことになる。二重の環濠を持つことで著名な和泉の池上遺跡に近い規模が考えられる。本遺跡の環濠が二重に回るかどうかは、現在のところ明らかではないが、少なくとも従前の調査例からみて検出した環濠の北側を回ることは、ありえない。

環濠の東側に、方形周溝墓とともに3条の大溝が存在することが、第12次調査で明らかになっているが、西側では検出されていないことから集落を囲んでいるとは考えられない。これらの大溝内より遺物がほとんど出土しないこと、堆積土が砂であることからみて環濠の外側に設けられた、集落を洪水などから守る溝であったことが考えられる。²⁾

環濠を掘削した際に出土した排土は、土壘を築くのには用いられていない。肩口に最大厚さ16cmほどの盛土（第14層）がみられるが、土壘といえるものではない。土層断面からみて削平を受けていないことは明らかである。本遺跡においては集落部分に盛土層が厚さ10~20cmで広く分布する。居住地が低湿な地に営まれているため環濠や大溝の排土を用いて地上げを行ったのであろう。

環濠の第1次掘削時の規模は、下場幅は1.7~2m、深さ1.2~1.5m、上場幅5m前後と考えられ、大阪府下で、現在知られているものの中では、最大級のものである。他遺跡では丘陵上に位置するものが多いため、上部の削平を受け本来の規模より小さく検出されるためであろう。

断面形が逆台形を呈するのは、前期から中期にかけて多くみられるよう摂津の東奈良遺跡、³⁾ 和泉の池上遺跡、丹波の太田遺跡、⁴⁾ 大和の唐古遺跡の環濠も同様である。環濠掘削に際し一定の基準があったのであろうか。

本遺跡の環濠は、防禦的な役割を果たしたのは、規模からみて第1段階の掘削直後から第2層が堆積する直前までの短期間（第3・4層の堆積時期）であったと考えられる。この2層は遺物がほとんど出土していないのに比べ第2層や第1層が弥生土器・自然木や木製品・シカ・イノシシの骨・炭化した稻束などを多量に含むことは、環濠が集落のゴミ捨場となったことを示しており、深さからみても敵の侵入を防ぎ集落を守る機能を果したとは考えられない。おそらく、集落の排水用の機能しかもたなかつたものと考えられる。

柵列

今回、検出した柵列は尾張の朝日遺跡の他に管見では類例が知られていない。⁸⁾ 環濠の肩口に柵列を巡らすことは、世界の民族例から、都出比呂志氏が指摘したところであるが、実例としては2例目であろう。朝日遺跡の例は、逆茂木などを環濠の外側に設けている点で本遺跡とは

異なる。¹⁰⁾

柵列を構成した杭の上部構造は不明であるが、残存した柱根やピット断面の形状からみると径10cm前後のものである。環濠内より出土したような杭（第56図51）が用いられたのかもしれない。杭の配置からすると、環濠の外側からは、居住区内部がほとんど見えない状況が想定される。

柵列を構成するピット内よりの土器の出土は少なかった。柵列が環濠の第1次掘削に合せつくれられ、B～E地区の第15層中より遺物が出土しなかったことと合わせると、それまで未居住区であった所に居住区を策定した際に環濠と柵列が同時に作られたことが考えられる。

各ピットは、切り合いが少なく南北環濠掘削時には存在していない。柵列の機能した時期もこの間に限定されよう。防禦的な環濠と柵列を廃止した理由は不明である。

注

- 1) 石神怡「池上弥生ムラの変遷」（『考古学研究』92 P 33～P 58 1977年）考古学研究会
- 2) 上野利明、才原金弘（『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』 P 9、P 22～P 24 1987年）財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 3) 奥井哲秀他（『東奈良発掘調査概報II』 P 39～P 120 1981年）東奈良遺跡調査会
- 4) 江谷寛「遺構」（『池上・四ツ池』 P 16～P 20 1970年）第2阪和国道内遺跡調査会
- 5) 村尾政人「太田遺跡（『京都府遺跡調査概報第7冊』 P 16～P 32 1983年）財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 6) 藤田三郎（『昭和58年度 唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』 P 30～P 31 1984年）田原本町教育委員会
- 7) 那須孝悌、樽野博之氏の教示を得た。
- 8) 石黒立人他「朝日遺跡」（『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報昭和61年度』 P 11～P 13 1987年）財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 9) 都出比呂志「環濠集落の成立と解体」（『考古学研究』116 P 14～P 32 1983年）考古学研究会
- 10) 本遺跡においては、現在のところ環濠の内側（居住区側）にしか柵列は認められていない。外側には河川が存在し、これが防禦の役割を果たしていたため、柵列を必要としなかったのではないかろうか。

2. 遺物について

弥生土器

前述したように、出土した土器の大半は、第II様式に属す。中でも環濠出土品は、513点の器種の判明する土器があり、全器種が揃い量も多く單一様式に属すことから、河内において現在知られている当該期の遺構出土資料の中でも数少ない良好なものである。この資料を用いて若干の考察を行う。

土器の器種構成の比率は、壺20.3%、細頸壺0.6%、無頸壺A 0.4%、B 0.6%、鉢A 12.7%、¹⁾ B 2.3%、高杯1.6%、甕54.2%、壺蓋0.8%、甕蓋5.5%、その他1%で、和泉の池上遺跡に比較すると、壺の比率が低く（池上は38.7%）鉢が高い（同A・Bで4.4%）。河内の恩智遺跡のSD04出土土器（壺3.5割、甕5割、その他1.5割）との比較でも同様である。鉢Aの比率の高いのが本遺跡の特徴となるかもしれないが、比較資料の少ない現在、異なりを指摘するに留める。

壺Aは、出土量が多く本遺跡でも一般的な壺であり、他地域産のものも28%存在する。壺Bは、摂津・大和・和泉にも見られるが、壺Aに比して出土量は多くない。本遺跡においても同様である。他地域産のものが12%しか存在せず、櫛描直線文や流水文などで口縁端部や体部外面を飾る土器が多いのが特徴である。壺A・Bとも口縁端部の拡張が始まっており第III様式に続くことを示している。

鉢Aの中で第III様式から出現すると考えられていた縦位の環状把手を持つ土器の存在を今回確認した。5点とも在地産であることが、出自を考える上で興味深い。同形態の木製品が池上遺跡や今回の調査（第52図23）で出土しているが、どちらが先に出現したかは不明である。⁴⁾

鉢Bの中にも環濠および土壙12の資料から瘤状把手を持つものが認められた。瘤状把手を持つものは一般的に第I様式新段階で消滅すると考えられているが、中村友博氏の教示によれば、近江～山城にかけては第II様式に伴うことが知られており、本遺跡でも残存していることが確認された。今回の調査以外でも第7次調査土壙7で第II様式の壺と共に伴っている。出土した3点とも在地産のものであり鉢Bの中では25%を占めている（鉢全体の5%）。タイプの異なる把手付きの鉢が同時に使用されていたのである。

壺・鉢の底部は93点（在地産51点、他地域産42点）出土しており、底径3.8～17.8cmまでみられるが7～8cm前後が多い。出土土器中最大の（第41図144）は、口頸部を欠失する壺で底径12cm、残存器高52cmである。底径12cm以上の底部は12点（在地産10点、他地域産2点）あるが、量は少ない。

甕A 「和泉・河内型」甕と呼ばれるものであり、他地域産は13%しか見られない。体部外面をヘラミガキせずにヘラケズリだけで仕上げる在地産の土器が少数存在した。（第37図74）などの例からみて、通常の甕Aのヘラミガキの手順を省略したものである。同様に体部外面をヘラケズリで仕上げるものに「紀伊型」の甕や藤原宮下層遺跡等で出土している甕Bがあるが、胎土や形態で異なる。出自は明確でないが、本遺跡及び周辺で使用された在地産の甕の一形態⁶⁾

と考えたい。なお、「紀伊型」の甕は、今回出土せず、第1～3次調査で2点出土しているにすぎない。「紀伊型」の甕は本遺跡ではたこ壺のようにごくわずか客体として存在するのであろう。⁹⁾

甕Bのうち、B-1は、出土量も少なくすべて他地域産であるが、第12次調査出土品などにわずかに在地産のものがみられ、すべて搬入品とはいえない。しかし、本遺跡においてはこのタイプの甕は少数しか存在せず、他地域産が大半であることは確実である。¹⁰⁾

甕B-2は、59%が在地産である。大和におけるこの時期の「大和型」の甕は、口縁端部に刻み目を施すのが通例（B-1）¹¹⁾でこのタイプのものは少ない。本遺跡の特徴を考えることも出来るが、山城の鶏冠井遺跡にも存在し即断できない。甕B-3は、摂津の安満遺跡で多く出土する「大和型」と同タイプと考えられる。在地産が83%と多いのが特徴である。甕Aの中にヘラミガキを施す前にハケメを用いるものがあり、在地産が多いことから「和泉・河内型」甕のヘラミガキを省略したものとみることも出来る。¹²⁾

甕Cは、出土量が少ない点で甕B-1と同様であるが、すべて在地産であることが異なる。第12次調査出土土器も4点のうち1点を除いて在地産である。「播磨型」の甕であるが、本遺跡ないし周辺部で「播磨」ないし「摂津」の影響を受けて、製作されたのであろう。¹³⁾

以上のように本遺跡で製作、使用された主要な甕は、「和泉・河内型」と呼ばれる甕Aを主体に、甕B-3・B-2がある。甕B-3・B-2・Cに関しては現状では他地域からの影響のもとに在地で製作されたと考えられるが、本遺跡において1タイプの甕だけを製作、使用していたのではない事が判明した。また、3タイプの甕に「逆L字状」と「く」の字状の口頸部を持つものがわずかながら存在し、第I様式から第III様式に移る状況を反映していることが知られた。

甕蓋は、11%が他地域産である。甕全体の他地域産の割合は、27%であるのでこの比率からみると、蓋と甕がセットで搬入されるよりも、甕だけがもたらされた場合が多かったといえるのではなかろうか。

壺・鉢の体部片に認められた文様は、同一個体と考えられるものは複数の破片であっても1点として取り扱い、437点（在地産323点、他地域産114点）を確認した。文様の種類と点数は、単帶の櫛描直線文282点（在地産210点、他地域産72点）、複帶の櫛描直線文5点（在地産）、単帶ないし複帶の判別できない櫛描直線文46点（在地産32点、他地域産14点）、櫛描直線文と波状文14点（在地産8点、他地域産6点）、櫛描波状文14点（在地産2点、他地域産12点）、櫛描直線文と扇形文6点（在地産2点、他地域産4点）、櫛描扇形文2点（他地域産）、櫛描流水文ないし擬流水文64点（在地産61点、他地域産3点、うち 在地産4点は、櫛描擬流水文と波状文）、付加条のヘラ描沈線と櫛描直線文2点（在地産）、櫛描直線末端扇形文1点（他地域産）、櫛描直線文と直交するヘラ描沈線1点（在地産）である。単帶の櫛描直線文が、65%を占め（不明も含めると75%）次いで流水文・擬流水文が、15%存在し、両者合わせると90%に達する。複帶の櫛描直線文を含む残りの各種文様は10%の中に収まる。池上遺跡では総数90%近くが櫛描直線文で0.3%が流水文であるのと比較すると櫛描流水文・擬流水文の比率が高く、この文様の

95%を在地産がしめることと合わせて本遺跡の特徴といえる。

和泉の特色である櫛描直線末端扇形文や付加条のヘラ描沈線文（在地産）が少数ながら出土しているのは、交流を考える上で興味深い。

文様帶間をヘラミガキするものは、櫛描直線文（在地産21点、他地域産19点）・櫛描直線文と波状文（在地産、他地域産各1点）・櫛描直線文と扇形文（他地域産1点）櫛描流水文（在地産2点）・櫛描波状文（他地域産4点）にみられるが数は少ない。

黒色物質の塗付が壺・甕・鉢などに少数認められた。一番多い鉢Aでも66点中の9点にすぎない。¹⁵⁾ ¹⁶⁾ 池上遺跡や恩智遺跡でも確認されているが第I様式の名残であろう。

土器の成形に際し用いる粘土紐の幅は、今回確認した限りでは、1.5~2.5cm前後のものではないかと考えられる。接合の仕方には、内傾と外傾が混在し、第I様式と、第III様式の間に位置する本様式の特徴を示している。また胎土中の砂粒は、各器種とともに大きなものが含まれ最大のものは6×9mmの閃綠岩の亜角礫であり、いくつかの土器では内外面に一つの砂粒が表れているものもみられた。

胎土から、各器種に他地域産のものが見られた。主要な器種の壺で26%、甕で27%、鉢で27%を占める。¹⁷⁾ これは、都出比呂志氏が、『甕をも含む、基本的な生活用具としての土器を携えた、人間そのものの移動、すなわち、彼地において生活を営む目的の移動と考えるのが最も適切である。』と考えられるB類型の土器の移動である。

本遺跡に少数しか存在しない「播磨型」の甕である甕Cの大半が在地産のものである。逆に、甕B-1は他地域産がほとんどである。前者はこのタイプの甕を主として製作、使用していた人が、本遺跡に移り住んで理由は不明ながら、少量製作した結果、後者は交流による搬入品と考えられる。

今回出土した土器の形態などから判明する周辺地域との関係は、「播磨」「摂津」「山城」「大和」「和泉」との交流が認められることである。ただ交流の仕方には、強弱があったよう¹⁸⁾ 甕B-3・甕C・木葉底をもつ土器、「山城系」の甕や瘤状把手をもつ鉢Bの存在から、「播磨・摂津・山城」との関係が甕B-1や櫛描直線末端扇形文などにみられる「大和・和泉」に比べ強かったことが知られた。いいかえれば、淀川水系の地域のほうが、旧大和川水系の地域に比べて、第II様式の時期には本遺跡に与えた影響が多いということであろう。

環濠をはじめとする遺構から出土した土器は、前述したように第I様式と第III様式に属す土器を含んでいない。第II様式が古い段階と新しい段階に分かれることは、古くから指摘されているが、まだその明確な基準は示されていない。¹⁹⁾ 第I様式新段階の土器と混在する美園遺跡や高井田遺跡の土器を古い段階と考えると、今回報告の土器は新しい段階ということになる。ただ恩智遺跡S D 04の資料よりは、各器種の型式からみて古くなると考える。

土製品

小型瓢形壺は、大小各1点（第46図2・3）が出土し、いずれもC地区環濠第2層よりの出土である。この種の壺は、弥生時代前期に属するものが摂津の安満遺跡・上ノ島遺跡でみられ、中期初頭に近江の長命寺湖底遺跡・中期末に尾張の朝日遺跡などで出土している。²⁰⁾明確な遺構からの出土が少なく朝日遺跡の1点が溝内出土である。また、河内の佐堂遺跡で古墳代前期の不明遺構より可能性のある土器片が発見されている。²¹⁾²²⁾²³⁾²⁴⁾²⁵⁾

安満遺跡の例は、器高23.4cmあり実用品として十分役立つものであるが、他は器高10cm前後かそれ以下の小形で普通に置いては立たない非実用的な土器である。上ノ島遺跡例以外は、今回の例も含めて、櫛描擬流水文や鋸歯文などで外面を過度に飾ることと合わせ、ヒョウタン製容器を模した、銅鐸形土製品と同様の祭祀用土器の一種と考えられる。

今回出土例を含め口縁部の残るもの（上ノ島・朝日遺跡例）は、口縁部直下に円孔を1個穿っている。おそらく穴に紐を通して木の枝などに吊り下げて祭時に使用したものであろう。今回出土の例から見ると、使用による摩滅などがほとんどみられず祭祀が終わった後、ほとんど再使用することなく環濠に投棄したと考えられる。

出土例からみると、弥生時代の全期間を通じて小型瓢形壺を用いた祭祀が畿内および周辺部「近江」で行われ、中期末には東海地方にまで及んでいることが明らかである。祭祀の具体的な実態については不明である。

なお、第7次調査の土壙13から第III様式に属する縦位の把手をもち外面にタタキを施した器高16.8cm、体部最大径6.4cmの瓢形壺が出土しているが、大きさからみて実用品か祭祀用土器かの区別がつかない。もし、祭祀用土器であれば、把手をもつ点から今回の出土例とは異なった祭祀に使用されたものと考えられる。

井戸と考えられる土壙12より出土した板状土製品（第46図3）は、類例を知ることができなかった。形態からみて実用品とは考えられず祭祀用の土製品と思われる。おそらく何らかの器物を土製品に移し替えたものであろうが、それが何であったかは不明である。使用によると思われる摩滅がみられないことから、小型瓢形壺と同様何度も使用されるのではなく、祭祀に用いられた後、遺棄されたものであろう。

石器

石庖丁の未製品が出土したことから本遺跡において原材を手に入れ、製品に加工していたことが明らかになった。サヌカイト製石器も、剥片や石核が出土していることから二上山より原材を手に入れ加工し製品にしていたことはまちがいない。大型蛤刃石斧は閃緑岩を用いている。

石器は、土器に比べて少量しか出土していない。第12次調査でも同様であり理由は明らかでないが、調査地が集落の北辺にあたる環濠と方形周溝墓群であることと関連するかもしれない。環濠より石鏃が1点も出土していないことが、戦いに備えて造られたと考えられる遺構の性格からみて注意を引く。

カゴ状纖維製品

C地区、環濠、2層内より、カゴとみられる纖維製品が1点（第54図・図版70）出土している。以下、その事実報告に、若干の考察を交えながら行論していきたい。

まず、記述にあたり、二・三の約束事を確認しておく。カゴの口径に対して垂直方向を経、平行方向を緯とする。編み方の呼称については研究者間で異同が甚だしいが、経緯が密接して緯が、 x 本越え・ y 本潜り・ z 本送りにより経と結縛しているものを「網代編み」、緯の送りがなく、経緯に隙間が生ずるものを「ザル目編み」、経と経、緯と緯の隙間が大きく、基本的に、経は編まず、緯がよじりながら経と結縛するのを「モジリ編み」としておく。

さて、出土状況では、表面で3段のモジリ編みを確認し、グローブ状の遺存状況から当初箕状の纖維製品と考えたが、樹脂による固定、取り上げののち、室内にて裏面の精査を行ったところ、縁巻き及び紐を確認したので、縁巻きから2段目で二つ折りになったカゴと判明した。とすれば、現存長で、器高64cmを測ることになる。但し、底部は欠損している。カゴの縁巻きは、現状で長径約50cm、短径約16cmの楕円形を呈する。3条巻き編みを行う。体部は3~3.5cm間隔の経に、1回ずつ緯をよじっている。緯の間隔は10cmを測る。縁巻き部での結縛部分が確認できたので、カゴの紐と思われる。またモジリ編みの技法は単純なものである。底部は欠損している。材質はフジツル系である（渡辺誠氏御教示）。

次にこのカゴの用途について考えてみたい。遺跡で出土するカゴ類の全国的な規模の集成は既に植松なおみ氏により行なわれている。ただ氏の所論は資料の集成にとどまり、形態や手法の差が時期あるいは地域の差を表象するものかどうかの議論は行われていない。カゴ類の材質の問題と併せ、今後の資料の蓄積により解明しなければならないだろう。まず、個々の資料の分析・吟味を通じて、例えば弥生時代の纖維製品の特質を考えるべきだと思われる所以である。

モジリ編みがよく行われるものに漁具の筌がある。弥生時代の筌の出土例は福岡県辻田遺跡例（後期）や大阪府山賀遺跡例（前期）が広く知られている。両例とも砲弾形を呈し、緯の間隔が3cm前後であるのに対し経は数mm程度である。これら筌の出土例に対し、本資料の場合、経緯とも間隔が大きく、筌の蓋然性は低いと言わざるを得ない。これは、現存する民俗例と対比した場合でも肯首されるところである。また、その間隔ゆえに、単なる運搬用のカゴと考えることもできない。

二、三の研究者の方々に、本資料の用途・機能を伺ったところ、編袋とする説と落ち葉拾いのカゴ説の二説の御教示を得ている。モジリ編み製品の類似という点では、土器を包むカゴがある。出土例としては、奈良県唐古遺跡例（縄文晩期）や大阪府西岩田遺跡例（布留式併行）などがある。両例とも紐がないが、本資料をそれにあてはめれば、住居内で貯蔵用に吊るすカゴが考えられる。今後の資料の増加が期待されるところである。

注

- 1) 土器の比率計算は、山本裕子に負う所が多い。
- 2) 井藤暁子他「土器編」(『池上遺跡第2分冊』P30 1979年) 財団法人大阪文化財センター
- 3) 曾我恭子(『恩智遺跡I』P147 1980年) 瓜生堂遺跡調査会
- 4) 小野久隆、奥野都「木器編」(『池上遺跡第4分冊の2』PL26、PL53 1978年) 財団法人大阪文化財センター
- 5) 芋本隆裕「遺構編」(『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3』P31～P33 1984年) 財団法人東大阪市文化財協会
- 6) 井藤暁子「近畿」(『弥生土器I』P217 1983年) ニュー・サイエンス社
- 7) 6) に同じ。P217
- 8) 木下正史他(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告III』P151～P154 1980年) 奈良国立文化財研究所
- 9) 才原金弘氏の教示による。
- 10) 上野利明、才原金弘(『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』P56～P68 1987年) 財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会
- 11) 松本洋明「弥生土器の考察」(『末永先生献呈論文集』乾 P115～P151 1985年) 末永先生米寿記念会
- 12) 森田克行他「安満遺跡発掘調査報告書」(『高槻市文化財調査報告書第10冊』P27～P29 1977年) 高槻市教育委員会
- 13) 10) に同じ。P56～P68
- 14) 2) に同じ。P30
- 15) 2) に同じ。P30
- 16) 3) に同じ。P150
- 17) 都出比呂志「弥生土器における地域色の性格」(『信濃』第35巻4号 P252～P255 1983年) 信濃史学会
- 18) 井藤暁子他(『美園』P480～P486 1985年) 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 19) 萩田昭次(『布施市高井田遺跡』P12 1963年) 布施市教育委員会
- 20) 原口正三「考古編」(『高槻市史』第6巻PL31 1973年) 高槻市史編さん委員会
- 21) 勇正広、橋爪康至他(『尼崎市上ノ島遺跡』P16 1973年) 尼崎市教育委員会、この報告では、小型蛸壺土器とされている。
- 22) 宮崎幹也(『長命寺湖底遺跡発掘調査概要』P16 1984年) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 遺物は、宮崎氏のご好意により実見させていただいた。
- 23) 中川真文「土製品」(『朝日遺跡II』P12 1982年) 愛知県教育委員会
- 24) 井藤暁子、阪田育功他(『佐堂その2-1』P81 1984年) 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

- 25) 瓢形壺について、金閥恕先生を通じて、佐原真氏の教示を得た。類例については、秋山浩三氏の教示を得た。
- 26) 芦本隆裕「遺構編」(『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3』 P34 1984年) 財団法人東大阪市文化財協会

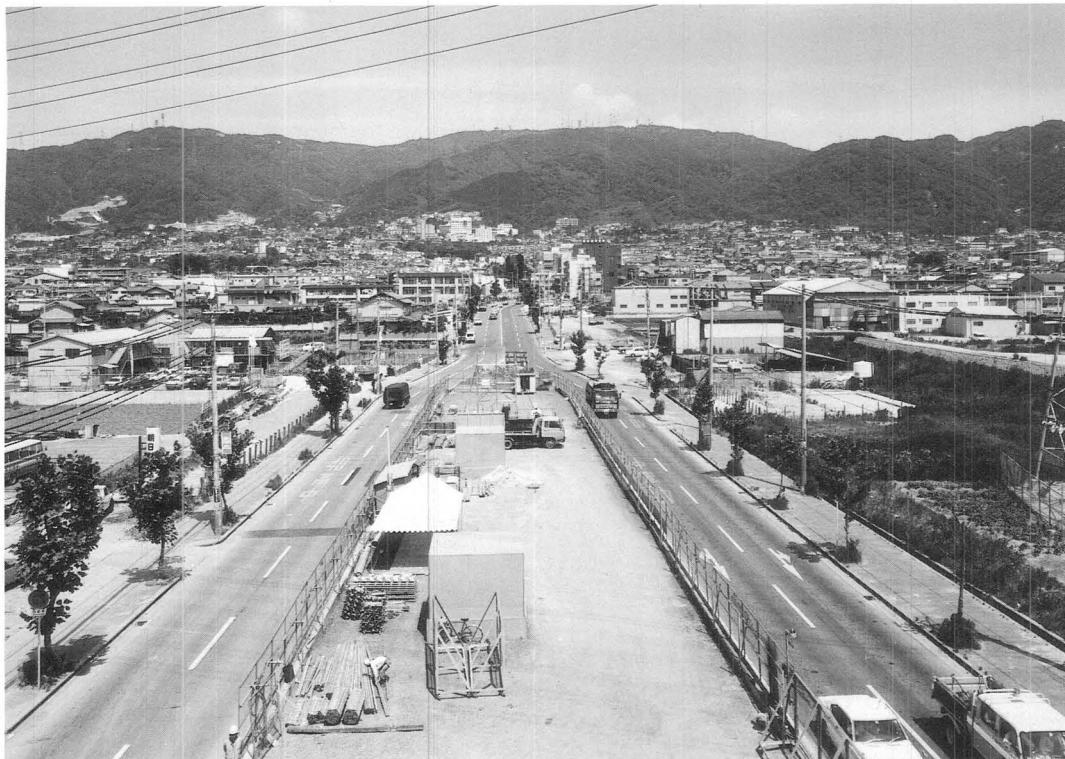
カゴ状繊維製品〔参考文献〕

- 植松なおみ 「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」(『物質文化』35 P20~P35 1980年)
- 角山幸弘 「縄文晩期の編物」(『横田健一先生環暦記念日本史論叢』所収 P55~P67 1976年)
- 小林行雄 (『続古代の技術』 P101~P186 1964年)
- 佐藤庄五郎 (『図説竹工芸』 1974年)
- 名古屋市博物館 (『海の漁具・川の漁具』 1983年)
- 渡辺誠 「弥生時代の筌」(『稻・舟・祭』所収 P121~P137 1982年)

図 版



調査地全景(上・東方向)



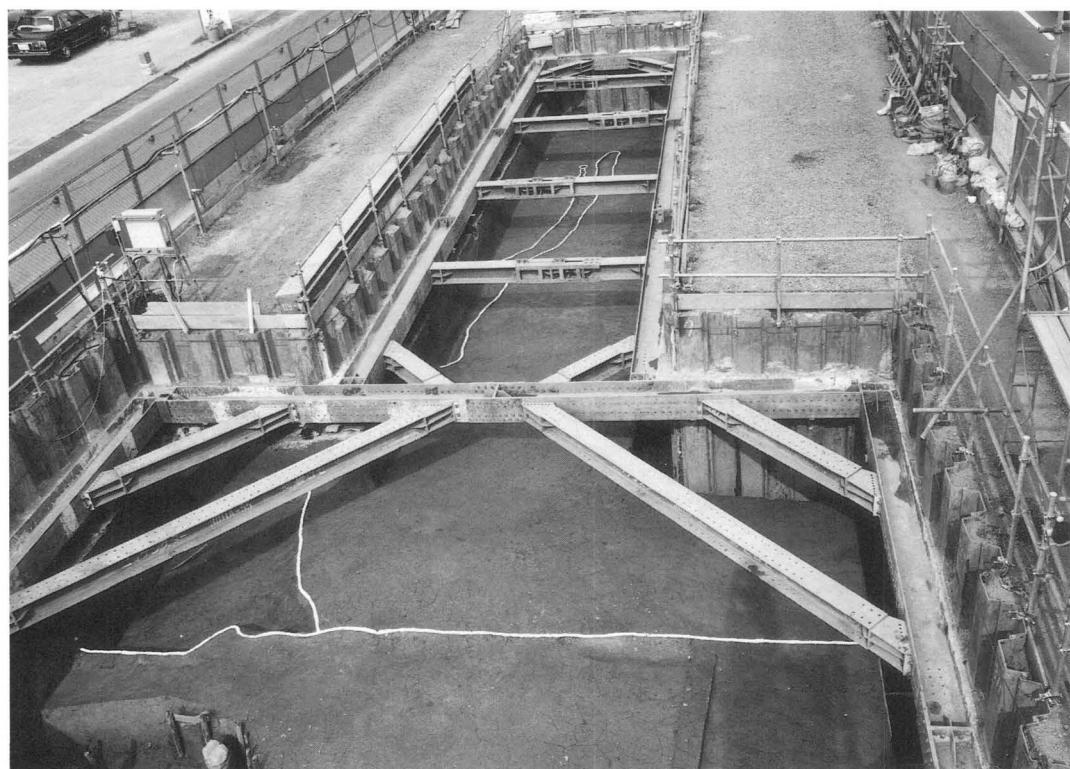
1. B地区より生駒山遠望(西より)



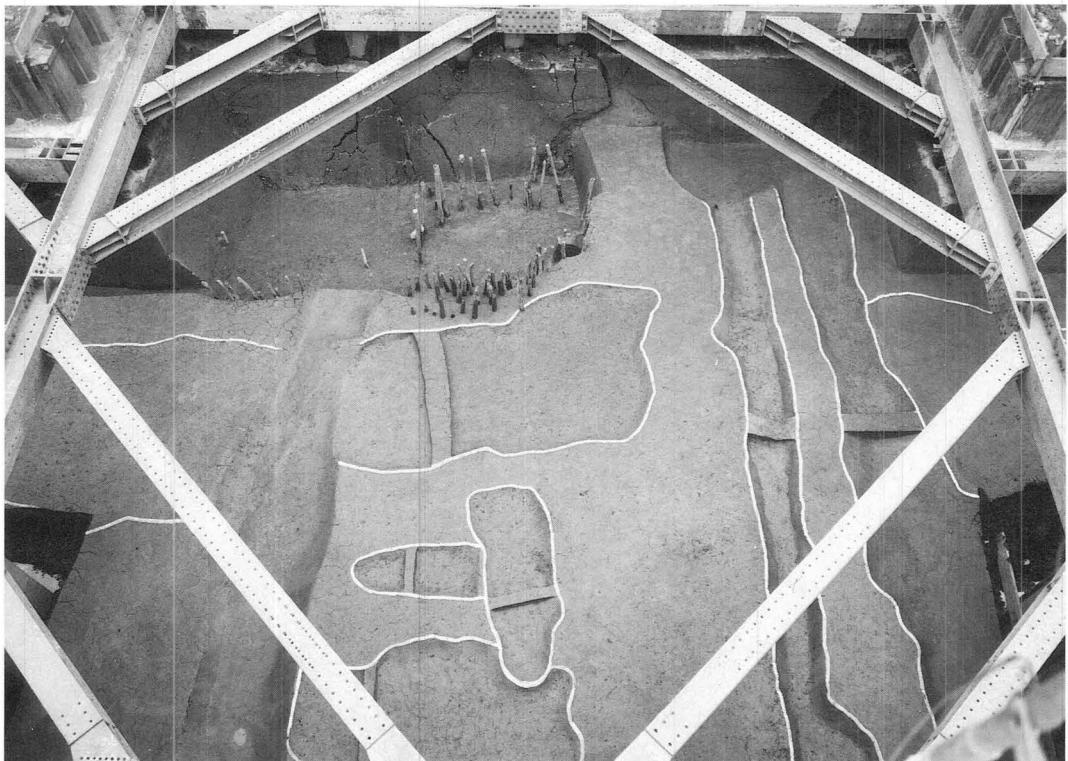
2. B～D地区第1遺構面全景(東より)



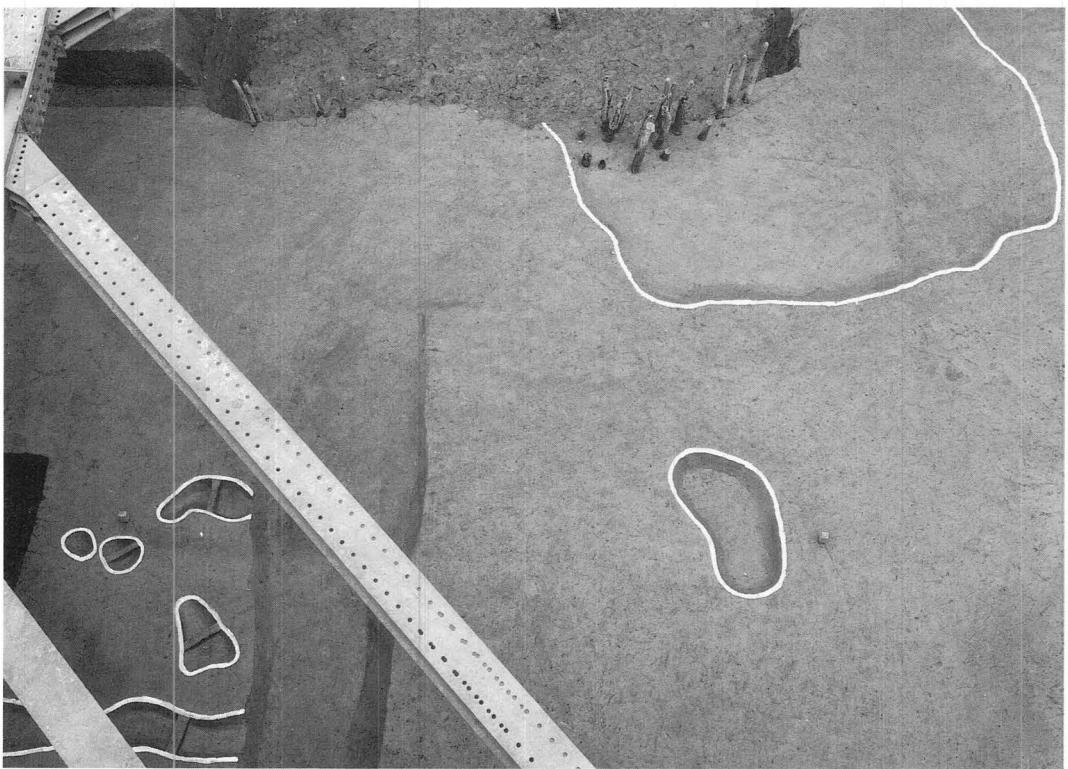
1. C地区掘り上げ田溝の杭群(西より)



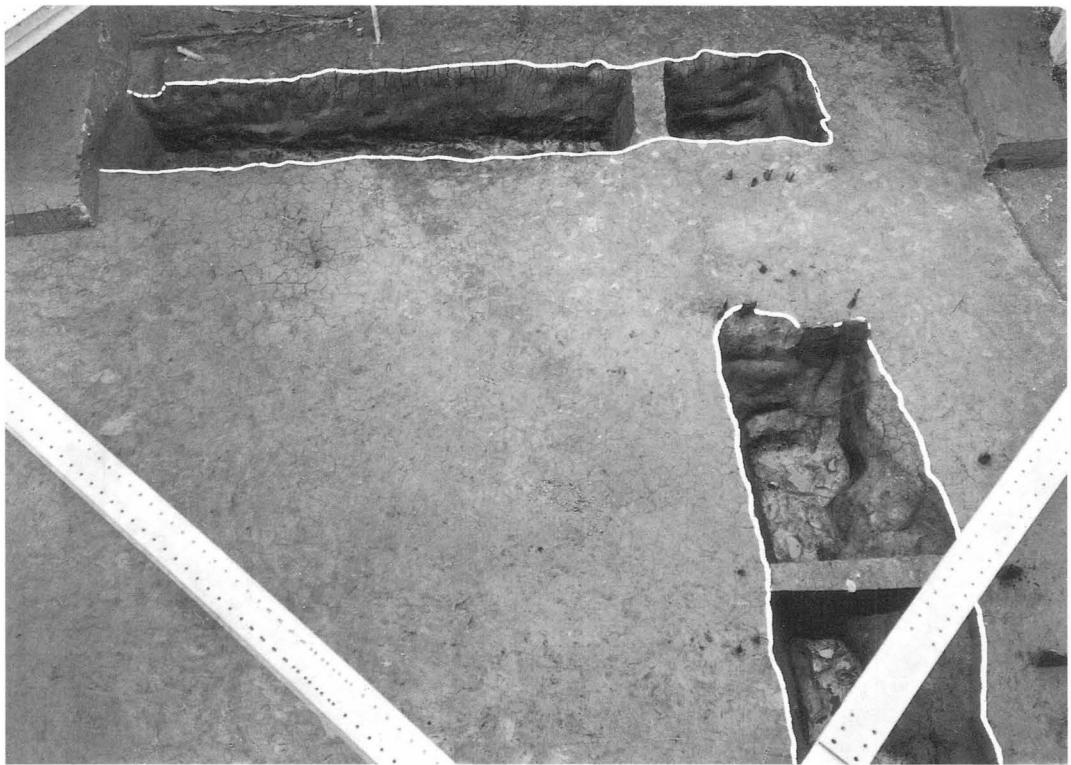
2. B・C地区第2遺構面全景(西より)



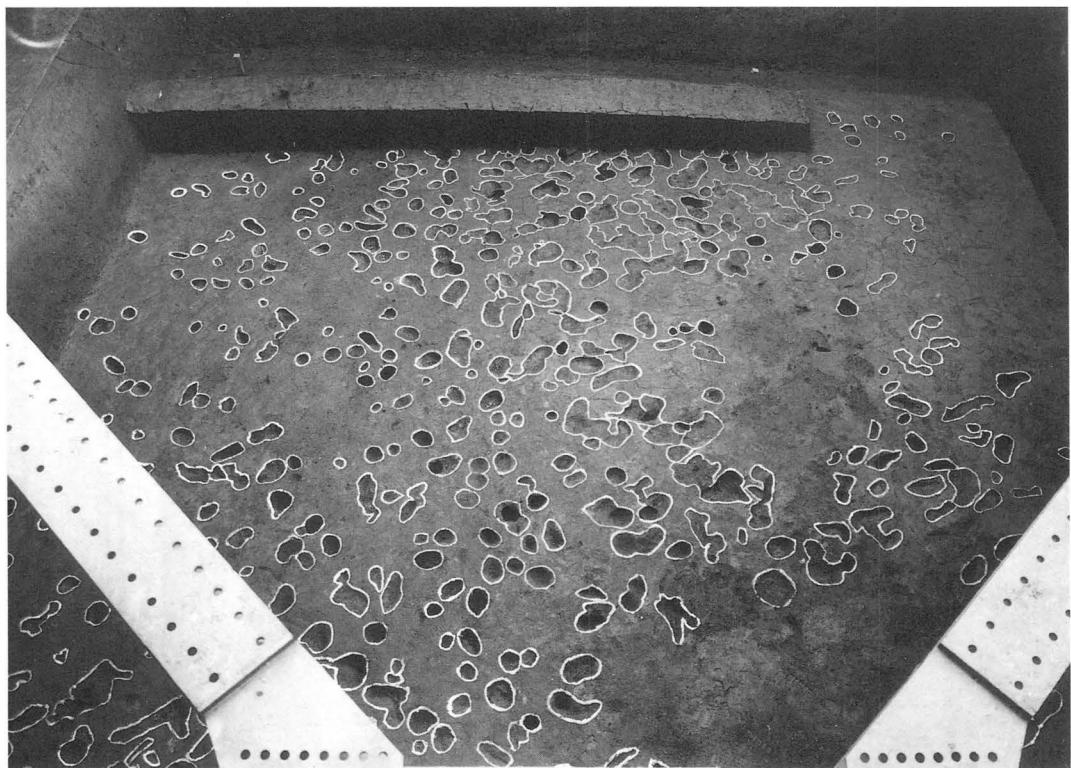
1. C地区第3遺構面全景(南より)



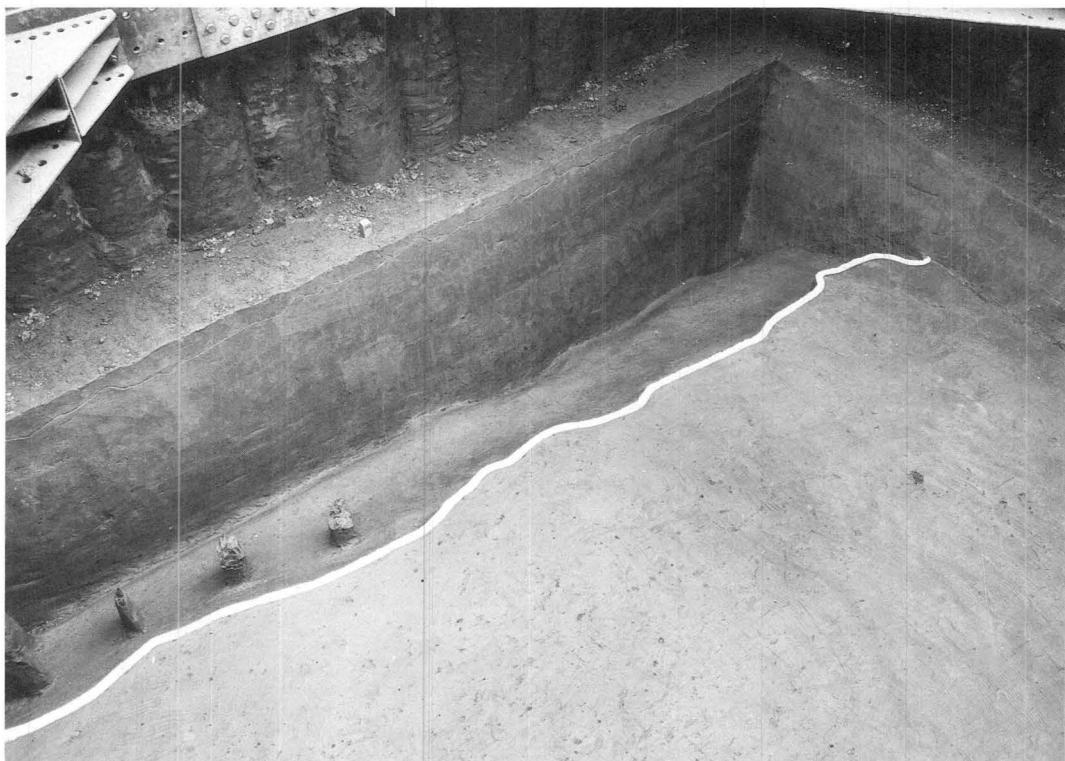
2. C地区第4遺構面全景(南より)



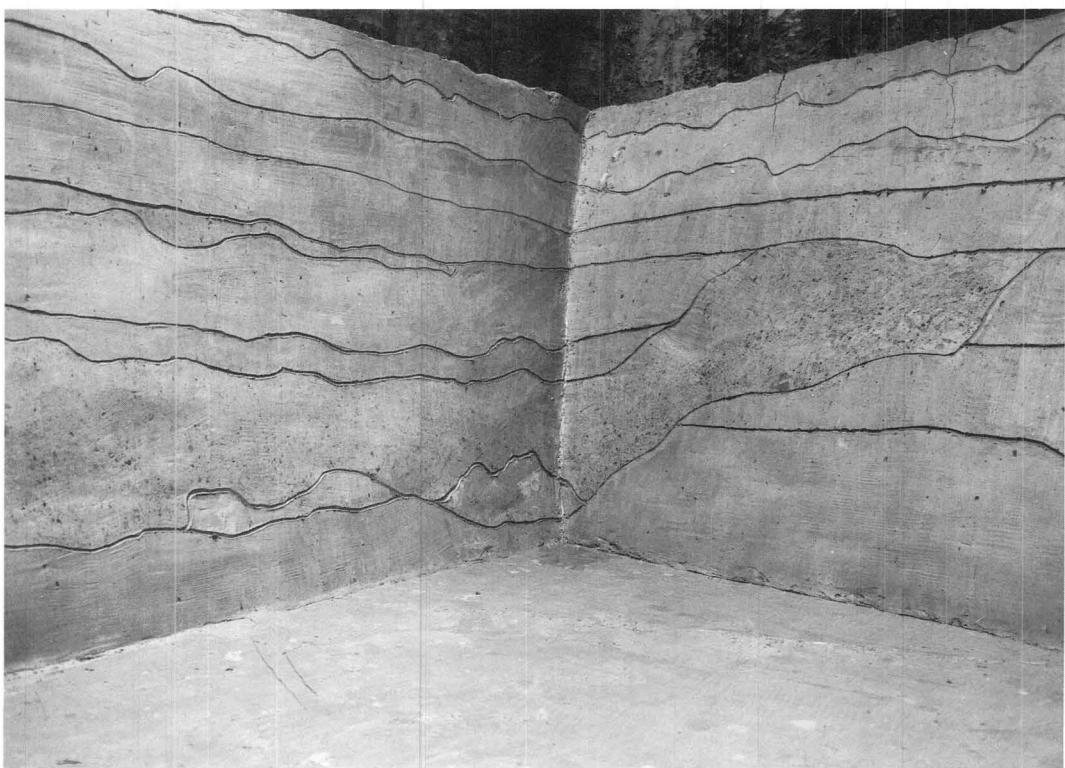
1. C 地区溝11・12検出状況(南より)



2. E 地区足跡検出状況(南より)



1. F地区溝13検出状況(南東より)



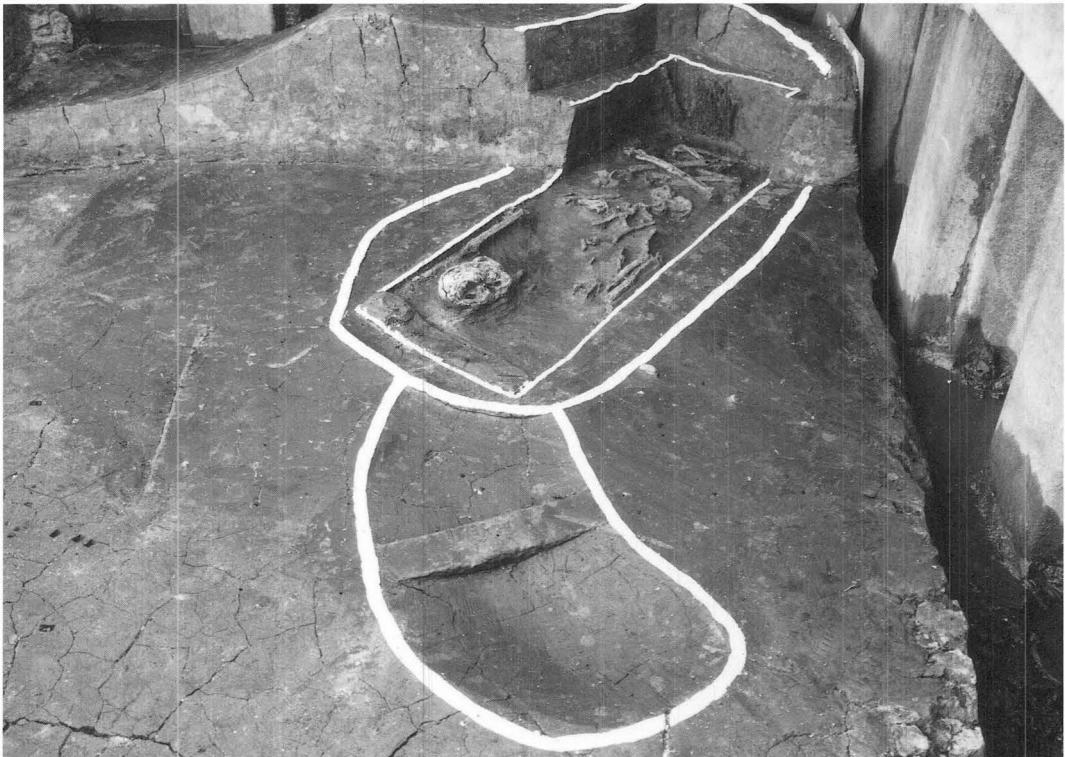
2. F地区溝13土層断面(南西より)



1. A地区第7・8号方形周溝墓全景(南より)



2. A地区第8号方形周溝墓全景(南より)



1. 第7号方形周溝墓木棺・土壤11検出状況(北より)



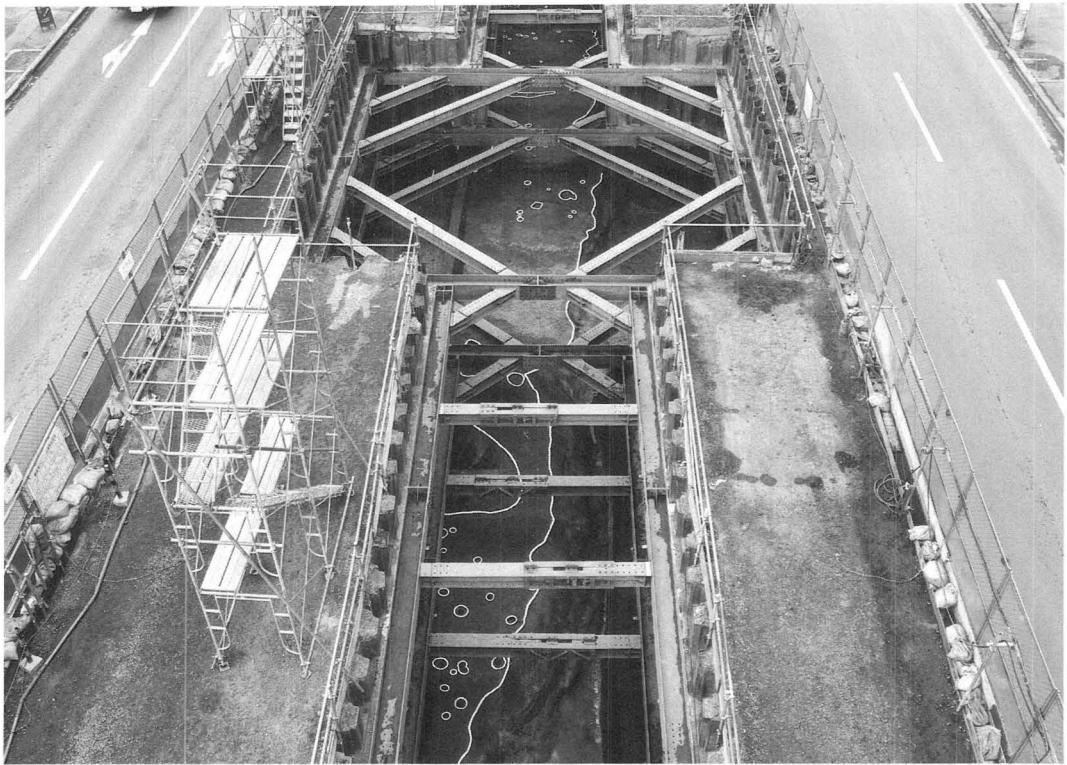
2. 第7号方形周溝墓木棺検出状況(西より)



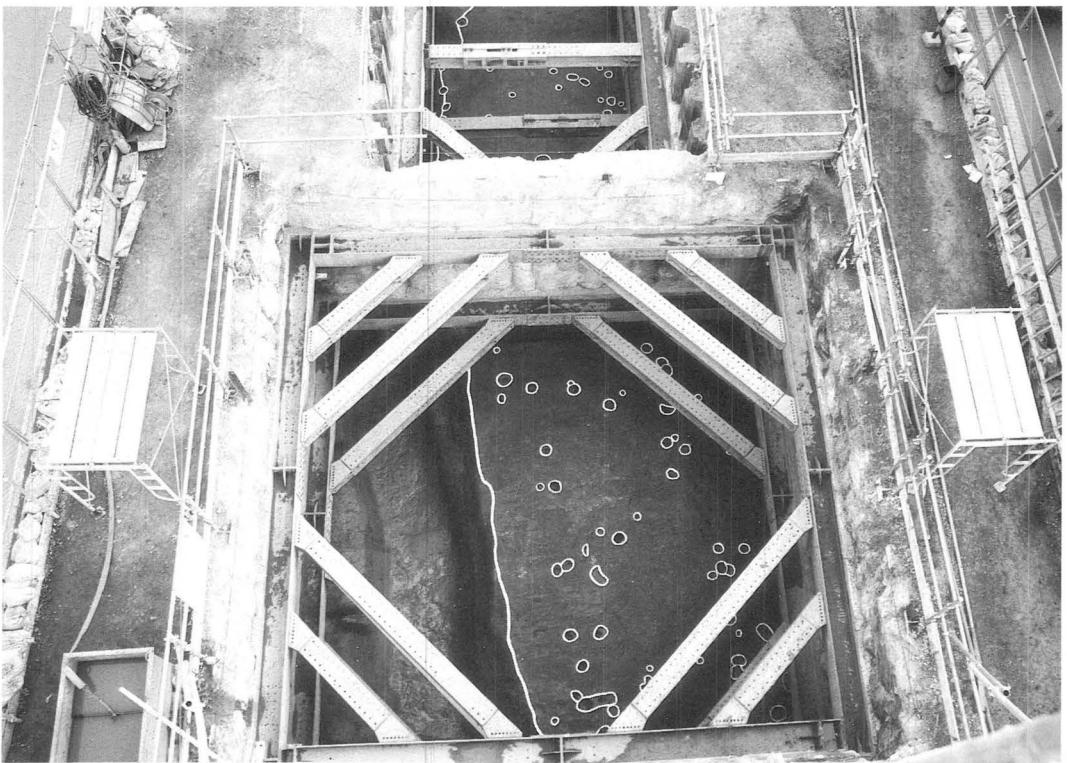
1. 第8号方形周溝墓木棺検出状況(南西より)



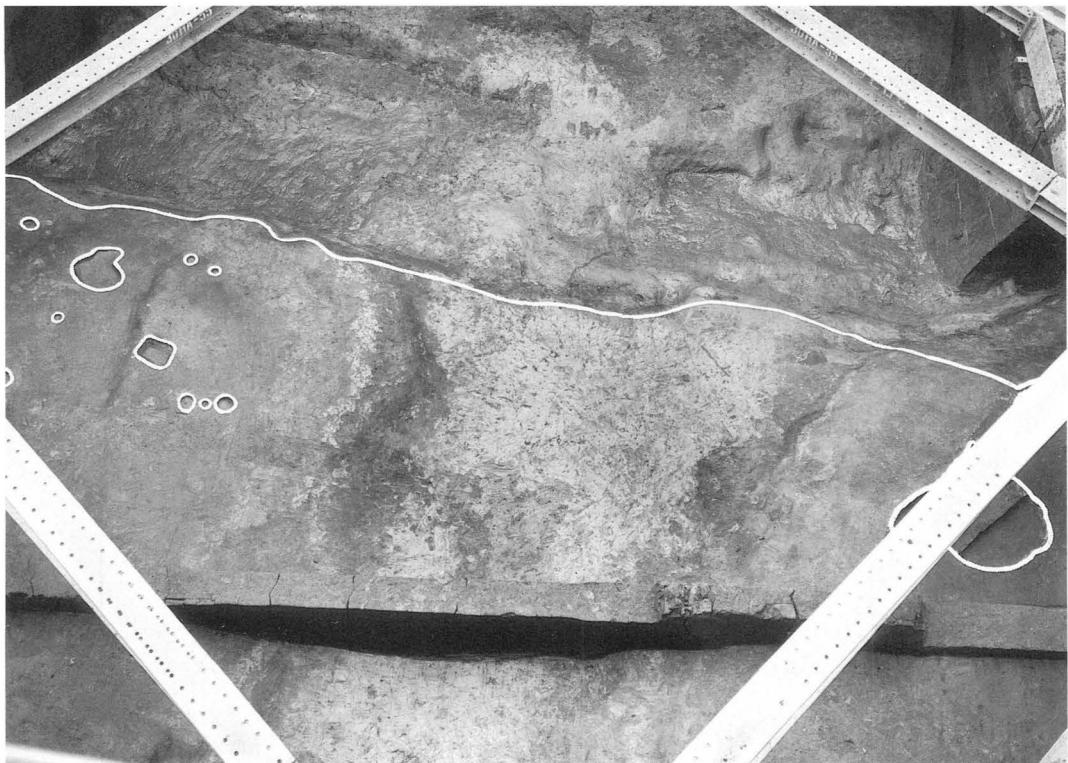
2. 第8号方形周溝墓木棺検出状況(南より)



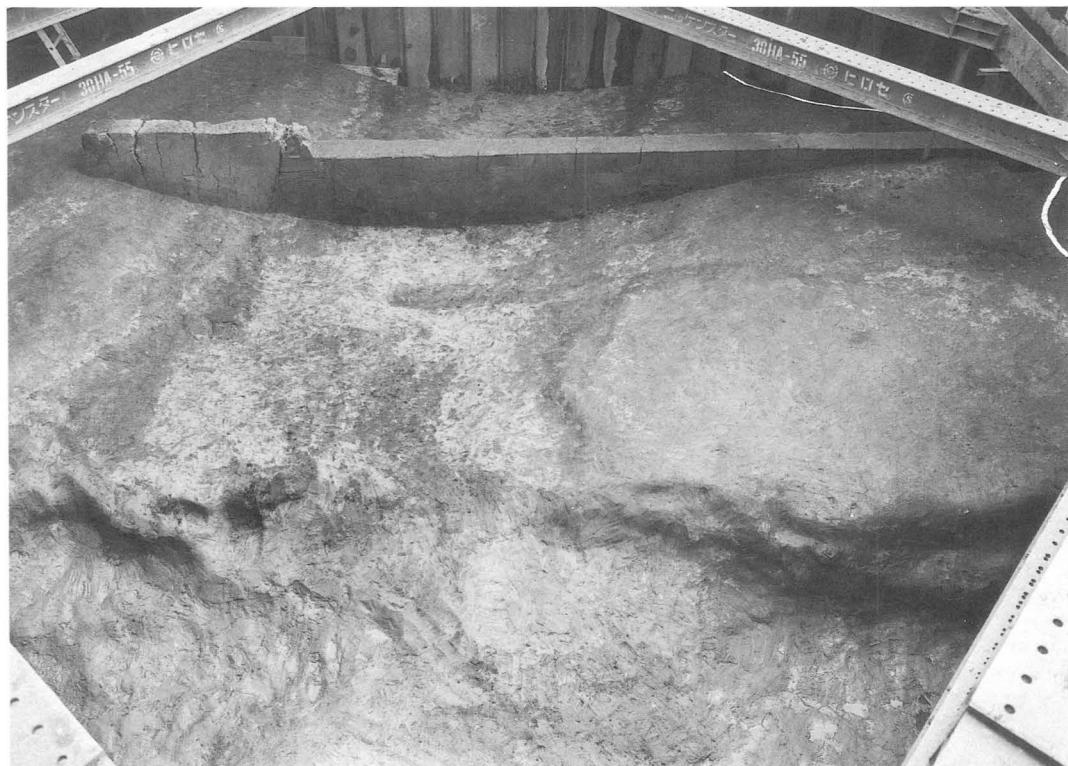
1. B~D地区環濠・柵列検出状況(東より)



2. D·E地区環濠・柵列検出状況(西より)

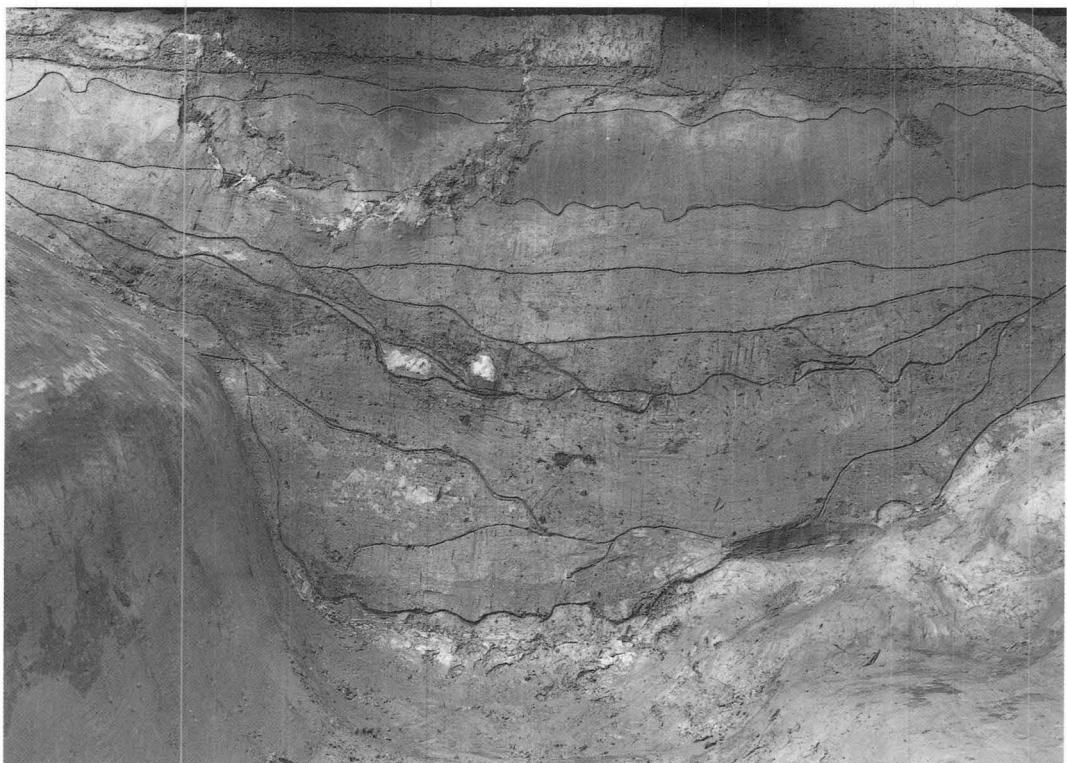


1. C地区環濠・柵列検出状況(南より)

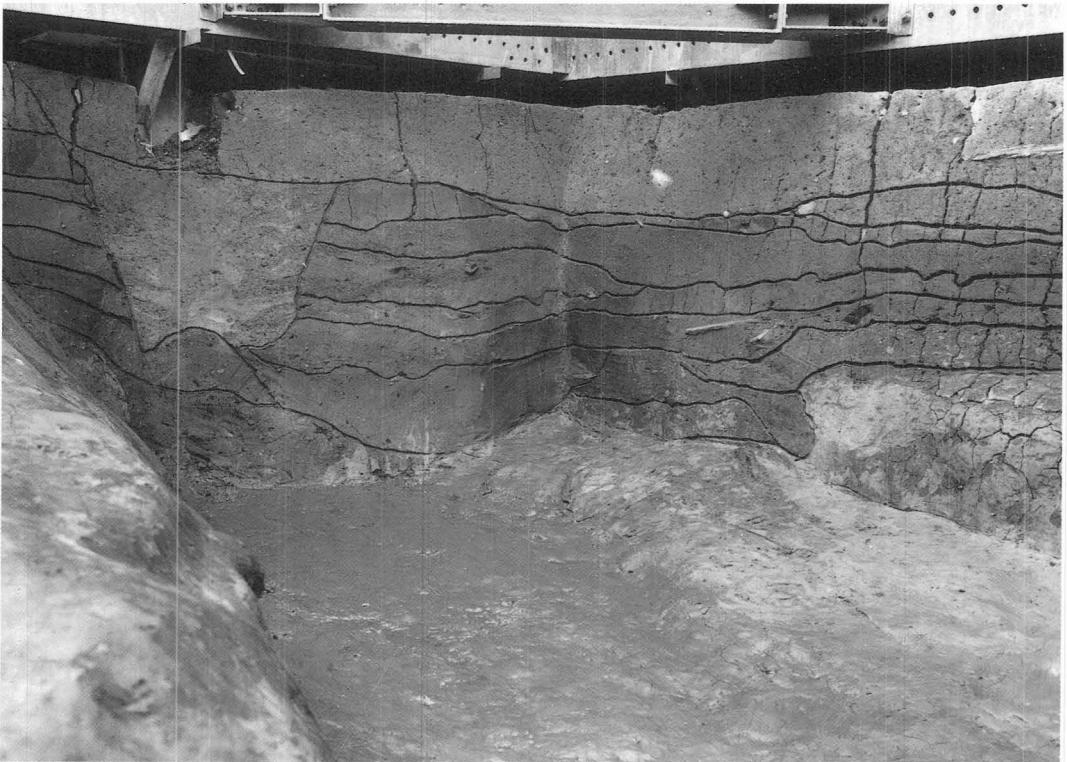


2. C地区環濠検出状況(北より)

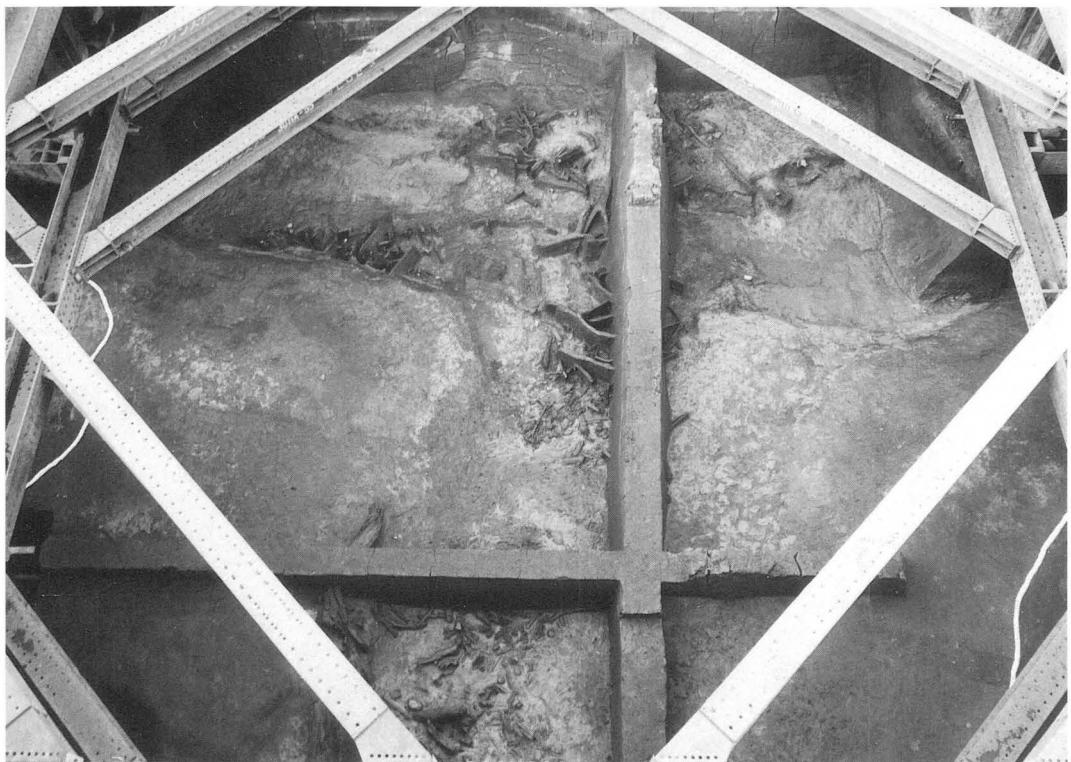
図版 12
遺構



1. E地区環濠断面(東より)



2. C地区環濠断面(東より)



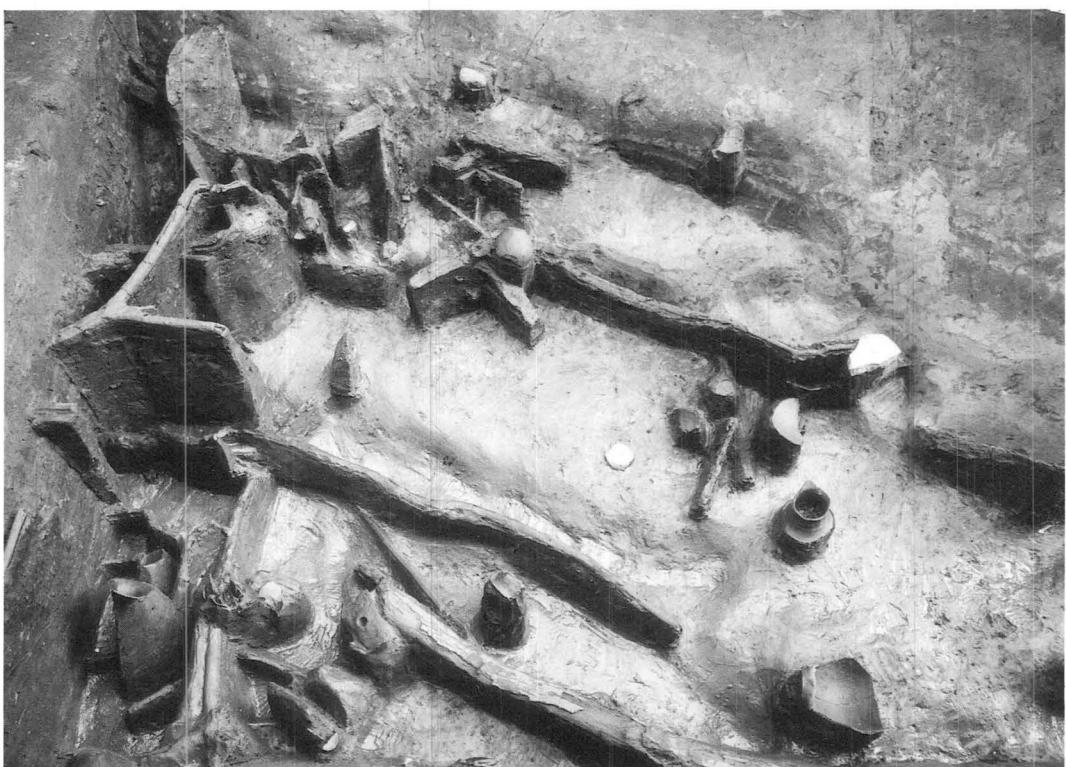
1. C地区環濠遺物出土状況(南より)



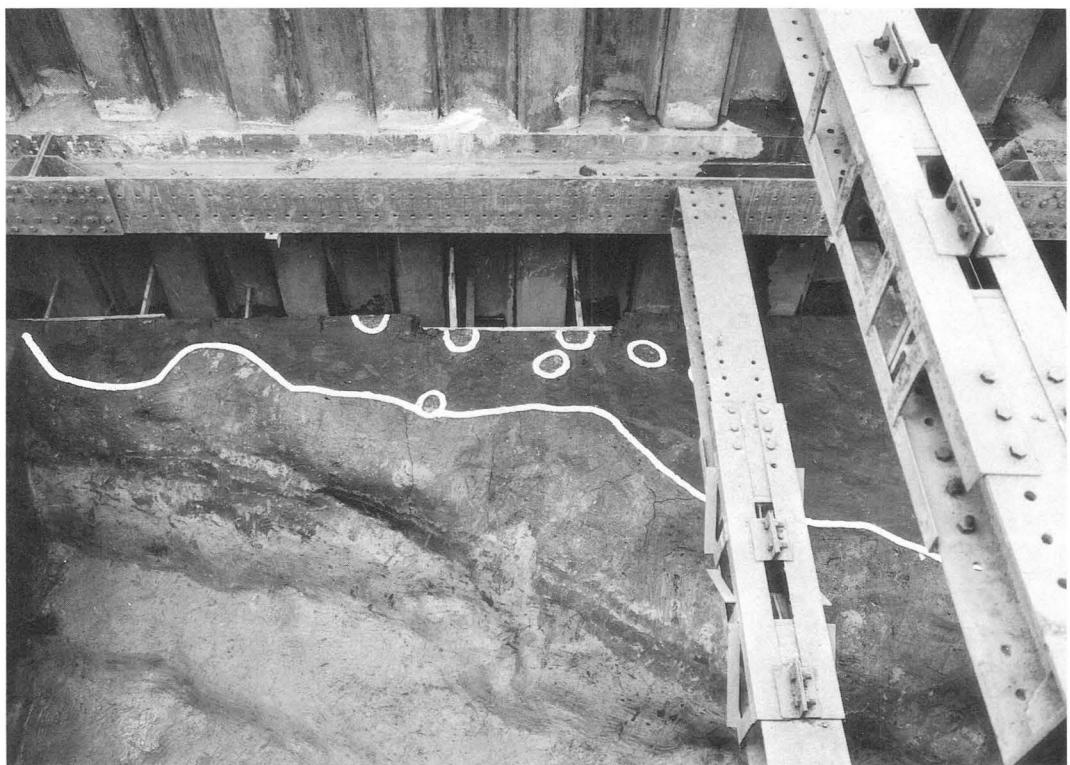
2. C地区環濠遺物出土状況(上より)



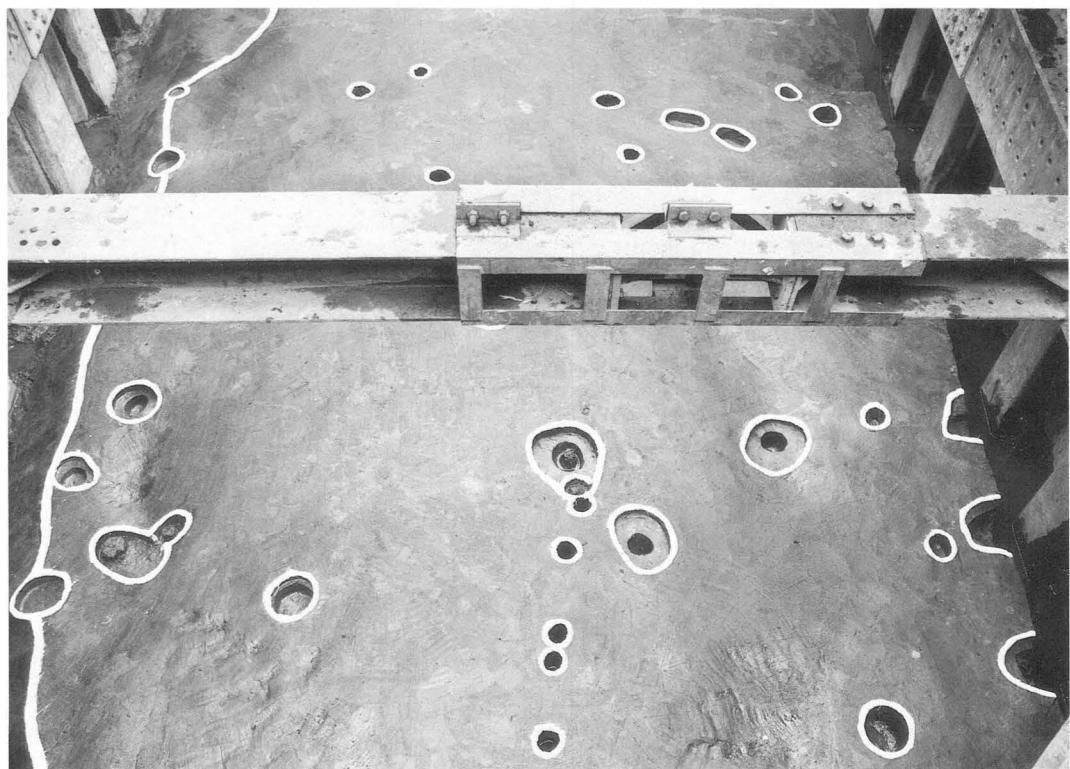
1. B地区環濠木製品(鋤・鍬)出土状況(西より)



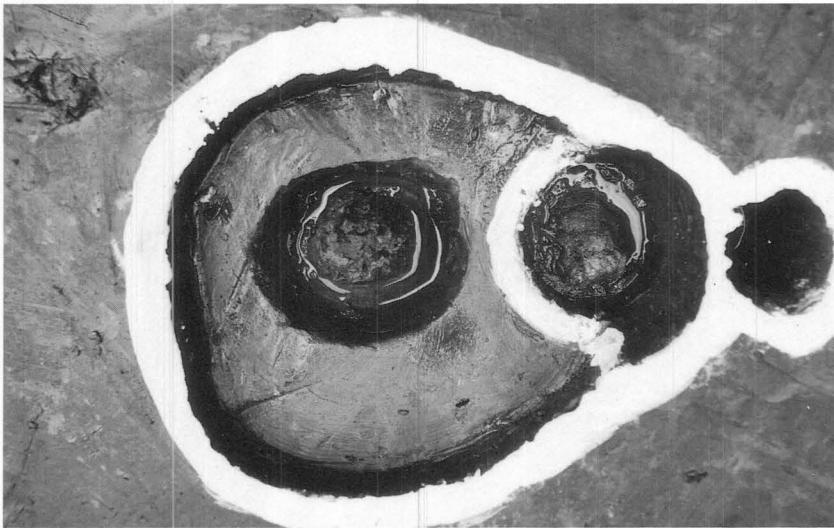
2. B地区環濠遺物出土状況(南より)



1. B地区環濠・柵列検出状況(北より)



2. D地区柵列検出状況(西より)



1. D地区ピット117
検出状況
(上より)



2. D地区ピット
立割状況
(南より)



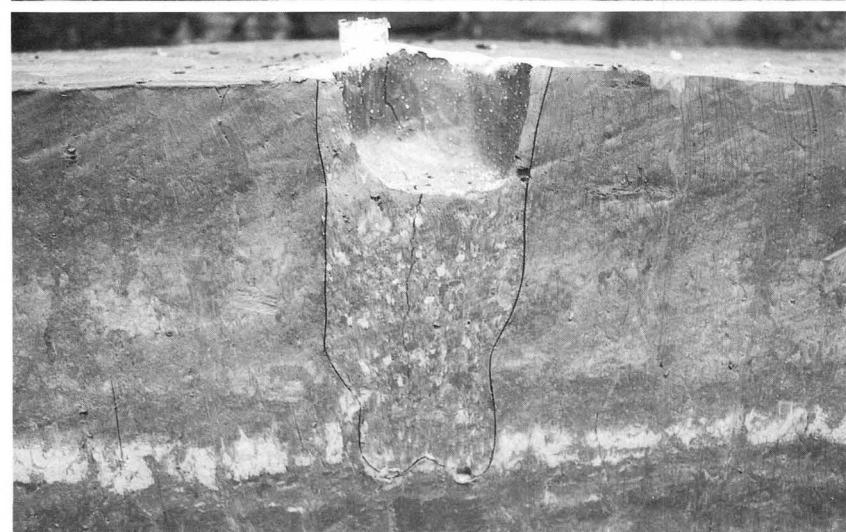
3. E地区ピット179
立割状況
(東より)



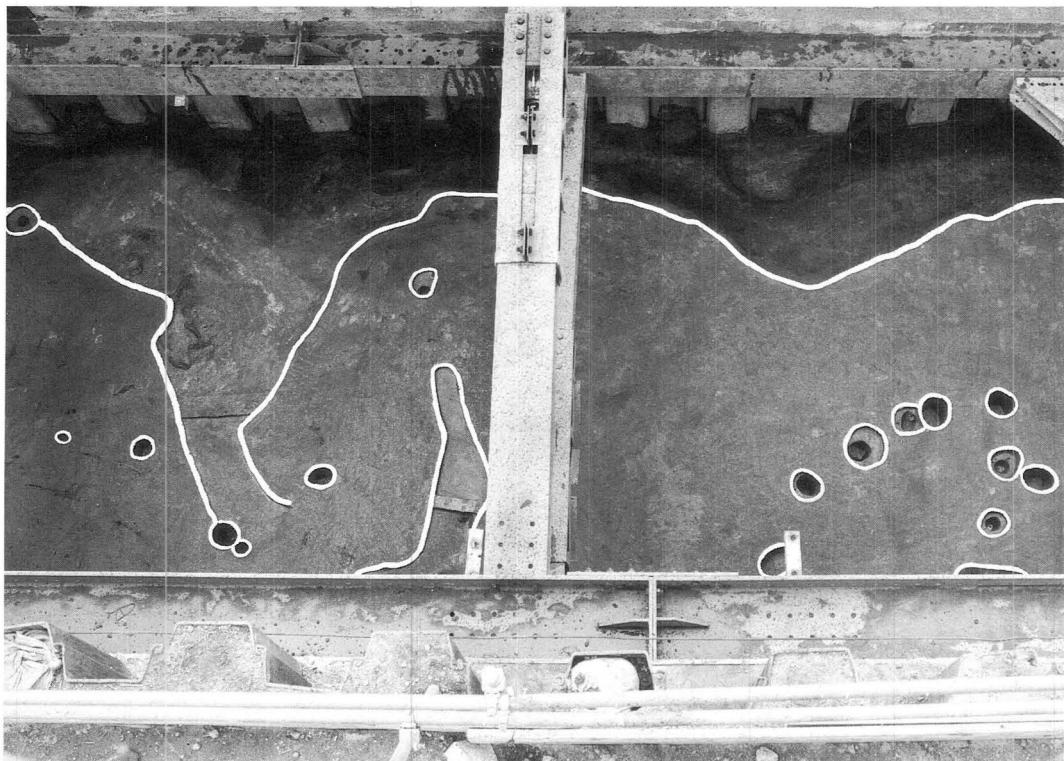
1. E地区ピット127
立割状況



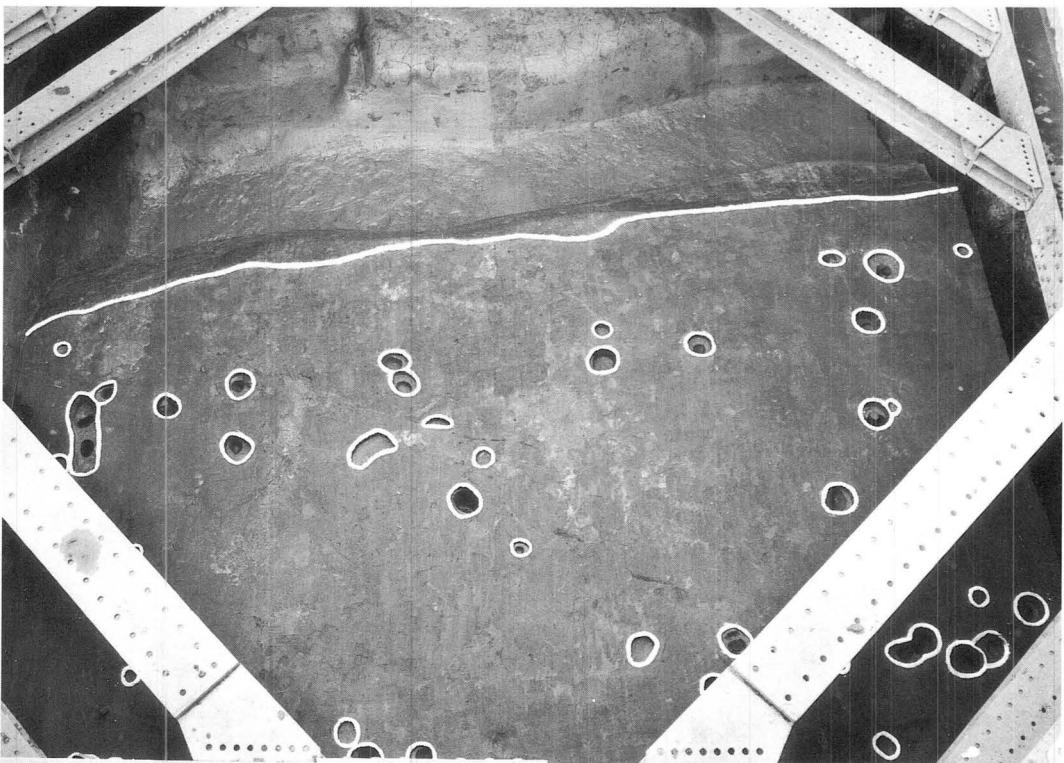
2. C地区
ピット189・190
立割状況



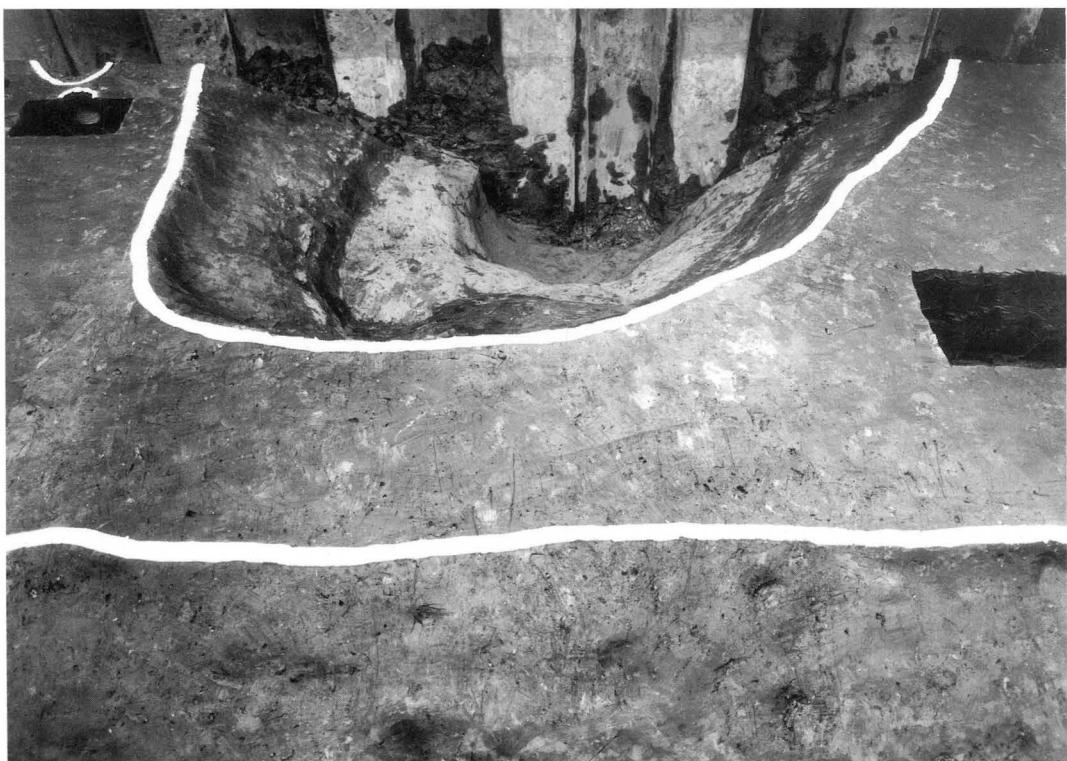
3. E地区ピット138
立割状況



1. D地区環濠・柵列検出状況(南より)



2. E地区環濠・柵列検出状況(南より)



1. B地区土壤12検出状況(北より)



2. B地区土壤12遺物出土状況(北より)



1. C 地区土壤16検出状況(北東より)



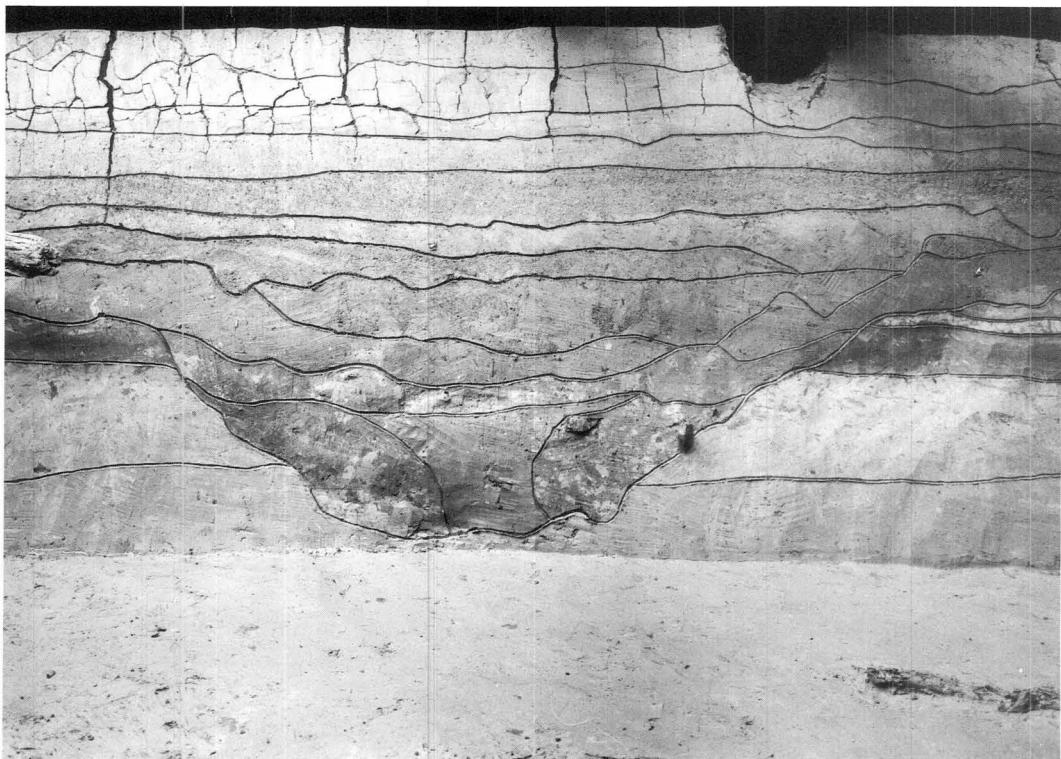
2. D 地区土壤22検出状況(南より)



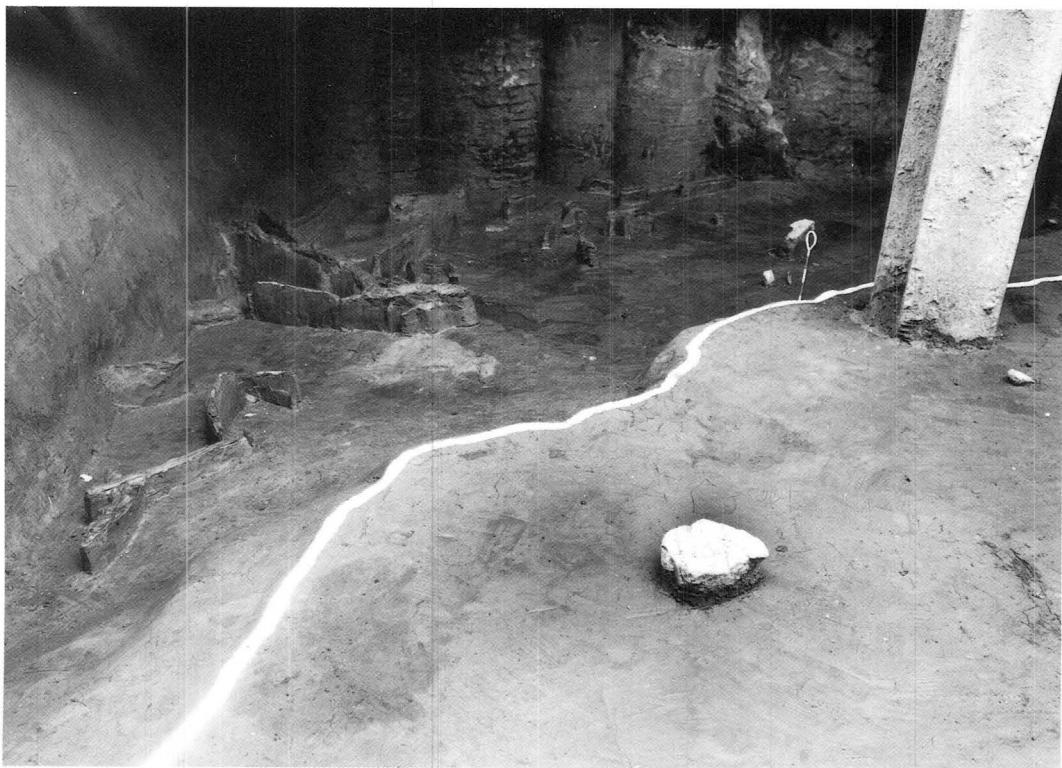
1. B地区溝17遺物出土状況(南より)



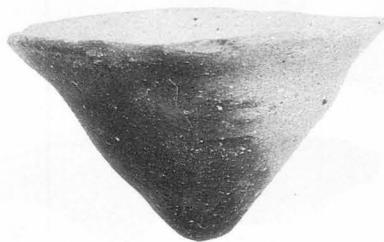
2. B地区溝17検出状況(西より)



1. B地区溝17断面(南より)



2. F地区落ち込み2検出状況(南より)



14



30

土師器ミニチュア甕(14) 須恵器壺(30)



107



106



104

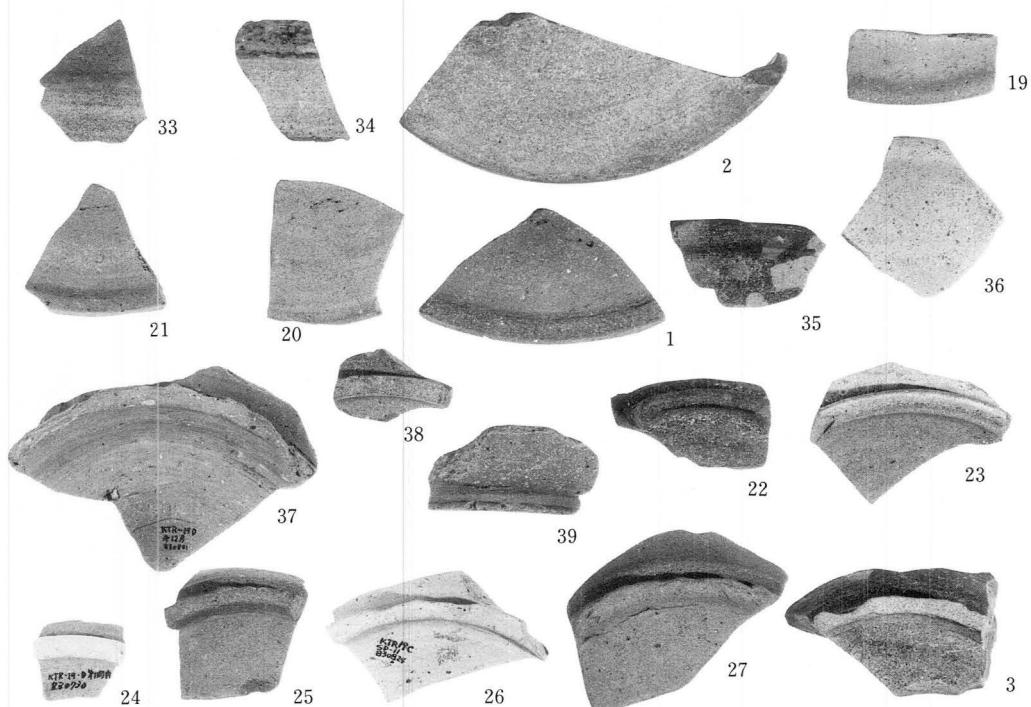


105

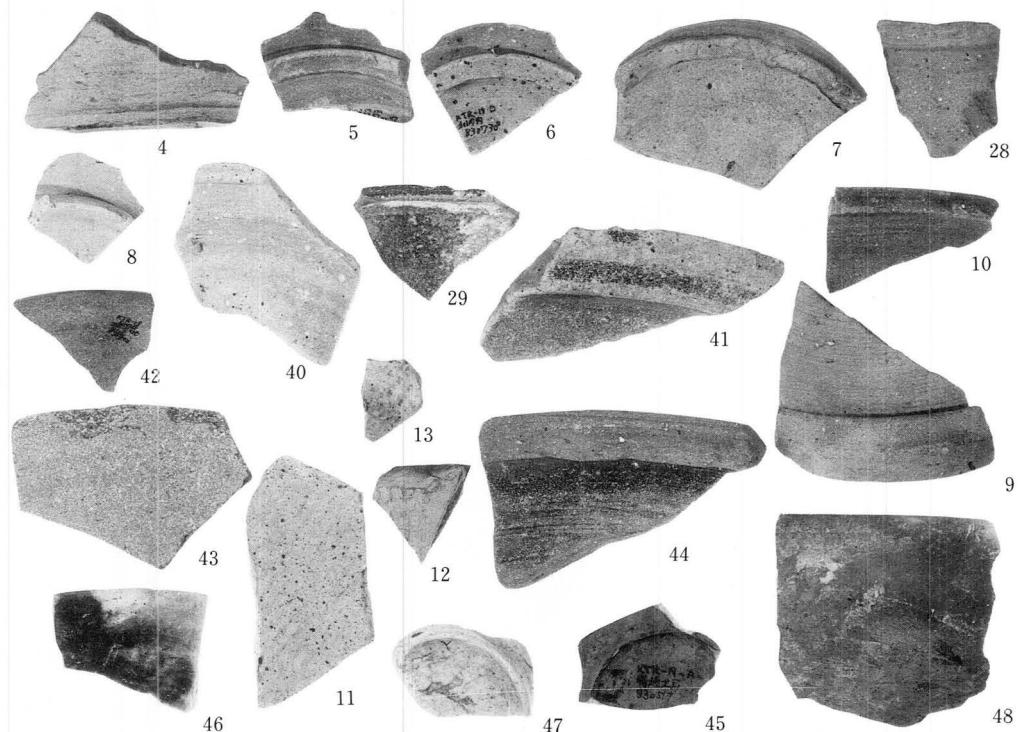


103

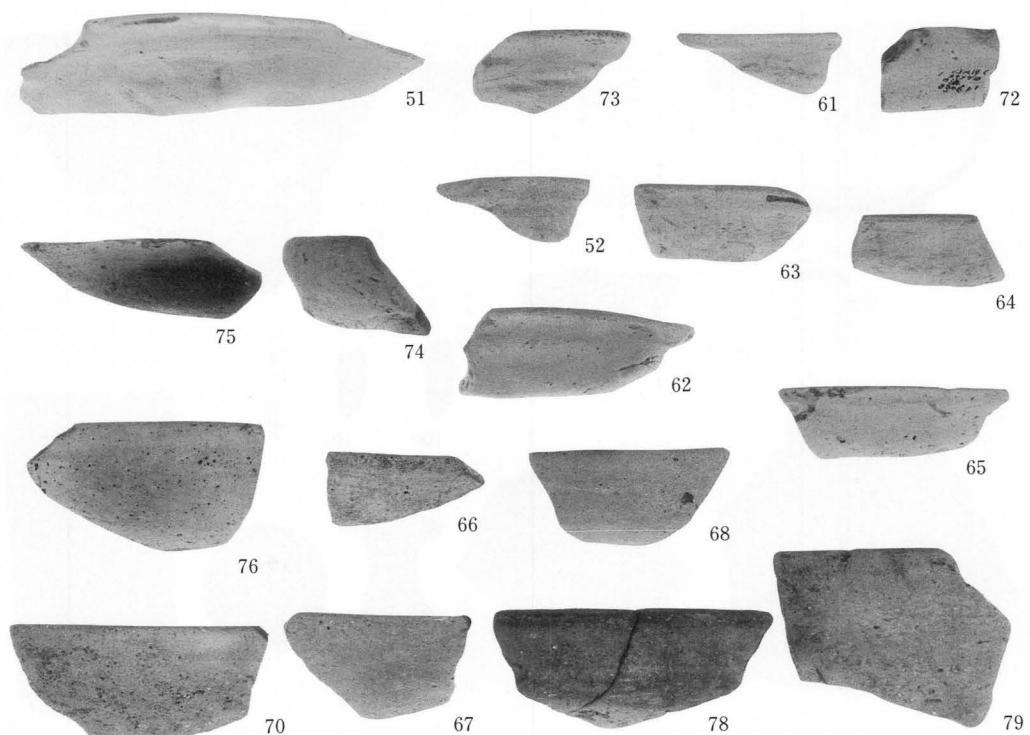
延喜通宝(107) 寛永通宝(103~106)



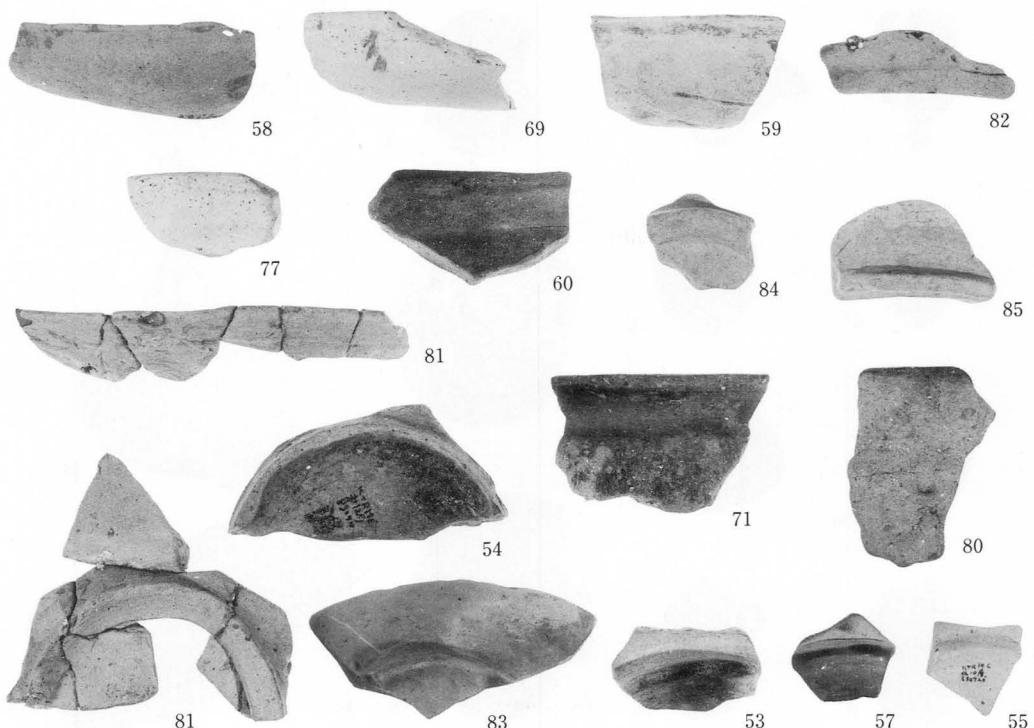
1. 須恵器 (1~3・19~27・33~39)



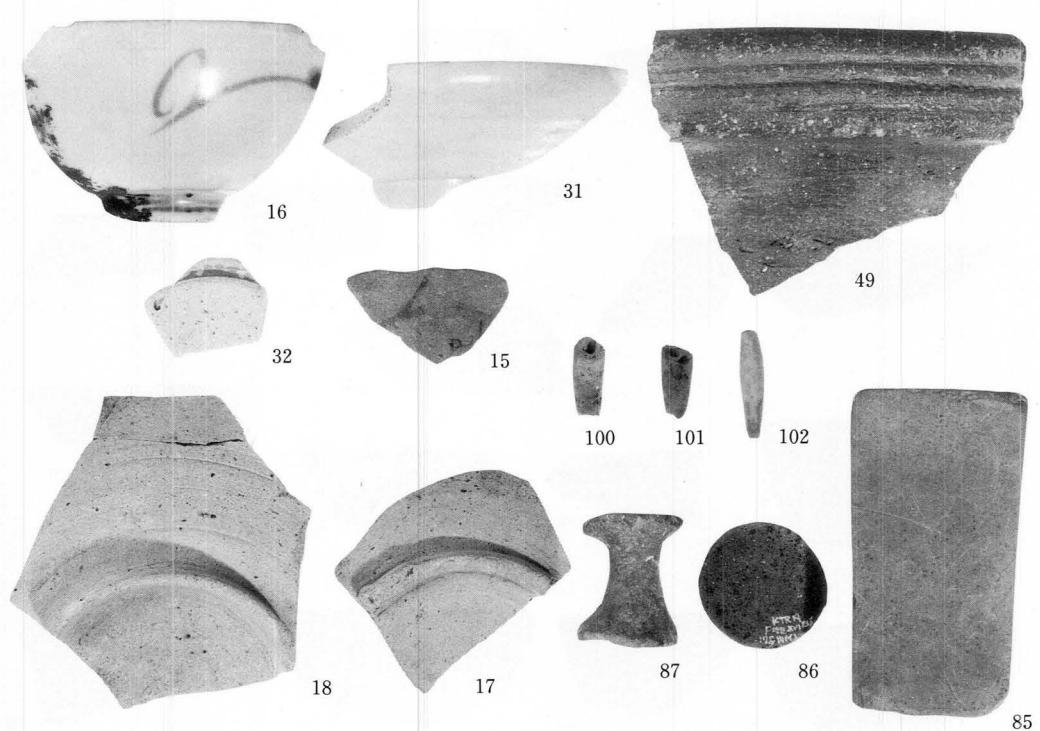
2. 須恵器 (4~13・28~29・40~48)



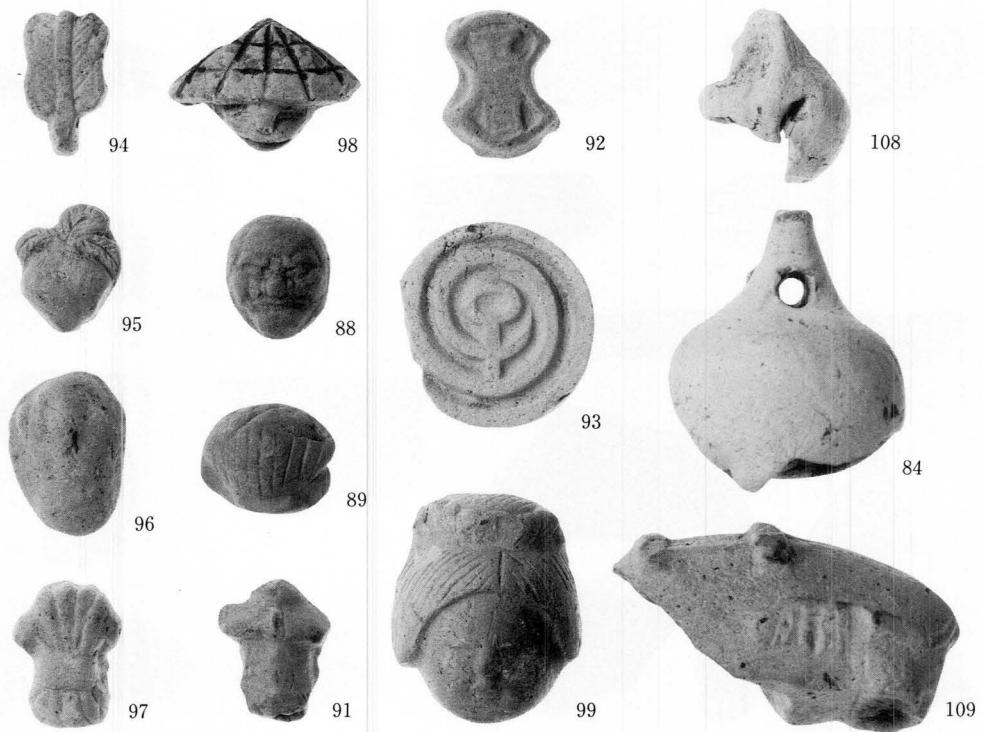
1. 土師器 (51・52・61~68・70・72~76・78・79)



2. 土師器 (53~55・57~60・69・71・77・80~85)



1. 陶磁器(16・31・49) 緑釉陶器(32) ミニチュア甕(15) 濱戸椀(17・18) 他



2. 泥面子(88・89・91~99) 土鈴(84・108) 土馬(109)



17



205

3

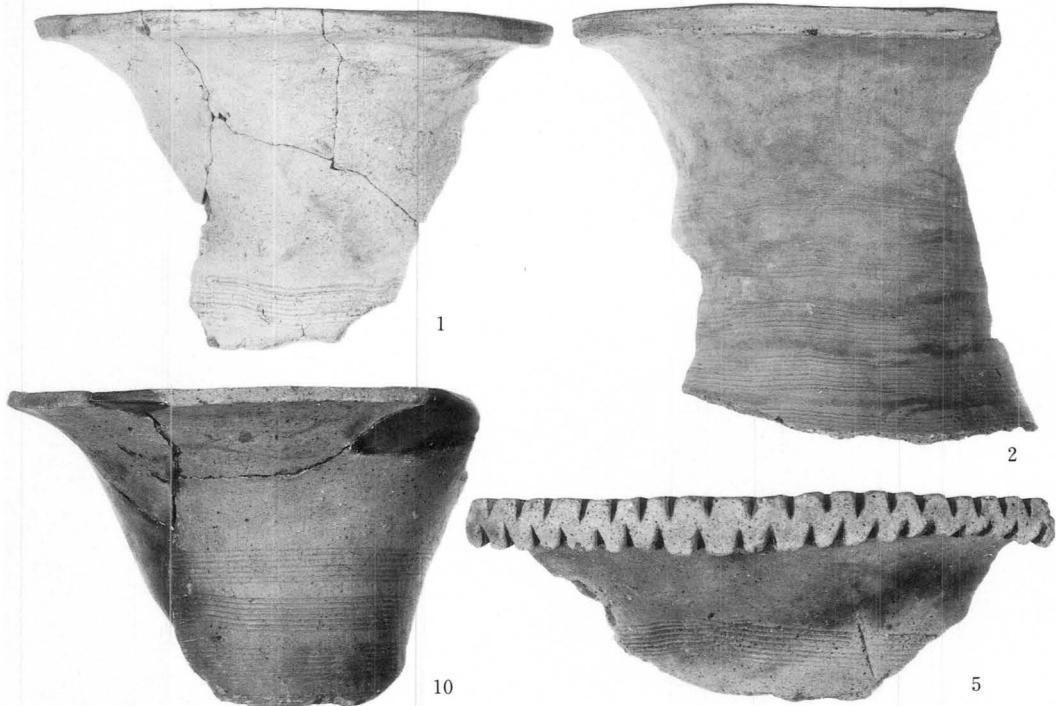


7

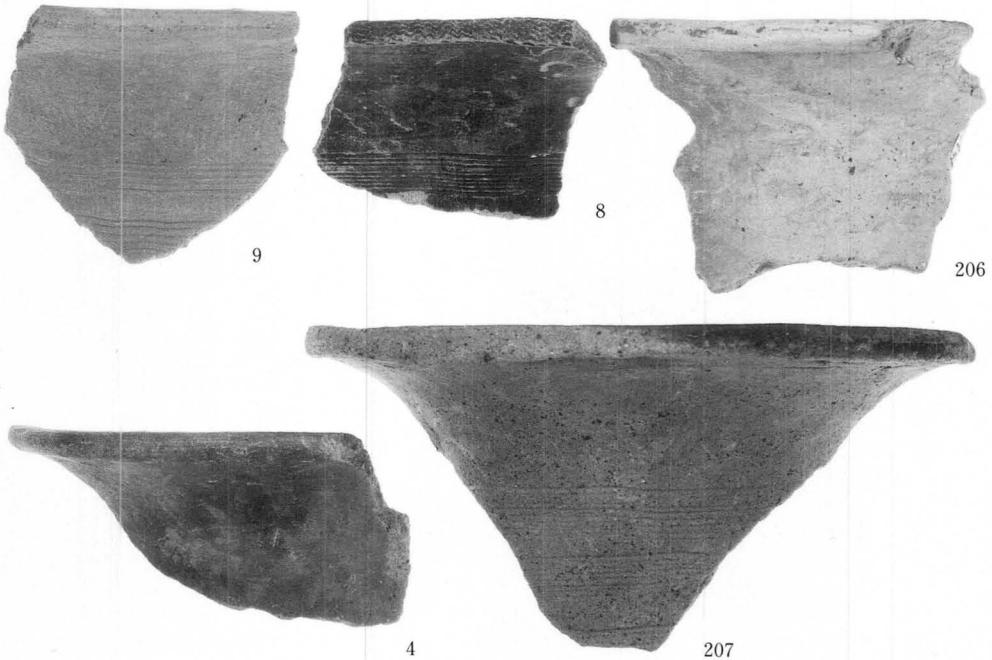


6

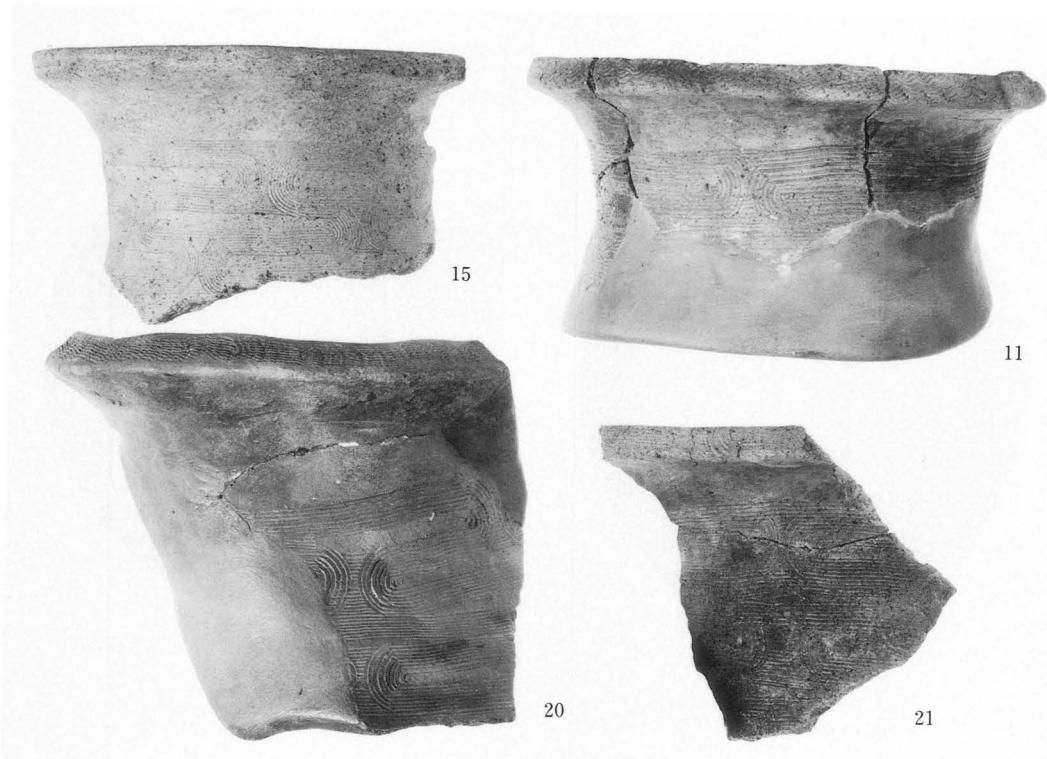
壺A(3・6・7・205)、B(17)



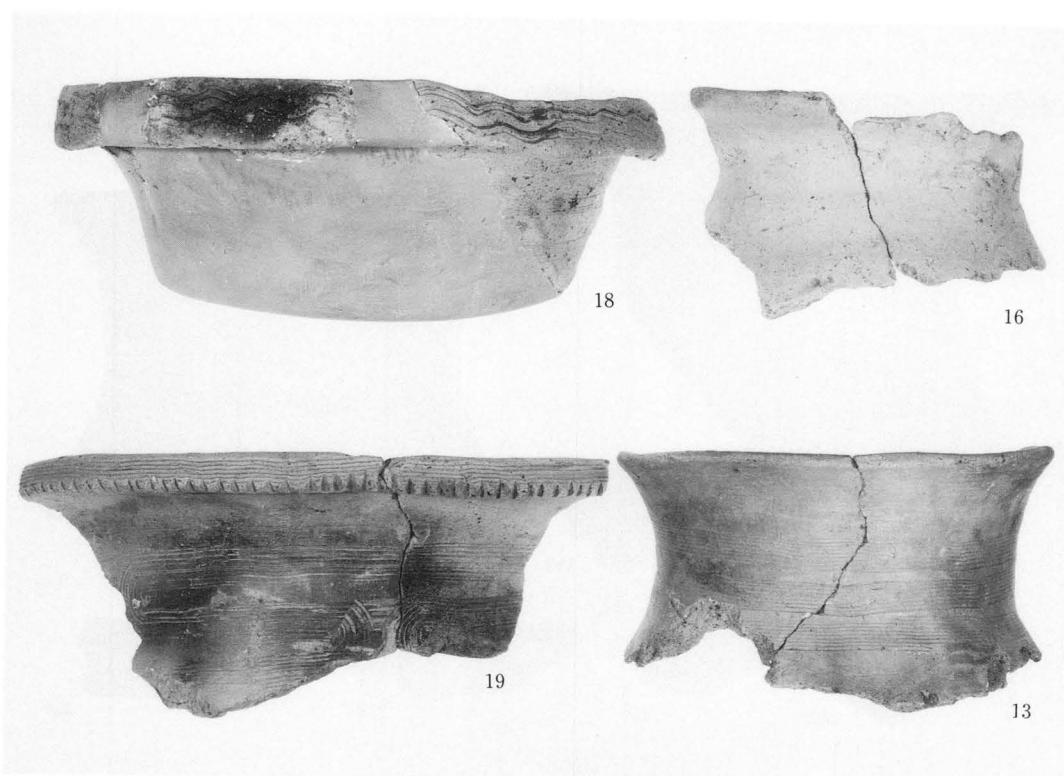
1. 壺A (1・2・5・10)



2. 壺A (4・8・9・206・207)



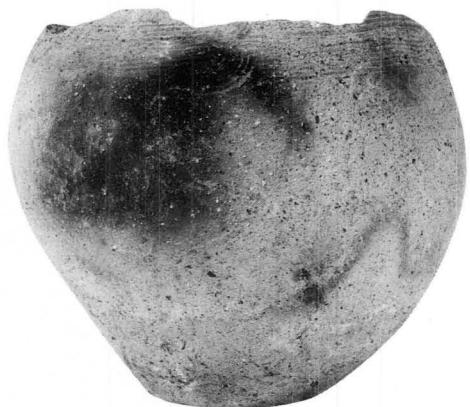
1. 壺B (11・15・20・21)



2. 壺B (13・16・18・19)

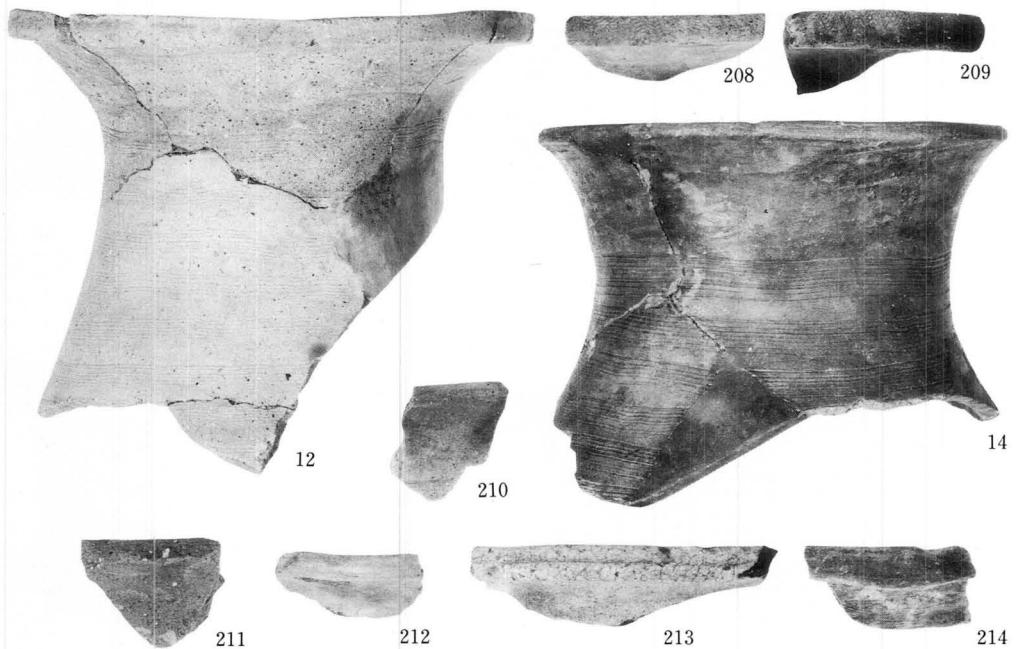


22



145

1. 無頸壺 B (22) 壺底部 (145)



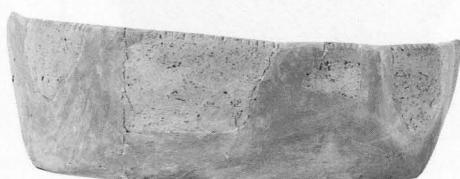
2. 壺 A (208・209・210・211・212・213・214)、B (12・14)



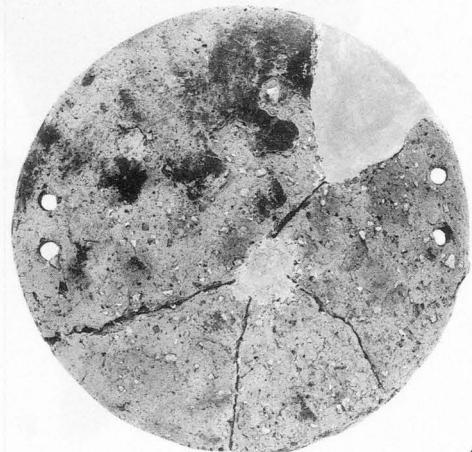
34



47



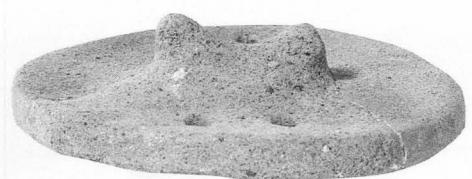
39



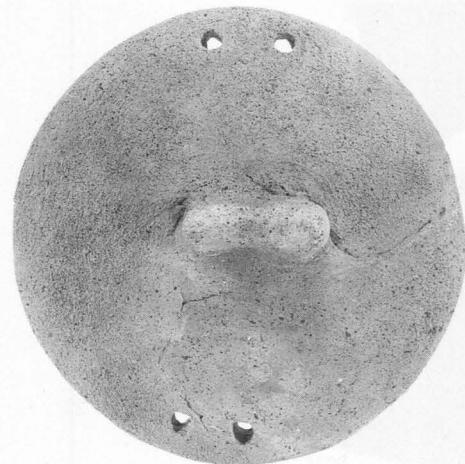
47'



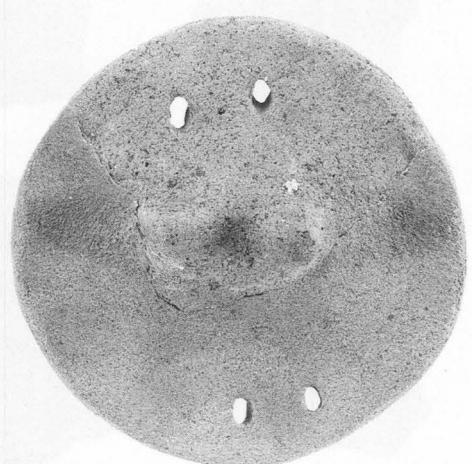
46



48

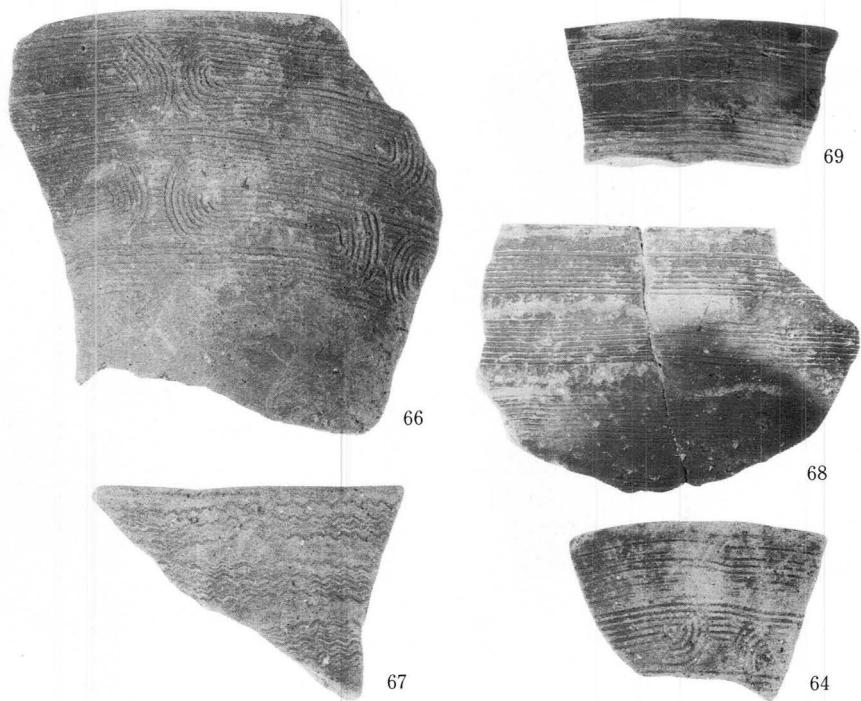


46'

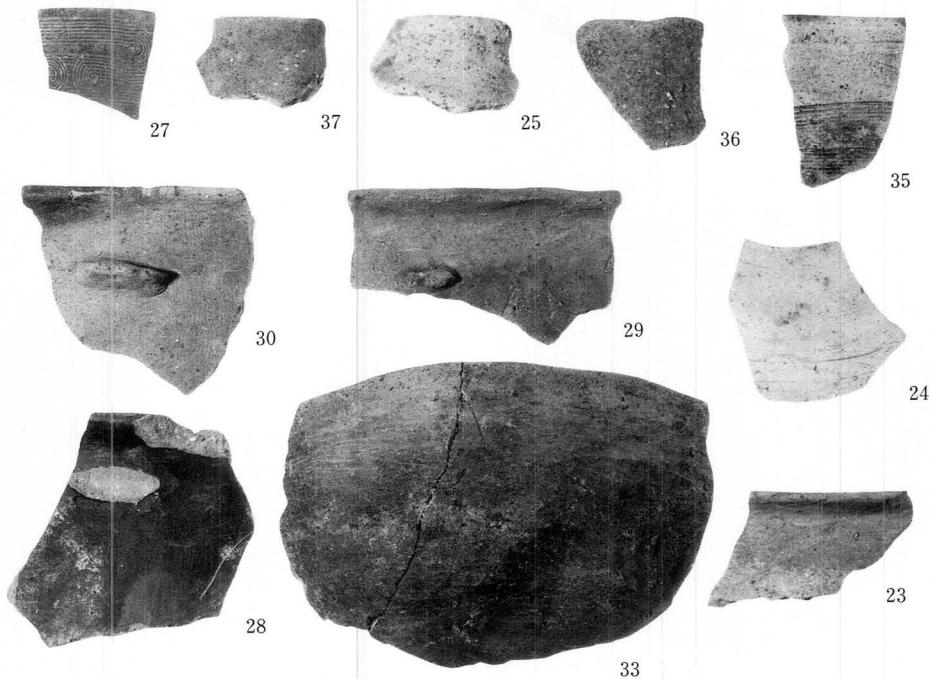


48'

鉢 A (34) 高杯 A (39) 壺蓋 A (47)、B (46・48)



1. 鉢A (64・66~69)



2. 無頸壺A (24)、B (23・25) 細頸壺(35・36) タコ壺(37) 鉢A (27・33)、B (28~30)



31



65



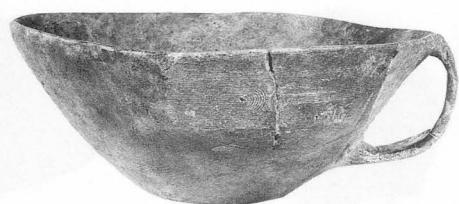
62



63



70



71

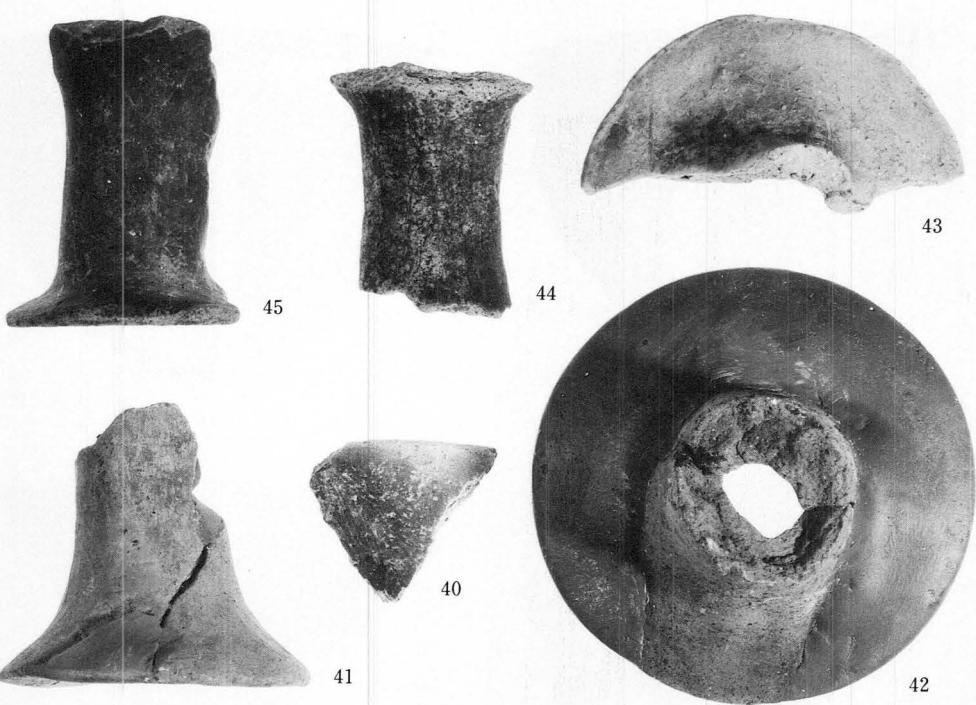


60

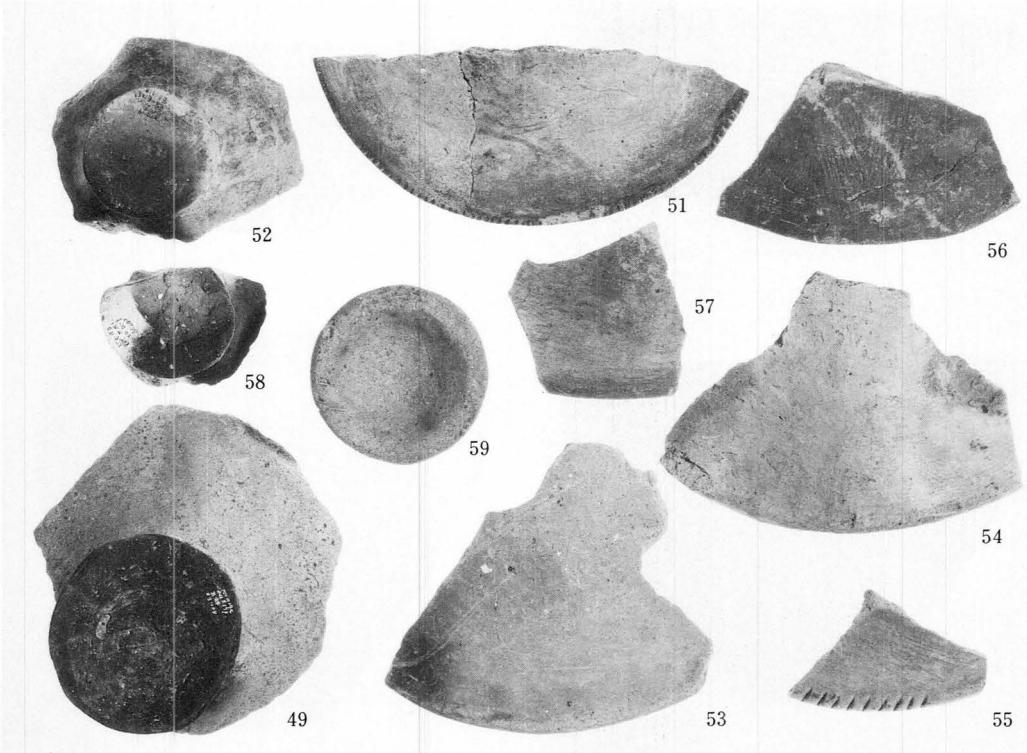


61

鉢 A (60~63・65・70・71)、B (31)



1. 高杯A(40) 高杯脚部(41~45)



2. 蓋(49・51~59)



38



88



32



26



100



82

甕A(82)、B-2(100)、B-3(88) 鉢A(26)、B(32) 高杯B(38)



93



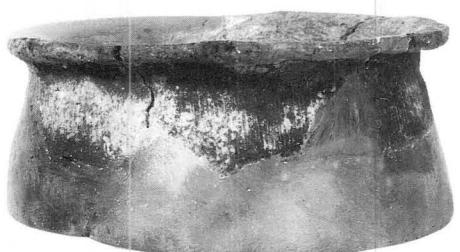
105



89



74

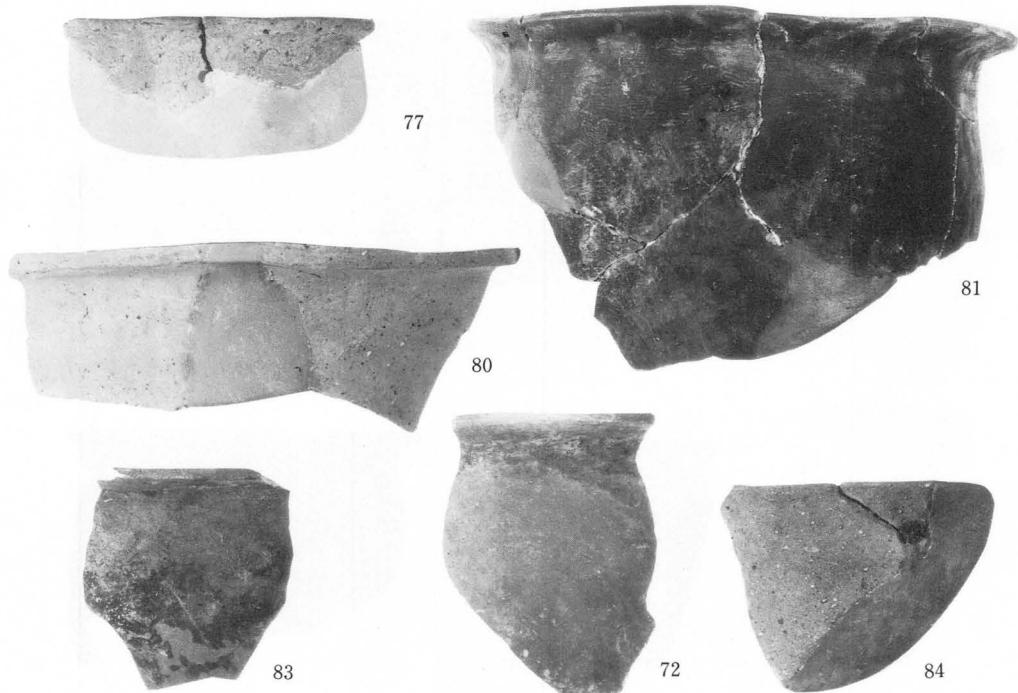


111

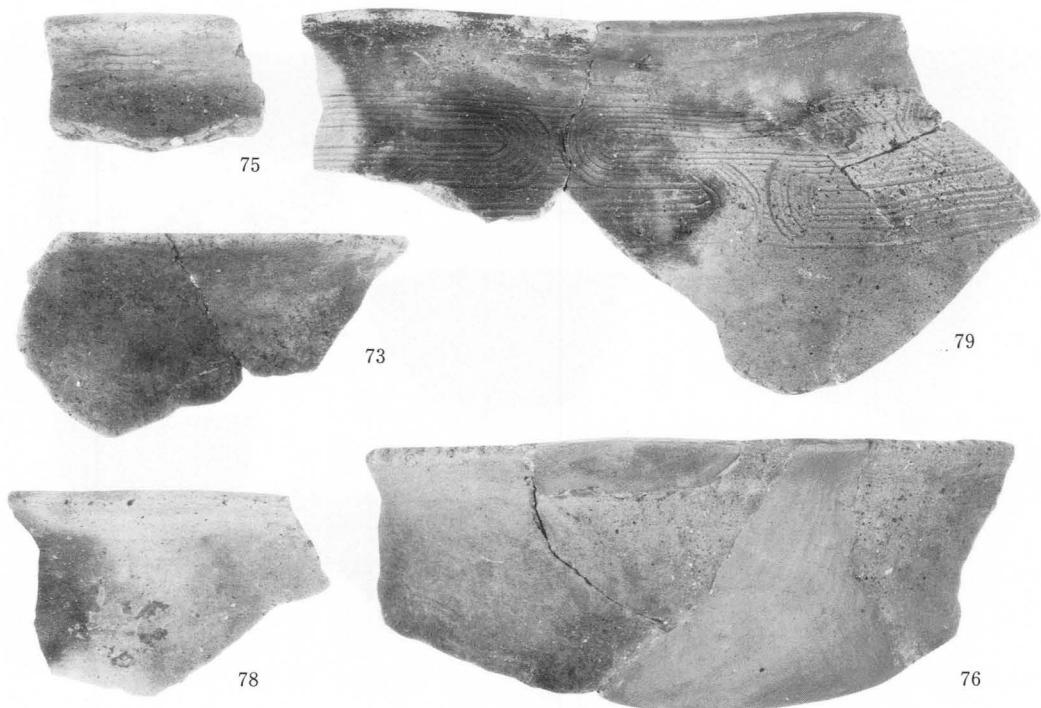


116

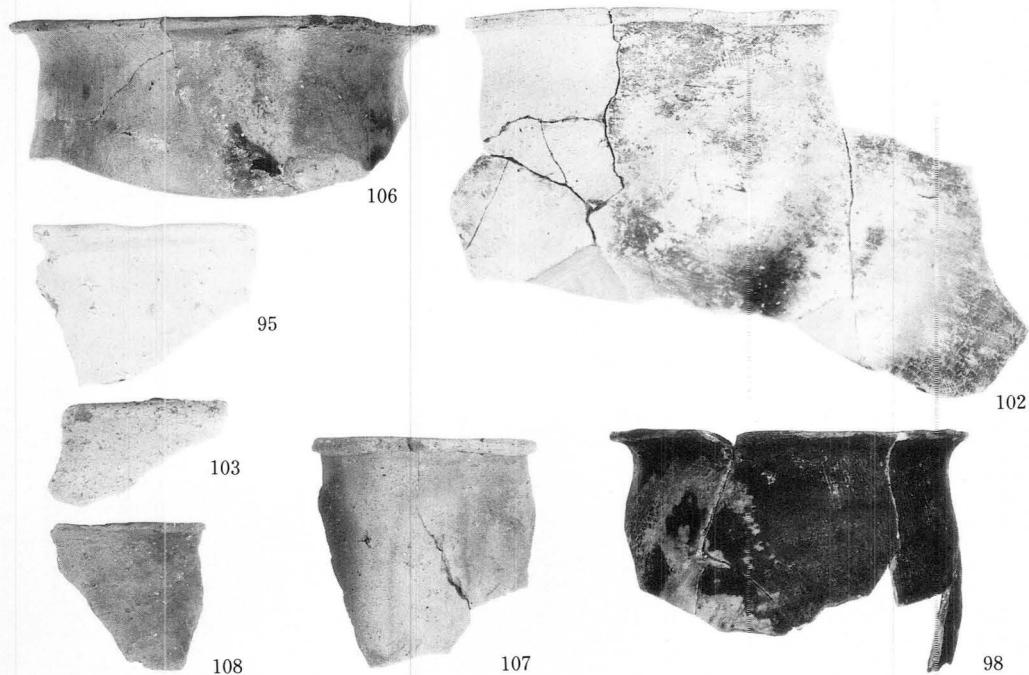
甕A(74)、B-1(116)、B-2(105)、B-3(89・93)、山城系(111)



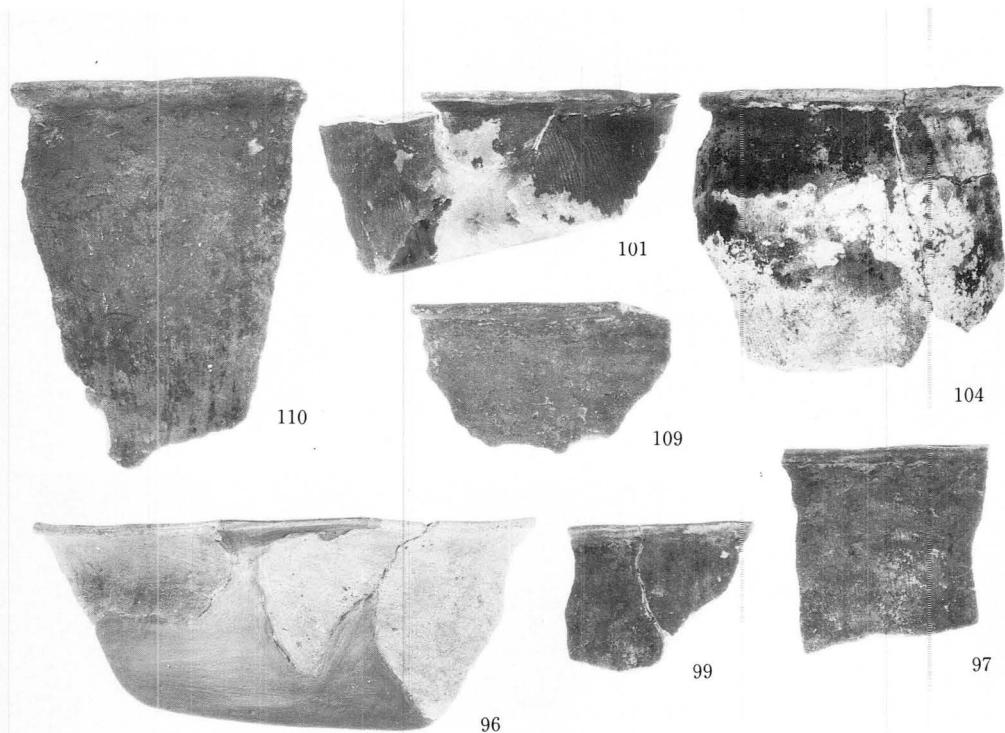
1. 蓋A (72・77・80・81・83・84)



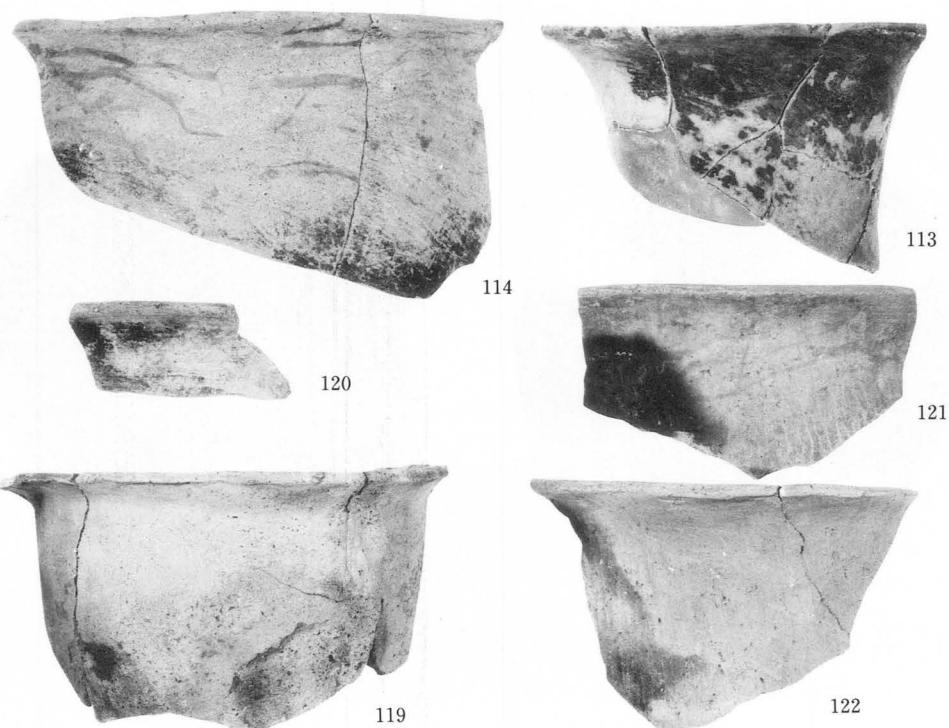
2. 蓋A (73・75・76・78・79)



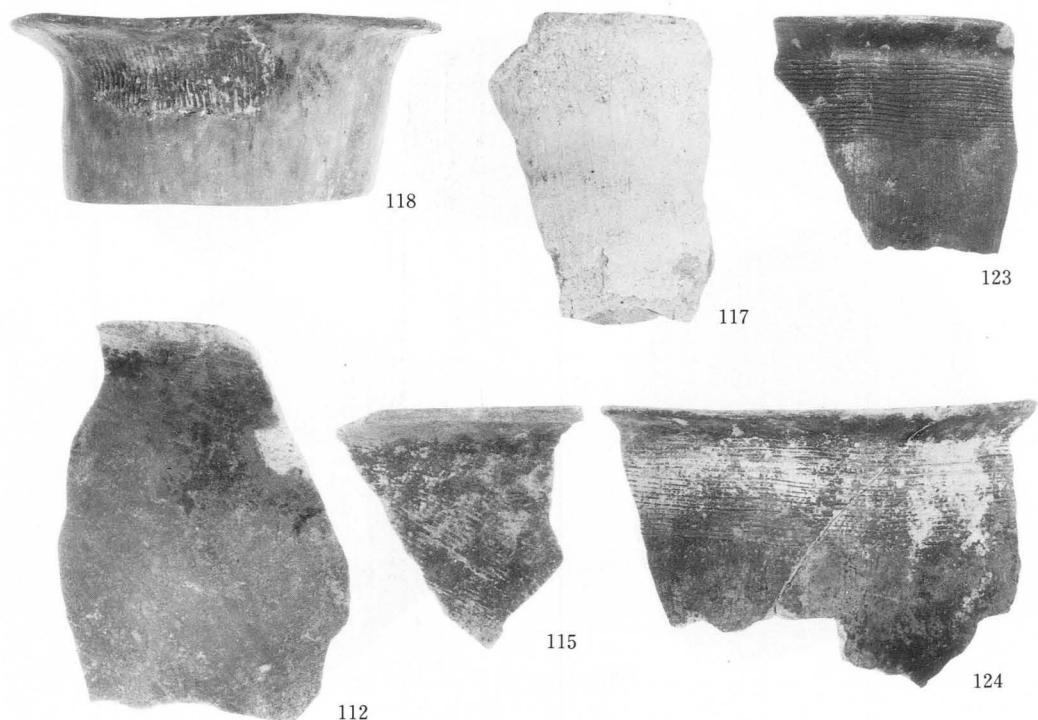
1. 薩 B - 2 (95・98・102・103・106~108)



2. 薩 B - 2 (96・97・99・101・104・109・110)



1. 甕B-3 (113・114・119~122)



2. 甕B-1 (117・118)、B-3 (112・115)、C (123・124)



144



138

1. 壺体底部(138・144)



141



146



142

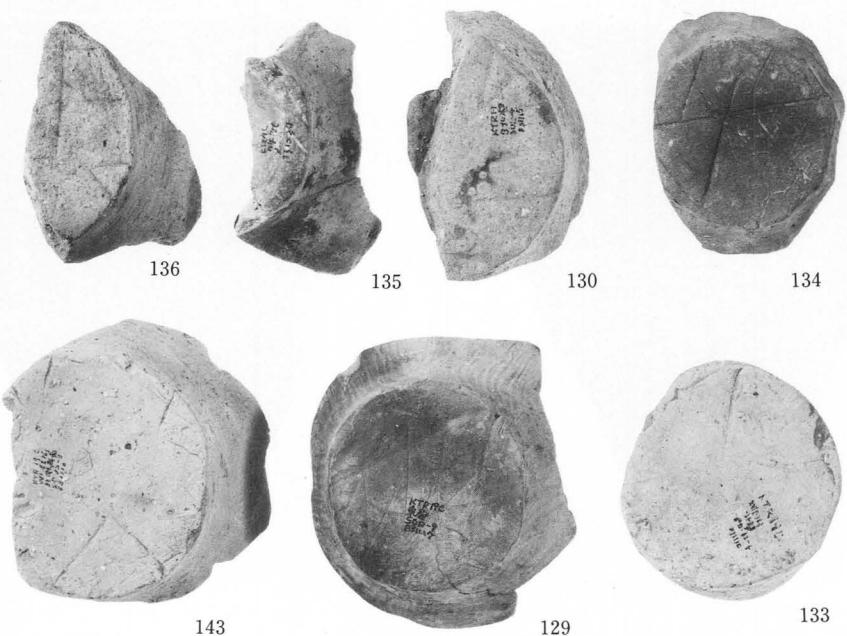


126

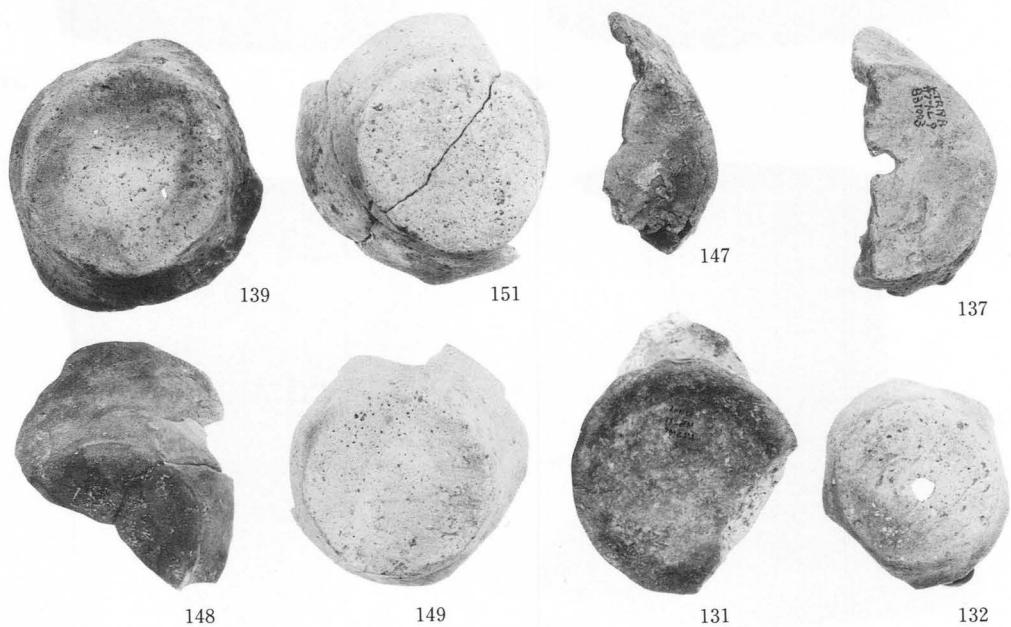


127

2. 壺・鉢底部(126・127・141) 袋底部(142・146)



1. 壺・鉢底部(143) 蓋底部(129・130・133~136)



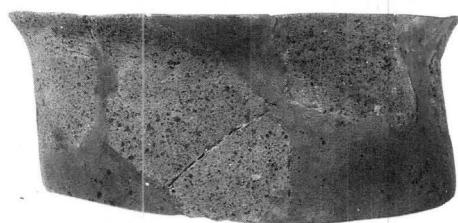
2. 蓋底部(131・132・137・139・147~149・151)



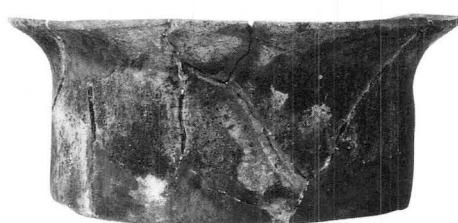
162



163



165



168

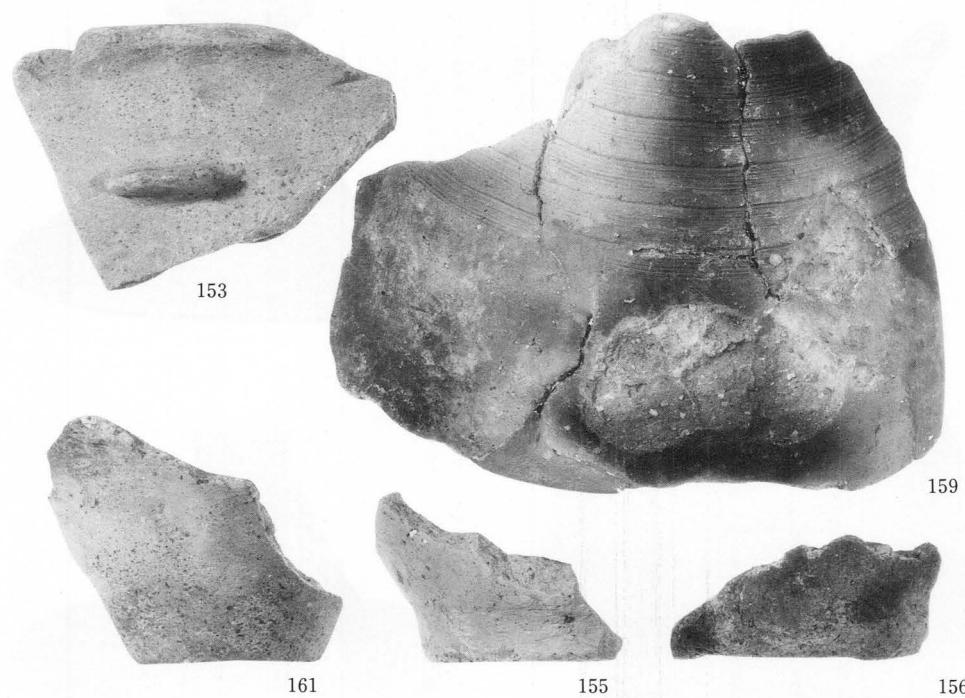


157

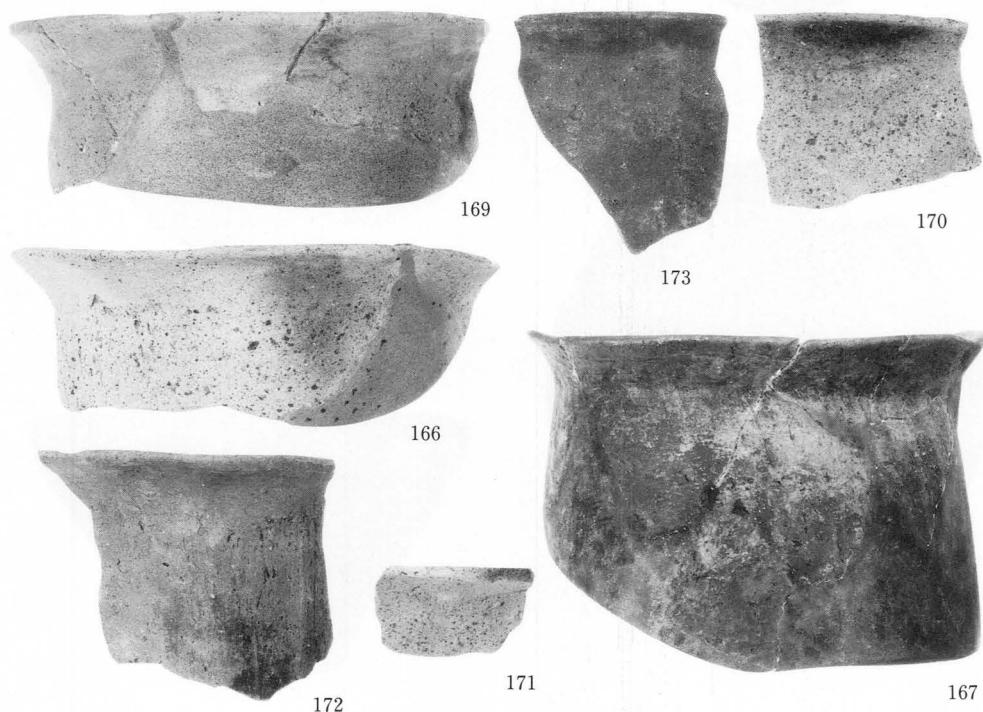


164

壺A(157)　甕A(162・164)、B-3(163・165・168)



1. 鉢B(153) 壺体部(159) 壺・鉢底部(155) 蓋底部(156・161)



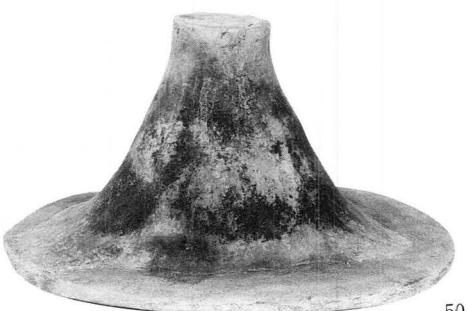
2. 蓋A(166・167・169~171)、B-3(172・173)



158



151



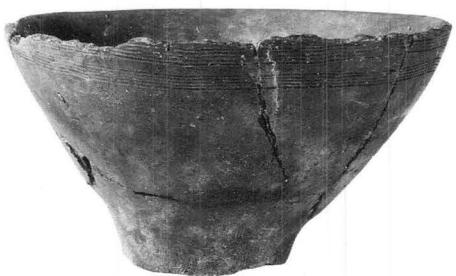
50



154



152



201

壺A(154・158) 鉢A(152) 甕蓋(50・151) 壺底部(201)



191



193



191



193'



204



175

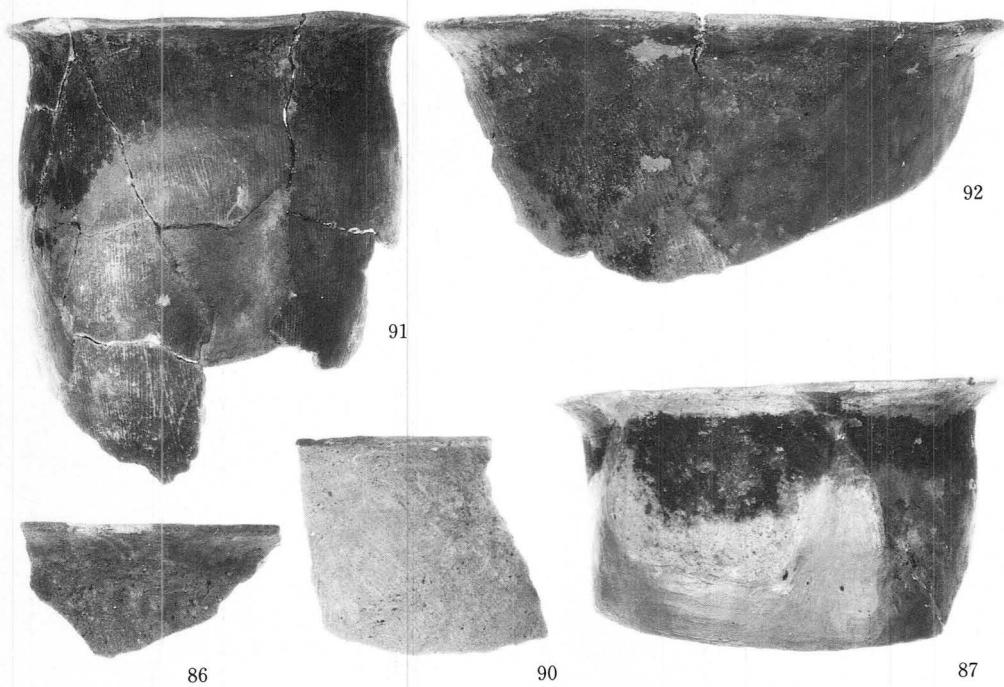


128

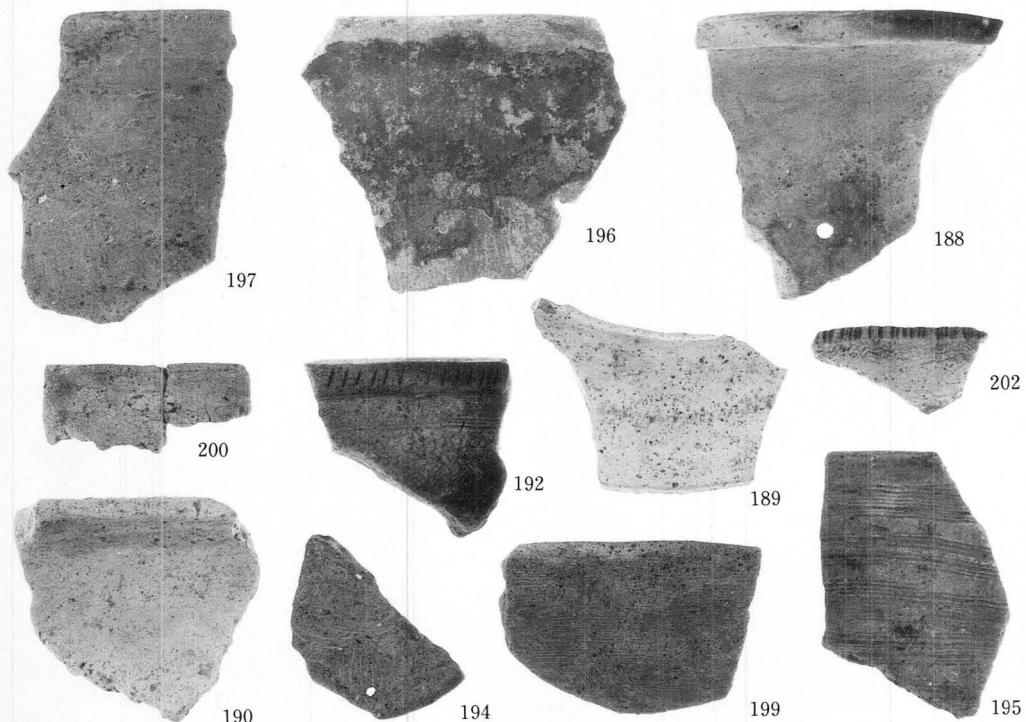


180

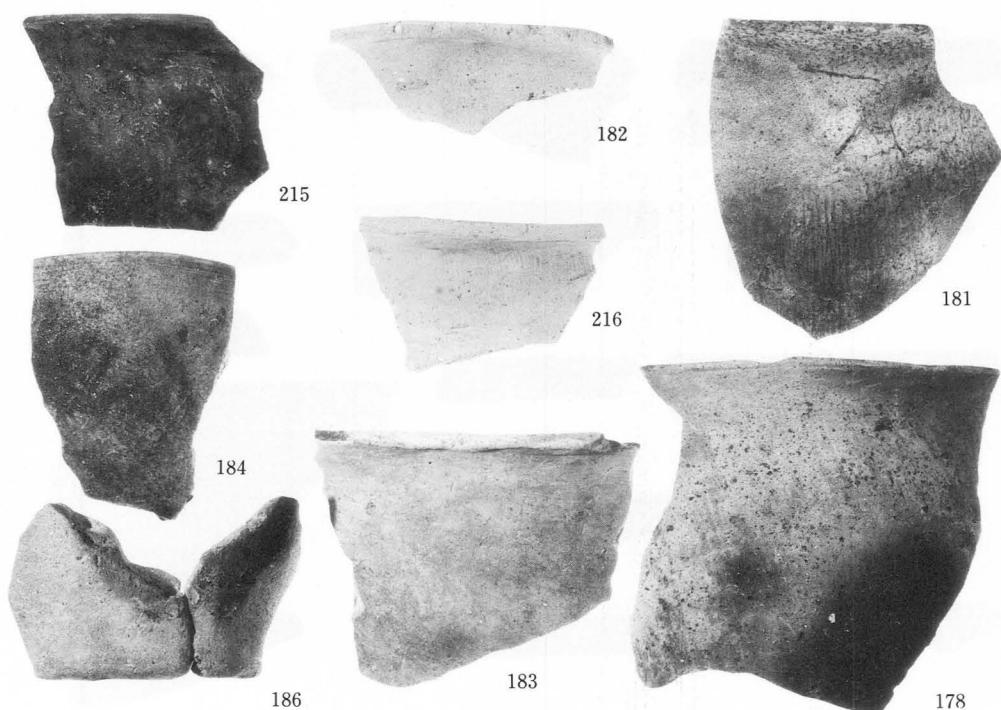
壺 B (175) 甕 C (180) 甕 (204) 鉢 B (191) 壺蓋 B (193) 壺・鉢底部 (128)



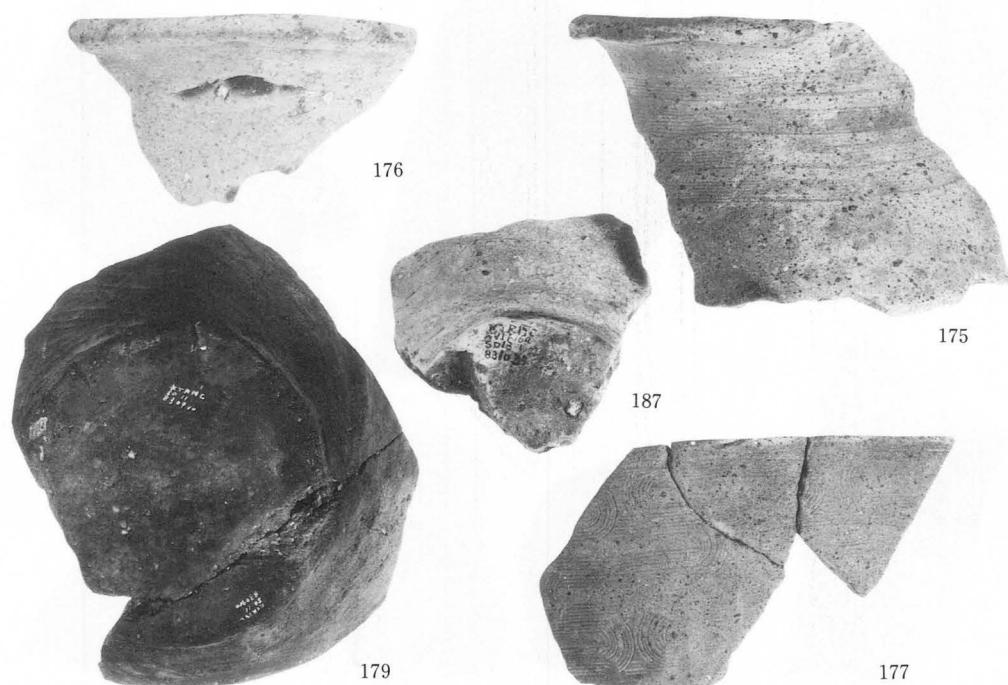
1. 薩 B - 3 (86・87・90~92)



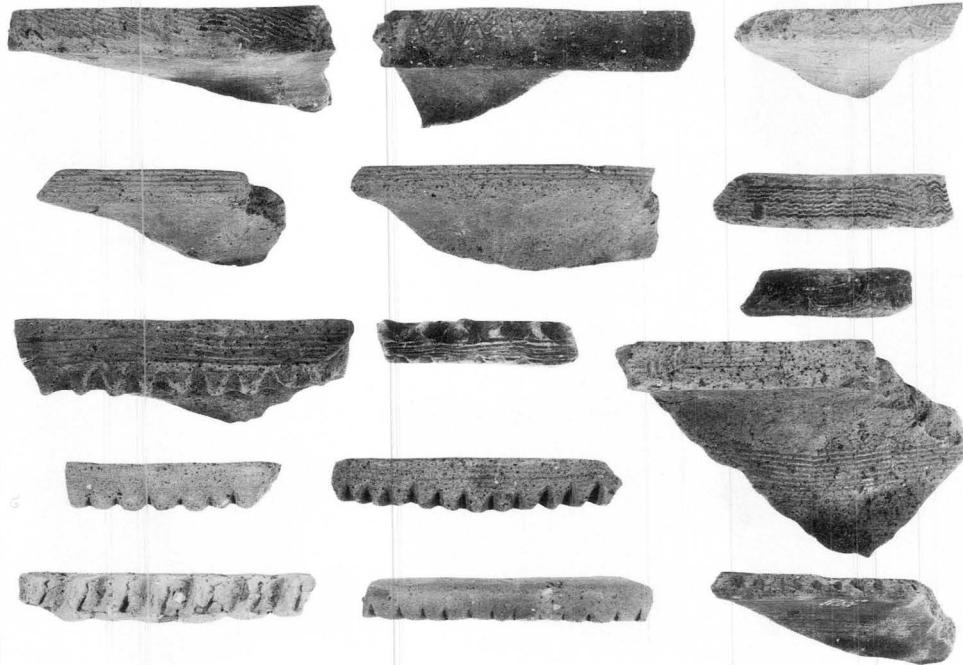
2. 壺 A (188) 壺 (202) 細頸壺 (195)
高杯 B (189) 壺蓋 B (194) 薩 A (190)、B - 3 (196・197) 鉢 A (192・199・200)



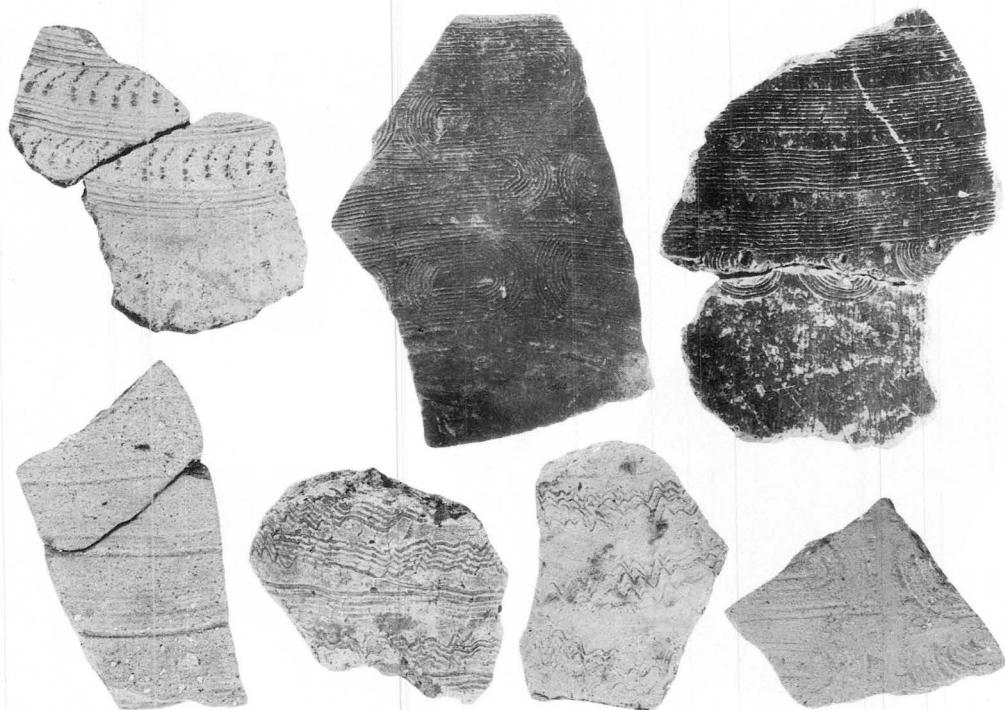
1. 蓋 A (182)、B - 2 (181・183)、B - 3 (178・215・216) 鉢 A (184) 壺底部 (186)



2. 壺 A (176)、B (175) 鉢 A (177) 蓋底部 (187) 鉢底部 (179)



1. 壺口縁部文様



2. 壺・鉢体部文様



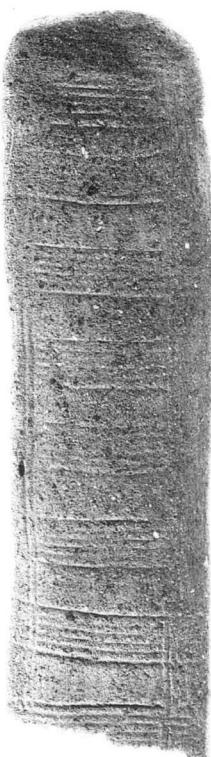
2''



2'



2



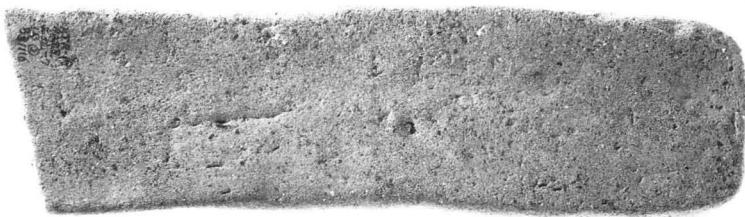
3



1'

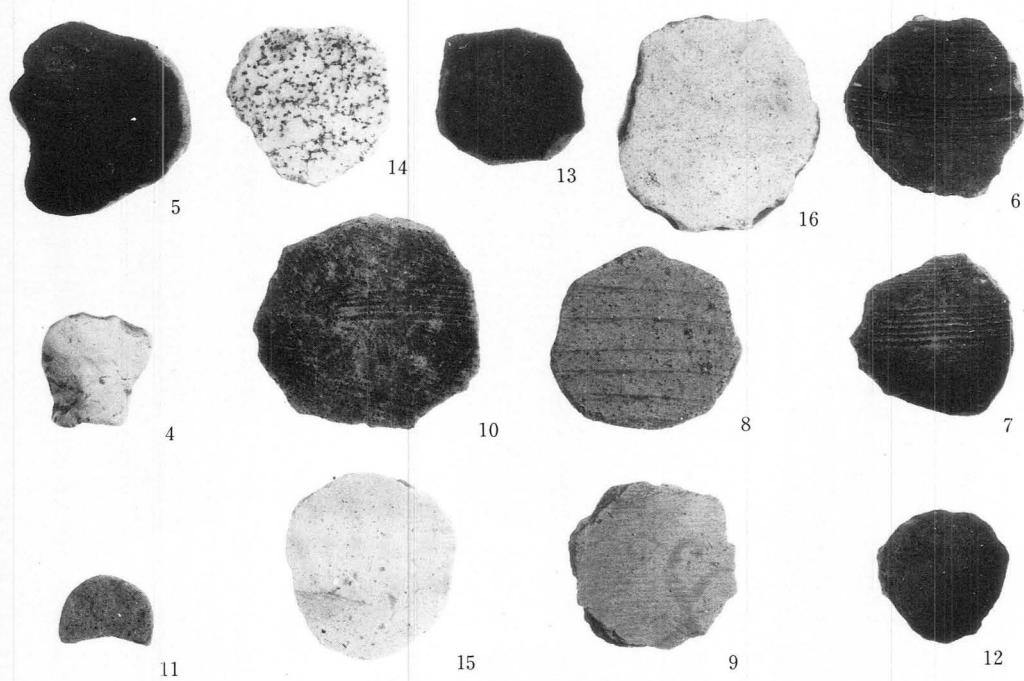


1

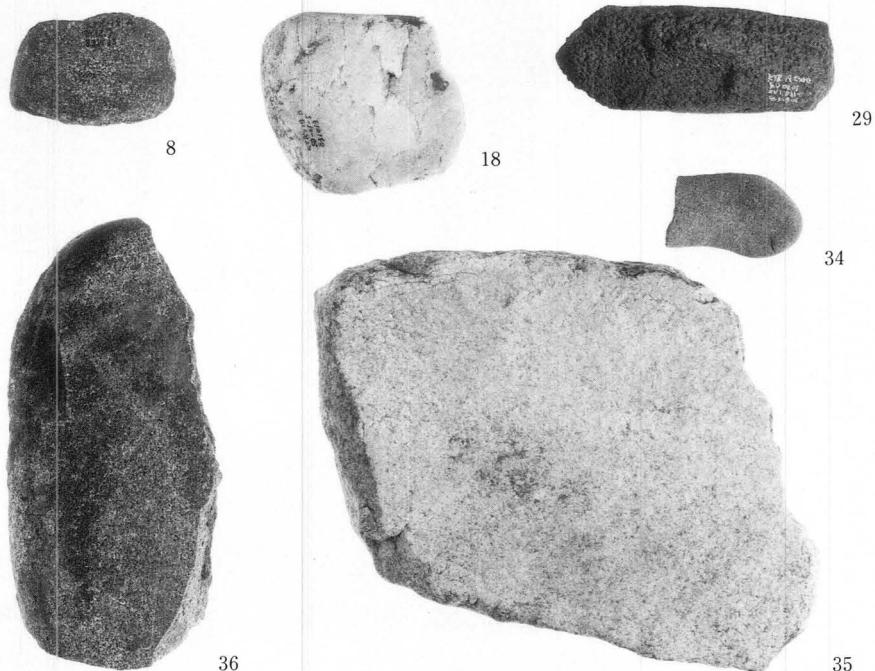


3'

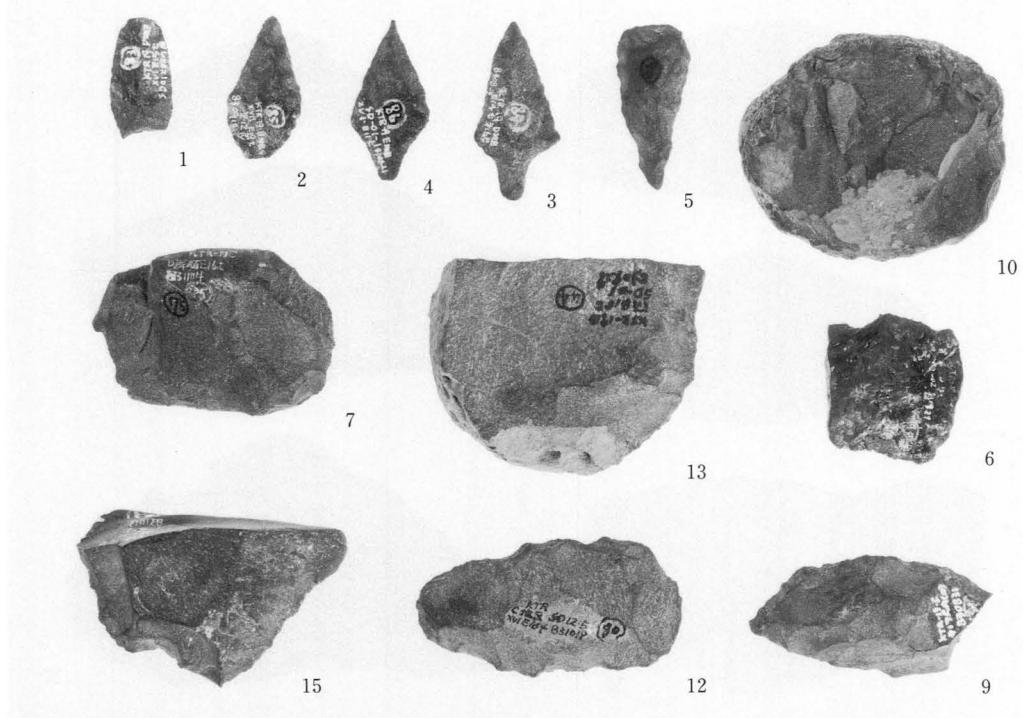
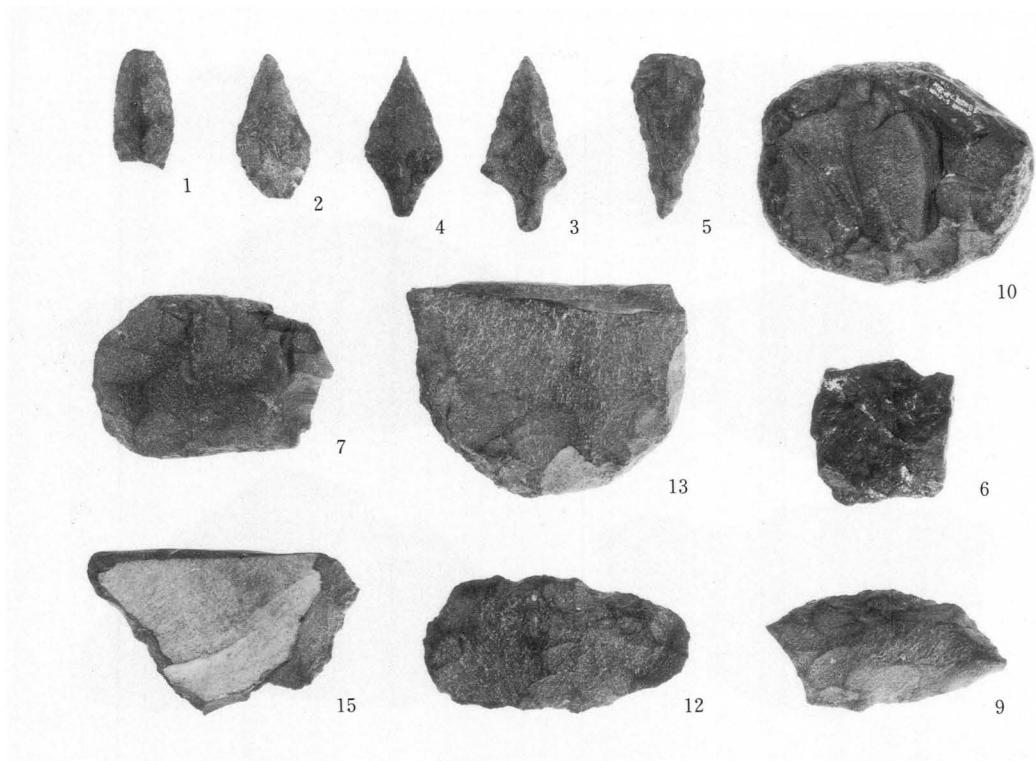
小型瓢形壺(1・2) 板状土製品(3)



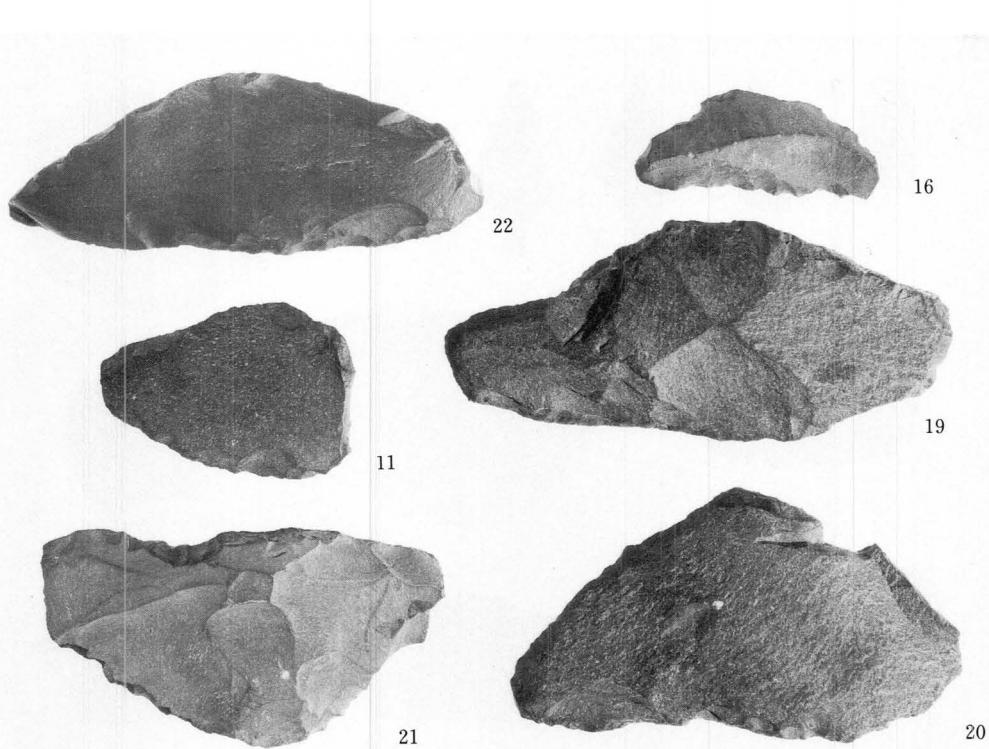
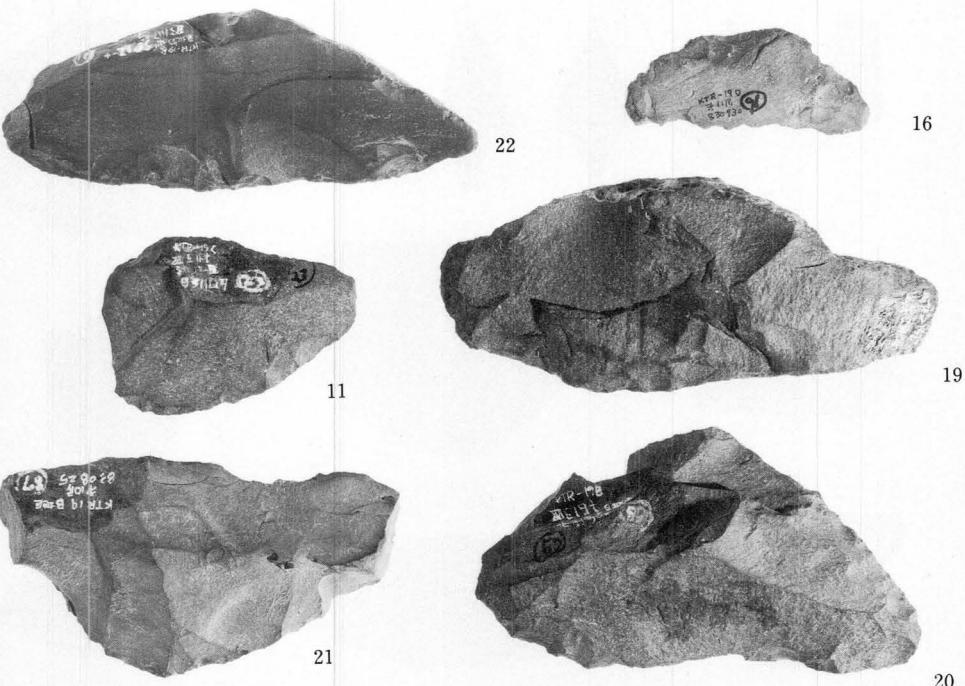
1. ミニチュア土器(4) 土製円盤(5~16)



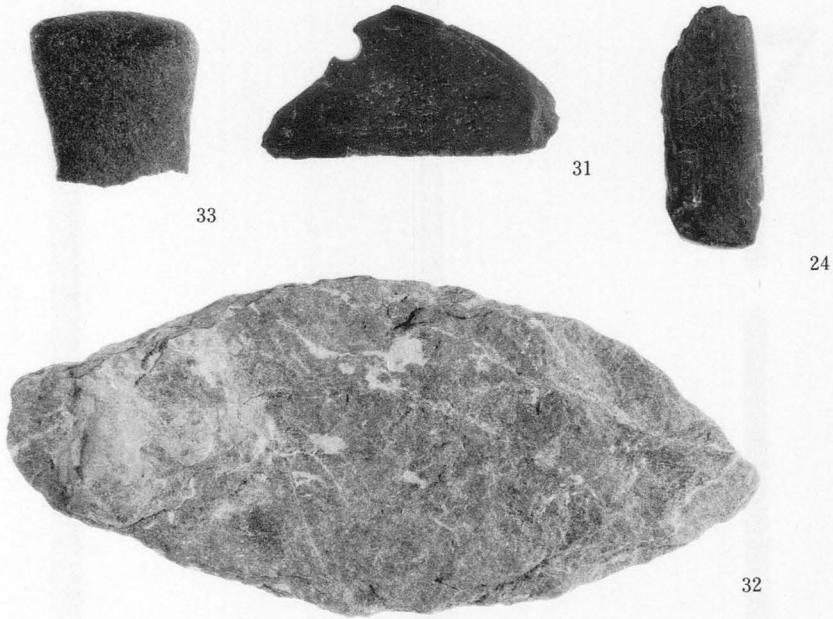
2. 石斧(29) 磨石(8・18・36) 砥石(35) 不明石製品(34)



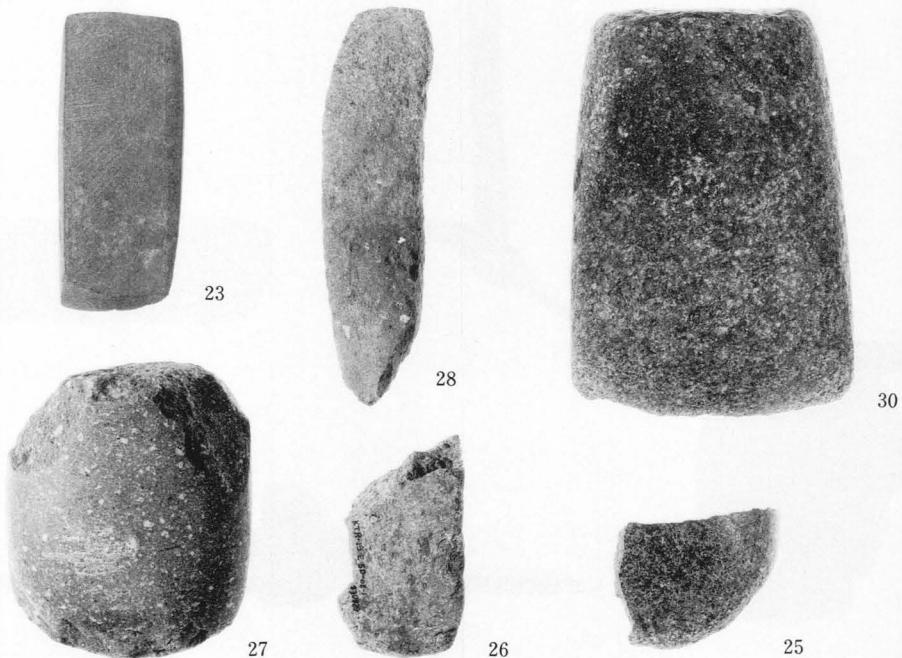
石鏃(1~4) 石錐(5) 楔形石器(6・7) 複刃削器(9) 削器(12・13・15) 叩き石(10)



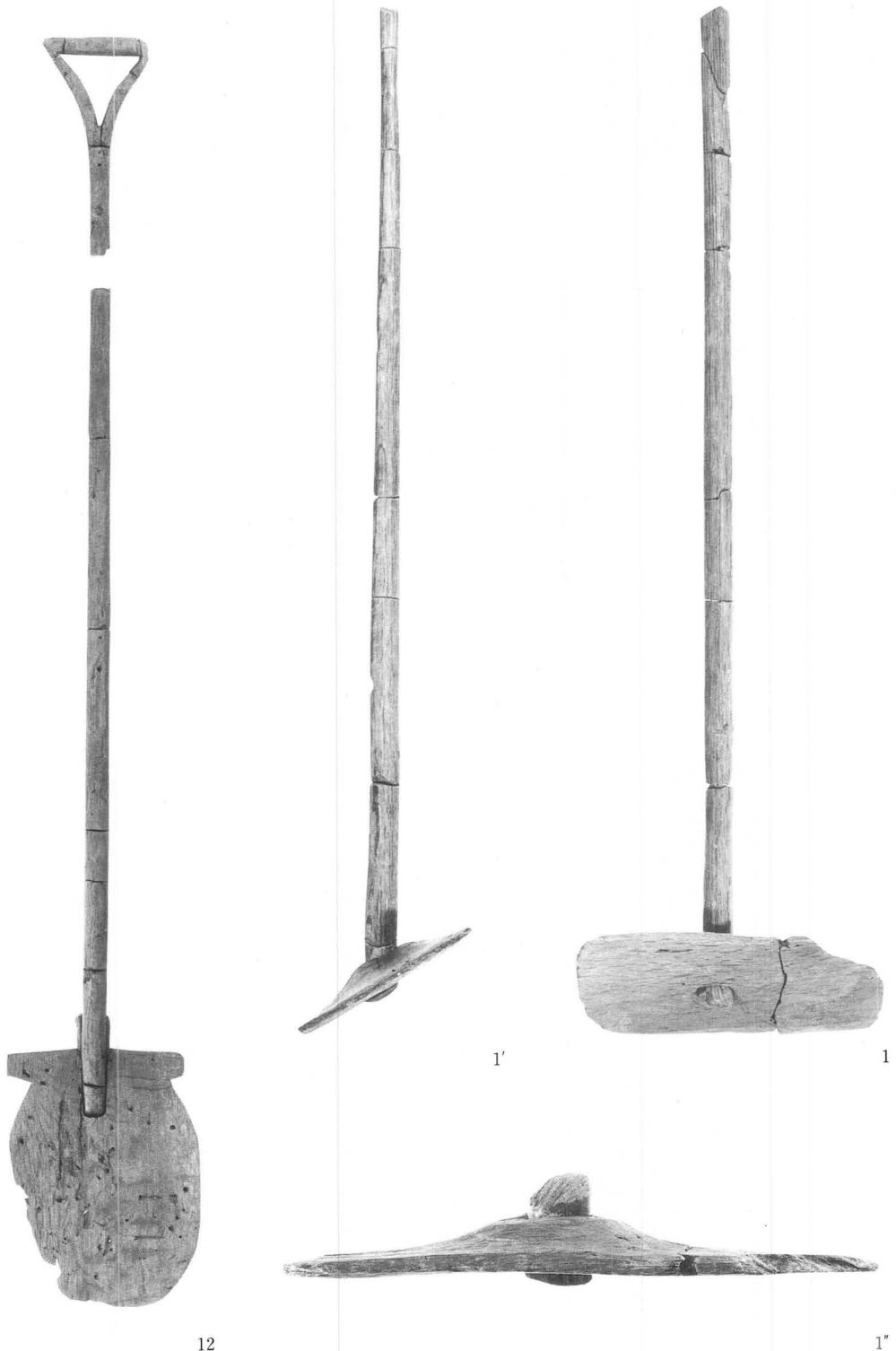
削器(11・16・19~22)



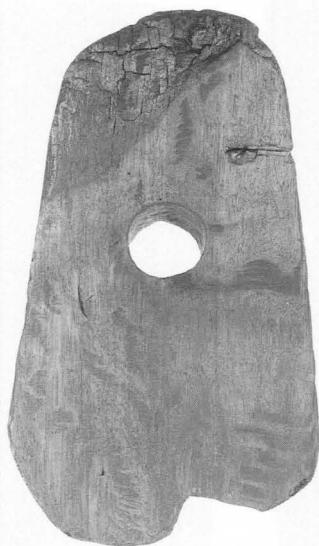
1. 石庖丁(31) 石庖丁未製品(32) 扁平片刃石斧(24) 不明石製品(33)



2. 太型蛤刃石斧(25~27・30) 扁平片刃石斧(23) 石斧(28)



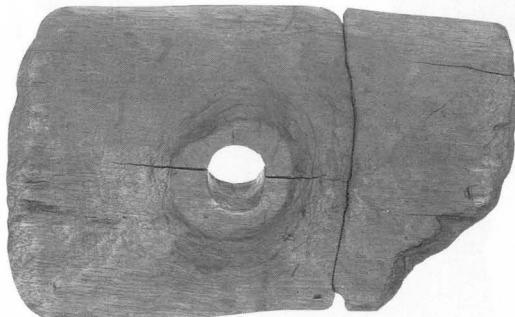
平鍬(1)、鋤(12)



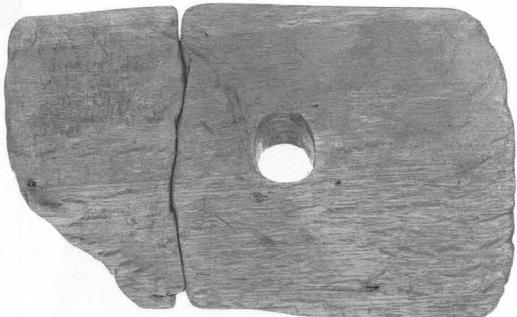
2



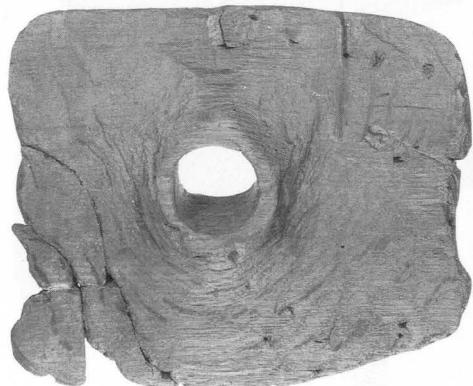
2'



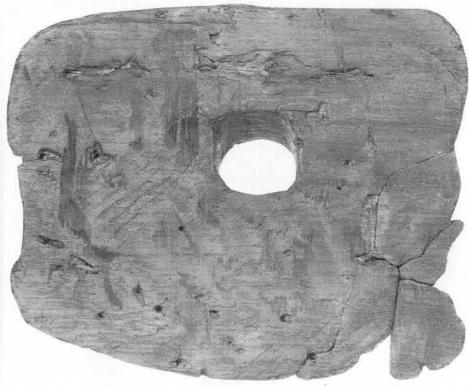
1



1'

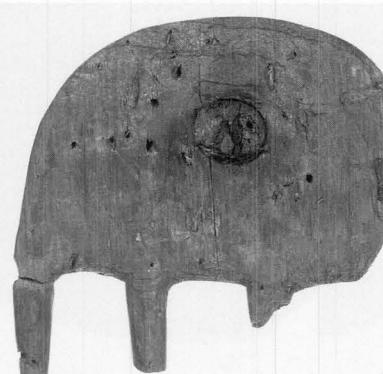
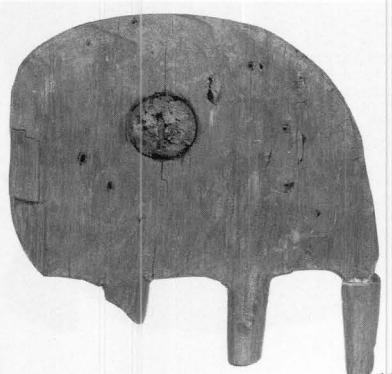
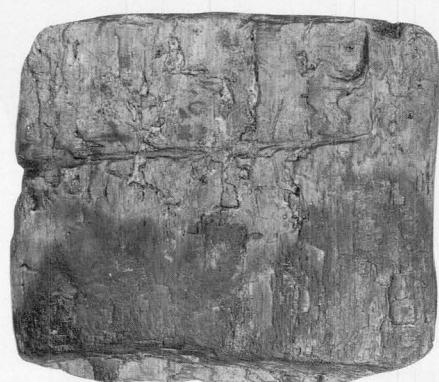
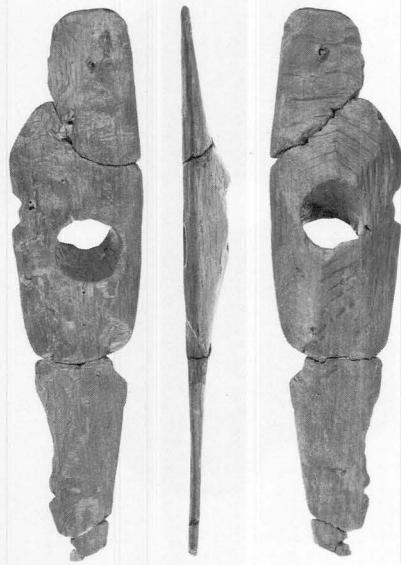


3

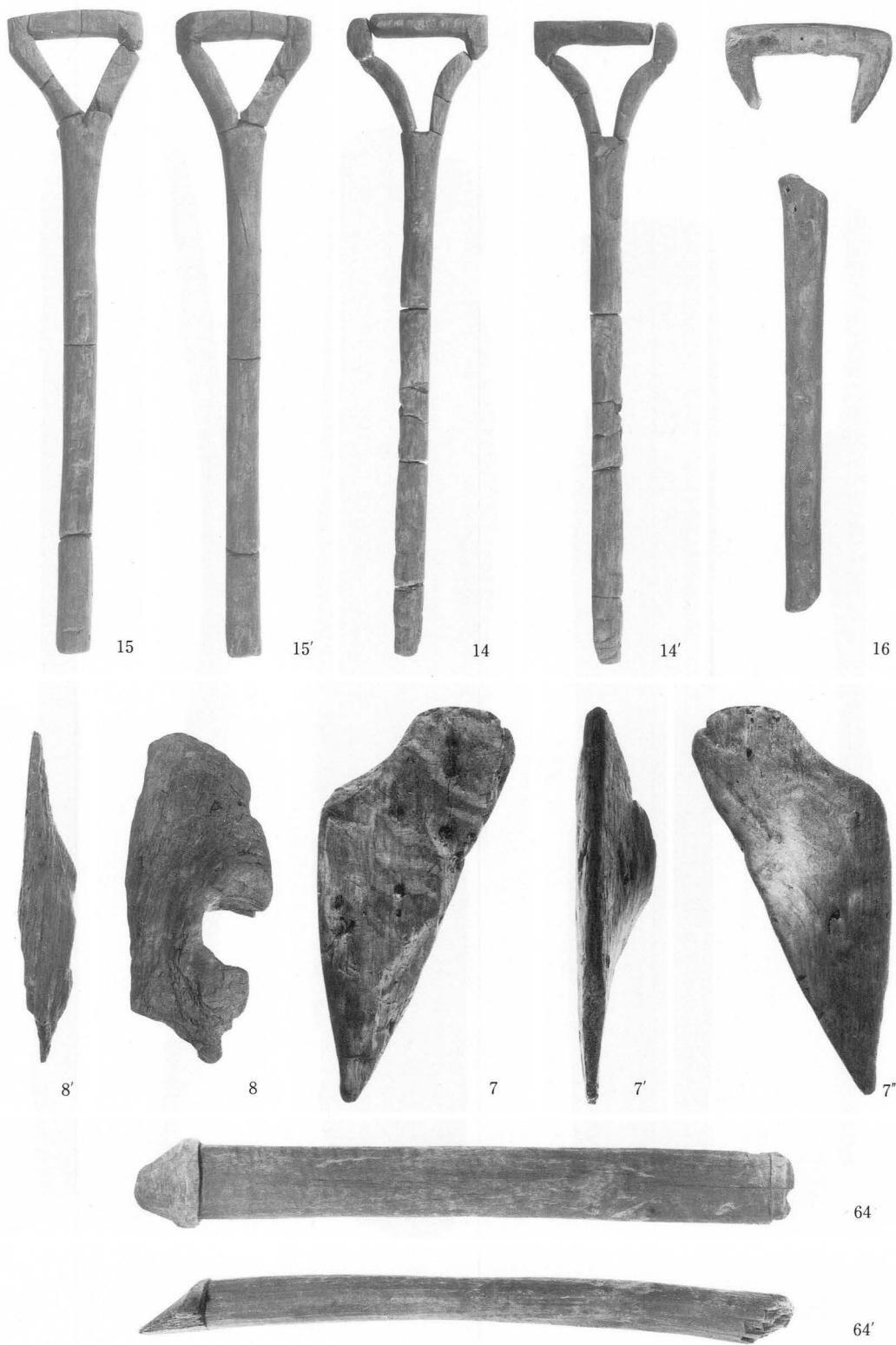


3'

平鍬(1~3)



平鍬(4～6・10) 又鍬(11)



平鋤(7・8) 鋤(14~16) 用途不明木製品(64)



櫂(18) 梯子(54) 弓(59)

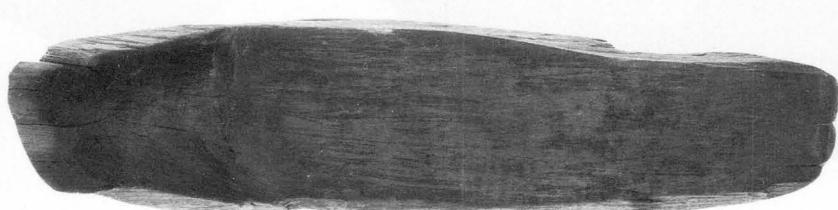
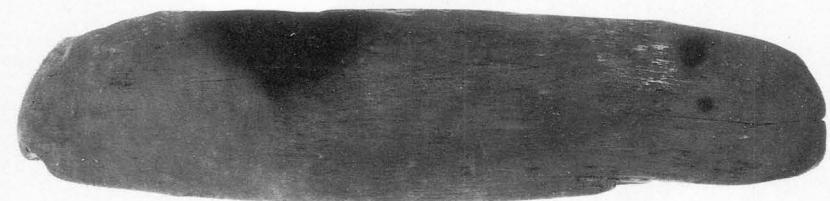


71

71'

71

24



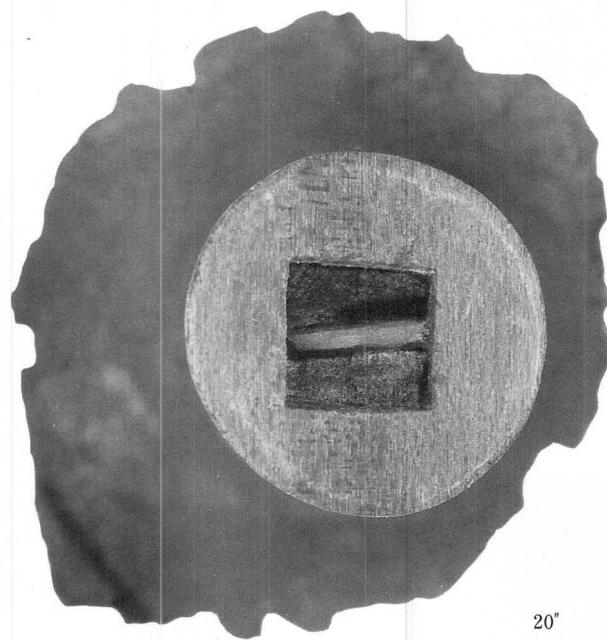
櫛(19) 容器(24) 用途不明木製品(71)



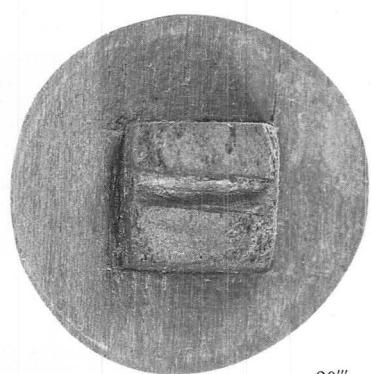
20



20'

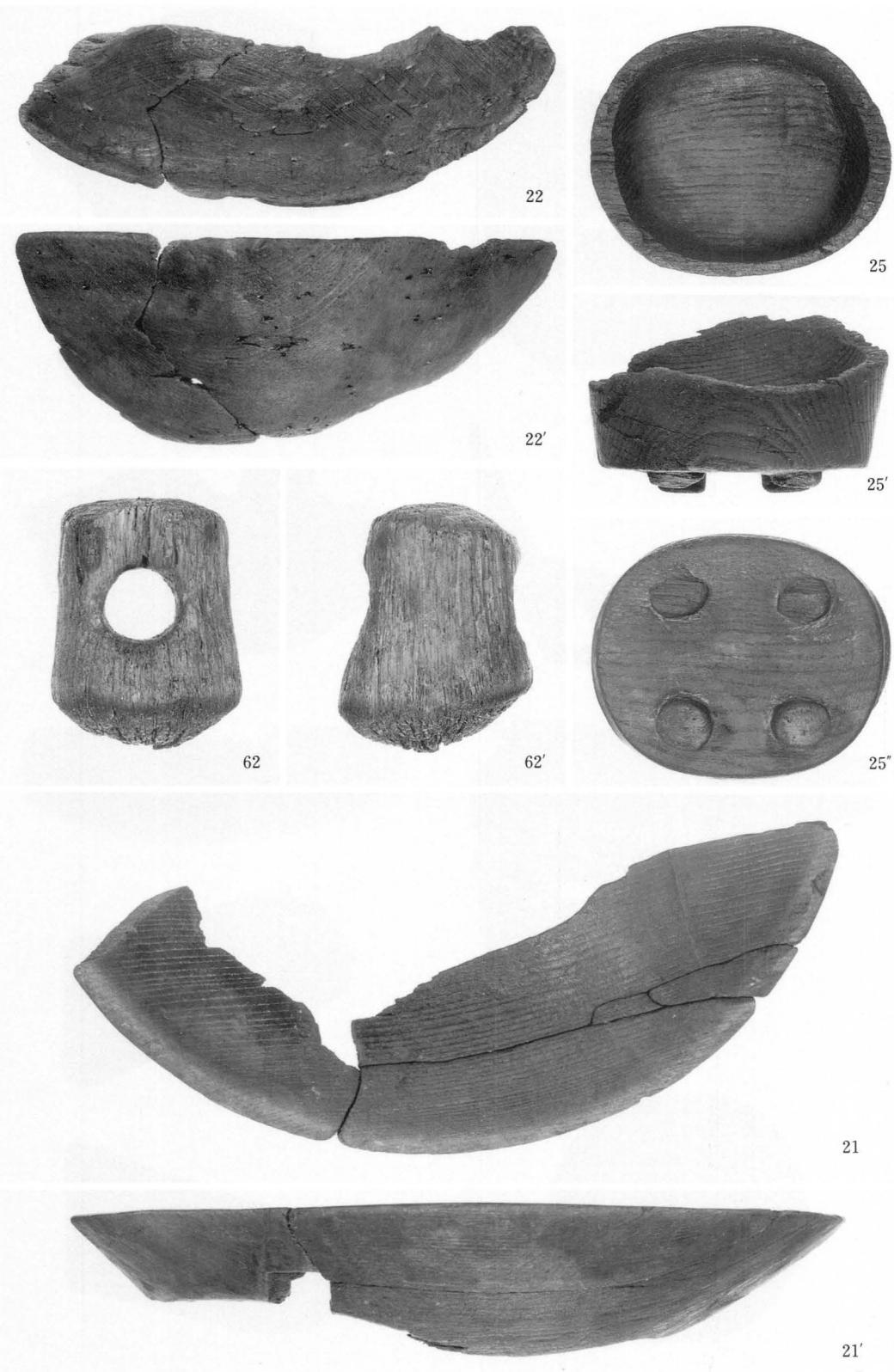


20''

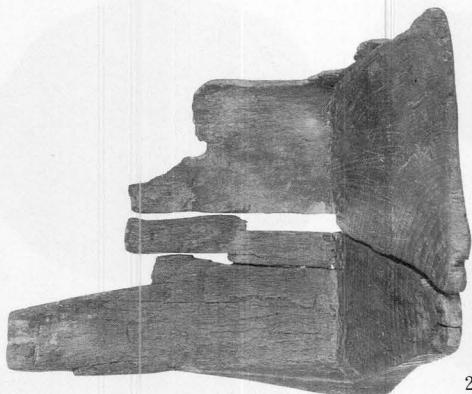


20'''

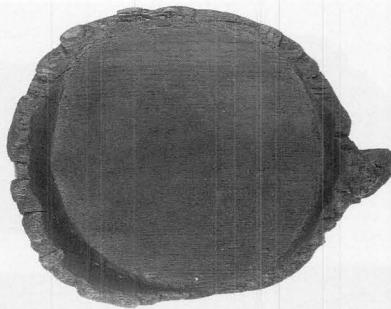
高杯(20)



高杯(21) 高杯か、鉢(22) 四脚付円形容器(25) 木錘(62)



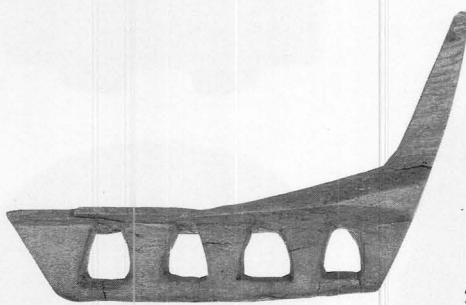
26'



23



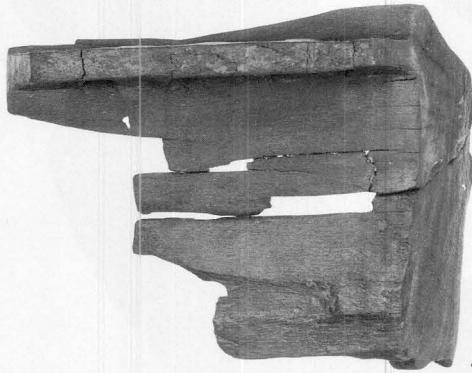
23'



26



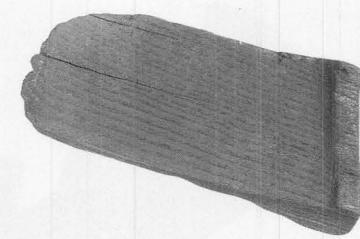
28



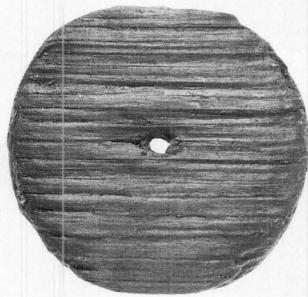
26''



28'



75



55

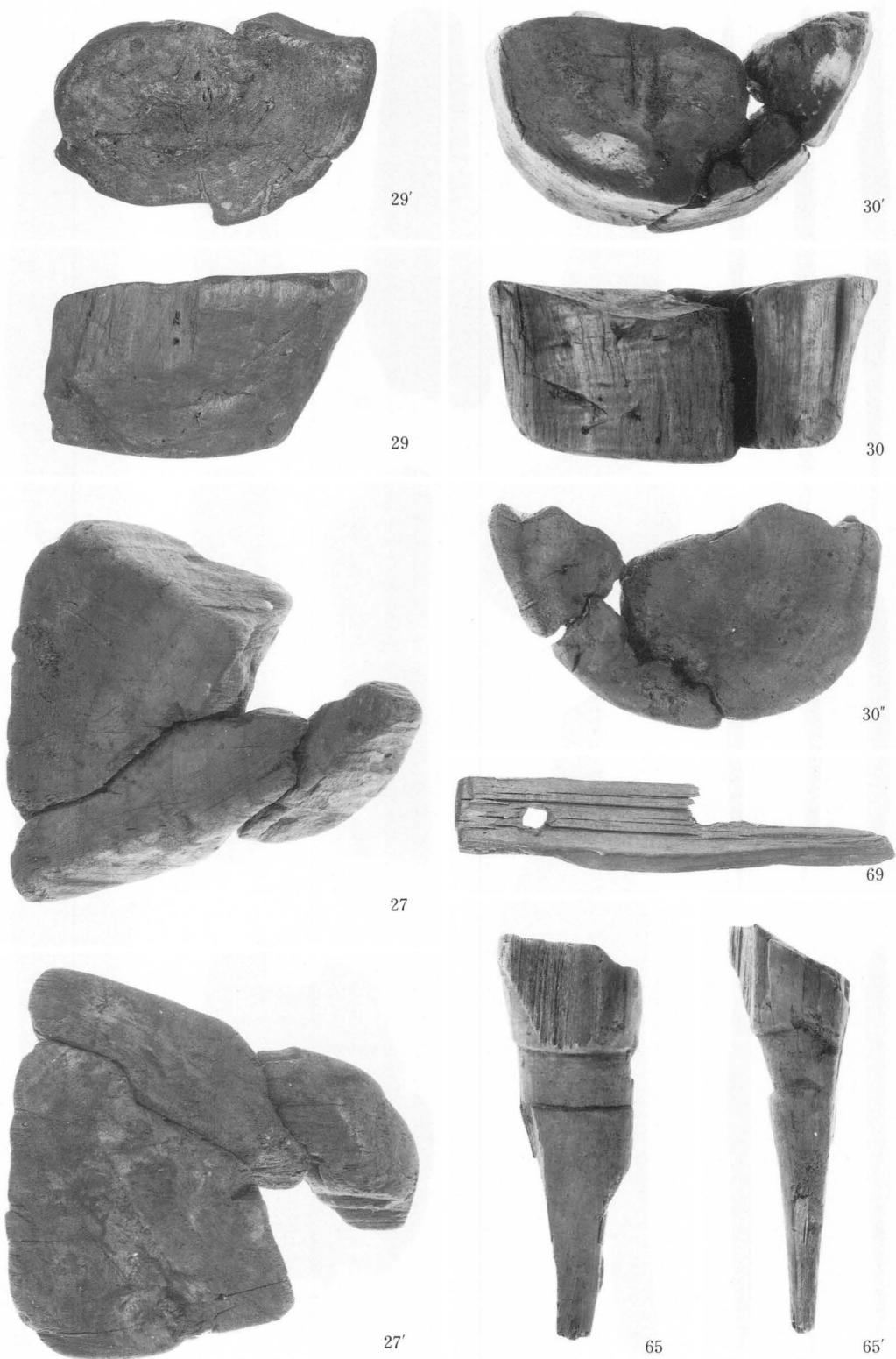


75'

把手付円形容器(23) 二脚付円形容器(26) 円形容器(28) 容器(75) 紡錘車(55)

図版
63

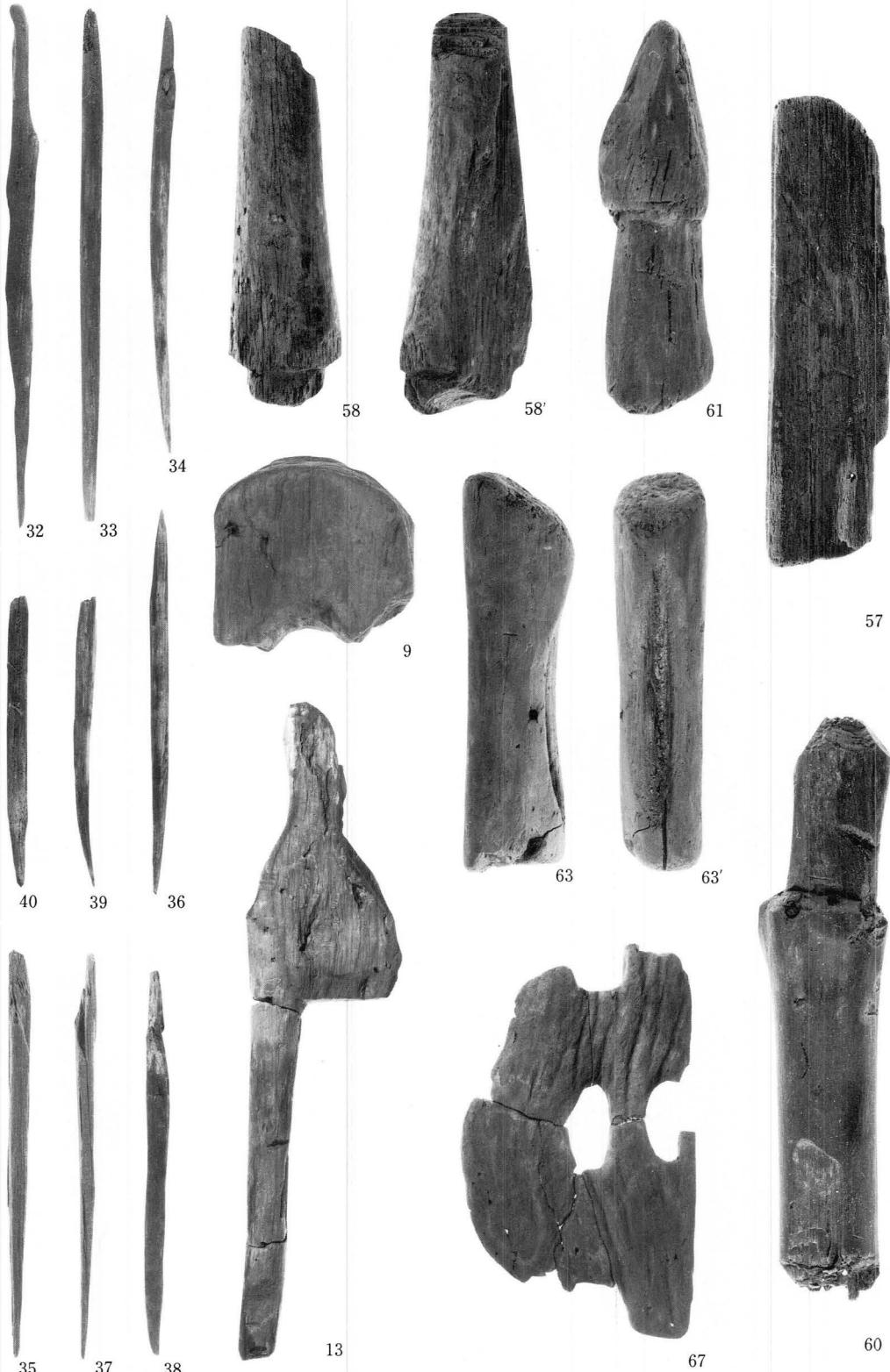
環濠出土木製品



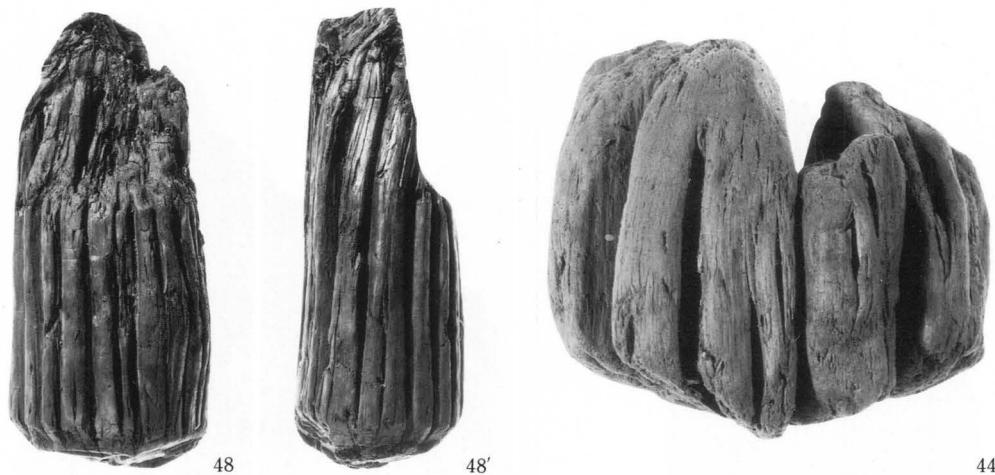
円形容器(27) 小型臼(29・30) 用途不明木製品(65・69)

四版
64

環濠他出土木製品



平鍬(9) 鋤(13) 刺突具(32~40) 刀子状木製品(57) 石斧の柄(58) 弦(60) 鳥形木製品(61)
用途不明木製品(63・67)



48

48'

44



46

49

48''



72



76

柱材(44・46・48) 板状木製品(72・76)



47



31



45

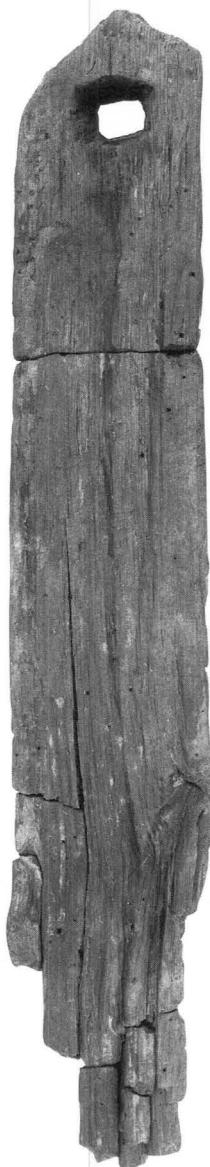
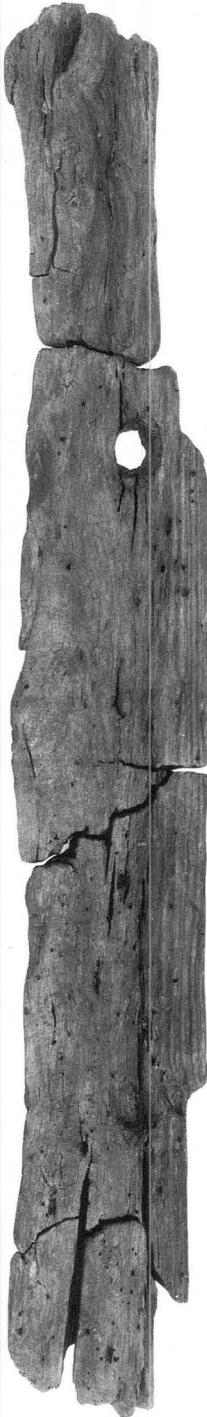


31'

大型臼(31) 柱材(45・47)



杭(50) 腰当具(56)



77

74

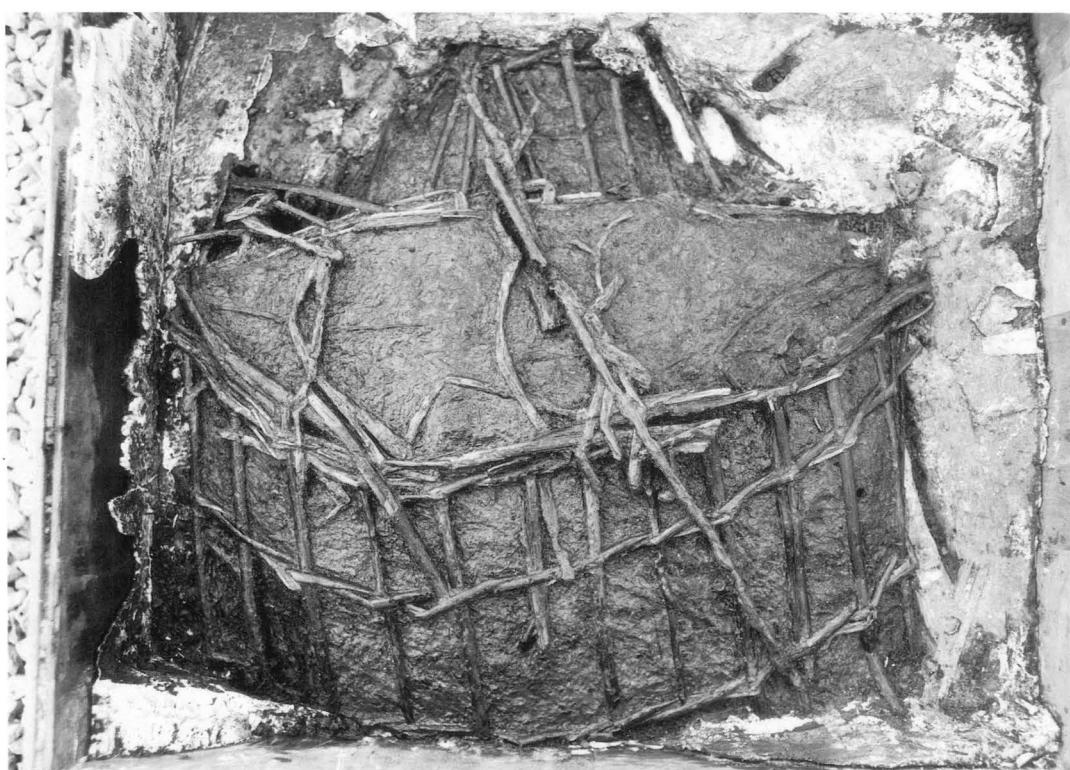
51

52

杭(51・52) 板状木製品(74・77)



1. 檢出面



2. 檢出面の裏面



1. 検出面裏面 モジリ編みの状況



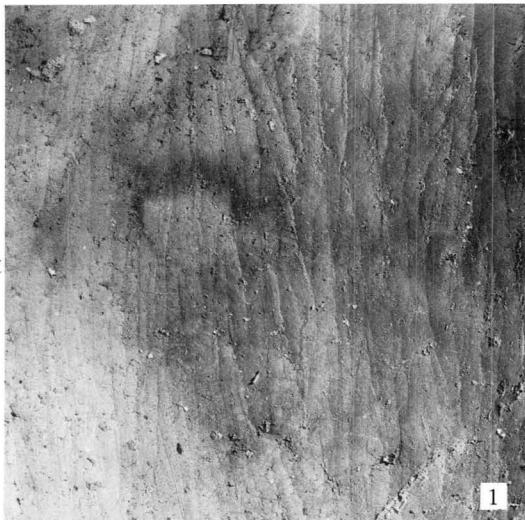
2. 検出面裏面 紐状部分



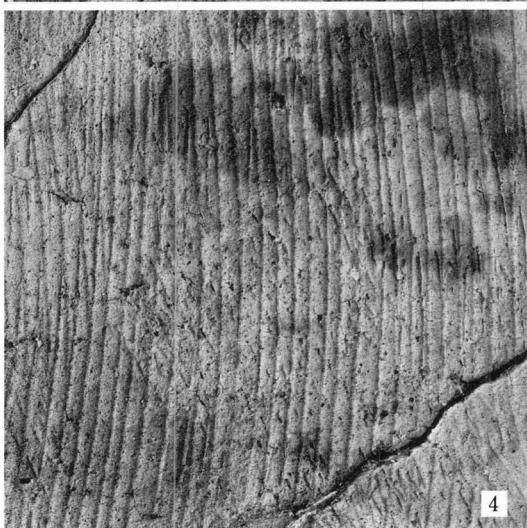
炭化稲束(1) ウリ類の種子(2) シカ(3) イノシシ(4~10) サメ(11)



2



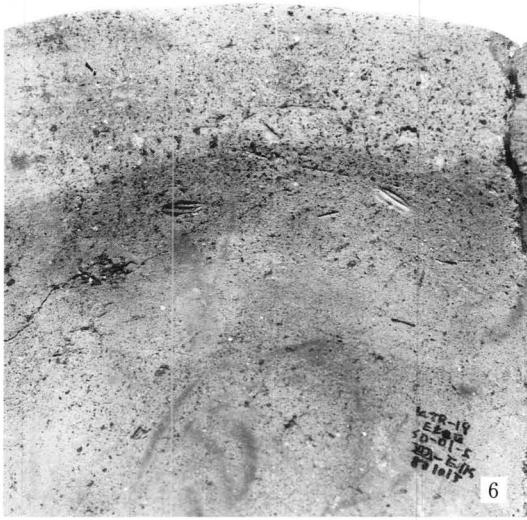
1



4



3



6



5

1. ヘラミガキ 2. ヘラケズリ 3. 細いタテハケ 4. 粗いタテハケ 5. 接合痕(外傾)
6. 粋压痕

鬼虎川遺跡第19次
発掘調査報告

1988年11月30日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会
東大阪市教育委員会
印刷 ドウミ印刷 広研社